

東京ラカン塾

精神分析トウィーティング・セミナー:

フロイト・ハイデガー・ラカン

Tweeting Seminar on Psychoanalysis :

Freud, Heidegger and Lacan

12 June 2014 - 28 December 2014

<https://twitter.com/ogswrs>

<http://twilog.org/ogswrs>

小笠原 晋也

精神分析家, 東京ラカン塾主宰

<http://www.lacantokyo.org>

<http://ogswrs.blogspot.jp/>

<https://www.facebook.com/ogasawara.s>

12 June 2014 : 存在のトポロジーは思考の鍵である.

論文 [HEIDEGGER AVEC LACAN](#) を東京ラカン塾の site に公表しました. この論文は, 精神分析の基礎に関する問題を論じています. 専門的な話をこまごまとしていますから, かなり読みにくいかもしれません. しかし, 何事に関しても基礎的な議論はそのようなものです.

ラカンを理解することも, ハイデガーを理解することも, 難しいことではありません. 存在のトポロジーを忘れなければ: $\frac{a}{\emptyset}$. それは, 精神分析において最も基本的な学素です.

13 June 2014 : Heidegger も Lacan も神に関して問うている。

わたしが『存在と時間』を初めて手にしたのは、大学入学時、精神科医をしている叔父が入学祝いに松尾啓吉訳本をくれたときでした。当時はまだ、精神病理学や精神療法を志す精神科医は Heidegger を読まなくてはならないという古き良き伝統が残っていました。勿論、哲学の素養の無いわたしには、何も理解できませんでした。その後まもなく Lacan に出会い、構造主義の流行もあって、実存主義や現存在分析はもう乗り越えられたというような臆見に、わたしは陥っていました。

Heidegger との第二の出会いは、彼の生誕 100 年を記念して出版された『哲学への寄与(自有によって)』が Heidegger の第二の主著である、という Hermann のキャッチフレーズを目にしたときでした。全く興味本位でそれを買ってみました。当時は既に Lacan のテキストにある程度鍛えられていたのですが、Heidegger の文章には改めて驚愕を覚えました。これは真剣に読まねばならない著作だ、と直観しました。そして、原書と邦訳を並べて見比べながら読み進めていきました。

学生時代との大きな違いは、わたしは当時既にカトリックとなっており、神学にも興味を持って、聖書だけでなく、ある程度は神学の諸著作も既に読

んでいた, という点です.

Heidegger にせよ Lacan にせよ, 一般に難解だと言われるのは, 彼らが何を問題にしているのかが, そもそもわからないからです. ただ単に, 彼らは哲学やら精神分析やらを問題にしているのだという理解では, 的外れです. 彼らは何を問題にしているのか?

それは, 神です. 多分, 神学を学んだ人には, それは始めから明白だったでしょう. 周知のように, Heidegger の出発点は神学でした. Heidegger も Lacan も, カトリックの家庭で育ちました. Lacan の弟は, ドメニコ会の神父になり, 聖書の仏訳にもたずさわりました.

Lacan は無神論者としてふるまっていたようですが, 彼は神を無視していたわけではありません. まさに「父の名」の用語が, 彼の神への関心を物語っています. 無神論者を自認していた Freud も, 晩年, モーゼと一神教についての論考を残しました.

Heidegger が「抹消された存在」 das **Sein** によって考えているのは, 神です. それは, 哲学者たちの神ではありません. Heidegger は哲学者であると一般には見なされていますが, むしろ彼は, 哲学を再び神学の道具に引

き戻したのです。

Heidegger が『哲学の寄与』において「最後の神」について語る時、それは、キリスト者とその再来を待ち望む神です。

神は **alpha** であり **omega** であると黙示録には言われていますが、「最初の神」は、もう既に、抹消された存在としての神ではありませんでした。Heidegger は「最初の源初」**der erste Anfang** という表現を用いていますが、それが「最初の神」です。それは、前ソクラテス期のギリシャの哲学者たちにおいても、存在は既に **physis** として立ち現れていたことに相当します。

最後の神、終末論的の神、その再臨が待ち望まれている神こそ、存在 **Sein** そのものです。そして、それが、Heidegger にとっても、Lacan にとっても、本当に思考すべきものなのです。

14 June 2014 : 神の存在は, あなた自身の存在である.

Lacan は神など問題にしていなと思う人は, この事実を思い出してください:即ち, 彼が「父の名」の用語を最初に用いたのは 1953 年のローマ講演においてであり, そして, 1975-76 年の Joyce についての Séminaire においても, 彼が問題にしているのは「父の名」です. Lacan は, *Écrits* に収録されている書のなかで父の問題を「予備的問い」と呼んでいますが, それは彼にとって, 予備的であるばかりでなく, 最終的, 究極的な問いでもあったのです. まさに alpha にして omega です.

神のことは自分には関係無いと思いますか? 確かに, Jacques Prévert は, 主の祈りをもじって, 「天にまします我れらの父よ, そこにとどまりたまえ. 我れらは地上にとどまります. ここはときとしてとてもすてきなところですから...」と言いました.

しかし, ここで問題にしたいのは, ミケランジェロがシスティナ礼拝堂の天井に描いたような, 長いヒゲをはやした長老のような神のことではありません. 問われるべき神は, ひとつの存在事象ではありません. 存在事象ではなく, 抹消されてしか書かれ得ないものとしての存在 **das Sein** です.

神について考えるとき, Heidegger の簡潔な表現を手掛かりにしましょう.

即ち, Es gibt Sein. 何かが存在を与える.

ドイツ語の es gibt という言い回しは, フランス語の il y a, 英語の there is...

と同義で, 「... がある」です. しかし, Heidegger はこの極めて日常的な表現のなかに, 究極的な存在論的真理を読み取りました.

大文字で書かれた Es は, 存在をさします. つまり, 神です. 神が存在を賜るのです. これが, 「天地の創造主」「万物の創造主」である神の本質である. そう Heidegger は公式化しました.

「天地の創造主」とか「万物の創造主」と言うと, また我々自身から遠くなってしまいそうですが, あなた自身の存在をあなたに与えてくれているのも, Es : 存在としての神なのです. あなたの存在の真理は, 神そのものなのです.

神を問うことと, 自分自身の存在に関して問うこととは, 同じひとつのことなのです. そのことをふまえれば, Heidegger を読むときにも神学を学ぶときにも, 視界が開けます.

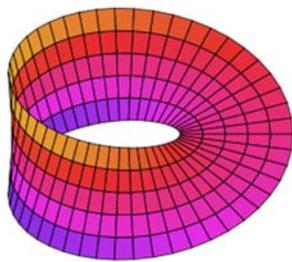
Lacan は *de Alio in oratione tua res agitur* [他 A の言説において, 汝が
ことがかかわっている]というラテン語の句を「主体のくつがえし」の書のな
かで引用していますが, まさに, 神についての話のなかで, あなた自身の
存在が問われているのです.

15 June 2014 : 存在論的穴と解脱実存

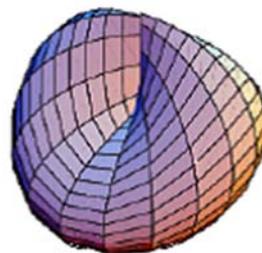
存在のトポロジー $\frac{a}{\phi}$ は極めて単純です. Heidegger が einzig, einfach, einfaltig という語をしばしば用いているように.

この ein は一神教 monothéisme の一にも重なり合います. つまり, 存在のトポロジーにおいてかかわっているのは, ひとつの穴, 唯一の穴です

Lacan はその穴をメビウスの帯を以て説明しました. 彼がそうしたのは, 必ずしも哲学や神学の素養を有していない精神分析家たちのためです. 彼らの大部分は, 精神医学や心理学の出身でしたから, 抽象的な話ではなく, 具体的なものを持ち出して示さなくては理解できないだろうと Lacan は配慮したのでしょう.



Möbius の帯



cross-cap

メビウスの帯のエッジ(縁, ふち, へり)は, 御存じのように, ひとつです. ですから, それはひとつの穴のエッジをなしていると思なされます.

投射平面という閉曲面 [closed surface] に基づいて事態を見てみると, 投射平面はひとつの円板とひとつのメビウスの帯のそれぞれのエッジを同一化して作られます. その三次元空間内のひとつの immersion である cross-cap は, 鉗子で押しつぶされてできたように見える線上の諸点を除けば円板に還元されます. つまり, cross-cap においてはメビウスの帯は三次元空間に対して解脱的に実存しており, 言い換えると, 解脱実存 ex-sistence を成します

より正確に言えば, 存在のトポロジーは, ひとつの穴と, それに対するひとつの ex-sistence 解脱の実存とから成ります. Lacan はこの Heidegger の用語 ex-sistence を以て「実在」le réel を定義します.

Ex-sistence という用語は, Lacan の *Écrits* の最初の書:『盗まれた書簡についてのセミナー』の最初の数行のなかに既に用いられています. この ex-sistenceこそ Heidegger が *das Sein*, 存在と書いたものに相当します. それが本事です.

16 June 2014 : 存在の真理の現象学的構造

Ex-sistence としての存在, 自己秘匿における存在の真理を, 仮象 [semblant] としての存在, 非秘匿性 [ἀλήθεια] としての存在が代表する : $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$. これが, 存在の真理の現象学的構造です.

Heidegger はときとして自己秘匿における存在 ~~Sein~~ を Seyn と書きますが, 一貫してはいません.

Heidegger が「存在」と言うとき, それが自己秘匿における存在を指しているのか, あるいは, 非秘匿性ないし朗場 *Lichtung* としての存在を指しているのか, 常に注意深く識別する必要があります.

昨日の日曜日は, カトリックでは三位一体の主日でした. いったいそんなものが我々に何の関係があるのか? ところが Lacan は *Écrits* の最後の書:『科学と真理』において三位一体と *Filioque* というまさに神学的な問題を取り上げています. 明日以降, それを見て行きましょう.

17 June 2014 : 三位一体について; 聖なる靈気について.

Twitter というメディアの性質上, ここでは思いつくままのことを書いています. ですから, 議論の展開はあらかじめ良く組み立てられたものではありません. そのときどきに頭に浮かんだことを書いています.

昨日は, Lacan の或るテキストのコメントをしてみようと思いつきました.

神学的な問題に関心を持つことと, 宗教的信仰を持つこととは, 別です. 神学的問題を論じたからといって, その問題がかかわる宗教の教会に服従する必要はありません. また, わたしがカトリック教会の信徒であるとしても, Vatican に対して批判的な意見を全く持てないわけではありません. むしろ, 人間として最も本自的に生きるとは如何なることか, もしそれがキリスト者として生きることであるとすれば, そのような実存は如何なるものであるか, と問うことは, 教会の教義から距離を取らねば可能ではないでしょう.

Heidegger も Lacan もそのようにしていました.

三位一体は, キリスト教の概念のなかでも最も難解です. 『科学と真理』において Lacan は聖アウグスティヌス Augustinus の著作『三位一体について』に言及し, まずそれを読めと我々に勧めています, Augustinus が

15年以上の年月をかけた著作はそう簡単に読めません。

『科学と真理』において Lacan は、三位一体に関連して、Filioque の問題に言及しています。Filioque はラテン語で「および子から」です。それは、ニケアコンスタンチノーブル信条と呼ばれる信仰箇条 *credo* のなかの文言に関する対立をきっかけにするローマ・カトリックとギリシャ正教の分裂の問題です。

通常「聖霊」と訳されている *Sanctus Spiritus* は、父なる神のみから発するのか、あるいは、父からと同様に子なる神イエスからも発するのか？

いったいそんなことにどんな重要性があるのかと思われるようなことで、歴史的な教会の分裂は始まったのです。

そこに立ち入る前に、「聖霊」とは何かについてまず考えてみましょう。ギリシャ語では *τὸ πνεῦμα τὸ ἅγιον*。

「霊」というと、幽霊とか霊園とか、死者の霊のことがまっさきに思い浮かびます。ところが、*πνεῦμα* とは、本来、大気、風、息、息吹を意味します。ひとことで言えば「気」です。この聖なる霊気は、天の神から地上の人間へ送ら

れてきます。風として、あるいは熱い気、つまり火ないし炎として下ってきます。神の靈氣を受けることができれば、*inspiration* を得ることができるだけでなく、永遠の命を授かります。聖霊、聖なる靈氣は、神と人間とをつなぐものです。

三位一体の子の位階であるイエスは、全的に神であり、かつ、全的に人間である、とされています。聖なる気、聖なる精気は、イエスにおける神性と人間性との一致を実現しているものです。

19 June 2014 : 三位一体と Filioque について.

「ラカンの『科学と真理』における三位一体と Filioque について」と題した
短い論文を東京ラカン塾の site に発表しました.



『科学と真理』においてラカンは、三位一体の絵柄のゴブラン織りタピストリーに言及しています。父と子と聖なる靈氣とが、全く同じ形姿で描かれています。

まったく同一の人物が複数いると、無気味です。ラカンはそう指摘しています。

それらまったく同一の三人は、三位一体として、一を表しています。その一は、神の存在、抹消されてしか書かれ得ない存在です。

「ラカンの『科学と真理』における三位一体と Filioque について」においては、学素を用いて説明を行いました。その方がわかりやすく説明できます。すべては、「存在の真理の現象学的構造」と名づけた学素 $\frac{a}{\Phi}$ に表されている存在のトポロジーに集約されます。

「ラカンの『科学と真理』における三位一体と Filioque について」においてははっきり書かないままになっていて、今急に頭に浮かんできたことを付け加えると、三位一体はキリスト教だけの特殊事情ではありません。神の現象学を内包するあらゆる宗教、つまり、人間にとって神と認識し得る神がかかわる宗教すべてにおいて、三位一体は明示的ないし暗示的に作用しています。

たとえばイスラム教においては、それ自体としては隠れている神 Φ が、預言者マホメットに語りかけ、その言葉がコラーン a として書きとめられました。隠れている神は、キリスト教の父なる神 Φ であり、コラーンは受肉した御言葉イエス a に相当します。聖なる霊気(聖霊)は、コラーンが神の御

言葉であることの保証とは言わずとも、その可能性の条件です。ほかのあらゆる宗教において、同様のことが当てはまります。

20 June 2014 : 自有としての解脱と救済

救済とか解脱という言葉聞けば、今の社会において常識ないし良識を持っていると自認しているひとは、まず眉をひそめるでしょう。かつてオウム真理教も解脱という言葉売りものにしていたと思います。

しかし、究極的に人間が求めているものは何でしょうか？ひとことで言えば、満足でしょう。しかし、いったい人間にとって、満足とは何でしょうか？満足を得ることは可能なのか？可能であるとすれば、如何なる満足か？どうすれば満足を得られるのか？あるいは、そもそも満足を得ようとするのは、見当違いではないのか？

伝統的には、アブラハムを信仰上の祖とする宗教、すなわち、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教では、人間にとって最も望ましいことは、神による救済です。救われることです。

仏教においてはいろいろな表現が用いられますが、ひとことで言えば、ブッダと同じに成ることです。ブッダと同じ実存構造において実存することです。

同様に、キリスト教では、最終的に目指すべきことは、イエス・キリストと同じ
実存構造において実存することです。実際、*Imitatio Christi* キリストをまね
ること、という 15 世紀に書かれた有名な書があります。

ブッダと同じように、キリストと同じように、実存を生きること、それが目指され
るべき解脱であり、救済である、と言っても良いでしょう。キリスト教と仏教で
目指されていることは、実は同じことです。それは、Heidegger の用語で言
えば、*Ereignis*, 自有です。

21 June 2014 : 悦と満足 ; 死の本能と解脱・復活.

質問: 満足と *jouissance* とは概念的にどう区別されるのか?

Freud は « *eine Triebbefriedigung ist immer lustvoll* » と言っています.

「本能の満足は, 常に *Lust* に満ちている」.

Freud は, 快原則の彼方を予感しましたが, それを完全には捉えきれませんでした.

Lust というドイツ語は, 快と悦と両方の意味に訳せます. *Lust* を用いているかぎり, *Lust* の彼方も *Lust* だとしか言いようがありません. そこで Lacan は, 快 *plaisir* の彼方として *jouissance* という語を用いました. フランス語ではこの語は十分に性的なニュアンスを持っています.

精神分析においてかかわる本能は, 死の本能 *Todestrieb* です. 性本能 *Sexualtrieb* の正体は, 死の本能です. ですから, 性本能の満足は一見, 快をもたらすかのようですが, それにはとどまりません. それは明々白々な事実です. ですから, 「快」ではない語が必要になってきます.

ちょうど死の本能を話題にしたので、救済ないし解脱を死の本能との関係において考えてみましょう。

解脱が死と本質的な関係にあることは明白です。涅槃という語がそれを示しています。しかし、我々は生物学的に死ななければ解脱できないのか？ 禅ではそうは考えていません。

ブッダという名称の本来の意味は、目覚めた者、覚者です。その含意は、我々は日常生活において目を開いたまま眠っている、夢をみている。そのような惰眠から目を覚ませ、実在を見究めよ、ということです。

存在事象の世界は仮象の世界です。それが真理と実在を覆い隠しています。

しかし、存在事象を捨て去ると、どうなるか？ 我々はもうこの世のものではなくなります。つまり、死を引き受けることになります。死を覚悟することと、生物学的に死ぬということは、異なります。生物学的に死んでしまえば、もはや覚悟することもできません。そのためには、耐えること、辛抱することが必要です。

三島由紀夫のことを、わたしは殉教者として評価していますが、残念ながら、彼には「待ち望む」という態度が不可能でした。その点において、わたしは彼においては「父の名の閉出」があったのではないかと疑っています。三島は読むに値する作家です。今でも、あるいは、ニヒリズムの蔓延している今だからこそ。

キリスト教における救済は、復活です。キリストは死者のうちから復活しました。それは「よみがえり」ではありません。永遠の命、神の命へと復活したのです。

言うまでもなく、復活するためには、まず死ななくてはなりません。死を引き受けなければ、復活はありえません。

キリスト教における洗礼は、実は、死の儀式です。古代キリスト教においては、洗礼は全身を水に浸けて行われました。洗礼者ヨハネによるイエスの洗礼の画は幾つもありますが、イエスは半裸で水のなかに立っています。全身を水につけるからです。それは死を儀式的に象徴します。

出エジプトにおいてイスラエルの民が紅海を渡ることも、洗礼と同じ意義を有していると解釈されます。彼らは死を通り抜けることによって、約束の地、

エルサレムへ入ることができるのです。

ともあれ、死を引き受けること、死を覚悟することが、救済と解脱のための必要条件です。

言いかえると、救済ないし解脱は、死の本能を積極的に利用することによって可能になるのです。死の本能によって日常的な世人、Heidegger の言う *das Man* の状態を打ち破ってこそ、救済ないし解脱は達成されます。

22 June 2014 : ニヒリズムについて.

ニヒリズム nihilisme を話題にしてみましょう. Nihil はラテン語で「無」のことです. 虚無主義と訳されますが, 「主義」という表現は nihilisme を理解することの妨げになります.

昔, 多分敗戦後から 1970 年代ころまでは, ニヒリズムはよく話題になっていたと思います. ところが, 今はどうでしょう? 今まさにニヒリズムが頂点へさしかかっているときに, ニヒリズムを問題にしている人がどれほどいるのでしょうか? わたしは論壇や日本の哲学界の動向に全くうといので, 確かなことは言えませんが, 今, この語を見かけることはほとんどありません.

ニヒリズムをもっともよく論じたのは Nietzsche (1844-1900) でした. つまり, 19 世紀にはニヒリズムは既に深刻な問題と受けとめられていたわけです. 資本主義と市場経済が発展するにつれて, 伝統的な価値観が無効になっていった時代でした.

今, ニヒリズムがほとんど話題にならないからといって, ニヒリズムが克服されたわけではありません. むしろ全く逆です. ニヒリズムは頂点にさしかかりつつあります. それは, 仮象の蔓延に示されています. いわゆる virtual な

ものの氾濫、架空、仮想の次元のものの際限のない増殖。それらはまたたくまに消費され、また別のあらたな仮象にとってかわられて行きます。誰もそのようなもので本当の満足は得られないからです。ところが、仮象、架空、仮想のものに見いだされる価値以上のものはどこにも見つけられない。無価値なもの以外に価値あるものは見いだせない。

今、誰もがそれに少なくとも薄々は気がついています。そのようなニヒリズムに対する反動として、いわゆるナショナリズムの高揚があります。今の総理大臣、安倍晋三氏が良い例です。隣国を批判し、自国の価値を高めようとする。どこにも価値を見いだせないことに対する埋め合わせです。

Nietzsche は、伝統的な価値が無価値になってしまったなら、みづから価値を措定すればよい、と考えました。プラトンの二元論をくつがえし、天上的・イデア的なものではなく、地上的なものを価値のスケールの上位に置く。みづから価値を措定する意志を、彼は「力への意志」と呼びました。Wille zur Macht. 「権力への意志」とも訳されます。そして、この力への意志を体現する新たな人間を、彼は「超人」Übermensch と名づけました。それは Nietzsche なのニヒリズム超克の試みでした。しかし、それでは解決になりませんでした。

ニヒリズムは現在に至るまで、深刻化の一途をたどっています。それは、ニヒリズムの本当の理由を誰も理解していないからです。少なくとも Heidegger がそれと指摘するまでは、ニヒリズムの本当の原因は、存在そのものにあります。つまり、存在の真理は存在だということです。

存在の真理を、存在事象という仮象が覆い隠しています。この存在の真理の構造を理解せずに、価値あるものは存在事象の次元に見出されるはずだと思い込んで右往左往している。それがニヒリズムが頂点に至ろうとしている今の状態です。では、ニヒリズムを超克するにはどうすればよいか？

23 June 2014 : ニヒリズムと三島由紀夫.

三島由紀夫は、ニヒリズムを克服しようとしていました。彼は、三つの手段でそれを実行しようとしていました。ひとつは、文学によって。つまり、作家として文学作品を書くことによって。これは、言葉の次元にかかわります。第二に、彼自身の肉体を鍛えることによって。これは影像の次元にかかわります。第三に、彼は社会的、政治的な次元において、天皇制の真の復活を欲しました。象徴天皇制ではなく、古代においてそうであったように、実際に天皇が支配し、まつりごとをおこなうよう、日本の社会を変えようと彼は欲しました。

一見、それら三つのことは相互に関係がないように見えますが、実は、三島由紀夫にとっては、それらは三つとも「美」において統一されていました。言葉の美、肉体の鏡像的な美、そして、古代の朝廷で実現されていたろうと少なくとも彼が想像する天皇制の美です。

天皇は美しいか？少なくとも彼はそう思い描いていました。例えば、「憂国」において、彼は昭和天皇が白馬にまたがって、みづから最前線におどりでて、反乱将校たちに凜々しく切腹を命ずる、というような場面を描いていたと思います。

三島は、ニヒリズムは美によって克服されると考え、その考えに従って実際
に行動しました。

美は、確かに、ニヒリズムの世にあつて、価値あるものとして最後に残るもの
かもしれません。しかし、美は本当にニヒリズムを克服し得るか？

三島の書く作品は、最初のうち、すべてがベストセラーになりました。彼が
大して本気を出さずに書いたものまで。しかし、彼が本気で書いた「鏡子の
家」という作品は、文壇から評価されませんでした。今読むとなかなかおも
しろい作品ですが、何故か当時は無視されてしまいました。

「鏡子の家」の文壇における不評は、三島のその後の生き方にとって非常
に重大な意義を持っていただろうと思います。つまり、言葉の美から肉体の
美への重点の移動です。そのことは、彼の「太陽と鉄」というエッセーに書
かれています。

一時期わたしは三島について評論のようなものを書いてみようと思ってい
ました。そのときの構想では、「仮面の告白」と「太陽と鉄」とをふたつの焦
点にしようと思っていました。どちらも自伝的な作品です。

「仮面の告白」を三島は、精神分析を受けるのと同じ気持ちで書き、作品を或る精神科医に読んでもらうために送りました。残念ながら精神分析家ではありません。その精神科医が三島にどう答えたのか、答えなかったのか、三島はそのことについて何も証言を残していません。

いずれにせよ、その後、三島は精神分析に対して非常に批判的になりました。「音楽」という小説に精神分析家のような人物を登場させてはいますが、その作品は三島が本気で書いたもののひとつではありません。

「太陽と鉄」では、彼は、自分は今もう言葉を信じてはいない、肉体を信じている、というようなことを言っています。しかし、当然ながら、年齢とともに肉体は衰えてゆきます。三島が死んだのは 45 歳のときでした。彼は、肉体の美が永続的でないことを実感していたでしょう。肉体美を写真として残そうとしたとはいえ。

そして、天皇制の美は、もうとうに無くなっていました。

三島と昭和天皇との関係を考えるとき、三島が学習院を首席で卒業するとき、昭和天皇から褒美として銀時計を賜ったという事実は、それなりの意義を持っていると思います。三島はその銀時計をその後どうしたか、証言を何

も残していませんが. ともあれ, それは, 三島にとって, 昭和天皇に対する負債としての意義を持ち続けたでしょう.

話がかなり三島の方へずれこんでしまいましたが, ともあれ, たとえ美であれ, 存在事象のなかにはニヒリズムを克服する方途を見出すことはできません.

存在事象ではなく, 存在そのものに, 存在の真理そのものに目をむけることなくしてニヒリズムを克服することはできません.

24 June 2014 : 三島由紀夫とニヒリズムの超克.

もう少し三島由紀夫について続けましょう.

美を以てはニヒリズムは超克できないと言いましたが, 三島は, 彼の最後の長編小説『豊饒の海』の第四部『天人五衰』においては美を超えました. そのとき彼はもう死を覚悟していたのですから, 或る意味, 当然ですが, ともあれ, 美を超えたという点において, 『豊饒の海』は彼の最高の作品だと言うことができるでしょう.

ある評論家が『豊饒の海』は失敗作であり, 『天人五衰』の結末は幻滅以外の何ものでもない, というようなことを言っていました, その評論家は何もわかっていません. 『天人五衰』の結末ほど感動的なものは, そうざらにありません. 死を覚悟した者だけが書けるものかもしれません.

問題は, 三島は「死を覚悟する」の次元にとどまらなかったということです. 彼には, そこで辛抱して欲しかったと思います. 小説を書き続けて欲しかったと思います.

『天人五衰』は如何に感動的か? そこでは, まさに美が仮象であることが暴

かれます。それまで輪廻転生において美を体現してきた三人の主人公の後継であるはずの透は、清顕の生まれ代わりではないことが啓かされます。

他方、本多の体は腓癌におかされています。嚢胞性腫瘍であると書かれています。嚢胞とは、つまり風船のように、中に空(くう)を含んだ病変です。本多は今や文字どおりに己れの内に空を有し、死を抱えています。そして彼は必死の思いで、清顕の恋人であった聡子を訪ねます。

しかし 80 歳をすぎた尼僧、聡子は何と答えるか？清顕という人は知らない、と彼女は答えるのです。アルツハイマーではありません。嘘をついているのでもありません。彼女のこころのなかからは、清顕という *signifiant* は消え去ってしまっていたのです。つまり、彼女のこころのなかで、清顕は真に涅槃 \emptyset に至っていたのです。

聡子は、まさに存在を己れのうちに懐胎しつつ、この世において成仏しているのです。聡子のこの実存は大変感動的です。そして今や、美の正反対、老醜以外の何ものでもない本多も、己れのうちに空、抹消された存在をかかえこんで、聡子と会います。空と空との出会い。

『天人五衰』の結末ほど感動的な小説は希でしょう。そして、最後に聡子が

本多に見せる寺の中庭は, Heidegger が *Lichtung* と呼んだもの, 朗場, 明るい空き地を象徴しています. そこには神秘的な救済の喜びが満ちています.

25 June 2014 : 男女の性別の構造論的基礎について.

今月 18 日に起きた都議会の性差別発言事件を機に、『[男女の性別の構造論的基礎について](#)』と題した小論を書きました.

今日はニヒリズムの問題から一時的に離れて、『[男女の性別の構造論的基礎について](#)』で述べたことに若干の補足をします. 三島由紀夫のことを話題にしてきたのですから, 同性愛と異性愛について考えてみましょう.

男が女を性的欲望の客体にするということは, どのような構造の事態でしょうか?

Lacan が精神分析家の言説と呼ぶ構造に準拠して考えましょう. それは, 排斥 [Verdrängung : 抑圧] されたものの回帰としての症状の言説の構造でもあります. 次の図は, Lacan にもとづいてわたしが形式化し直した症状の言説としての分析家の言説の構造を表しています:

$$\frac{a}{\emptyset} \rightarrow \$$$

症状の徴示素 (signifiant) a が左上の能動者の座にあり, それは, 左下の

座に位置する主体の存在の真理を代表ないし代理します。何に対して代表するかというと、右上の座に位置する $\$$ に対して代表します。

男が女を欲望の客体にするという事態は、こう考えられます:分析家の言説、症状の言説の構造において、男は右上の座の $\$$ 、女は左上の座の客体 a です。客体 a は、主体の存在の真理を代表する限りにおいて、 $\$$ にとって欲望の客体となります。

そして、 a はできるだけ存在の真理をそのままに代表するのが良いのです。究極的には、 a は穴そのもの、切れめ、裂けめそのものであれば、最も忠実に、抹消された存在の深淵を表し得ます。

異性愛の男にとって性的欲望の対象になりにくいのは、男です。なぜかと言うと、男の存在構造においては、 a は一番厄介な *signifiant phallique* Φ であるからです。このハリボテは、存在の深淵をすっかり覆い隠して、そのような穴は全く無かったかのごとくにしてしまいます。

それに対して女は、そのような *phallus* Φ を欠いているがゆえに、欲望の客体となりやすいのです。

逆に言うと、みづから phallus を有している(解剖学的にではなく、徴象的に)ような女性は、男と同様に、異性愛の男にとっては性的な客体とはなりにくくなります。

三島由紀夫のような同性愛の男にとってはどうであるか？彼の伝記的事実として知られているように、彼の幼年期、彼の家族における支配者は彼の祖母でした。彼の父親の母親です。三島の父親は、自分の母親に対しては、いわば去勢された者でしかありませんでした。ですから、三島にとっては phallus を体現しているのは女性なのです。たいていの場合、同性愛の男性自身の母親が phallique なのですが、三島の場合はたまたまそれは祖母だったのです。

存在の真理を覆い隠してしまう phallus を持っている女性は、三島にとって欲望の客体にはなりません。彼にとっては欲望の客体は、彼の父親のように去勢された男なのです。三島にとっては、男は phallus を欠いており、それがゆえに、存在の真理を覆い隠さずに、より良く代表し得るものなのです。その限りで、彼にとっては男が性的欲望の客体なのです。

ところで、このことは、女が男を愛するときにも当てはまります。社会に流通しているイメージとして完璧な男、精神的にも身体的にも力強く、たくましく、

それこそ勃起した **phallus** そのものであるような男を、女は愛するでしょうか？もしあなたがそう思っているなら、それは完全な思い違いです。もし仮にそのような男が女の目を引くとしても、女が愛するのは、そのような外見のなかに欠如や欠点や欠陥を感じさせる男なのです。あるいは、見るからに完璧なダメ男です。

同性愛の男が愛する男と、女が愛する男は、ですから、共通性があります。いかにもたくましい勃起した **phallus** は、存在の真理の深淵を覆い隠して、欲望に蓋をしてしまいます。そうではなく、できるだけ無に近いもの、あるいは、裂けめ、切れめをそのものとして暗示するような客体 — むしろそのようなものが、男にとっても女にとっても欲望の客体となります。

美は、はかなさにおいて欲望の客体になります。三島の作品にはそのことが常に描かれています。

26 June 2014 : 三島由紀夫と性別.

三島由紀夫は、解剖学的には勿論、男でした。しかし、はたして存在論的には、つまり、実存構造の観点からは、男だったでしょうか、女だったでしょうか？

問いは存在論的に措定しましょう、心的とか心理学的とか精神的とかではなく。

彼の存在論的構造は、男のそれではなく、女のそれであった、とわたしは考えます。

昨日も指摘したように、彼が育った家族構造において、 Φ と表記される徴示素ファロス *signifiant phallique* を体現しているのは、彼の祖母でした。それに対して彼の父は去勢されていました。そのような家族のなかで、三島自身は、ファロスの祖母の欲望の客体でした。三島は子供時代、病気がちで、体格も弱々しく、ファロスの祖母の欲望の客体となるのにまさにうってつけでした。そして、この存在構造は、三島の生涯を通じて変わりませんでした。

通常、異性愛の男は、signifiant Φ との同一化において男として存在します。性別に関しては、それで十分です。Ex-sistence の深淵の穴を塞ぐのに、ほかの徴示素は基本的には必要ありません。

それに対して、女の存在構造においては、ex-sistence を代理するのは、それ自体切れめであり、穴である徴示素 a です。そして、そのままでは穴は言うなればむきだしですから、さまざまな仮象が動員されて、その穴を埋めようとします。具体的には、様々な衣装、化粧、装身具、等々です。

Lacan は、或る英国の女性精神分析家が使った表現を引用して「仮面舞踏会」とどこかで言っています。Melanie Klein ではなく、Joan Rivière という名の分析家です。

女性とそのような仮象の多様性ととの親和性は、女性の存在論的構造の特徴に由来しているわけです。そのままでは不安を惹起する ex-sistence の深淵の穴を塞ぎ、美化し、できるだけ社会に受容されるものにする。

或る意味では、女が美しいとすれば、それは、仮象の下に不安惹起の穴を秘めているからです。欲望の客体であるためには、過度に穴を覆い隠してはならず、穴の暗示が十分に可能でなければなりません。

三島においては、まさにこの仮象の多様性、仮象の増殖が見て取れます。彼の文体の美は、評論家の評価の的でした。そして、彼の衣装に対する関心も、女性なみでした。「沈める滝」という小説において、女性が和装の際に用いる細々した小道具の名が列挙される一節があるのですが、よくそんなに知っているものだと全く感心してしまいました。それから、戯曲「サド公爵夫人」においては、彼は、女優たちに「ロココ風」の衣装を着せることにこだわりました。そして、盾の会の制服。彼自身の肉体の美、等々。

男が自分の身を飾るための仮象に凝りすぎると、「めめしく」なります。宝塚のようになってしまいます。盾の会の制服は、今なら「コスプレ」と揶揄されたでしょう。昔の王侯貴族は自分たちの権力の象徴として身を飾り立てましたが、今ではどの国の王室でも日本の皇室でも、男性の服装はさっぱりしたものです。昔のスタイルを装ったら滑稽です。

しかし、三島自身と仮象の増殖との親和性に注目するなら、三島自身の存在構造は女性のそれであったと推論されます。そして、徴示素 Φ との同一化が成立しなかったことと、彼が死の覚悟を生き続けることができなかったこととに、関連があるのではないかと推測されます。

28 June 2014 : 性別の公式; 祈りと声.

『ラカンの性別の公式についての若干の考察』を公開しました. Lacan が *L'étourdit* と *Encore* において提示した性別の論理式について読解を試みました.

Twitter にはそのときどきの思いつきを書いています. こうして比較的短時間, 思考に集中するのは良いことです. 祈りに集中するときに若干似ています.

皆さんは祈りますか? 祈るとは, 単に神に単に願い事をするだけのことではありません. 祈りは, 神とのつながりを持つことです. 神の言葉を聴き, 神と対話することです. 勿論, 無言であってもよいのです.

先日 Paris に滞在したとき, たまたま四旬節の時期でした. 四旬節とは, カーニバルの終わりから復活祭までの 40 日間です. キリストの受難に思いをはせる期間ですから, 禁欲生活を送ることが求められます. 勿論, 今のカトリックではそう厳しいことは求められませんが. ともあれ, 禁欲のことが或る御ミサの説教のなかで話題になりました.

ミサの説教なんて退屈な話だろうと思わないでください。退屈な説教もありますが、神父様によっては非常におもしろい、あるいは神学的に得るところの多い説教をすることもあります。今回 Paris 滞在中におもしろい説教に幾度か出会いました。第一のお勧めは、Paris 大司教 André Vingt-trois 枢機卿です。

今から紹介する話をしたのは、聖フランシスコ・ザビエル教会の Patrick Chauvet 神父様です。彼も、Académie française のメンバーだった Ambroise-Marie Carré 神父様の話を紹介しただけなのですが。

或る婦人が、四旬節を迎えて、大いに禁欲しようと思い、神父様に相談しました。四旬節ですからものすごく禁欲しようと思いますが、どうすれば良いですか？神父様は答えました。一日に 15 分間だけ絶対の沈黙と静寂を守って、聖霊の声を聴きなさい。15分間だけでいいんです、と。婦人はたったそれだけと不満でしたが、アドバイスに従いました。数ヶ月後、神父がその婦人に再会したとき、彼女は大変怒っていました。神父様、聖霊の声が四六時中、たくさん聞こえるようになってしまって、どの声を聴いたらよいのかわかりません！

この話は、精神病の人をからかうためのものでは勿論ありません。フランス

語の言い回しで「どの聖人にすぎたらよいかわからない」というのがあり、そのもじりです。

しかし、ともあれ、一日に10分でも15分でも、絶対の沈黙と静寂を守って、気持ちを神へ向けるのは無駄なことではありません。祈りとはそういうものであって、願い事をしたり、決まり切った文句を唱えることが祈りのすべてではありません。一日に短時間でも精神を集中させるのは思いがけない効果をもたらすこともあります。

性別に関する小論文を書いたところなので、性欲について少し考えてみましょう。Freud は Sexualtrieb 「性本能」という表現を使いました。Sexualtrieb は衝動的なものではありません。むしろ「一定の力」とであるとFreud は言っています。そして、Triebこそ、人間の本有を成すものです。勿論、生物学的な意味ではありません。そこでわたしは、古い「本能」という訳語に戻りました。

29 June 2014 : 本能について；存在の真理の現象学的構造；人間はその本有において言語存在である。

Freud は Triebregung という表現も用います。Regung という語で Freud は dynamisch な何か、生命の躍動のようなものをイメージしていたかもしれませんが、わたしはむしろ暗がりでごめく無気味なものをイメージしてしまいます。「本能蠢動」と訳してみました。

「本能」は Trieb ではなく Instinkt ではないかという御意見に対しては、Hegel が「精神現象学」のなかで Instinkt を全く非生物学的な意味で使っている例を引き合いに出すことができます。

本能寺の名の「本能」が仏教で如何なる意味で使われているのか「日本国語大辞典」を見ても説明が見当たりませんでした。いずれにせよ、生物学的な意味で使われていたはずはありません。

我々にとって重要なのは、いずれにせよ、Freud の Trieb を Lacan は désir 「欲望」という用語のもとに捉え直した、ということです。

質問やメッセージをくださった方々に感謝します。Twitter という媒体が対

話にどの程度適しているのかわかりませんが、ひとりごとより対話の方がはるかに生産的です。ですから、Socrates は対話を好みました。対話は思考を活性化します。思いがけない着想を生んでくれます。ですから、遠慮無く質問、御意見をください。

Trieb に限らず、Freud をどう翻訳するかについてはフランスでも多くの議論が交わされました。しかし Lacan 自身は翻訳のための翻訳にはみづからかかわろうとはしませんでした。重要なのは、概念把握であり、さらには形式化です。

始めに、存在のトポロジーを忘れなければ Heidegger も Lacan も難しくはない、と言いました。Twitter や blog の欠点は、Lacan の mathèmes を表記できないことです。これについては、東京ラカン塾の site からファイルを download して参照していただくしかありません。

存在のトポロジーとは、 $\frac{a}{\varphi}$ という学素で表される構造です。この分数のようなしるものは、分数ではなく、下の座は真理の座、上の座は能動者 agent の座で、能動者が真理を代表・代理するという構造を表しています。

φ は、Heidegger の言う das Sein 「存在」を表します。Heidegger は、

Sein 「存在」という語をバツじるして抹消しています。なぜ存在を抹消するかというと、それは隠れており、そのものとしては目に触れないからです。存在事象の側から見れば、存在は無です。

a は、個々の「存在事象」(通常「存在者」と訳される Seiendes を「存在事象」と訳します)、ないし、「存在事象そのもの全体」としての「存在」を表します。

したがって、 $\frac{a}{\emptyset}$ は、Heidegger の用語においては、 $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$ と表記されます。

Lacan においては、 a は signifiant 徴示素と image 影像に該当します。

a の影に存在の真理は隠れており、 a により代表ないし代理されている：これが存在のトポロジーであり、存在の真理の現象学的構造です。

「存在の真理の現象学的の構造」の概念は非常に powerful です。

Heidegger も Lacan も神学も、これを手掛かりにすれば恐れることはありません。勿論、それなりに苦労は必要ですが。

さて、Trieb に関連して、この用語をどう翻訳するか、それが「本能」である

なら, Freud の言う Trieb と動物の本能は同じか違うのか? 等の御質問, 御意見をいただきました. ありがとうございます.

基本的に言って, 精神分析においてかかわるのは, 言語に住まう存在としての人間です. Lacan は parlêtre という新造語を使いました. 「言語存在」と訳しましょう.

「言語は存在の住まいである」は Heidegger の命題です.

我々にとっては, 言語存在としての人間だけが問題です. というより, 人間の本質は言語存在です. 言語に住んでいない動物は, 問題外です.

無や欠如という用語は, 取扱注意です. 存在の真理の現象学的構造, 存在のトポロジーの学素に常に準拠して考える必要があります.

Lacan の存在欠如 manque à être は, ~~存在~~の Lacan 的な呼び名です.

無は, あくまで, ~~存在~~を存在事象の側から見たときに, 存在事象ではないものを無と呼ぶしかないので, 無と呼んでいるだけです.

存在は、単なる虚無的な無ではありません。存在は、別の呼び名では *existence*, *Ek-sistenz* です。「解脱実存」と訳しています。それが、存在のトポロジーにおいて真理の座に位置する存在です。

哲学と神学において、さまざまな人がさまざまな表現で存在と神について思考してきました。ですから、用語や概念の字面だけを見ていては道に迷うこと必至です。だからこそ形式化、構造化が必要不可欠になってきます。Lacan が学素を作り出したのは奇をてらったものではありません。

Trieb に話を戻すと、Lacan も当初は *instinct* というフランスで従来用いられてきた訳語を使っていました。しかし、やはり生物学的な臭いが残っているので、Lacan は *désir* という語の方を好みました。

Trieb も *désir* も、存在論的には存在として把握されます。学素では ϕ です。それは抹消され、隠れてはいますが、しかし、*a* に代表されることによって現れ出てきます。

Hegel が「精神の現象学」と言うとき、それは、存在が如何に現象してくるか、ということの議論です。

存在は、徴示素 a に代表されることによって、我々に請求をつきつけてきます。Freud は Triebanspruch と言ひ、Heidegger は Anspruch des Seins と言ひました。

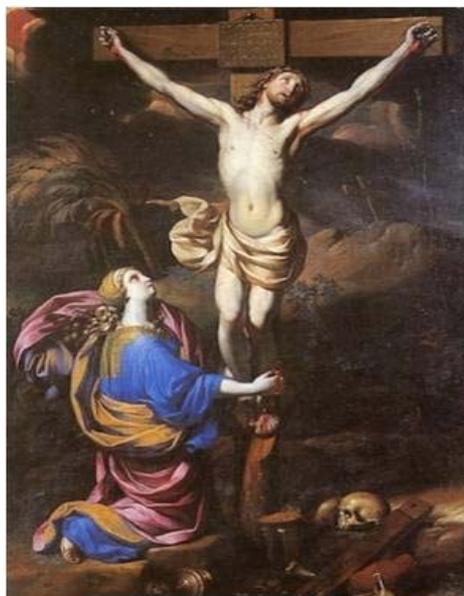
その請求に如何に答えるかが人間に課された課題です。

性本能、性欲の問題は、そのような構造において把握されます。

30 June 2014 : サロメとマグダラのマリア.



L'Apparition :
Salomé et la tête de Jean-Baptiste
Gustave Moreau (1826-1898)



Sainte Marie-Madeleine
et le Christ en croix
Claude François,
dit « Frère Luc » (1614-1685)

精神分析において陥ってはならない誤りは、心理学的にものごとを考えて
しまうという誤謬です。

例えば、心理学的に考えては、なぜサロメが洗礼者ヨハネを、なぜマグダラのマリアはイエスを欲望したのか了解はできないでしょう。

女性の欲望、性欲については、女性自身はなかなかみづから証言してくれませんか、芸術作品に準拠することになります。

福音書を文学作品と言うのは語弊がありますが、サロメとマグダラのマリアは、女性の性欲の例として注目されます。彼女たちはいずれも、生き生きとしたたくましい男性を欲望の対象としたのではなく、捕囚され、処刑される男を欲望しました。

小説家としては、Marguerite Duras と Elfriede Jelinek の名を挙げたいと思います。しかし、Duras の代表作「Lol V Stein の恍惚」の邦訳が中古本で数千円の値がついているのには驚きました。「愛人」と「北の愛人」は文庫本で手に入りますから、それらを読むのが良いと思います。Jelinek は「ピアニスト」しか読んだことはありませんが、邦訳は古本で安く手に入りますし、映画化されたものはレンタルで見ることができます。あのクライマックスがどう映像化されているのか知りませんが。

いずれにせよ、男でも女でも、性欲に関しては倒錯的であることに変わりあ

りません。なぜなら、性関係は無いからです。

「性関係は無い」と「女は現存しない」は、多分、Lacan の命題のなかでも最も良く知られたものでしょうか？ 日本でも？

「性関係は無い」はずいぶんびっくりさせる命題かもしれませんが、さほど突飛なものではありません。Freud のリビード発達論の文脈で考えれば、つまり、Freud が想定したような性的成熟としての性器段階は無い、とLacan は言っているのです。Primat des Phallus 「ファロスの優位」と Freud が呼んだ「正常」な成人の性の発達段階はただの社会規範からの要請、想定にすぎません。

存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ において真理の座に置かれた ϕ は、直接的にはこの「性関係は無い」に由来します。

性関係は無いのですが、性的と呼べるような満足が無いわけではない。それをLacan は「剰余悦」le plus de jouir と呼んでいます。それをただ単に「悦」jouissance と呼ぶこともあります。用語や表現の厳密さから言えば、もうちょっと気をつけて言ってほしいと頼みたくなりますが、この明治生まれのじいさんはお構いなしでした。

ここでも、用語に捕らわれるよりは、形式化された記号、学素 a を以て考える方が迷うことはありません。

ともあれ、性関係は無い、その無い性関係の代理物、代理品(それらの表現には、「まがいもの」というニュアンスがこめられています)として、剰余悦 a が、欲望の客体、欲望の原因客体として現れてきます。この原因という表現もかなりの注釈が必要ですが、別の機会に説明します。

Jouissance の概念について御質問をいただきました。ありがとうございます。

Lacan のテキストのなかには幾つかの種類の *jouissance* が見出されます。まず *jouissance phallique* は、*signifiant* に媒介された悦です。*Jouissance de l'Autre* の用語を Lacan は一義的に用いてはいませんが、1947-75 年の *Séminaire RSI* の図において *jouissance phallique* とは区別されて、*le symbolique* の位の外に位置づけられている限りで、それは *signifiant* によって媒介されていないものと見なされます。しかし、*le réel* と *l'imaginaire* との交わりである *jouissance* とは、いったい如何なるものでしょうか？もしかしたらそれは *jouissance mystique* と呼べるものかもしれません。

01 July 2014 : ファロスについて; *aliénation* について.

Jouissance phallique と *plus-de-jouir* との関係についての考察を送ってくださった方に感謝します.

Lacan の *phallus* の概念は複雑です. 実在 *le réel*, 影象 *l'imaginaire*, 徴象 *le symbolique* の三つの位に沿って整理するなら, わたしが ϕ の学素を以て形式化するものは, 実在的ファロスです. 学素 $(-\phi)$ は影象的ファロス, 学素 Φ は徴象的ファロス, と識別することができます.

Jouissance phallique においてかかわるファロスは徴象的ファロス Φ です. そして徴象的ファロスは, 男女の性別の問題にかかわってきます. それに関しては, 先日二つの短い日本語論文を公表しましたので, 御参照ください.

Jouissance phallique は, 男性的悦として, 精神分析治療に対して抵抗を成します. Freud が Adler を引用して「男性的抗議」と呼んだものです. その本質は去勢不安です.

Jouissance phallique を取り上げる前に, 剰余悦 *plus-de-jouir* についてよ

り詳しく見て行きましょう。

質問者の方がおっしゃるように、Lacan が α と呼んだものの構造は、
剰余悦の構造に他なりません。ここで剰余悦の構造と呼んだものは、存在
の真理の現象学的構造、つまり、 $\frac{a}{\phi}$ の構造です。この構造は、性関係が
無いことによる源初的な十全たる悦の不可能、不可能な悦 — それは、存
在と等価なわけですが —、それを、症状の徴示素である a が代理をする
ということにおいて、代理満足としての症状の構造であり、また、徴示素 a
が客体 a とも呼ばれるように、欲望の客体、ないし、欲望の原因客体の構
造でもあります。

同じひとつの構造が主体の構造であり、かつ、客体の構造でもある、という
事態を、Lacan は *aliénation* 「他化、異化」と呼んでいます。その語には、
狂気、精神疾患という意味もあります。つまり、主体自身の本源的な構造で
あるものが客体として現れてくるということが、*aliénation*、狂気 — つまり、
神経症、性倒錯、精神病 — の本質です。

精神分析は、この *aliénation* を解消しなければなりません。狂気から人間
を救わねばなりません。そして、人間が本源的なしかたで、本自的なしかた
で、要するに、本来の自己にかなったしかたで実存するようにしなければ

なりません。Aliénation の状態から自己本来の状態へ生まれかわること、それが精神分析における救済です。

女の存在構造は、その救済により近いところにあります。男の場合は、まず jouissance phallique を forclore することから始めないとなりません。

Kierkegaard と去勢について非常に興味深い考えを紹介していただきました。ありがとうございます。彼の「不安の概念」は Lacan のお勧めの本のひとつですが、わたしは残念ながらまだ読んでいません。

不安に関しては、「存在と時間」の不安論も是非参照してください。

02 July 2014 : 学素 ϕ ; ハイデガーと存在の歴史 ; 心理, 意識, gender 等の概念は形而上学的誤謬である.

ϕ を $\$$ や A のように抹消するのは, わたし独自の工夫です. Heidegger が Sein をバツ印で抹消しているのに倣いました. 確かに, Lacan のテキストのなかに $(-\phi)$ が imaginaire なものとしてではなく réel なものとして用いられていると解釈することができる下りがあります. しかし, $(-\phi)$ は「去勢の影象的な関数」であると Lacan は 1960 年のテキストで明確に定義していますから, 混乱を避けるために, $(-\phi)$ とは異なる学素 ϕ を用いたいと思います.

Heidegger に Nazi やユダヤ嫌いのレッテルをはって批判したつもりになっている人々がありますが, Proust が既に文学批評について「作家と作品は別次元のものであって, 作家の人格や伝記に基づいて作品を評するのは見当違いだ」と言っていたように, Heidegger の Denkwerke — 思考の作品と言ってはちよつとしっくりしませんが — 思考の業(わざ), 思考の所業は, 彼の政治的思念とは切り離して評価されるべきです.

こんなことを言うのも, Heidegger avec Lacan に対して, Heidegger は Nazi だと批判されたりしないか, とコメントをもらったからですが.

Heidegger は非常に広い視野で考えました. いわゆる思想史を「存在の歴史」と捉え, 彼が第一の源初と呼ぶ前ソクラテス期から始めて, プラトンに始まる形而上学, ニーチェにおけるその満了, 形而上学に必然的に伴うニヒリズム, そして, 今もなお, 我々はニヒリズムのまっただなかにいること, しかし, 科学技術の本質を為す Gestell 「総召集体制」は, 新たな源初, 第二の源初の前ぶれとなるだろうという預言に至るまで, Heidegger は見通しました.

今や, 資本主義の本質である資本の言説の限界は明らかです. 全体的に見れば, 経済成長の可能性はもう残されていません. そして, Fukushima は, 科学の言説のほころびを今や明らかにしました. 資本の言説と科学の言説は, 総召集体制の二本の柱です. それらが破綻しつつあることが今や明白になってきました.

総召集体制体制の崩壊と, それに続くかもしれない何らかの再生と. それは, 精神分析の主体の死と復活による救済と, 構造論的には等価です.

精神分析などにかまけていて, つまり, 自分のことにだけ気をとられていて, 社会の現実を見ないでどうする? これは, Lacan の時代から精神分析に

向けられていた批判でした。sex のことばかり考えていてどうする？無駄口をきいていないで、街頭に出て行動せよ！1968年ころは、そんな雰囲気でした。

ある意味で、三島由紀夫もそんな雰囲気に巻き込まれてしまったのかもしれませんが。自分の殉教によってニヒリズムの超克のきっかけを与えることができるかもしれないと彼は思ったかもしれません。

しかし、社会の構造と、主体の構造は、おなじ学素で形式化して捉えることができます。それが Lacan の学素の強みです。そして、Lacan の学素にそのような可能性を読み取るためには、Heidegger の広い視野が必要です。

心、心理、意識、等の概念はすべて、形而上学的誤謬です。

性の問題をいわゆる gender という社会学的概念に還元して、社会的役割といった視点から考えるのも、社会学的誤謬、ひとつの形而上学的誤謬です。

男女の平等をめざすとすれば、それは、女性がファロスを得ることによって

ではありません。むしろ逆に、男がファロスを捨てることができなければ男女の平等は達成されません。

そう断言し得るのは、Lacan に準拠してです。

性の問題、性欲、性本能の問題の出発点は、Freud が気がついたひとつの根本的な不可能です。絶対的に除去し得ない、制止できない、満足させることのできない何か人間の本有の核にある。この洞察が、精神分析の主体の構造論の出発点を成します。その不可能性を、本能、欲動、欲望、その他、いかなる用語で考えようとするかは、どうでも良いことです。重要なのは、その不可能という實在 *le réel* を、構造論的な穴として見定めることです。言うなれば、それが *alpha* であり *omega* です。

03 July 2014 : 資本の言説と科学の言説；存在論的な穴；ハイデガー・ラカン定理.

「資本の言説」[le discours du capital] と「科学の言説」[le discours de la science] について御質問をいただきました. ありがとうございます. 両用語は Lacan のテキストに見出される表現ですが, Lacan 自身はそれらについて詳しく説明しておらず, それらの用語をどう解釈すべきか見解が分かれています. 特に, 科学の言説は多分, Lacan 自身が一義的には用いていないようです.

$$\frac{S_1}{\$} \rightarrow \frac{S_2}{a}$$

支配者の言説

$$\frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{\$}{S_1}$$

分析家の言説

ともあれ, 「資本の言説」は「資本家の言説」 le discours du capitaliste に対する症状として捉えられます. 資本家の言説はひとつの支配者の言説であり, 支配者 S_1 を資本家, S_2 を労働者, $\$$ を断念された欲望 [versagter Wunsch], a を剰余価値と解釈します. それに対して, 蓄積された剰余価値が症状として agent の座へ出現してくると, 資本の言説が成立します. その場合, a は, ひたすら自己増殖を命ずる症状・超自我としての資本です. 資本の自己増殖という超自我命令が資本主義という狂気の本質です.

そして、その狂気は今やもう成り立たなくなってきました。

科学の言説においては、分析家の言説の能動者の座に位置する a は、科学の客体、つまり自然科学であれば、しかじかの研究の対象となる自然現象を表します。少なくとも Lacan の「科学と真理」という書においてはそう解釈されます。別の箇所では、科学の言説と *hysterica* の言説は同じだと Lacan は言っていたと思いますが、それをどう理解すべきか、まだ十分に考えていません。

$$\frac{a}{S_2} \rightarrow \mathcal{S}$$

この図は「分析家の言説」を若干簡略化したものです。Galileo は「自然は、数学の言語で書かれた書物だ」と言いました。この命題は、近代に始まる科学の最も基本的な前提的仮定を公式化しています。すなわち、科学の言説においては、存在の真理の座に、数学の言語で書かれた — すなわち、形式言語において形式化された — 知 S_2 が仮定されているのです。そして、科学の対象である諸現象 a は、仮定された知 S_2 を代理的に表しています。科学の営みは、現象 a を解釈して、存在の真理の座に仮定された知 S_2 そのものを数式の形 — ないし、それに準ずる形式化された形 — において読み取ろうとすることに存します。

質問: 「存在論的な穴」と呼ばれているものは, 「わたしたちの生にはどこからうまく行かないところがある, そのうまく行かなさを巡り *sexuality* が営まれる」という事態を生ぜしめるものだ, と言って良いだろうか?

そのとおりです. Freud が *das Unbehagen in der Kultur* と呼んだもの, また, 我々個人個人が折々に経験する不安, 不快, 症状等々は, すべてこの存在論的な穴にかかわっています.

そして, あらゆることをこの存在論的な穴との関係において思考する必要があります. なぜなら, その穴こそ, *Es gibt Sein* と Heidegger が言うときの *Es* の場処, *Sein* の場処, *Sein* の場処だからです.

« *Es gibt Sein* » は, 存在の真理の現象学的構造を言い表す公式です. *Es* がすべての中心です.

Sexualité に関しては, Lacan が *Séminaire XI* において示しているように, それをひとつの実体として捉えるのではなく, むしろ分解する必要があります. ひとつは客体 *a* であり, もうひとつは源, つまり, 存在, *Es* です. それから, *sexualité* には性別 *sexuation* の問題が含まれますが, 御存じのよう

に, *sexuation* を Lacan はまた別個に論じています.

『ハイデガーとラカン』の第一章では, 「ハイデガー・ラカン定理」とでも呼べる最も根本的な命題を証明してあります. 略して H-L 定理です. つまり, ハイデガーの存在とラカンの「性関係は無い」: \emptyset は等価であるということ:

$$\text{Sein} \equiv \emptyset$$

の証明です. 厳密に論証しようとする, 結構面倒です. ともあれ, それによって, 性関係の不可能を存在論的穴と捉えることができます.

H-L 定理は, ハイデガーとラカンを統一的に思考しようとするとき, その足がかりとなる基本中の基本の定理です.

Heidegger の Sein と Lacan の言う *jouissance* は同じものだという直観はずいぶん前から持っていたのですが, 厳密な証明を展開することができたのは Heidegger avec Lacan において初めてでした.

H-L 定理に準拠することによって, わたしたちは, 存在論的穴を見失わずにすむはずで, それがかとにかく一番大事なことです.

今日, Facebook での対話のなかで, 女にとっての欲望の客体に関して, Abélard と Héloïse のことが話題になって, びっくりしました. 御存じですか? Abélard (1079-1142) と Héloïse (1094-1164) は, いうなれば道ならぬ恋に陥り, それに怒った彼女の叔父ないし伯父によって, Abélard は去勢されてしまいます. そして, 二人とも別々の修道院に入ります. しかし, 二人の愛は持続し, 愛の手紙のやりとりが続きます. その書簡集は出版され, 邦訳は今でも岩波文庫で出ているそうです.

これは, 女がまさに去勢された男を欲望の客体にした典型例です. しかも, その書簡集が女性の間で今も愛読されている! 男は研究者でもなければ見向きもしないでしょう. 女が男において欲望の客体とするのは *phallus* Φ では決してないということを最も見事に例証するもののひとつでしょう.

このような歴史的証言のうちにも, 精神分析の終わりにおいて欲望は如何に生きられるか? という Lacan が *Séminaire XI* の最終部分で措定している問いに対する答えのヒントがあります.

通常の意味では決して成就され得ない愛を辛抱において生きること, それは「宮廷愛」 *amour courtois* と呼ばれているものも同じです.

そこにおいては何がかかわっているのか？存在論的穴をそのものとして支える、ということです。穴を塞いでしまうのではなく、穴を穴として在るがままに支える。それが、分析家の欲望と Lacan が呼ぶ欲望の生き方です。

それは、我々神経症者にとっては、分析を通じてようやく達成し得る状態ですが、特別な人々にとっては、分析経験の外においても達成されます。しかし、ひとりで、みづからの意志のみによって達成されるわけではありません。そこには必ず他 *Autre* と他 *Autre* の欲望が関与してきます。

Lacan は「精神分析の終わりに主体は聖人になる」という意味のことを言っています。カトリックでない人々にとって聖人という言葉はぴんどこないかもしれせん。日本語で聖人君子と言うのとは違います。聖人は、新約聖書において聖パウロにより定義されています。明日は聖人についてお話ししましょう。今日はこのへんで。

御質問、御意見、メッセージ等を御遠慮なくお送りください。対話は思考を活性化します。だからこそソクラテスは常に対話を好んだのです。

04 July 2014 : フロイトの自我の概念について; narcissisme について;
stalker と宮廷愛; 聖人について.

中井久夫先生の或る文章に関連して御質問をいただきましたが, あの手
の心理学的言説に捕らわれないようにしましょう. そこにおいては適切に問
いを立てることができませんから, 答えも見つかりません.

Narcissisme を論ずる前に, Freud が自我 *das Ich* と呼んだものについて
注意を促します. というのも, それは一義的ではないからです. 一方に『ナル
チスムスを導入するために』における自我があり, 他方に第二トピックに
おける自我があります.

分析家の言説の構造に準拠するなら, narcissisme との関連において論ぜ
られる自我は, 能動者の座に位置する a により形式化されます. 他方, 第
二トピックにおける自我は, 他者の座の $\$$ です. 第二トピックの理論では,
超自我と呼ばれるものが能動者の座の a に対応します.

Narcissisme との関連で覚えておきたい Freud の命題があります: 「彼ら
(精神病者)は自分の妄想を自分自身のように愛している」.

これは、「人間は自分の症状を自分自身のように愛している」と一般化され得ます。

Narcissique な自我も症状のひとつです。それらは皆、わたしが「症状の構造」と定義した学素： $\frac{a}{\Phi}$ により形式化されます。

自我という症状においては、 a は, symbolique なものとして捉えられたときには Ichideal 「自我理想」とよばれ, imaginaire な側面において捉えられたときには das ideale Ich 「理想自我」と呼ばれます。

ともあれ、「傷ついたナルシシズム」と中井久夫先生が呼ぶものは、この自我の構造が多かれ少なかれ破綻した状態、 a が Φ を十分に代表し得なくなった状態として理解されます。そのとき、確かに、存在論的穴が多かれ少なかれ口を開けることとなります。

Stalker への言及は、興味深い論点です。Stalker は自分の欲望の客体 a につきまといまわります。そこにおいては死の本能が野蛮なしかたであらわになります。Stalker は宮廷愛の対極です。宮廷愛においては、死の本能という存在論的穴をそのものとして辛抱することがかわります。Stalker はその穴に客体 a をまさに飲み込んで破壊しようとします。

Stalker とは、欲望の客体に拒絶されながらもつきまとう者のことです。宮廷愛 amour courtois の正反対です。

宮廷愛においては、不可能を不可能として、そのままに保つことが関わっています。言い換えると、存在論的穴を穴として守るのです。それは苦痛なことです。Heidegger も Schmerz, 疼痛, 苦痛という表現を使っています。しかし、その苦痛を通して、真の communion 「他 A との交わり」の悦へ至ります。喪失の穴を何かで塞がずに、純粹に穴として保つこと、それが宮廷愛の本質です。

それに対して stalker は、存在論的穴へ客体を言うなれば呑み込んでしまおうとします。死の本能(欲動)が野蛮なしかたで、攻撃と破壊の本能(欲動)として、歯止め無く活動します、Freud の言う unhemmbar そのものです。

Heidegger avec Lacan のなかで、存在論的穴のまわりをぐるぐると堂々めぐりする、という比喻を出しました。精神分析においても、宮廷愛においても、穴の周りをぐるぐると周り、その中心へまなざしを向け、それを穴と認め、改めて何か存在事象でその穴を塞ぐことなく、穴を穴として保持するということ

がかかわってきます。

聖人においても、同じことです。Lacan は、精神分析家と聖人は同じ者だと *Télévision* のなかで言っています。Lacan は無神論者だからそんなばかげたことを言うはずがないと疑う方は、*Autres écrits*, pp.519-520 を読んでください。Lacan はそこにおいて、新たに聖人が誕生するようにと懸命に考えている、と言っています。

では、聖人とは何か？日本でどの程度報道されたか知りませんが、今年 4 月 27 日、復活の主日の次の日曜日、二代前の教皇ヨハネパウロ二世と、1958-63 年に教皇だったヨハネ 23 世が列聖されました。ヨハネパウロ二世は生前から聖人のほまれが高く、ヨハネ 23 世は第二 Vatican 公会議を開いて、カトリックの刷新を図った革命的な人でした。この二人は最も新しく列聖された聖人です。

他に、皆さんが知っているとすれば、Lacan の *Séminaire XX* の表紙を飾っている *sainte Thérèse d'Avila* でしょうか？天使に槍で刺されて恍惚としています。最も有名な *mystique* のひとりです。

神秘主義という訳語はどうもいただけません。マルクス主義のような主義で

はありませんから。

以上のようなすごい聖人もいますが、しかし、新約聖書のパウロ書簡のなかで聖パウロが *saints* (複数形)と呼んでいる人々は、そのような意味での聖人ではありません。そもそも、列聖するという手続きができる前の聖人たちですから。

ああ、その前に、殉教者に触れましょう。日本にも聖人がいます。16世紀末から17世紀始めにかけてキリシタン弾圧のなかで処刑されたキリスト教徒たちです。古代ローマでも、キリスト教が公認される前は、多くのキリスト教徒が迫害され、処刑されました。それら殉教者たちの多くが聖人として崇められています。なかにはほとんど伝説上の人物としか思えない人もいますが。

殉教者という語については、Lacan が *Séminaire III* で言ったこの命題が有名です：精神病者は無意識の殉教者である。殉教者 *martyr* という語の語源であるギリシャ語は、証人という意味です。精神病者は無意識を証言する者たちである。どのように？彼らの症状を以て。

そして、キリスト教の殉教者たちは、身を以て神について証言した者たちで

す。身を以てというよりも、身を捨ててと言うべきかもしれません。ゴミのように、クズのように身を捨てて。(ゴミ, クズという単語も, Lacan は精神分析家に関して用いています.)

聖人は存在の証人です。

05 July 2014 : キリスト者の実存について.

聖パウロが彼の書簡のなかで *saints* 「聖なる者たち」, 「聖徒たち」と呼んでいるのは, 要するに, キリスト教信徒たちです.

聖書を読んだことのない人々のために解説しておく, 新約聖書は福音書だけではなく. 使徒パウロがそのときどきの宣教の必要に応じて一般信徒たちに書き送った書簡が非常に重要です. なぜなら, それらは西暦 50 年代に書かれた — つまりイエスの処刑から 20 数年後に書かれた — キリスト教文書のうちで最も古いものだからです. 福音書が書かれたのはそれより後です. 特に重要視されているのは, パウロがローマに暮らす信徒たち宛てに書いた「ローマ書簡」ですが, そのほかのものも劣らず重要です. Heidegger は, 1920-21 年の講義において, パウロの「第一テサロニケ書簡」の解釈を行っています. この書簡は, パウロ書簡の最初のもの, つまり最古のキリスト教文書です.

では, キリスト教信徒であるとは如何なることか? 定義のしかたはいろいろあるでしょうが, 最も簡潔な定義のひとつだろうと思われるものは, 御ミサのなかで *transsubstantiation* の神秘が祝われた後, 信徒たちが唱えるこの言葉です: *Mortem tuam annuntiamus, Domine, et tuam resurrectionem*

confitemur, donec venias.

日本では「主の死を思い, 復活を讃えよう, 主が来られるまで」という文言になっています.

フランスでは *Nous proclamons ta mort, Seigneur Jésus, nous célébrons ta résurrection, nous attendons ta venue dans la gloire.*

ラテン語を文字どおりに訳すと:「主よ, わたしたちは, あなたの死を告げ知らせます, あなたの復活を公言します, あなたが来るときまで」.

重要な言葉は, 死, 復活, 「来る」です.

主イエス・キリストがこの世に再び来ることを, ギリシャ語では *παρουσία* と言います. この語はそのまま *parousie* と書かれて神学のテキストなどで用いられています.

「来る」は, 「あなたが来るときまで」, つまり, 主の来臨を「待つ」ということを含意しています. フランス語では明確に *attendre* 「待つ」という語を補っています.

神の死の喪の悲しみに耐えると同時に、イエスは永遠の命へと復活したことを喜び、そして、主が来ることを待ち望む。これがキリスト教徒の定義であり、聖人の定義です。

このキリスト教徒の存在論的構造こそ、Heidegger が本自的な実存と呼んだものです。

主が来るのを待つということが本質的ですから、『存在と時間』においては「存在の意味は時間だ」と Heidegger は言ったのです。

そして、待つことは、神の死の悲しみと苦痛に耐えることを含意します。辛抱という日本語はこの文脈において非常に雄弁です。辛さ、悲しみ、痛みを抱えつつ、それに耐えながら生きるということ。そのように生きているもの、そのように実存している者が聖人です。

そして、そのように生きることにおいて聖人は *παρουσία* の *ex-sistence* を証言しているのです。言い換えると、聖人は、その存在構造において、*παρουσία* を *ex-sister* させているのです。それが、Heidegger が *Ereignis* と呼ぶところのものです。

06 July 2014 : 読解不可能なことを思考し続ける; 精神疾患と精神分析;
父の名の閉出; folie, aliénation, forclusion.

幾つか御質問をいただきました. ありがとうございます.

まず『存在と時間』の邦訳についてですが, わたしが昔読んだものは絶版
のようです. 昨年新しい翻訳が出ているようですが, わたしはそれを見たこ
とはありません.

基本的に言って, Heidegger を読むためにはドイツ語を知る必要がありま
す. Heidegger のみを読むためにドイツ語を習得し, Lacan を読むためだ
けにフランス語を習得することは, する価値のあることです.

わたしが目にしたことのある邦訳は, Heidegger も Lacan も, それだけで
は何も理解できません. 原文を隣に並べて並行して読まなければ, 何も理
解できません.

そして, そのように並べて読むと, それらの邦訳が如何に誤訳に満ちてい
るかを発見するでしょう. ハイデガー全集の邦訳もその誤訳の多さは『エク
リ』に負けていません. ドイツ哲学や神学を専門的にやっている人々の手

によっても、Heidegger の邦訳はその程度の水準にしかかなり得ないのです。

はっきり言って、翻訳に時間をかける前に、原文をじっくり読み込むべきです。まず勉強会をやって翻訳してみようという姿勢は、日本のアカデミズムの悪しき伝統です。時間と労力の無駄です。翻訳しようとせずに、まず原文のレベルで読み取れることは何か、読解不可能なことは何かを把握すべきです。

鬱病に関する御質問をいただきました。精神医学領域の疾患としての Schizophrenie と躁鬱病は、常染色体優性遺伝の疾患です。それは臨床的事実です。それらの疾患の病因が心理学的レベルにあると考えることは nonsense です。

精神分析にとって有意義であるのは、精神分析はそれらの疾患から何を学び得るかと問うことです。

Lacan が「精神病」 psychoses と言うとき、彼の念頭にあるのは Paranoia と Schizophrenie です。そして、Lacan の精神病論と言えば「父の名の閉出」とくるのが tarte à la crème ですが、70年代の Lacan では話はそうは行きません。そのことには、性別に関して先日書いた小論のなかで若干触

れてあります.

結局のところ, 分析家の言説は, 支配者の言説における *signifiant maître* S_1 の生産の座への閉出により成立し, そしてその閉出は, 『精神病のあらゆる治療に対する予備的問い』における「父の名の閉出」の概念の一種の一般化です. 父の名 S_1 の閉出により, 分析家の言説における症状の成立が可能になる, と言えます.

閉出されたものは実在へ回帰する, と Lacan は言いました. では, 閉出された父の名は?

閉出された父の名は, ひとつには, 分析家の言説における真理の座へ存在として回帰します. もうひとつには, 閉出された父の名は, 症状の実在として, 能動者の座へ a として回帰します. この意味での父の名の閉出は精神病に限ったことではありません. 一種の一般化を見ることができると思います.

鬱病については, 日を改めて論じましょう.

昨日言ったことに若干付加するなら, *mortem tuam annuntiamus, Domine, et*

tuam resurrectionem confitemur, donec venias の confiteor は、「告白する」
です。

主の復活は現に起きました。我々はそのことを証言します。

confiteor は、あることを認めて、それを言表するということですから、「証言
する」です。annuntio 「告げ知らせる」も「証言する」です。

神の死と復活を証言する者として生きること、それがキリスト教徒的実存で
あり、聖人的実存です。

殉教者の原義が証人であることは前に触れました。殉教者は文字通りに身
を捨てて証言しました。Lacan は、精神分析においても同じことを要請して
いるのです。

forclusion と aliénation との関連について御質問いただきました。一般化
された forclusion は aliénation(狂気)の可能性の条件である、ということ
はできると思います。つまり、 S_1 が支配者(能動者)の座に居座っている限
りは、 a が症状の剰余悦として能動者の座に出現することはできない、とい
う意味で。

Lacan が 1946 年に folie と呼んだものと, 1964 年に aliénation と呼んだものは共に, 症状の構造の学素 $\frac{a}{\phi}$ により形式化されます. Lacan が folie という表現によって思考していたものは, 要するに精神分析における症状です. S_1 の forclusion は分析家の言説, つまり症状の言説において成起することです. そして, 症状の言説は folie の構造です. S_1 の forclusion 無しには症状の成起は可能ではありません.

07 July 2014 : 鬱と躁, 死と復活; 死の覚悟; 聖なる靈氣.

翻訳についてさんざん悪口を言いましたが、「翻訳する」という作業について言うと、その最大の過ちは、理解不可能なことを理解不可能なままに保つことが許されない、ということです。

Heidegger や Lacan に限らず、偉大な哲人の著書には必ず我々にとって理解不可能なことが含まれています。だからこそ、彼らは偉大な哲人なのです。

Heidegger は、偉大な哲人自身にとって思考不可能であったことこそ最も重要なことである、と言っていますが、我々にとっては、そのレベルに至る前に、或るテキストにおいて読解不可能であるところに非常に重要な、肝腎なことがひそんでいます。ですから、或る時点で理解不可能なこと、読解不可能なことは、そのようなものとして頭のなかに保存し、おりにふれてそのことに関して思考し続ける、というようにするのが望ましいことです。

ところが、翻訳するとなると、しかも、それを出版するとなると、編集者はそんな悠長なことは許してくれません。ここは翻訳不可能です、と言いわけることは許されません。理解できないままにわけのわからない訳文にしてお

くことも許してくれません。

一番いけないのは、訳者または編集者が、適当に意味の通ずる訳文をでっちあげてしまうことです。それでは、訳文を読む者に、ここでは理解不可能なこと、理解困難なことが語られているのだ、ということ伝えることすらできなくなってしまう。

重要なのは、或る時点で読解不可能なことは、読解不可能なこととして記憶のなかに保存し、そのことについて繰り返し問い、思考し続ける、という態度です。それによってあるとき突然、ああ、あれはこういうことだったのだ、とひらめく瞬間が訪れます。無理やり翻訳してしまったのでは、その恵みは永久に断たれたままです。

精神医学に詳しくないかもしれない人々のために躁鬱病について若干捕捉しておきます。今は、bipolar mood disorder 「双極性気分障害」と呼ばれていると思います。わたしは数年間にわたって、躁鬱病の人々と日常的に接する機会に「恵まれ」ました。患者ではなく、職場の上司です。その人の父親も躁鬱病でしたし、その人の弟もそうでした。彼が躁状態のときには周りはふりまわされます。鬱状態のときには静で、わたしのような下っ端の医者にとっては平和でした。躁鬱病の症例として日本で最も有名なのは作家

の北杜夫氏でしょう。彼が躁状態のときは、株投資に手を出そうとするのを
食い止めるために奥さんは大変苦労したそうです。そのような躁鬱病は、
遺伝性の疾患です。わたしの上司だった人についてだけでなく、わたしが
治療を直接担当した複数の患者さんにおいても、それは臨床的事実として
確認されています。

問題は、非専門家たちが或る人について彼ないし彼女は躁鬱病だ、とか
鬱病だと言うとき、それが本当に精神病理学的に真なる命題であるかは、
えてして不明だ、ということです。

また、過労などにとまなう鬱状態は、わたしが先ほど言った躁鬱病と同じ疾
患ではありません。

以上のような留保をつけた上で、鬱状態と躁状態を存在論的構造の観点
からどのように規定し得るか、と問うならば、精神病症状においては症状の
構造の解体が徴示素 a の増殖によって代補されるのに対して、鬱病では、
症状の構造の解体がそのものとして起こります。つまり、症状の徴示素 a
の脱落が起こり、存在 ϕ がそのものとしてあらわになります。鬱病におい
て自殺の危険性が高いのは、そのせいです。鬱は、単なる気分の落ち込
みではありません。言うなれば、鬱の患者は死神に取り憑かれてしまうので

す。なぜなら、存在の別名ですから。

自殺してしまう患者さんは、死の深淵の開いた口に呑み込まれたままとなってしまう人です。そこまで行かなくても、鬱状態の人は、何もできなくなり寝たきりになってしまうこともあります。それはまさに死者となってしまうようなものです。死者ですから、食事もとりませんし、眠りもしません。そのまま放置されれば、生理学的に文字どおり死んでしまいます。

それに対して、躁状態とは、そのような死からの復活の歓喜の表現です。病的な場合には、歓喜を通り越して、精神運動性興奮の状態へまで行ってしまいます。

鬱は喪の悲しみであり、躁は復活の喜びです。Lacan が「精神分析の終わりは躁鬱病への準拠において考えられる」という意味のことを言うとき、そのように理解された躁と鬱のことを Lacan は考えていたはずです。

死すべき存在は死と如何なる関繋を持ち得るのかについて御質問がありました。死との遭遇には、望ましいしかたと望ましくないしかたがあります。望ましいしかたは、死を覚悟することです。望ましくないしかたは、死に不意打ちされて、死に呑み込まれてしまうことです。

「死を覚悟する」とは、「死を予覚 *entwerfen, anticiper* する」ことです。

精神分析においては時間をかけて徐々にそのような覚悟の用意をしてゆきます。

Heidegger のような天才的な哲人は、精神分析ではなく、先哲との対話を通して同じような覚悟に至れるのでしょう。**Heidegger** は、自分の信仰、神との関係、そして、先哲を死の覚悟の手本として読み解くことを通じて、みづから死の覚悟に至ることができたのだと思います。そのようなことが可能なのは、みづから深い思考をすることのできる限られた人々だけだろうと思います。

三島由紀夫は、死を覚悟しながらも、覚悟、予覚の構造に存有し続けることができませんでした。このことは、三島における「父の名の閉出」を示唆しています。

死の覚悟において存有するためには、父の名ないし聖なる靈気の作用が必要です。

精神分析は死の覚悟を可能にするひとつの方途です。そして、死の覚悟にもとづいて、復活ないし解脱に至ることができます。

「聖なる靈氣」は、通常「聖霊」と訳されている *Sanctus Spiritus* のわたしなりの翻訳です。 *Spiritus, esprit, Geist* は「霊」ではなく「気」「精気」です。「精気」という語は若干使いづらいので「靈氣」としました。

「覚悟」は Heidegger の *Verstehen* 「了解する」のわたしなりの翻訳です。*den Sinn des Seins verstehen* は、単に「理解する」「了解する」ことではなく、「本自的に実存する」ことです。それは、死の覚悟を要請します。

世人 [*das Man*] の *aliénation* から脱するためには、死の覚悟が必要です。世人という疎外ないし狂気から脱するためには、「世に対して死ぬ」ことが必要です。世人の存在様態から脱しなければ、死の覚悟が無ければ、本自的に生きることはできません。

08 July 2014 : 鏡の段階は特殊他化理論である；症状の解消と死・復活。

鏡の段階と *aliénation* との関連について御質問をいただきました。ありがとうございます。良い質問です。つまり、答えがいのある質問です。

Einstein の特殊相対性理論と一般相対性理論との関連に依託して言うなら、鏡の段階の理論は、特殊 *aliénation* 理論です。

鏡の段階と自我の成形に関して Lacan が主題的に論ずるのは 1960 年までです。彼が 1953 年に *signifiant* と *symbolique* の概念を彼の教えに導入した後は、鏡の段階の理論は、より一般的な *aliénation* の理論に包摂されることとなります。

日本における第一世代 *lacaniens*、その中には Lacan に関することについてわたしの師であった故三好暁光先生も含まれますが、彼らが Lacan について日本に紹介できたのは、鏡の段階の理論まででした。それもいたしかたありません。彼らは Jacques-Alain Miller による Lacan 読解に触れる機会がありませんでしたから。

すべての *lacaniens* にとって、Lacan の教えの全貌が何とか把握可能に

なったのは, Jacques-Alain Miller の努力のおかげです.

わたしは, Jacques-Alain Miller が大変充実した講義と séminaire を毎週欠かさず続けていた時期に Paris VIII に留学することができて, 大変幸運でした.

わたしが今していることは, Jacques-Alain Miller のまねごとにすぎません. つまり, Lacan のテキストを徹底的に読み込み, そのときどきに読んでいる部分を Lacan の教え全体のなかに位置づつつつ解釈し, 字面においては変わっているかのように見える Lacan の言表をとおして, 不変なもの, 根本的なもの, つまり構造を読み取るという作業のしかたを, わたしは Jacques-Alain Miller から学びました. その意味ではわたしは常に millérien です. たとえ今は, 彼の Lacan 解釈に必ずしも同意できないとはいえ.

さて, 鏡の段階についてですが, それは, 症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ において a が影象的なもの, つまり影象 image である場合の話です. 鏡の段階の理論は, 存在としての主体 ϕ の影象的他 a との同一化により自我の成形を説明するものです.

徴象の位 *l'ordre du symbolique* と徴示素 *signifiant* の概念を導入した
1953 年以降, つまりローマ講演以降, 鏡の段階の理論は, より一般的な症
状の構造の概念のなかに包摂されます. そこにおいては, *a* は *signifiant*
であり, さらには *semblant* 仮象と規定されます. 何に対して仮象であるか
というと, 実在 *le réel* に対してです.

そして, 実在とは, 解脱実存 *ex-sistence* としての主体 ϕ です.

精神分析は, 自我無き主体を成起せしめることを目ざす, という意味のこ
とを Lacan は 1953-54 年に既に言っています. それは, *imaginaire* としての
a を純粋な穴としての *a* へと滅却することとして最終的に公式化されます.
そのことを Lacan は 1967 年に主体滅却 *destitution subjective* と呼んで
います. それは, *ex-sistence* 解脱実存そのものとして存有することであり,
要するに「解脱」と呼び得るものです.

精神分析的救済論において, そのような解脱を論ずることになるでしょう.

御質問くださった方, 納得できない点についてはさらに御質問ください.
「くどい」ということはありません. 納得のゆくまで徹底的に問いつめることが
本質的です.

症状を完全に解消することは可能なのかという御質問をいただきました。
可能です。我々自身がブッダやイエスの実存様態の域に達するならば。
(漫画のブッダとイエスのコンビのことを言っているのではありません。)

死は \emptyset そのものです。そこから出発して、死を構造 $\frac{a}{\emptyset}$ において改めて
生きることが復活です。ただし、そこにおいて a は, *imaginaire* の側面を
伴う存在事象ではなく、純粋な穴としての a でなければなりません。それ
が、純粋な復活の悦です。

09 July 2014 : 学素 A について; hysteric と言説と女の性別; 大学の言説と男の性別; 他化的同一化の多重性.

御質問をいただいています. Twitter という媒体の性格上, 話が一貫している必要は無いだろうと思いますから, そのときどきの対話に応じて話題があちこちに跳んでも全く構わないでしょう.

まず Autre と A の学素についてですが, わたしが“他 A”と書くのは, 単に Autre と autre を区別するためです. いちいち「大文字の他者」「小文字の他者」などの書くのは煩雑ですから. Autre は“他 A”, autre は“他 a”です. これは Lacan のテキストを翻訳する際に利用している区別です.

学素 A の Lacan による定義は, 「他 A のなかの欠如」[un manque dans l'Autre] です.

他 A は trésor du signifiant 「徴示素の宝庫」ですが, そこに欠けている徴示素があります. なぜなら, それは書かれ得ない徴示素 — 抹消されてしか書かれない徴示素 — だからです.

それをわたしは, Φ という新たな学素を用いて形式化します.

欠如 A は, 欠如 Φ そのものです. 両者は相互に等価です: $\Phi \equiv A$

Φ も A も, 分析家の言説の構造における左下の座, 存在の真理の座に位置づけられる *ex-sistence* の学素である, と言えます. A は, 他 A の場処のなかの欠如という観点から思考された *ex-sistence* であり, 他方, Φ は「性関係は無い」の学素として定義されますが, 両者が差し徴しているものは同じです.

さて第二の質問は *hysterica* 「ヒステリー者」に関するものです. 四つの言説のひとつは *hysterica* の言説と名づけられています. それに対置されるのが大学の言説です. 大学の言説は, したがって, 強迫神経症者の言説と呼ばれてもよいのではないかとわたしは思っています. そして, *hysterica* の言説は, 当然, 女の性別公式と, 強迫神経症者の言説である大学の言説は, 男の性別公式と関連づけられるはずで

$$\frac{\$}{a} \rightarrow \frac{S_1}{S_2} \qquad \frac{S_2}{S_1} \rightarrow \frac{a}{\$}$$

hysterica の言説
大学の言説

ヒステリー症状の特色は, その著しい多様性と可変性です. そのことは, 女

の性別公式に基づいて説明され得ます。

女においては、存在論的構造の学素 $\frac{a}{\Phi}$ の a は、基本的に言って、純粹徴示素とも呼ぶべき 0 (zéro) そのものです。その構造は、或る意味で、精神分析の終わりにおいて到達されるべき純化された実存構造そのものです。

その意味において、 0 の代わりに仮象のファロス Φ が能動者の座に位置する男の存在構造は、救済ないし解脱から遠いのです。まずその仮象を閉出しなくてはならない、あるいは、その仮象が最後まで残って、滅却に抵抗しますから。

しかし、女性においても、まずもって、かつ大方は、zéro の開在はさまざまな仮象 a によって覆われています。ヒステリー症状の多様性と可変性は、仮象 a の多様性と可変性により説明されます。zéro の穴は、著しく反応性の高い官能基のように、またたくまに様々な仮象と結合して同一化を成起させます。他者の自我、他者の幻想、他者の欲望、さまざまな仮象との同一化が起こり得ます。

男の存在構造においては、仮象のファロス Φ への同一化が多かれ少な

かれ確固たるものであるので、女におけるような同一化の多様性、可変性
は見られません。

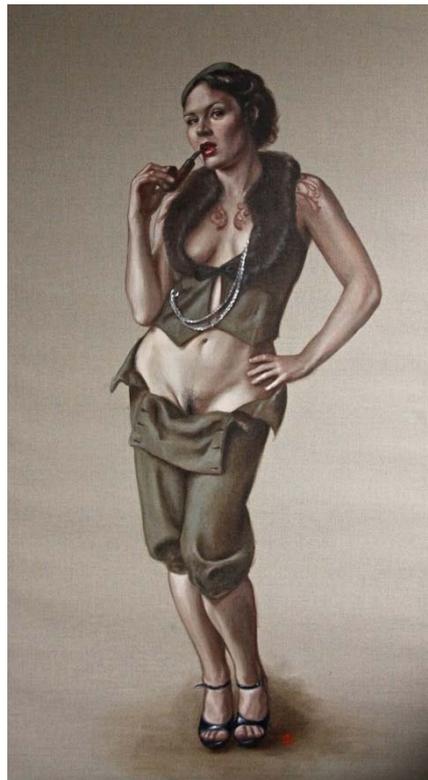
Lacan が *hysterica* の言説と名づけた構造そのものについては、明日以
降、引き続き考えて行きましょう。

死と復活は輪廻のように反復されるのではないか、という御質問をいただき
ました。興味深い御指摘です。

精神分析の経験の最中には、そのとおり、死と復活は繰り返し起こり得ます。
あるひとつの同一化が清算されるとき、喪の悲しみと、それと同時に、晴れ
晴れした喜びが訪れます。しかし、また次にほかの徴示素との同一化がす
ぐさま問題になります。症状の構造すなわち異化的同一化の構造におい
てかかわる徴示素は単一ではありません。Lacan は S_1 と同音語 *essaim*
(群れ)という語を持ち出して、症状の徴示素 a はたくさんある、というこ
とを示唆しています。ですから、異化の構造の解消は、タマネギの皮をむくよ
うに何回も繰り返されます。そして最終的に a がゼロにまで滅殺されたと
き、本当の解脱ないし救済が成起します。それは最終的なもので、唯一の
ものです。本当の復活は唯一であり、本当の解脱は唯一です。

10 July 2014 : まなざしの挑発.

<http://www.theguardian.com/lifeandstyle/2014/jul/07/painting-pornographic-pubic-hair-outrage>



Portrait of Ms Ruby May, Standing

by Leena McCall

昨晚ふと The Guardian 紙を見ていたら, ある展覧会に出されていた作品がその画廊の責任者の勝手な判断により撤去されてしまった, という記事が出ていました. 撤去の理由は猥褻性に存するとは明言はされなかったよ

うですが、そうであることに疑いの余地はありません。

しかし、猥褻であるのは、肖像画として描かれた半裸の女性の恥毛ではありません。彼女のまなざしです。見る者を見返す挑発的な、挑戦的なまなざしです。それによって、見る者は、Sartre が分析した窃視者と同じ状況に置かれます。つまり、のぞき見をしているところを、第三者に不意打ちされ、そして羞恥を感ずるという状況です。問題の絵は、のぞきの対象であったはずの女性自身が、のぞく者をまなざし返し、それによって、その絵を前にした鑑賞者に一種の居心地悪さを覚えさせます。それが撤去の本当の理由でしょう。

その記事を Facebook に投稿したところ、もっと直接的な行動に出た女性芸術家の事件を教えてくださいました。



<http://leplus.nouvelobs.com/contribution/1213853-j-ai-expose-mon-sexe-devant-l-origine-du-monde-mon-geste-n-a-rien-de-transgressif.html>

Courbet という画家の *L'origine du monde* 「世界の起源」(ないし宇宙の起源)という作品があります。女性の外性器だけを写實的に描いたものです。この絵は、かつて Lacan が所有していました。彼の Guitrancourt の別荘に飾られていました。ただし、普段は Lacan の友人の画家 André Masson が描いた別の絵で覆われて隠されていたそうですが、Lacan の死後、Musée d'Orsay に寄贈され、未成年者でも誰でも見ることができます

Courbet は女性の外性器の部分のみを描きました。つまり、上半身も顔も画面の外に置かれています。つまり、まなざしは描かれていないのです。

そこで、Deborah de Robertis は、Courbet の絵の前で自分の外性器を露出し、かつ、挑戦的なまなざして鑑賞者たちを見返す、という行動に出ました。彼女は、性器にまなざしを与えようと思いました。彼女自身、「わたしは性器によってまなざす」とコメントしています。彼女のまなざしが印象的です。

いずれの例においても、芸術作品として、あるいは、みずからを芸術作品にしたてる行動として、彼女たちは $\frac{a}{\phi}$ を体現しています。

しかし、分析家の言説の外における行動として見るとき、彼女たちの挑発的、挑戦的態度は、*hysterica* の態度の典型例と言えます。

Hysterica の言説について御質問をいただいていたから、考えてみましょう。

四つの言説のうち分析家の言説以外のもの、つまり、支配者、*hysterica*、大学の言説は、当然ながら、精神分析的状況の外で成起するものです。支配者の言説は排斥 *Verdrängung* (抑圧)の言説であると言えます。そして、*hysterica* の言説は、女の性別の公式と関連があると思われます。大学の言説は、強迫神経症者の言説と解釈し得るのではないかと考えています。そして、それは男の性別の公式と関連づけられるはずで

Hysterica の言説や大学の言説の構造のままでは、精神分析になりません。そのような構造のなかにいる主体を、精神分析の言説のなかに導入しなければ治療はできませんし、当然、救済や解脱に至ることもできません。分析の言説に入れば、*hysterica* でも強迫神経症者でも同じ症状の構造に位置づけられます。

分析的状況の外では、事態は異なります。Hysterica の言説では、まさに挑発と挑戦がかかわります。Hysterica は、右上の他者の座に位置する父 S_1 を挑発し、誘惑します。

しかし、hysterica はそれによって性的な満足を得ようとしているわけではありません。悦は彼女にとって不安以外の何ものでもありません。ですから、父は不能者でなければならないのです。

もし万一、 S_1 の立場にある男が hysterica の挑発にまともに答えようとする、つまり、不能でないファロスを以て応じようすると、hysterica は不安にとらわれて逃げ去ります。

Hysterica の言説において、 $\$$ が左上の能動者の座に位置しますが、これは、分析の言説において右上の他者の座にある $\$$ に hysterica は同一化している、ということを表しています。 $\$$ は、versagter Wunsch 断念された欲望です。

これは、Freud が『夢解釈』のなかで取り上げている hysterica の症例の分析にもとづいています。Lacan はその症例について論じています。Lacan の議論も非常に興味深いので、いつか紹介したいと思います。

11 July 2014 : いわゆる境界例としての *hysterica* の言説.

引き続き *hysterica* の言説の構造について考えてみましょう.

Hysterica はラテン語で「ヒステリー女性」です. フランス語で *hystérique* と言うと, それだけでは名詞か形容詞か, 女性か男性かも不明です. 日本語で「ヒステリー女」というと, 完全に侮蔑的なニュアンスが勝ってしまいます. ですから, Freud もときとして用いた *hysterica* を使いたいと思います.

さて, *hysterica* の言説は, 分析家の言説ではありません. つまり, 症状の言説ではありません. ということは, *hysterica* の言説の構造にある *hysterica* は, まだ症状を呈していないということになります.

かつて Jacques-Alain Miller は, いわゆる境界例 *borderline* は, 分析家の言説に入ることに抵抗している *hysterica* だ, とやったことがあります(いつどこで言ったかは覚えていません).

若干の留保は必要です. というのも, ちまたで境界例と呼ばれている患者さんたちの病理は単一ではないからです. 勿論, *hysterica* もいますが, *Schizophrenie* 発症寸前の人もあります.

ともあれ、境界例 *borderline* の概念がはやったのは分析家の言説が優勢でない地域においてである、ということは事実です。つまり USA と日本です。フランス等、分析家の言説が優勢な地域においては、いわゆる境界例は臨床的にほとんど話題になりません。要するに、聴く耳を持つ者がいるかいないかの問題です。

USA や日本のように *hysterica* に耳を傾ける者がいないところでは、彼女たちは分析家の言説に入ることができないので、*hysterica* の言説にとどまります。そうすると、典型的な症状は出ないかわりに、自殺未遂等の *acting out* が繰り返されます。

これは、父 S_1 に対する一種の挑発、挑戦です。Freud の症例 *Dora* にもそれは見てとれます。*Dora* は Freud に会う前、自殺未遂とまでは行かなかったものの、親に対して自殺をほのめかす言動をしていました。それを根拠に、*Dora* は *Hysterie* ではなく境界例だったというような議論をする人がいますが、見当違いです。彼女には、聴く者がいなかったのです。

Hysterica の言説においては、症状の徴示素 a は、自己秘匿としての真理の座(左下の座)に隠れています。神経症症状は、その言わんとするとこ

ろを聴こうとする者がいてこそ、初めて症状として現象します。Freud の前は、Charcot でした。聴く耳を持つ者にだけ、hysterica は症状を現します。

そして、分析家の言説のなかにいる hysterica は、自傷行為などをしようとすることはありません。

Acting out の定義に関して御質問をいただきました。

Acting out は厳密に定義された精神分析用語ではなく、精神医療の領域で漠然と用いられている表現です。一般的には、自殺未遂、自傷行為など、治療上望ましくない行動を指します。

わたしが先ほど使ったのは、分析家の言説の構造に入れながゆえに起こる行動化という意味においてです。症状の構造は、分析家の言説の構造そのものです。存在の真理が症状により代理されない状況において、acting out は起こる、と言えると思います。

12 July 2014 : 芸術作品の本源; hysterica と「境界例」; 精神分析は主体滅却のために死の本能を利用する.

幾つか御質問をいただきました. ありがとうございます. まず, 芸術に関してですが, Heidegger は『芸術作品の本源』においてこう言っています : Im Werk ist ein Geschehen der Wahrheit am Werk. 芸術作品においては, 真理の成起が現動している.

要するに, 芸術作品の根本的構造は, 存在の真理の現象学的構造 : $\frac{a}{\varphi}$ そのものです. 芸術作品という客体 a は, 存在の真理 φ を代表します. それが, 芸術作品の定義です.

芸術作品は, 絵画, 彫刻, 映像などのように, 芸術家自身とは異なる一種の独立した客体であることもあり, 演劇・舞踏などにおける俳優・ダンサーなどのように, 芸術家が身を以て芸術作品を体現することもあります.

いずれにせよ, 芸術作品という表象 a は, 存在の真理を, 鑑賞者 S に対して代表します.

そして, この構造は, 分析家の構造であり, そこにおいて成起する症状の

構造です。

しばしば芸術家は精神病理をかかえています。それは、精神病からアルコール依存、薬物依存に至るまで、さまざまです。自殺の危険性もあります。ある意味で、そのような精神病理をみずから癒やすために、芸術家は創造します。症状としての芸術作品を創造します。

鑑賞者は、そこに表現されている悦を、文字どおり享受します。鑑賞者は、己れ自身の存在の真理を、芸術作品という他化された形においてしか悦することはできません。

しかし、言うまでもなく、存在の真理をみずから芸術作品として創造するには、特別な才能が必要です。

フランス等の分析家の言説が優勢な諸国では、今や分析家の大多数が *lacaniens* です。興味深いことに、それらはカトリック諸国です。それに対して、プロテスタントが優勢な英米、ドイツ、そして、そもそも神を畏れない日本では、優勢なのは、分析家の言説ではなく、支配者の言説と大学の言説です。

支配者の言説と大学の言説が優勢な国々は、女性差別がまかりとおっている国々である、とも言えます。USA や英国で *féministe* たちが声を上げなければならないのは、それだけ女性差別が強いからです。日本では、*féministe* たちはようやく声を上げ始めたばかりです。

支配者の言説は父の言説であり、大学の言説は男の言説です。それらの言説が優勢なところでは、*hysterica* を聴こうとする分析家の言説は *marginal* であり、*hysterica* は分析家の言説に入ることができません。それゆえ、*hysterica* の言説にとどまらざるを得ず、精神科医からは *borderline* 扱いされることとなります。

Freud の症例 Dora も、Freud と出会う前は自殺をほのめかす *borderline* であり、結婚後 USA に移住してからは、家族にとってお荷物以外の何ものでもない *borderline* 症例でした。

主体の存在の真理は、死の本能と Freud が呼んだものと等価です。死を拒絶したり否認したりするのではなく、死を通過して復活へ至ることが、Lacan の教えに準拠する精神分析における目標です。死の本能を無視するのではなく、死の本能による主体滅却を精神分析の目標にします。

13 July 2014 : Hysterica と「境界例」に関する補足；大学の言説について.

Hysterica の言説について一点付け加えると、分析家の言説において真理の座に置かれた知 S_2 は、hysterica の言説においては、右下の生産の座に置かれます.

分析家の言説における S_2 は、主体の存在の真理の座に仮定された知、Lacan の用語で *sujet supposé savoir* 「知の仮定的主体」を表しています。主体の存在の真理の座において語る何かの知、つまり、無意識の知、それが分析家の言説における S_2 です.

それに対して hysterica の言説では、この無意識の知は、生産の座に置かれています。生産の座は、実は、閉出 *forclusion* の座でもあります。つまり、hysterica の言説においては、無意識の知は言説の構造から閉出されてしまっており、無意識の知として機能できません.

それが、borderline の本質です。いわゆる境界例においては、症状は形成されず、それとともに、無意識も機能し得ないのです.

いわゆる境界例を治療するためには、分析家の言説への導入が必要不可

欠です。ところが、いわゆる境界例となると尻込みしてしまう者が少なくありません。自分が分析の経験をみづからしたことがなければ、いたしかたないことですが。

さて、*hysterica* の言説から、大学の言説へ話題を移しましょう。

Lacan は、支配者の言説は古代奴隷制社会における支配構造を表しており、現代社会の支配構造を表しているのは大学の言説だと言っています。また別のところで、旧ソ連(Lacan の時代にはまだ現存していました)の支配構造は大学の言説だとも Lacan は言っています。

大学の言説は男の言説だ、と予備的に言いました。

大学 *université* という語は、ラテン語の *universitas* に由来します。そしてこの語は「全体」「すべて」*totalité* を意義します。

ソ連は全体主義でした。今の中国もその典型例です。それらの国は非民主的と言われていています。

では民主主義は？民主主義は *démocratie* です。*démo-* はギリシャ語の

δημος に由来します。δημος は貴族に対して平民であり、本来は被支配者です。つまり、支配者の言説の右上の座、奴隷の座に位置する S_2 です。民主主義とは、この被支配者たる平民 S_2 が支配者となっていることであり、ですから、実は、民主主義も全体主義と同じく、大学の言説、全体性の言説なのです。

議会制民主主義は、多数派を形成することによって運営されます。多数は「皆」です。そこから排除される者を必ず伴います。誰もが子供時代に学校などでこう言われた経験があるだろうと思います：「皆」はこうしているのだから、「皆」はこう考えているのだから、あなたもそうしなさい。これが民主主義の暴力です。

民主主義は「皆」を形成するために必ず排除される者を作り上げます。それは、ヨーロッパではユダヤ人であったり、USA ではアフリカ系市民であったり、歴史上さまざまです。そして、世界中どこでも、男は「皆」を形成するために女性を排除します。そのように排除された者を表すのが、大学の言説における右上の他者の座に位置する a です。

男の性別公式における $(\forall x) \Phi(x)$ 「すべての x について $\Phi(x)$ である」は、男がひとつの集合、ひとつの「すべて」、ひとつの「皆」を形成すること

を意義しています。それは、大学の言説において支配者の座に位置する S_2 , *universitas* です。

真理の座に隠れている S_1 は、Freud の『トーテムとタブー』の神話における殺された *Urvater* 「原父」であり、フランス革命で言えば、Louis XVI です。男の性別公式における $(\exists x) \neg \Phi(x)$: 「 $\Phi(x)$ ではない x が解脱実存する」は、そのような父を意義しています。

今や、資本の言説と科学の言説の破綻が明らかになり、あらたな時代への再生がまさに始まろうとしています。そして、今まで少なくともそれよりましな政治体制は無いと言われてきた民主主義も、実は排除の言説であることが明らかになりました。移民、外国人、少数者などを排除することは、「皆」を形成する民主主義の本質に属していることなのです。民主主義とも決別する 때가 近づいています。

ではどのような政治体制を選ぶべきか？ 政治学者でも社会学者でもないわたしには答えることはできません。しかし、理論的には、それは分析家の言説により形式化されるものになるのではないかと考えることができます。

自有 *Ereignis* として実存する $\frac{a}{\Phi}$ が支配者の座につく政治体制。それは、*nationalisme* も差別も無く、ひとりひとりが己れの自有・自由において

生きて行くことのできる社会であるはずですが。それは *démocratie* ではなく、言うなれば *idocratie* です。

どのようにすればそのような *politeia* が作り出されるのか、わたしにはわかりません。しかし、皆さんも考えてみてください。あるいは、John Lennon と共に *imagine* してみてください。

大学の言説における右下の座の \$ はどう解釈されるのかという御質問をいただきました。この \$ は、*hysterica* の言説において能動者の座にあった *désir insatisfait* 不満足な欲望としての *hysterica* の欲望と解釈されると思います。

Lacan は強迫神経症者においては、欲望は *désir impossible* 「不可能な欲望」だ、と言っています。大学の言説において閉出の座にある \$ が、この不可能な欲望に相当すると思います。

社会主義体制では、欲望を持つことはできないとされていました。物質的配分は「皆」が決めたのだから、「誰にも不満は無い」わけです。

勿論、実際にはそうは行かず、ソ連と東欧諸国は崩壊しました。中国もい

ずれその道をたどるでしょうが、その崩壊の際の影響ははるかに大きいでしょう。世界経済にとって壊滅的かもしれません。

isonomia という概念について貴重な御示唆をいただきました。Wikipedia でちょっと調べてみましたが、古代ギリシャで既に唱えられていた「法のもとの平等」だそうです。

はたして、真なる平等を実現し得るのは如何なる politeia か？それが問題です。

資本の言説 discours du capital について御質問をいただきました。Lacan もさほど詳しく論じてはいない主題ですから、lacaniens の間でもさまざまな解釈が為されています。わたしは、discours du capitaliste 「資本家の言説」は支配者の言説、それに対して、discours du capital 「資本の言説」は、症状の言説、超自我の言説としての分析家の言説の構造のものと解釈しています。

資本の言説において能動者・支配者の座に位置する a は、資本家の言説において生産の座に蓄積された剰余価値です。剰余価値は、排斥されたものの回帰としての分析家の言説の構造において、資本として能動者の

座に出現します。そして、資本は、資本の自己増殖として現象する事態が実現されるよう、奴隷の座に位置する $\$$ へ命令します:増やせ, 増殖させよ, と。 $\$$ は、悦することを断念した資本家の欲望です。資本の言説は、残酷無慈悲な超自我としての a が「悦せよ」と命令する症状の言説としての分析家の言説です。

今や、超自我としての資本の命令は、それに従うことが事実上不可能であることが明らかになってきています。利率がほとんどゼロであることがその証拠です。これについては、水野和夫氏の『資本主義の終焉と歴史の危機』が非常に示唆に富んでいます。一読をお勧めします。このような著作がマルクス主義者によって書かれなかったのが残念ですが。

14 July 2014 : 神の御国は近づいている；哲人政治と聖人政治；民主主義の言説は排除の言説である；神を畏れることを忘れた日本人。

来たるべき時代の *politeia* (政治体制)は、分析家の言説により形式化されるものだろう、と言いました。その場合、分析家の言説における存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ における a は、純化されていなければなりません。つまり、 a は、影象のものではなく、純粹に徴象のものとなっています。切れめ、ないし、穴そのものとなっています。それが Lacan が *sinthome* と呼んだものです。

sinthome は *symptôme*「症状」の古い書記です。そして、音の上では *saint homme* : 聖なる人間、つまり聖人と同音です。

存在の真理の現象学的構造において、 a が純粹な切れめ、ないし穴になる、ということが、死からの復活であり、精神分析の終わりとして目ざされるべきことです。

存在論的穴を、何か影象的なものによって塞ぐのではなく、純粹に徴象的な穴として保存し、その穴という欠如の苦痛に耐えること、それが聖人の実存です。それによって聖人は、神を証言します。

来たるべき政治体制, John Lenon が想像した理想的世界においては, すべての者が或る意味で聖人になっています.

Platon は, 哲人による支配を夢見ました. わたしたちは, 聖人の国を夢見ます. それは, つまり, 天の御国です. それをただ単に死後の極楽として空想するにとどまってはなりません. 各人が聖人として, 自有として本自的に実存するような polis, 神の都市 — どのようにそれは実現され得るでしょうか?

とにかく, 精神分析は, 支配者の言説, 大学の言説, hysterica の言説として形式化される支配と収奪と排除の構造を止揚します.

大学の言説に関して, 全体主義(つまり, ファシズム)も民主主義も大学の言論により形式化される, と言いました. そこにおいては, ひとつの「すべて」, ひとつの「皆」が形成され, それに対して, そこから排除される者が必ずそれに伴います.

今の子供たち, 若い人々は, 「皆」から排除されることを非常に恐れています. いわゆる「空気を読む」ことによって, その都度その状況で「皆」を形成

する雰囲気は過剰に適合しようとする。そこから排除されないために。

この現象は、ですから、日本の社会が非常に「民主的」であることの帰結です。しかし、それは、「すべて」や「皆」のファシズムにはほかなりません。

分析家の言説においては、支配者の言説において排斥されたもの、大学の言説において排除されたもの、つまり a が、支配者の座に位置します。しかし、それは、超自我の声としてではなく、切れめ、穴そのものとしてです。

分析家の言説により形式化される来たるべき社会においては、各人が欠如の苦痛を辛抱せねばならないかもしれません。各人が、ほかの者ひとりひとりの苦痛を分かち合うことになるでしょう。それが隣人愛と呼ばれるものです。来るべき社会の素描は、2000 年前に既にイエスによって提示されています。

今こそ、神の御国は近づいたのです。つまり、各人が自有として実存する *politeia* の実現を準備すべきときです。

精神分析は、各人が解脱的に救済されるような *politeia* を実現するための方途です。

水野和夫氏は、日本は来たるべき社会の実現に最も近いところにいる、と言います。経済学的にはそうなのかもしれません。しかし、精神的にはどうでしょう？

今こそ、日本に精神分析の言説を確立するときです。今こそ、精神分析の「福音」を広めるときです。

「なぜ日本では精神分析が広まらないのか」と「なぜ日本ではカトリック(つまりキリスト教)が広まらないのか」のふたつの問いは、結局、同じひとつの問いに帰着するように思われます。それらの問いの答えは、「日本人は神を畏れないから」です。

始めからそうだったわけではないでしょう。1867年の最初の開国のとき、ないし、1945年の敗戦による第二の開国のとき以後のことでしょう。

日本で精神分析は精神医療の一手段と見なされてきました。フランスではそうではありません。日本の大学人は、Lacan を構造主義に属する思想家のひとりとし、構造主義の流行が過ぎれば、もう見向きもしなくなりました。しかし、フランスではそうではありません。

フランスと日本と、何が根本的に違うのでしょうか？フランス人は、Lacan の *spiritualité* に対する感受性を持っていた(少なくとも過去には)と思います。

日本で *spiritualité* を語ろうとすれば、哲学の用語ではなく、宗教の用語を用いざるをえません。そして、実際、精神分析において、仏教の言う解脱、キリスト教の言う救済がかかわっていないとしたら、現代社会において、精神分析にいったい何の意義があるでしょう？

15 July 2014 : 知が支配者である構造としての大学の言説について。

御質問を幾つかいただいています。まず、救済を語ることは、支配者の言説への逆戻りではないのか？次に、陰性治療反応は主体が救済を欲していないということを示しているのではないか？

質問において問われていることを考える前に、大学の言説について補足します。大学の言説における S_2 を、昨日までは、もっぱら「全体」と解釈してきました。しかし S_2 は知 *savoir* と定義されてもいます。

現代における支配の構造として、能動者・支配者の座(左上の座)に位置する知 S_2 は、高等教育を受けた官僚です。フランスでは ENA, 日本で

は旧帝大等の法学部を卒業して公務員となった者たちです。つまり、**bureaucratie** です。これは、旧ソ連も今の中国も日本も同じです。

官僚たちは、基本的に、自分たちの利益を追求します。さらに日本では国会議員の少なからぬ部分が 官僚出身者たちにより構成されています。彼らは、支配と収奪のための **know-how** を有しています。そのようなものとして、能動者・支配者の座に知 S_2 として居座ります。そして、特権階級として、ひとつの「すべて」、ひとつの集合を形成します。

民主主義には官僚支配がつきものです。フランスもそれを免れてはいません。日本では言わずもがなです。

知 S_2 が支配する大学の言説の具体例をもうひとつ挙げるとすれば、それは、精神医療の現場です。精神科医は、能動者の座の知 S_2 です。その知は、DSM のようなおそまつなマニュアルから精緻なドイツ精神医学の精神病理学の知に至るまでさまざまですが、とにかく、それらの知 S_2 は支配者として君臨し、観察対象、取り扱い (**treatment** は、取り扱いと治療と両方の意味を有します) 対象の患者 a を支配しようとしています。

当然ながら、そのような構造においては、主体の存在の真理を代表する症

状が現象する分析家の言説は成起し得ません。大学の言説である精神科医の言説に対しては、患者は *hysterica* の言説にとどまらざるを得ません。

医者は病気だけ診て、患者を見ていない、と言われてますが、精神科医の言説においては、医者は症状を見定めることすらできていません。なにしろ、精神科医の言説においては症状は現象し得ないのでから。

大学の言説とは以上のようなものです。

さて、御質問のあった「精神分析的救済論」に話題を移しましょう。

果たして主体は救われたいのか？この問いは、精神分析の主体の根本的な構造にかかわります。つまり、主体の分裂です。「...したい」「...を欲する」と言うとき、誰が欲しているのか？

Lacan は、人間の欲望は他 A の欲望である、と言いました。精神分析においてかかわる欲望、無意識的欲望は、他 A の欲望です。しかも、抹消された A : A としての他 A の欲望です。それは、抹消された存在そのものです。

これ以上続けると長くなってしまいますから、明日続けることにしましょう。解脱・救済は、存在の真理の現象学的構造の解体、つまり、死を経ねばならない、とだけ言うておきましょう。

科学の言説について御質問をいただきました。Lacan が「科学の言説」 *le discours de la science* という表現を使うとき、一義的ではないと思われます。確かに、大学の言説を科学の言説と呼んでいることもあったと思います。知が支配者の座にあるという意味で。また、「先生」 S_1 が右上の他者の座に位置する *hysterica* の言説を科学の言説と呼んでいるくんだりもあります。さらにまた、「科学と真理」という書においては、科学の言説の構造は分析家の言説の構造と理解されます。

科学の言説が、数学の言語で書かれた自然が言わんとすることを読み取ることであるとするなら、科学の言説の構造は分析家の言説の構造である、と言えると思います。つまり、真理の座に仮定された知 S_2 を代表する *signifiant a* をキャッチし、記録し、解釈することが科学の営みです。

分析家の言説においてしか症状が現れないということについて臨床的具体例を挙げるとすれば、Freud の「ネズミ男」の症例の一読をお勧めします。この症例において強迫神経症の症状が明確に形成されるのは、精神

分析治療が始まってからなのです。

これはよくあることです。ですから、分析を始めたせいで病気が悪化した、
という非難も珍しくありません。

しかし、治療のためには、まず症状が出現しなくてはなりません。今まで十分にそれとして症状が出現していなかったところに、症状が「遠慮無く」出現してもらわなくてはなりません。そうでなければ、そもそも治療を始めることはできません。

症状は、それが言わんとしていることを聴く耳を持っている者に対してのみ姿を現します。その言わんとしていることを聴き取るのが精神分析的解釈です。

borderline と言われる症例においても、ほかのところでそう診断された患者さんたちを分析家の言説の構造へ導入し、つまり、聴く耳を以て聴くうちに、さまざまな症状、夢、等の無意識の成形が現れてきて、精神分析治療を進めて行くことができます。そうなれば、自傷行為はもう繰り返されなくなります。

16 July 2014 : 目覚めよと声は我れらと呼ぶ.

日本において、精神分析を新たな相貌のもとに提示しなければなりません.

今朝の新聞の或る記事のなかにこんな文章を見かけました:『*** などの著書がある臨床心理士の *** 氏は、首相の答弁には質問者の弱点を突く「攻撃型」と、用意した文書を読み上げる「官僚型」があると指摘する. 「いずれも首相の深い自己愛から生じているのではないか...』』.

日本では一般にこの手の心理学が精神分析だといまだに思われています.

精神分析家でない者、つまり、みづから分析の経験の無いままに精神医学や心理学の分野の者が書物から Freud やその周辺の著者らの言っていることを自分ができる範囲内で読み、精神分析用語らしい言葉をもてあそび、もっともらしいことを言う. それが日本で精神分析と呼ばれているものです.

彼らは、精神分析においては何が本当にかかわっているのかを知りもしないし、みづから経験したこともないのです.

彼らはたいてい、大学人です。大学の教師たちです。ですから、必然的に大学の言説のなかに位置しています。大学の言説は強迫神経症者の言説であり、男の言説です。

それに対して、精神分析は *hysterica* の治療から生まれたという歴史的事実があります。Freud は *hysterica* を治療するうちに精神分析を発明したのです。*Hysterie* は精神分析の母です。

性別と関連づけるなら、支配者の言説と大学の言説は男の側にあり、*hysterica* の言説と分析家の言説は女の側にあります。

精神分析的な意味における症状が形成され現象するのは分析家の言説においてだ、と言いました。

Lacan 自身は著作のなかではその用語を使っていませんが、予備面接 *entretien préliminaire* と呼ぶものを重視していました。予備面接とは、まさに、患者(患者を Lacan は *analysant* 分析者と呼びます; *analyste* は分析家です)を分析家の言説に導入することによって症状が十分に立ち現れてくるために必要な時間をさします。

予備面接の間に十分に形成されてくる症状こそが、分析されるべき客体、対象になります。

もし症状と呼べるようなものがその間に何も出現してこないとしたら、それは、患者が分析家とは転移の関係に入れなかったということです。

転移が成立しない理由はいろいろあります。いわゆる相性の問題は当然あります。それから、患者が精神病的構造の場合、症状の固着が強すぎて、分析家との転移が成り立つ余地がないこともあります。分析家の側が大学の言説に位置していれば、勿論、転移は維持され得ません。

もしあなたが精神分析を新たにしてみようと思って、始めて「分析家」のところに行ったら、最初にこう質問してかまいません：「あなたは自分自身、分析の経験をしましたか？誰としましたか？」と。失礼なことはありません。もし「分析家」がそれに答えなかったり、怒り出したりしたら、その「分析家」はみずから分析を受けたことはないと思ってまちがいありません。

また、日本では、日本精神分析学会の伝統のなかで教育分析を受けた分析家は、大学の言説の構造のなかにどっぷりつかったままのことがあります。そのような場合、本当に分析を受けたとは言えないこともあります。

いずれにせよ、そのような「分析家」たちを排除する必要はありません。彼らの商売を邪魔しようとは思いません。福音書にもこう書かれています：

ヨハネはイエスに言った：先生，あなたの名において悪霊を追い払っている者を見たので，やめさせようと思いました，彼は我々に従っていませんから。だが，イエスは言った：彼を妨げるな。そも，わたしの名において奇跡を行いながら，その直後にわたしを悪く言う者は無い。我々に反対していない者は，我々の味方である。(Mc 9,38-40)

Barthe も Lacan も日本における仮象の優位を指摘しました。日本では，社会的に認められた形式に従っていれば，不安を感じずることは無いのです。あるいは，不安を感じないですむように，その場の「空気」を敏感に感じ取り，それに適合しようとしています。

日本は，不安を感じずにすませるためのお作法が発達した社会です。ですから，神を畏れることを忘れていられるのです。実存的不安を感じずにすむのです。

Freud が初めて USA に講演旅行に行ったとき，「彼らは我々がペストをも

たらしに行くことを知らない」と言ったと伝えられています。「ペスト」は、実存的不安です。

日本において皆が巧みに避けて通っているそのような不安を、日本の社会に広めること。あらためて日本人に実存的不安を感じさせること。

精神分析が歓迎されるはずはありません。しかし、精神分析はニヒリズムの頂点を迎えようとしている今、唯一のではありませんが、可能な選択肢のひとつとして、日本にもあってよいものです。

救済と解脱の話が始めるのが遅くなってしまいましたが、キリスト教における救済にはふたつの側面があります。贖罪と復活です。いずれも他 A すなわち神との関係において可能なことです。

仏教においては他 A は関係無いのでしょうか？そんなことはありません。

Buddha とは、目覚めた者です。いわゆる悟りのことを仏教用語で「正覚」と言います。

ブッダは、如何にして目覚めに至ったのか？少なくとも、その出発点にお

いて、彼は、「目覚めよ」と呼ぶ声を何らかの形で聞いたはずで**す**。Wachet auf, ruft uns die Stimme. 目覚めよと声は我れら**を**呼ぶ。御存じのとおり、有名なコラールです。他 A からのそのような呼びかけがなければ、ブツダはブツダにはならな**か**ったでしょう。

17 July 2014: 精神分析家は己れ自身によって己れを精神分析家として認定する.

2002 年のわたしの事件に関する御質問をいただきました.

わたしと分析をしようとする人には, 当然, わたしの事件のことを事前に知っておいていただかなければなりません.

わたしが「患者と恋愛関係」に陥ったとの御指摘ですが, それは事実ではありません. 「おがさわらクリニックにかつて通院していた女性」です. 当時, 治療関係には既にもありませんでした. しかも, その女性は実際には, 精神科医療を必要とする厳密な意味での病者ではありませんでした.

医師と患者ないし元患者との恋愛関係が職業倫理的に許されないのは, 以下の条件のもとにおいてだと考えます: 1) 医師が患者に対する自分の優位な立場にもとづき患者を利用しようとする場合; 2) 両者の関係が病状に悪影響を与える場合.

例えば, 教師とその教え子との恋愛関係についても, それが職業倫理上許されないのは同様の条件においてでしょう: 1) 優位な立場にある教師

が、その優位性にもとづいて教え子を利用しようとする場合； 2) 両者の関係が教え子の教育学的状態に悪影響を与える場合。加えて、教え子が未成年ではいけないでしょう。

わたしのケースにおいては、それらの条件は全く当てはまりません。

わたしの事件に関して事実に反する記述は Internet 上にまだ残っています。いちいち訂正して行くことはしないつもりでしたが、御質問をいただいた機会に正確な事実をお伝えしました。質問者の意図は明らかに単なる嫌がらせにすぎませんが、あなたが意図せずにこのような機会を提供してくださったことに感謝します。

わたしが殺人罪で服役した経歴を持ちながらも敢えて精神分析家として仕事を続けるのは、精神分析がわたしの lifework だからです。Lifework とは、存在が請求していることです。

Lacan は言いました：精神分析家は己れ自身によって己れを精神分析家として認定する。

この命題の意味は、誰もが勝手に精神分析家を自認してよいということ

はありません。「己れ自身」とは、精神分析を通じて到達し得る存在の処有という最も本自的なものです。

精神分析家が精神分析家であり得るのは、存在としての最も本自的な自己に基づいてのみです。誰か他者なり、何らかの認定団体、保証機関によるものではありません。

ですから、精神分析家にはあらかじめ自分自身の精神分析の経験が必要なのです。

「分析家である」« être analyste » という表現は、「分析の言説の構造において分析家として機能している」という意義と、存在論的意義と、両方を持ち得ます。

Freud は分析家として機能しましたが、存在論的には分析家であるとは言えません。彼の理論的な構築がそのことを証しています。

存在論的に分析家で在るということを問題にしたのは Lacan が初めてです。

そして, Lacan 自身, 自分は存在論的に分析家で在る(つまり, 聖人である)というところまでは行かなかったと認めています (cf. *Autres écrits*, p.520).

存在論的に分析家で在るようになるためには, いわゆる自己分析で済ますわけには行きません. 必ずみづからの分析の経験が必要です.

ここで, パレスチナとイスラエルの子供たちのために祈りましょう. 今回の武力衝突のきっかけは, 6 月にイスラエルの子供たち三人が誘拐され殺害されたことです. しかし, それはパレスチナで何十人何百人もの子供たちが殺されつつあることを正当化しません.

Facebook を利用している人は, わたしのページを見てください. Facebook を利用していない人は, *Le Nouvel Observateur* の site を見てください. 子供たちが殺された現場の映像が upload されています. 血を流す子供たちを見たくない人には勧めません.

ユダヤ教の YHWH とキリスト教の父なる神とイスラム教の Allah は同じ唯一なる神です. それを心得ていなければ, Freud も Derrida も読むことはできません.

今、頼まれて Derrida の *Mal d'Archive* を読んでいるところですが、Derrida も全く宗教的な哲人です。Derrida をまともに読んだのは今回初めてですが、ユダヤ教を抜きにして Derrida を読むことはできません。

ともあれ、パレスチナとイスラエルの子供たちを主が憐れんでくださいますように。天に召された子供たちの涙を主が御みづからぬぐってくださいますように。

このような悪を神はなぜ起きるがままにするのか？ Freud は第一次世界大戦に関してそう問いました。

今読んでいる Derrida の *Mal d'Archive* の mal も悪という意味を持っています。

イエス自身が信徒に教えた祈りとして「主の祈り」はキリスト教徒にとって最も根本的な祈りです。その短い祈りの最後の言葉は、*Délivre-nous du Mal* 「わたしたちを悪から救ってください」です。

しかし、悲劇はやみません。悪の問題を論ずるには、この場は狭すぎますから、別の機会にゆずります。

Derrida の *Mal d'Archive* が英語で *Archive Fever* と訳されているのには笑ってしまいました. なぜかという、この ... *Fever* はわたしくらいの年齢の者にはいやおうなく 1977 年の John Travolta 主演映画 *Saturday Night Fever* を連想させてしまうからです.

しかし, Derrida の言う *mal* はそんなものでは全然ありません. この *mal* は死の本能そのものを指します. Derrida は, Freud が死の本能を破壊本能, 攻撃本能と呼んだことをも強調します.

Derrida が *archive* と単数形で呼んでいるものは, 要するに *signifiant* です. そして, *mal d'archive* における *archive* は, 抹消された *signifiant* としてのファロスです. つまり, 症状の構造の学素における ϕ です.

Derrida のこのテキストにおける *archive* は, 能動者の座における徴示素 *a* と, 真理の座における抹消された徴示素 ϕ との両方をさしています. ちょうど Heidegger における存在の真理の現象学的構造において「存在」が「存在」を代表しているように:

$$\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}} \equiv \frac{\text{archive}}{\text{-archive}}$$

悪は、存在の真理そのものに属しています。善も、存在の真理そのものに属しています。

存在は、その真理において、あらゆる対立を己れのうちに含んでいます。それが、現象学の秘密です。

わたしたちの心を引き裂く悲劇は、存在論的裂口の痛みをわたしたちに教えてくれます。その痛みを、酒や薬物でおしつぶしてしまおうとするのはひとつの否認です。祈りにおいて痛みを耐えねばなりません。それが本自的実存です。

18 July 2014 : 正覚と復活.

覚者と聖人と哲人と精神分析家は, いずれも, 自有 Ereignis として実存する者と規定され得ます.

覚者のプロトタイプはブッダであり, 聖人のプロトタイプはイエス・キリストです.

哲人は Denker 「思考する者」です. 「思索者」とか「考える者」とかよりは「哲人」と呼ぶ方がすっきりしています.

哲学者 philosophe と哲人 Denker, penseur は必ずしも同じではありません.

「思想家」という表現を忘れていました. わたしの頭のなかでは「思想家」はほとんど死語ですが, 一般的にはどうなのでしょう?

ともあれ, 「哲学者」が大学等で歴史的哲学者の注釈のようなものを学生たちに講ずることを生業としている者を意義するなら, 哲学者と哲人は異なります.

覚者と聖人と哲人になるためには、精神分析の経験は必要ありませんが、しかし、特別な神の恵みが必要です。仏教においては「神の恵み」でなく、何と云えば良いのでしょうか？ 特別に恵まれたカルマのおかげとでも？

しかし、そのような特別な恵みを受けていない我々のような人間にとっては、精神分析の経験は、自有になるためのひとつの手段です。そして、「自有になる」ことは、従来の宗教的な語彙で言うなら、「解脱」であり、「救済」です。

Heidegger と Lacan が用いている Ekstase, extase をどう翻訳するかを考えているうちに、わたしは「解脱」という語に行き着きました。

ekstatisch, extatique という形容詞は、存在の真理の座, ex-sistence の座にかかわります。ex-sistence の座は、徴象と影象、つまり仮象の座から見ると、外である場処です。Lacan は le réel 実在を ex-sistence と定義しますが、それは、そのように仮象に対して外であるものとしてです。

「解脱的」とは、仮象から解脱した外の座にかかわるトポロジックな形容詞です。

Ek-sistenz, ex-sistence を Existenz, existence から識別しようとするなら、単に「実存」でなく、「解脱実存」と訳します。

ブッダは覚者であり、解脱的に実存していますが、しかし、彼は死後になって初めて「成仏」したわけではありません。彼は、この世に人間として生きているうちに覚者となり、解脱しました。

ということは、単純に \emptyset そのものになったのではなく、ブッダも、存在の真理の現象学的構造において実存しています。ただし、一旦、涅槃の境地に達し、そして涅槃から復活したのです。

「涅槃に達する」とは、「存在の真理の現象学的構造、つまり、実存の構造が、一旦、解体する」ことです。

Heidegger は Destruktion という語を用いましたが、それを Derrida は déconstruction と言い換えました。

Lacan はもっとそっけなく séparation 分離と言います。実存の構造、存在論的構造が「解体する」とは、 a が \emptyset から分離することだからです。

☉ は「抹消された存在」であり、死そのものです。涅槃です。

そして、そこから復活が成起します。復活においては、 a はもはや全く象徴的ではなく、純粹に徴象的な穴、裂けめのままです。

わたしは仏教の教理に精通していないので、「涅槃からの復活」に相当する概念が本当に仏教のなかにあるかどうか知りません。しかし、ブッダは覚者であり、目覚めた者なのですから、涅槃の眠りから目覚めた者と言えるかもしれません。もっとも、覚者は、我々の日常的な非本自的存在様態から目覚めた者であるとも言えます。ともあれ、仏教で言う正覚もひとつの復活である、と言えるだろうと思います。

仏教に「本覚思想」と呼ばれるものがあることを教えていただきました。ありがとうございます。大変興味深い概念です。

如何にして真如へ至り得るのか？真如は、存在の真理そのものです。これからじっくり考えてみましょう。

精神医療と精神分析との関係について御質問いただきました。フランスを

引き合いに出すと、一概には言えませんが、つまり医療施設ごとに異なりますが、精神科医、看護師、臨床心理士、social worker が皆、治療環境を分析家の言説の構造のものにしようと意図的に、積極的に努力している精神病院があります。そのような病院では、患者さんを単なる treatment（治療、取り扱い）の客体として見るのではなく、つまり、大学の言説の構造における a として患者さんを扱うのではなく、患者さんは、分析家の言説の構造の左上の座、能動者の座に位置する a になります。治療者側は、右上の座の $\$$ の立場に立ちます。 $\$$ は聴く者であり、 a が何を言おうとしているのかに耳を傾けます。それによって、治療者側はよりよく患者さんの症状を把握できるようになります。

一般的に言って、Schizophrenie や躁鬱病の治療においては薬物療法は必要不可欠です。しかし、薬をどう使うかが問題です。分析家の言説において症状を正確に把握すれば、病状に合わせてより適切な薬物療法をすることが可能になります。DSM などの診断マニュアルにもとづく精神医療は、大学の言説の典型例です。能動者の座にある知 S_2 としての医者が、要するに専門的知識 S_2 としての医者が、右上の被支配者の座にいる患者さん a を、出来合いの知 S_2 によって支配し、型にはめこんで行くだけです。薬物療法のしかたも紋切り型になります。

しかし、日本においては、要するに、精神科医にはヤブ医者があいかわらず多いようです。

先日相談を受けた或るケースは、かなり年配になってから発病した患者さんで、当初は鬱病であるように見うけられました。Schizophrenie の平均的初発年齢よりかなり高齢の患者さんです。Alzheimer 等でないことは明らかで、医者は鬱病と診断し、家族もそれに納得していました。しかし、数年間治療を続けても全く良くなりません。そのうち、家族の目からみて奇妙な言動がいろいろ出現してきました。家族はそのことを医者に知らせるのですが、医者は鬱病という先入観にとらわれて、いつまでも同じ処方を漫然と続けるだけです。わたしはその患者さんを直接診ていませんが、家族からその患者さんがどのような言動をしているかを聞くだけで明らかに Schizophrenie と診断されるケースであるにもかかわらず、主治医は新たに何もしようとはしません。そして、患者さん自身が、あの医者はヤブだと評しているそうです。まったく同感です。

どんなに良い薬が新たに使えるようになっても、医者が — しかも、街のかたすみで形ばかり個人開業している実質上現場から既に隠退したような高齢の医師ではなく、地域医療の中心的総合医療施設の精神科で診療を行っている中堅どころの医者が — このレベルでは、話になりません。

それが日本の精神医療のお寒い現実です。

19 July 2014 : 「境界例」について；本覚と解脱について；性倒錯について；存在論的穴について。

大変興味深い御意見，御指摘を幾つかいただきました。ありがとうございます。

まず「境界例」についてですが，厳密にはこの表現には括弧が付されるべきです。「境界例」と診断され得る人々は，単一の精神病理学的状態にあるわけではありません。一方には，分析家の言説の外に置かれたヒステリー神経症の人々があり，他方には未発症の *Schizophrenie* の人々がいます。つまり，典型的な精神病症状の無いまま，感情的不安定や極度の攻撃性などだけを呈している患者さんたちです。

そもそも *borderline* という用語は，まだ有効な薬物療法の無い時代，つまり，もっぱら精神療法が治療の主流であった時代に，精神療法ないし精神分析の経過の最中に精神病が発病するケースについて用いられていました。実存構造が比較的容易に解体してしまい，精神病症状によって代補される，そのような状態を *borderline* と呼んだのです。

ですから，今「境界例」と呼ばれている患者さんたちのなかにも潜在的に精

神病発症の危険性を持つ人々がいます。

「境界例」は単一同質の疾病概念ではありません。ですから、一概に言うことはできません。

Hysterica の言説から分析家の言説への転換は比較的容易に起こります。
なにしろ Hysterie は精神分析の生みの母ですから。

「境界例」が hysterica であるとすれば、精神分析への導入はさほど困難ではありません。

ただ、日本ではいわゆる教育分析を受けた者がフランスに比べて圧倒的に少ないので、治療者の側が尻込みすることはあるでしょう。治療者が教育分析を経験していなければ、いわゆる陰性転移に対しておじけづいてしまうでしょう。

攻撃性は、死の本能のひとつの現象形態です。Lacan は、死の本能を積極的に利用して、Freud 的な行き詰まりを打開することが可能だと提起しました。それにもとづいて彼は、精神分析の終わりを規定しました。

分析の経過中の攻撃性は、望ましくないものでは全然ありません。

精神医療の中核を成すのは、いわゆる内因性精神疾患、つまり **Schizophrenie** と躁鬱病の治療です。それ以外の精神病理学的状態の治療も、それに準じて行われます。そこにおいては、社会適応が基本的な治療目標になります。

躁鬱病においては実存構造の解体が起こり、**Schizophrenie** においては実存構造の解体が幻覚妄想症状によって代補されます。少なくとも不安定期には保護的な配慮が優先せざるを得ません。そのような態度が、精神医療の基本的態度になります。

そのような精神医療のなかには精神分析の居場所はありません。精神分析は、基本的に言って、精神医療の外のもので、フランスのように分析家の言説が優位なところでは、精神医療の現場が分析家の言説の構造を輸入しようという試みが為されることはありますが。

精神分析的救済論・解脱論を展開しようとしているところですが、それに関連する興味深い統計があります。先日ちょっと調べた日本のカトリックの人口において、男女比は 2 : 3 です。女性の方が有意に多いのです。日本

だけでなくフランスでもカトリック信者の男女比は 2 : 3 で女性の方が多
いです。

女性の方が男性より神の御国により近いのです。男は, **signifiant Φ** との強
固な同一化のせいで, 神の御国にも入りにくいし, 分析家の言説にも入り
にくいのです。救いようがありません。

フランスの精神分析家の数の男女比の統計があるかどうかわかりませんが,
おそらく女性の方が多いでしょう。彼女たちは非常に活動的・積極的です。
日本にも数多くの女性の精神分析家が誕生してほしいものだと思っていま
す。

日本の精神医療の現状について、「男性治療者と男性患者とによる
signifiant Φ を防衛するための集団的自衛権行使だ」という鋭い分析をい
ただきました。ありがとうございます。

性倒錯について御質問をいただきましたが、先に、昨日教えていただいた
「本覚」に触れておきましょう。

本覚は、すべての人間に本自的に備わっている悟りの状態を言います。し

かし、日常性においては、まずもって大方は、本覚は煩悩により覆い隠され、我々は「不覚」の状態にあります。

ですから、煩悩を断つことが必要です。それは、羅刹天や不動明王の持つ剣によって象徴されます。まさに去勢です。

去勢、すなわち煩悩断ちによって達成される悟りは「始覚」と呼ばれます。目覚めることを目的にして始められた試みの結果として到達された「覚」という意味でしょう。

実存の構造の学素に依拠すれば、本覚は Φ そのものです。それは、煩悩 a により覆い隠されています。その場合の a は、純粹徴示素ではなく、影象的なものとしての a です。まさに自我にとらわれた迷いの境地です。

そこから脱するには、 Φ から a を切断せねばなりません。そのために仏教においては、厳しい禁欲が課せられます。それによって煩悩が完全に断たれた状態が涅槃です。

涅槃に達するということは、覚の状態に達したことであり、真如へと目覚めたということです。真如は、まさに存在の真理 Φ です。

涅槃からの「復活」という概念はそのものとしてはやはり無いようですが、始覚において涅槃に達するということは、死の先取りであり、生理学的死ではないわけですから、涅槃から始覚の状態への「復活」を考えてもよいはず
です。

始覚の状態においては、煩悩 a は断たれ、 a は純粹徴示素としての穴へ還元されています。仏教における救済、つまり解脱は、以上のように把握されると思います。

他 A の関与は明白ではありませんが、しかし、やはり、仏陀の慈悲や、仏法の守護神である羅刹天、不動明王の剣による助力が必要であるということとは含意されているのではないのでしょうか。そもそも、仏陀は人間を救済するために仏法を説いたのですから。

性倒錯に話を移すと、Freud は「神経症は性倒錯の **Negativ** だ」と言いました。神経症においては幻想という無意識的なシナリオにとどまっているものが、性倒錯では実際の行為として演ぜられます。

性倒錯も、症状の言説としての分析家の言説に位置づけられます。

性倒錯を精神病理学的に分類していると切りがありませんが、最も基本的なのは Fetischismus です。

Fetisch は、症状の構造としての $\frac{a}{\phi}$ における客体 a です。

性倒錯という病的なレベルの Fetischismus においては、性的興奮のために Fetisch がその場に現存することが必要不可欠になります。

Freud は、Fetisch は母親の欠如せる Phallus の代理である、と公式化しています。それは、症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ そのものです。

のぞきと露出においては、まなざしとしての客体 a がかわります。露出では、他 A のまなざしを喚起するために、自分の身体の一部をさらします。のぞきでは、自分のまなざしを以て客体 a を体現しようとします。

sado-masochisme においてかわるのは、声としての客体 a です。sadique は自分の声を以て客体 a を体現しようとします。声は、超自我の声のように、命令する声です。masochiste は、他 A の命令の声 a を惹起させることを以て、悦びます。

以上のように、症状の構造としての分析家の構造は、神経症、性倒錯、精神病、すべてにおける症状の構造を表します。

穴の概念について御質問いただきました。ありがとうございます。話しているとどうしても表現が雑になってきてしまいますが、わたしが「存在論的穴」と呼んでいるものは、正確には、純粹徴示素としての a そのものです。

徴象 *le symbolique* を Lacan は穴と定義します。それが存在論的穴です。

それに対して、 ϕ は、解脱実存 *ex-sistence* であり、実在 *le réel* です。

存在論的穴は、言ってみれば、この *ex-sistence* によってうがたれた穴であり、*ex-sistence* の場処のエッジ(縁:この漢字は複数の意味を持っているので、混乱を避けるために英語の *edge* を使いたいと思います)を成すものです。

21 July 2014 : 存在論的穴について.

「存在論的な穴」 le trou ontologique は、「穴」ないし「切れめ」そのものと定義される限りでの徴示素 a のことである.

Lacan による a の規定は多様であり(『ハイデガーとラカン』第一章, 第二章を参照), Lacan のテキストにおいて a が論ぜられているときはその都度, 多様な a の概念のうちいずれの意味における a が問題にされているのか, 注意深く識別しなければならない.

1960 年前後の Lacan のテキストには le symbolique と signifiant a を「切れめ」や「穴」と規定する箇所が幾つか見出される.

徴象 le symbolique を「穴」と規定することは, 1974-75 年の Séminaire R.S.I. において改めて強調される.

そこにおける定義によれば:

l'imaginaire \equiv la consistance 影象 \equiv 定存

le symbolique \equiv le trou 徴象 \equiv 穴

le réel \equiv l'ex-sistence 実在 \equiv 解脱実存

「定存」consistance は, 影像 image が有する一種の「確かさ」, 「確固たるものであること」である. 画像処理に関する IT が非常に発展した今,

あたかもまさに image の明証性, 確固性こそがもつとも現実的なものであるかのごとき錯覚が蔓延している.

「穴」は, ex-sistence という Ab-grund [深淵, 根拠ならざる根拠, Seyn, Sein, 存在]のエッジを成すことによって ex-sistence を徴示する [signifier] ものとしての純粹徴示素 signifiant pur a そのものである.

「解脱実存」 ex-sistence は, 自己秘匿における存在 φ の真理である.

ところで Lacan は *Écrits* p.818 において学素 $S(A)$ を「他 A のなかの欠如の徴示素」[signifiant d'un manque dans l'Autre] と定義している. つまり, A は欠如であり, $S(A)$ はその徴示素 signifiant である. Saussure の学素 $\frac{S}{s}$ に代入すれば:

$$\frac{S(A)}{A}$$

徴示素の宝庫としての他 A の場処のなかの欠如 A は, 「常に欠けている徴示素」としての phallus が成す欠如, すなわち, そのものとしては書かれ得ない性関係の公式としての φ である:

$$A \equiv \varphi$$

穴そのものである純粹徴示素としての a は, $S(A)$ と等価である:

$$S(A) \equiv a$$

つまり, a が純粹徴示素であるとき:

$$\frac{S(A)}{A} \equiv \frac{a}{\emptyset}$$

「存在論的穴」は, 徴象を穴と定義する際の「穴」であり, それは, $S(A)$ としての純粹徴示素 a のことである.

21 July 2014 : 精神分析の倫理について; Bien-dire と parrhesia ; 存在論について.

Lacan は「無意識は前存在論的なものである」と言っている, との御指摘をいただきましたが, わたしには思い当たる箇所がありません. 代わりに, わたしの頭に思い浮かんでくるのは, Séminaire XI (p.35) のこの命題です: 「無意識の地位は, 倫理的であり, 存在事象的ではない」« le statut de l'inconscient est éthique, non point ontique ».

ここで Lacan が「無意識」と呼んでいるのは, 存在 \emptyset そのもののことです. \emptyset は, 「抹消された存在」 das **Sein** そのものとして, 当然, ひとつの存在事象ではありません.

倫理に関しては, Lacan は「精神分析の倫理は l'éthique du bien-dire である」と公式化しています.

bien-dire という表現をどう翻訳するかはさておき, とにかく, 「言う」という行為がかかわっています. どのような「言う」か? それは, \emptyset を覆い隠すことなく, そのものとして **ex-sister** させ得るような「言う」です. この「言う」は, \emptyset が己れを示すことができるようにする「言う」です.

つまり、精神分析の終わりにおいて達成されるであろう我々自身の実存構造においては、 a は純粹徴示素へと純化されており、つまり、穴そのものになっており、 ϕ をそのものとして実存構造において守り保つことが可能になっています。

そして、実存構造は言語の構造です。言語は存在の住まいです。

ϕ がそのものとして住まうことができる言語の構造としての実存構造において自有することの義務、それが *bien-dire* の倫理であり、精神分析の倫理です。

無意識の地位は倫理的で或ると Lacan が言うときの「倫理」は、そのようなものです。

御教示ありがとうございます。確かに、Séminaire XI, p.31 に « la béance de l'inconscient, nous pourrions la dire pré-ontologique » とありますね。そして、p.32 の 1-2 行に « ce n'est ni être, ni non-être, c'est du non-réalisé » とあります。それらの文章は、さきほどわたしが引用した « le statut de l'inconscient est éthique, non point ontique » と合わせて考えてみる必要が

あります。

Lacan がこの 1964 年 1 月 29 日の séminaire の冒頭で「存在論」を問題にしているのは、その一週間前の séminaire の最後に Jacques-Alain Miller が — 当時まだ 19 歳だった Miller が — 「あなたの存在論はいかなるものですか」 « Quelle est votre ontologie ? » と質問したからです。その質問とそれに対する Lacan の答えの記録は残っていないようですが、

ここで「存在論」という用語にはこだわらないでおきましょう。重要なのは、むしろ「倫理」です。さきほど説明した意味での「精神分析の倫理」です。

「無意識」 l'inconscient という用語も、存在の真理の現象学的構造、つまり症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ における a のことである場合と ϕ のことである場合とがあり、Lacan を読むときにはその都度、どちらを指しているのか注意深く識別しなくてはなりません。

さきほどの Lacan の表現のなかで現象学的に有意義なのは non-réalisé という語です。

現象学とは、「そのものとしては常に己れを隠している存在 ϕ が、にもか

かわらず如何にして己れを顕すのか」を問うことです。ですから Heidegger は、「存在論は現象学としてしか可能ではない」と言っています。

この non-réalisé は, 存在 \emptyset のことです。

存在 ~~das Sein~~ が如何にして存在 ~~das Sein~~ として己れを顕すか, それを問うのが Heidegger 的な意味での「存在論」です。つまり, かかわっているのは存在の真理の現象学的構造 $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$ です。

Lacan は Séminaire XI, p.31 で Miller に向かって, 君が「存在論」という語をどういう意味で使っているのか知らないが, というような前置きをしています。そして, Lacan は, Miller がその時点で Heidegger を理解しているとは思っていないでしょう。

ですから, この pré-ontologique という表現には「存在論というような用語を振りかざす前に, よく思考しなくてはならないことがある。それをわたしは béance 裂口という用語で言おうとしているのだ」というような Lacan の考えが読み取れると思います。

わたしは Foucault は学生時代に『狂気の歴史』と『語と物』しか読んだこと

がないので、彼が *parrhesia* について思考していたということは初めて教えていただきました。ありがとうございます。

parrhesia は語源的には $\pi\alpha\nu$ と $\rho\eta\sigma\iota\varsigma$ から成るそうです。つまり、「すべてを言う」です。すなわち、Lacan が「真理をすべて言うことは不可能である」と言うときの「すべてを言う」です。この不可能を敢えて行おうとすることは、確かに、精神分析の倫理に適うことです。御指摘のとおり、*parrhesia* と *bien-dire* は関連しています。

いわゆる客体 a としての a は現象します。たとえば、乳房、糞便、まなざし、声という部分客体として。

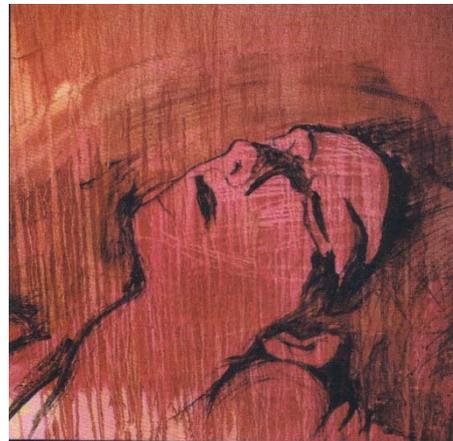
それに対して、「そのものとしては決して実現されないもの」は、自己秘匿における存在, *ex-sistence* としての ϕ です。

RSI のボロメオ結びにおいて a が三つの輪の *intersection* を成す中央部に置かれているのは、 a が R, S, I の三つに参与していること、つまり、影像でもあり、徴示素でもあり、物質でもある、ということを差し徴しています。 a は「症状の構造」である「存在の真理の現象学的構造」： $\frac{a}{\phi}$ における現象の要素です。

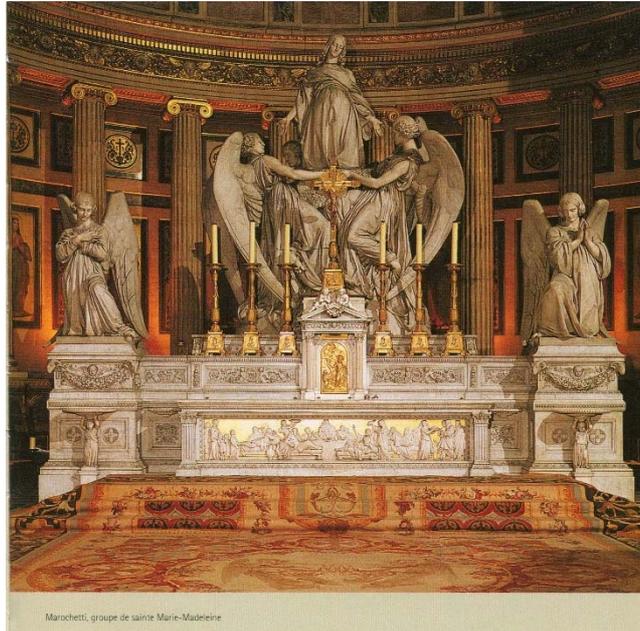
御質問, 御意見, メッセージ等, 御遠慮なくお送りください. 我々自身にか
かわる真剣な問いは, いくら繰り返し問うても「くどい」とか「しつこい」という
ことはありません. 徹底的に問うことが重要です.

22 July 2014 : phallus を形式化するふたつの学素 ($-\phi$) と ϕ の相違;
男が分析に入るためには; マグダラのマリア.

カトリックでは聖人ごとに祝い日が定められています. 今日, 7月22日は,
マグダラの聖マリアの祝い日です.



画像は, 一方は Caravaggio が描いた恍惚状態のマグダラのマリアです.
他方は, Caravaggio の絵をもとにして単色で描き直したものです. ここで
は顔しか見えませんが, オリジナルと同じく上半身全体が描かれています.
この模写は, 女性ラカン派分析家の第一人者 Colette Soler のところの待
合室に飾られています. 結構大きな画面の作品です.



Paris にはマグダラの聖マリアを守護聖人とする教会があります。有名な Eglise de la Madeleine です。祭壇の向こう側に、輪を成す三人の天使に取り囲まれた Marie-Madeleine の大きな彫刻があります。今年、新年早々、Eglise de la Madeleine で行われたオルガン・コンサートを聴きに行きました。そのコンサートのときには、正月ですから、オルガンだけで Wiener Walzer が一曲演奏されました。点滅する照明の効果で Marie-Madeleine と天使たちが本当に踊っているように見えました。

今日、このように Marie-Madeleine のことを話すのは、彼女がキリスト教の聖人のなかで最も重要な、最も決定的な聖人ではないかと空想するからです。

つまり、聖霊の作用によりイエスを懐胎したのは、実はマグダラのマリアだとしたら？

その前に、回答しそびれていた質問に簡単に答えましょう。

精神分析において *phallus* を形式化する学素のうち、Lacan 自身が用いていた学素 ($-\phi$) と、わたしが新たに工夫した学素 ϕ との相違は何か？

Lacan は ($-\phi$) を「去勢の *imaginaire* な関数」と定義しています。この場合の「関数」は「相関するもの」です。それに対して、 ϕ は、*ex-sistence* としての実在です。*ex-sistence* を一貫して形式化する学素が Lacan のテキストのなかに無いので、 ϕ を作ったのです。

「救済」や「倫理」という用語は日本においては誤解や拒絶反応を招くのではないか、という御指摘をいただきました。確かにそのとおりです。しかし、ほかの用語で言い換えるわけにも行きません。むしろ、日常性のなかにまどろんでいる「世人」*das Man* としての我々にとって違和感を生ぜしめる言葉は、眠りを妨げる効果を持つかもしれません。

真理は、驚き、不安、無気味さ、不快を与えます。真理は、本当らしさよりは、むしろ、信じがたさとして現れます。ですから、第一印象において誤解や拒絶反応を招くとすれば、それは真理を語る言葉に対する当然の反応だとも言えます。

「天の御国は近づいた。回心せよ」という声を聞くと、多くの人是一种のいごこち悪さを感じるでしょう。誤解や拒絶反応も招くでしょう。しかし、真理を語る言葉とは、そのようなものです。

大学の言説と分析家の言説との関係について Lacan は *Radiophonie* の末尾でこう言っています:大学の言説は、分析家の言説への「前進」により解明される。(「前進」 *progrès* という語には括弧が付されています。)

この命題をどう解釈すべきでしょうか？まずは、大学の言説において真理の座に置かれていた支配者 S_1 が、分析家の言説では生産の座へ閉出されます。 S_1 は、或る意味で「父の名」です。「父の名」の概念は S_1 に尽きるわけではありませんが。

男が精神分析可能となるためには、まず「父の名」の閉出が必要です。男

の性別を規定する **signifiant Φ** を捨てさせねばなりません。さもないと、**Freud** が克服不可能な抵抗として行き当たった「男性的抗議」が最後に障害物となります。

「男性的抗議」は、**signifiant Φ** の閉出、すなわち去勢が惹起する不安に対する防御です。その防御をまず解除しなくてはなりません。そのためにも、分析家の言説への導入の際の予備面接の間に、十分に症状を出現させる必要があります。

分析への導入が困難なケースはいろいろありますが、最も困難なもののひとつは、「わたしは、全く正常で、症状も何も無いのですが、分析家になりたいので、教育分析をお願いします」と言ってやってくる比較的若い男性精神科医でしょう。

自分が全く正常だと思い込んでいる人間ほど狂った者はいません。

このような ケースは、まさに大学の言説にひたりきっており、場合によって、かなりの揺さぶりをかけないと、夢すら語ろうとしません。**Lacan** だったらけとばすくらいのことはしたかもしれません。

さて、救済や解脱の文脈で既に聖人にも言及しましたから、マグダラの聖マリアのことを考えてみましょう。これから述べることはわたし個人の見解であって、カトリック教会のなかにはわたしに同意する人は一人もいないと思います。

きっかけは、福音の物語の中には何故こんなにたくさんマリアがいるのかという疑問でした。福音の物語において最も重要な役割を担わされているマリアは、聖母マリアとマグダラのマリアです。ふたりともマリアと呼ばれているのは偶然でしょうか？

そしてもうひとつ、聖パウロが書いたもののなかには、聖母マリアもマグダラのマリアも言及されていません。何故でしょう？

新約聖書として集められた文書のうち、最も古いものは聖パウロの幾つかの書簡です。福音書はそれより20年から40年後に書かれています。

聖パウロは、復活したキリストは最初に使徒ペトロに現れたと言っています。ところが、福音書は四篇とも、復活したイエスに最初に出会ったのはマグダラのマリアだと言っています。この矛盾をどう考えるべきでしょうか？単なる見解の相違でしょうか？

そして、そもそも、聖母マリアが聖霊によって処女のままイエスを懐胎したという「神話」は、どう解釈され得るでしょうか？

ふたりのマリアは対照的です。聖母マリアは処女であり、無原罪のお宿り（つまり、マリア自身、原罪無しに生まれてきた）であり、清純さそのものです。

それに対してマグダラのマリアは、もと娼婦であり、罪深い女であり、その罪をイエスに赦していただいて涙します。彼女は、イエスの足に香油を塗り、自分の長い髪でぬぐいます。この場面は、イエスがみづから弟子たちの足を洗う場面と対を成していますが、それとは異なり、非常に *érotique* です。

このような両極端の現象を見たら、両者はその起源においてひとつであったらうと考えることは、しばしば有意義です。

より神格化されているのは聖母マリアですが、しかし、より人間的、より真実味があるのはマグダラのマリアです。

わたしはこう空想します。マリアはただひとり、マグダラのマリアであった。彼

女は心の底からイエスを愛していた。イエスは彼女にとってすべてだった。イエスの処刑により彼女はすべてを失った。その喪失は、彼女自身の死でもあった。彼女は、 \emptyset の深淵、死の深淵に至ったのです。まさにそのことによって、死からの復活が成起します。

彼女は、イエスの復活を *concevoir* したのです。復活したイエスを *concevoir* したのです。この *concevoir* という動詞は、「心のなかに思いつく、着想する」という意味と「懐胎する」という意味と両方を有しています。しかし、「思いつく」といっても、単に空想したわけではありません。イエスは、死に至った彼女のなかの欠如から純粹徴示素として復活したのです。それが、聖霊の作用による(つまり、肉体的性行為によらない)受胎 *conception* の神秘の正体ではないでしょうか？

イエスの復活の喜びをマグダラのマリアは使徒たちに伝え、彼らは直ちにそれを分かち合います。キリスト教の成立の瞬間です。

イエスの復活の後、マグダラのマリアは荒れ野に引きこもったと伝説は言います。パウロは、マグダラのマリアのことを知らなかったかもしれません。あるいは、イエスの復活を最初に述べ伝えたのが使徒の頭ペトロではなかったという事実をパウロは排斥しようとしたのかもしれません。しかし、結局、イ

イエスの復活の **conception** はマリアにおいて成起したという排斥された真理は、一方で「聖母マリアは処女のままイエスを懐胎した」、他方で「復活したイエスは最初にマグダラのマリアに現れた」という両極的分裂において回帰したのです。

キリスト教を知るためには何を読むべきかという御質問をいただきました。答えは勿論、聖書ですが、質問なさった方は「聖書以外の書物としては何を読むべきか」とおっしゃりたいのだと思います。これは難しい質問です。最良の本が何かは今すぐには頭に浮かんでできません。結局、やはり、詳しい注釈のついた聖書が最も良いのではないのでしょうか。文庫本でも何種類か出ていると思います。できるだけ詳しい注釈がついたものを選んでみてください。そして、まずは聖パウロの「ローマの信徒への書簡」を読んでみてください。新約聖書のなかで神学的に最も重要とされている文書です。

23 July 2014 : 自有 Ereignis について; 父の名について.

聖人, 覚者, 哲人, 精神分析家の実存構造ないし存在論的構造は, 自有 Ereignis の構造であり, そこにおいては a は純粹徴示素として穴そのものに純化されています. そして, そのような純化は, 死からの復活, 涅槃からの復活と呼ばれている出来事において成起します.

その場合, 死ないし涅槃と呼ばれるものは, ex-sistence 解脱実存, 存在 \emptyset のことです. 自有においては, ex-sistence の深淵を, その裂口が開いたままに守保することがかかわっています. そのように開いたままの裂口, それが純粹徴示素としての a , 穴としての a です. そのように ex-sistence を守保することは, 不安や苦痛を辛抱することであると同時に, 死からの復活の至福でもあります.

さて, 「父の名」 le Nom-du-Père の概念について御質問をいただきました. ありがとうございます. 或る意味で, それは Lacan にとって最も重要な問い, 最も問われるべき問いであった, と言えると思います.

Lacan が「父の名」に言及した最初のテキストは, 1953 年の「ローマ講演」です. そして, 1958 年の精神病についての書, それから, 1963 年 11 月の

一回のみ行われた「父の名」(複数形)についての séminaire, 1969-70 年の「精神分析の裏」, 1973-74 年の Les non-dupes errent (だまされない者たちは誤る: フランス語では les noms du pères と同音), 1975-76 年の Joyce についてのセミナー — 思い出すままに列挙しても, Lacan は彼の教えの出発点から最晩年に至るまで「父の名」に関する問いを問い続けたことがわかります.

なぜそこまで問題にしたか? それは, 「父の名」という用語を以て Lacan は神に関して問い続けたからです.

Lacan は無神論者だっと思われているかもしれませんが, 神について無関心であったわけではありません. むしろ, Lacan は, Heidegger と共に, 神を探し求めて, 神に関して最も真剣に問うた 20 世紀の哲人の一人であったと言えると思います.

ですから, 「父の名」について説明するためには, ひとつふたことではとても足りません. しかし, とりあえず, 手掛かりを幾つか挙げてみましょう.

まずは, 父の *metaphora* の式. 次いで, 支配者徴示素 S_1 . さらに, 男の性別の公式における $(\exists x) \neg \Phi(x)$ [$\Phi(x)$ でない x が現存する] の式. 最

後に、ボロメオ結びの第四の輪としての「父の名」。

それらが Lacan の教えに登場する時間的順序には従わないで、まず支配者徴示素 S_1 について考えるなら、それは、前性器的な部分客体における部分本能の満足を妨げ、phallus の優位のもとでの性器段階を成立させるものとしての父の機能を形式化している、と見なされます。

その意味においては S_1 は signifiant Φ と等価です。支配者の言説の構造は、 S_1 としての signifiant Φ との同一化の構造と見なすことができます。しかし、父の名の概念は S_1 に尽きるわけではありません。

1953 年のローマ講演において、Lacan は、父の名は徴象の機能の支えである、と言っています。徴象の位の機能の支えとしての父の名は、父の *metaphora* の概念から、ボロメオ結びの第四の輪としての父の名に至るまで、一貫していると思われま。

それに対して、神の名 YHWH としての父の名は、*ex-sistence* としての父の名です。

24 July 2014 : Φ と $\$$ との違いについて; 父の名としての S_1 について.

精神医学であれ精神分析であれ, もともと何らかの精神病理をかかえている者が興味を持ちやすい分野です. わたし自身にも当然あてはまります. だからこそみづから精神分析を受けたいと思ったのです.

Paris ではこんな話も聞きました. つまり, 小学校や中学校の教師のなかに小児性欲者がいることが避けがたいように, 精神科医や分析家のなかに精神病者がいることも避けがたい.

当然, 望ましいことではありませんが, 完全に防止することは困難です.

話は若干脱線しますが, カトリック司祭のなかにも同性愛者, 小児性欲者がいることは事実です. それがゆえの事件が起きており, 教皇は被害者に謝罪しています. 神学校では, 神学生が同性愛者でないかどうか非常に厳しいチェックが行われているそうです.

Φ と Lacan の $\$$ との関連に関する御質問ですが, わたしの推測では, $\$$ という学素を作り出すきっかけを Lacan に与えたのは, Heidegger の **Sein** だったでしょう (Heidegger は Sein を × 印[バツじるし]で抹消して

いますが、そのまま再現するのは手間がかかるので、**Sein** と表記します)。

Heidegger が出版物のなかで **Sein** を使ったときと Lacan が \$ を使い始めたときとの間には 2 年ほどの間がありますが。

Heidegger の「~~存在~~」は、当然、le réel 実在の位のもので。そして、まだ完全に検証していませんが、1958 年の書と 1962 年の書においては Lacan は \$ を実在の位のもの、つまり、 φ に相当するものとして用いています。

それに対して、1969 年に発表された「四つの言説」においては、\$ はそのものとしては ex-sistence としての主体を表す学素ではなくなりました。その切りかわりがいつ為されたのかは、まだつきとめていません。

ともあれ、四つの言説において \$ が ex-sistence そのものの学素ではなくなったので、Lacan のものではない φ という学素を新たに工夫する必要があったのです。

Lacan が「精神分析の主体」「無意識の主体」と言うとき、それは ex-sistence としての主体、存在としての主体、つまり、実在の位に位置づけられる主体です。

ただし、主体の分裂を Lacan は問題にします。主体の分裂は、 $\frac{a}{\phi}$ の構造においては、 a と ϕ との分裂と規定されます。つまり、己れを隠している主体 ϕ と、それを代表する signifiant a との間の分裂です。

この問題は、aliénation とかかわっています。

aliénation は「狂気」「精神病」と訳され得る単語ですが、マルクス主義の文脈では「疎外」と訳されます。そして、語源的には alienus に由来しており、「他の所有物になる」という意味をも持っています。

主体の存在論的構造であり、症状の構造である $\frac{a}{\phi}$ は、主体の存在の真理 ϕ が、主体自身ではない仮象の signifiant a により代理・代表される、言い換えると、 ϕ が a に同一化するという点において「他化」の構造であり、aliénation の構造です。

精神分析は、当然、aliénation を解消することを目的にします。それは、構造から a を分離し、滅却し、それによって、構造の能動者の座に位置づけられるものを穴にまで、つまり無にまで純化することによって為されます。

それは、神学用語では「贖罪」ないし「復活」と呼ばれる「救済」に相当する

ことです。そこまで到達すれば、聖人です。それは、主体が単独で為し得ることではなく、他 A との関係のなかで成起することです。

父の名について少し考えてみましょう。昨日、父の名の概念は単一ではないと指摘しました。まず、 S_1 としての父の名のことを考えてみましょう。

S_1 が能動者の座に位置する支配者の言説の構造は、オイディプス複合を形式化していると解釈することができます。いわゆる前オイディプス期、前性器期において部分客体 a が位置していた座を、父の名 S_1 が占領し、 a は閉出の座である生産の座へ排斥されます。

a が再び能動者の座へ回帰すると、排斥されたものの回帰として、症状の言説としての分析家の言説が成立します。

支配者の言説がオイディプス複合の構造であるとする、そこから大学の言説へ移ることが男の性別を決定し、*hysterica* の言説へ写ることが女の性別を決定する、と考えることができます。

分析家の言説において右上の他者の座に位置する $\$$ に関する御質問をいただきました。ありがとうございます。この $\$$ は、主体の存在の真理 ϕ

ではありません。

Φ は, $S_1, S_2, \$, a$ の四項とは異なり, 四つの言説のいずれにおいても左下の真理の座に位置します. というより, 真理の座そのものの学素です.

それに対して $\$$ は, 四つの言説においては, *versagter Wunsch*, 満足を断念した欲望を表します.

25 July 2014 : 人生の目的について; ニヒリズムとその克服について; 自由について; 転移の構造について; 聖人について

Facebook で Slavoj Zizek について語るグループのメンバになっているのですが, そこで或る人が「Lacan 的な観点から言うと, 人生の目的は何か?」という問いを立てていました. 多くの人が真剣に答えて, 議論していました. とてもひとくちで答えられるような問いではありません.

或る人は「自由こそが生きる目的だ」と答えていました. しかし, 自由とは何でしょうか?

わたしは Lacan の言葉をふまえて, こう答えてみました: John Coltrane は「わたしは聖人になりたい」と言った. そして Lacan は「聖人があらたに実存するように, わたしは懸命に努力している」と言っている, と.

その後, 或る人は Zizek を引用しました: life is a stupid, meaningless thing that has nothing to teach you. 「人生は, ばかげた, 無意味なもので, 何も教えてはくれない」.

この手の発言は, 文脈から切り離してしまうと誤解を招きます. もとの文脈

がどういうものであるかは、わたしは知りませんが、Zizek が単なる nihiliste であるはずはありません。しかし、「人生は無意味だ」という言葉は nihilisme の言説の典型例です。もしそれが単純な悲観的ニヒリズムであるなら、克服しなければなりません。

前にニヒリズムについてちょっと触れましたが、Heidegger はニヒリズムの超克について真剣に考えました。であるがゆえに、Hitler と Nazi がニヒリズムの克服を実現し得るかもしれない、という幻想に一瞬とらわれてしまったのかもしれない。しかし、それは 1932 年前後の一時的なことでした。Hitler がいくら威勢の良いことを言っても、ニヒリズムは克服できるはずがありません。

現在、ヨーロッパでもアジアでも nationalisme の高揚が起きていますが、それも或る意味でニヒリズムに対する無効な悪あがきです。何か理想を振りかざしても、ニヒリズムは克服できません。三島由紀夫のように美を顕揚しても、ニヒリズムは克服できません。

では、ニヒリズムを超克するためにはどうすべきか？

Heidegger は、存在と無の本質を見定めることから始めました。

存在事象を存在事象たらしめているものが存在ですが、しかし、存在は、実は、*ex-sistence* として解脱的場処に位置づけられるものであり、存在事象から見れば、存在事象ではないものとして、無にほかならない。存在を存在事象と同様に論ずることはできず、存在は抹消されてしか書かれ得ない:存在。そして、存在、無としての存在は、世に生きている存在事象から見れば、死にほかなりません。

Freud が死の本能と呼んだものは、存在事象の存在が無であること、そして、その無の深淵は存在事象を呑み込み、破壊しようとしているという事態に対応しています。存在は \emptyset であり、他 A の場のなかの欠如としては A です。

分析家の言説の構造を図示した *aliénation* の図においては、*a* をはさんで、A と \$ とが対置されています。Lacan の公式:「ひとつの徴示素は、主体を、もうひとつのほかなる徴示素に対して代表する」において、「ひとつの徴示素」は *a* であり、「主体」は主体の存在の真理 \emptyset すなわち A であり、「もうひとつのほかなる徴示素」は \$ です。「ひとつの徴示素は主体をもうひとつの徴示素に対して代表する」という命題は、分析家の言説の構造にあてはまるものです。そこにおいて Lacan は、\$ は「聴く主体」であ

ると規定しています。何を聴くのかというと、他 A の言説である無意識を聴くのです。主体自身の存在の真理の場処において「何か語る」 *ça parle*, その声を聴くのです。その声は、主体の存在の真理を代表する徴示素 *a* です。

ニヒリズムから話がそれてしまいましたが、存在事象の次元でどうにかしようとしている限り、ニヒリズムは克服できません。今の日本ほど、存在事象が無意味、無価値であることが明白である歴史的状況はほかに少ないでしょう。存在事象の次元で、つまり、徴示素の次元で、何か目新しいものや、意味のありそうなもの、高邁な理想などを持ち出しても、それらの仮象性、欺瞞性はごまかしようがありません。

ではどうするか？存在事象を切り捨てるしかありません。主体の存在の真理が同一化している徴示素を切り離して分離するしかありません。そうして、無と死の深淵に一旦身を浸すのです。

それは、言うなれば、ニヒリズムを徹底的に突き詰めることだ、とも言えます。恐らく、先ほど紹介した Zizek の言葉も、そのような文脈において語られたものではないかと推測されます。

Heidegger が「自由」Freiheit と言うとき、ドイツ語でも英語でもフランス語でも frei, free, libre は「あいている」を意味します — そして、その場合漢字は「開, 空, 明」のいずれでも書けます — が、とにかく, Freiheit, freedom, liberté とは、あらゆる存在事象, あらゆる徴示素を切り捨てた「空き地」のことなのです.

あらゆる存在事象, あらゆる徴示素への執着を断ち, 同一化を解消したことによって到達される「空き地」が自由の本質です. それは, 存在論的穴と呼んできたもの, つまり, 純粹徴示素としての a と同じものです.

追加の御質問をいただきました. ありがとうございます. 分析家の言説の構造において, 左側の $\frac{a}{\phi}$ — これは $\frac{a}{A}$ と表記できますが —, この左側の構造と, 右上の座の $\$$ とのどちらが分析家でどちらが分析者 analysant (患者)か, ということは固定されたものではありません.

実際の分析の面接において解釈するのは分析家だけでなく, 当然, 分析者自身も自分の「無意識の成形」に耳を傾け, そして解釈します. 「無意識の成形」について語ることは, 既に解釈を含んでいます.

また, 転移の構造としては, 左側の部分は分析家を表すと言えます. 主体

の存在の真理の座に仮定された S_2 は、「知の仮定的主体」 *sujet supposé savoir* と Lacan が呼ぶところのものです。「知の仮定的主体」が転移の必要条件であり、それが分析家に位置づけられることが臨床的な意味での転移を生じさせます。

聖人について追加の御質問をいただきました。ありがとうございます。おっしゃるとおり、聖人は、存在の真理の証人です。しかし、その場合の「証人」は、具体的に何か言葉に言いあらわして証言するとは限りません。例えば、殉教者は、おのが身を以て、処刑されたキリストにならうことによって、「証言」します。つまり、身をもって「存在の真理」を代表する徴示素 a と成っています。そこには通常の意味での言葉はありませんが、しかし、彼の行為自体が雄弁な証言なのです。

実際に言葉を以て証言したり、芸術作品を生み出すことによって証言することは、それなりの特別な才能がないとできません。しかし、そのような才能が無い者でも、まさに無言のまま、無為のまま、その者が実存することそれだけで存在の真理の証人であり得ます。むしろ、それこそが聖人の典型かもしれません。Mother Teresa を見てください。

26 July 2014 : 死の本能の問いは存在論的問いである; 仮象の座の底を踏み抜いて真理の場処へ到達する; 自己秘匿の座から a を能動者の座へ引き上げる.

1950 年の Lacan の犯罪学に関する書についての御質問ですが, そこにおいて Lacan が問うているのは, 破壊, 攻撃として現れる死の本能です. そして, 死の本能について問うということは, 存在 φ について問うことです. それは, 心理学的な問いでも生物学的な問いでもなく, 而して, 存在論的問いです.

Lacan の問いの出発点は, 1932 年の医学博士論文で取り上げた症例 Aimée です. 彼女の妄想において彼女を迫害する幾人かの人物のうち, 或る女優を彼女は殺害しようとして, 現場で取り押さえられ, Sainte Anne 病院で Lacan と出会うこととなります.

他殺であれ自殺であれ, それは, 死そのものである φ が a を破壊し, 呑み込んでしまうことです. わたしは身をもってその極限状態を経験しました. 文字どおり, 突然足もとに穴が開いて, そこに呑み込まれてしまう感覚でした. 実存構造の突然にして急激な解体が起きた場合, そのようなことが起こり得ます.

神は、わたしを死の底から救ってくださいました。神は、わたしが真実を知り、生きたまま罪を贖うよう、お定めになりました。神に感謝しています。

さて、仮象と真理に関して、大変興味深い御指摘をいただきました。

Lacan が “ a と ϕ との分離において ϕ の場処へ到達する” と公式化した事態を、「仮象の座から真理の場所へと底を踏み抜く」という身体的な表現を以て捉えることは、独創的などともすばらしい試みだと思えます。

Freud は去勢複合、つまり、男における男性的抗議(即ち、去勢不安)と女におけるペニス妬みを、精神分析治療に対する克服し難い行き詰まりと見なしました。Lacan はその行き詰まりを打開する道を探求しました。まさに「底を踏み抜く」ことがかかわっています。

大学の言説と分析家の言説との関連についての御指摘から、Socrates のことを連想しました。

対話において Socrates は「わたしは自分では何も知らない」と言います。通常、学者と呼ばれる人々は「わたしは何でも知っている」「わたしは知の

体現者である」という態度を取ります。それは、知 S_2 が能動者の座に位置する大学の言説です。Socrates の対話相手たちはそんなふうです。

それに対して Socrates は、「わたし自身は何も知らない。知っているのは神だ」と言います。それは、左下の真理の座に知 S_2 が仮定される分析家の言説の構造に対応しています。そして、Socrates は真理が語る言葉に耳を傾け、それを聴き取り、そして、みづから真理の代弁者として語ります。Lacan が「フロイト的な物」という書において真理の女神に「我れ、真理は語る」と言わせたとおりです。

$$\frac{\$}{a} \rightarrow \frac{S_1}{S_2} \qquad \frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{\$}{S_1} \qquad \frac{S_2}{S_1} \rightarrow \frac{a}{\$}$$

hysterica の言説 分析家の言説 大学の言説

確かに、男が精神分析経験に入るときには、自分が今までしがみついていたものが揺さぶられ、無効になり、除去される、という感覚があります。それは、大学の言説から分析家の言説への転回に伴うものだと見なされます。つまり、能動者・支配者の座にあった知 S_2 が、死の座である真理の座へ罷免されるのです。

それに対して、女性が精神分析の経験に入るときは、それまで漠然として

いたものがはっきり見えてくるという感覚を持つでしょう。

御指摘のとおり、それまで自己秘匿としての真理の座にあった a が、能動者の座へ引き上げられ、症状として出現してきます。それによって、真理は、それまでは「断念された欲望」、つまり $\text{frustration } \$$ としてしか表現されていなかった状態から、 $\text{signifiant } a$ により代表される状態、つまり、真理がみづから語るようになることができます。

御指摘いただいた以上のような表現を用いると、大学の言説から分析家の言説へ、ならびに、 hysterica の言説から分析家の言説への転回がとても見えやすい形で定式化できます。

27 July 2014 : 我々が言語に住まう者である限りにおいて、精神分析は我々各人各自にかかわっている。

日本における精神分析, 特に Lacan 派精神分析の現状, ないし, その受容状況に関する御意見をいただきました。ありがとうございます。

精神分析も Freud も Lacan も, 誰かが独占することはできません。Lacan に関してはまだ著作権は切れていませんが, 精神分析も Freud も Lacan も, 語の字義どおりの意味において public domain です。なぜなら, 精神分析はあらゆる人間に, あらゆる言語存在にかかわることだからです。つまり, 我々が言語に住まう者である限りにおいて, 我々各人各自に精神分析はかかわっています。

ですから, 精神分析に関して, Freud に関して, Lacan に関しては, 誰もが発言する権利を持っています。そして, その際, 誰もが真理を言っています。ただし, すべてではなく, かつ, 仮象を通して。つまり, 真理そのものを言っているわけではないですから, 或る意味で, 誰もが嘘を言い, まちがったことを言っています。

したがって, 誰かが精神分析, Freud, Lacan に関して何かを言っており,

それが的外れなことであったとしても、咎めることはできませんし、その必要もありません。

以前にも引用した福音書の箇所を再度引用するなら：

ヨハネはイエスに言った：先生、あなたの名において悪霊を追い払っている者を見たので、やめさせようと思いました、彼は我々に従っていませんから。だが、イエスは言った：彼を妨げるな。そも、わたしの名において奇跡を行いながら、その直後にわたしを悪く言う者は無い。我々に反対していない者は、我々の味方である。

以上のようなイエスの言葉にさらに付け加えても良いでしょう：たとえ精神分析, Freud, Lacan について悪しざまに言うものがいたとしても、言わせておきなさい。それによって彼らは、彼ら自身の存在の真理の言葉に耳をふさごうとしていることをみづから証言しているだけであるから。

精神分析について言われたこと、書かれたことを通して精神分析を学ぶことと、みづから精神分析を経験することとの間には、確かにひとつのギャップがあります。要するに、精神分析を単なる一般論として捉えるか、それとも、まさに自分自身に、わたし自身にかかわることとして捉えるかの差です。

そして、精神分析について真剣に学ぶならば、単なる一般論として済ますわけにはいかないはずです。あるいは、自分自身にかかわる問いを真剣に問おうとしている人だけが、本当に精神分析に関心を向ける、とも言うことができると思います。

Heidegger を読むことは容易なことではありませんが、『存在と時間』を是非読んでみてください。

Heidegger は確かに大学の哲学教授でしたが、「ただの」大学教授ではありませんでした。Heidegger の著作はどれを取っても、彼が存在に関する問いをまさに彼自身、自分自身に関わる問いとして捉えていたことを示しています。だからこそ、Heidegger のテキストは感動的なのです。

Heidegger の教えは、昔、実存主義とか実存哲学と呼ばれていました。それらの表現は今やほとんど死語になっており、あるいは軽蔑的なニュアンスをこめてしか使われないかもしれません。

しかし、今や「実存」という語はひとつの本質的 key word として復活させられるべきです。Heidegger の為したことは、まさに実存分析です。そして、

実存分析においても精神分析においても, かかわっているのは我々ひとり
ひとりの自分自身, 自己自身の存在です. そのことを忘れないでください.

28 July 2014: 支配者徴示素 S_1 としての父の名について; 存在の真理としての父の名について.

「父の名」について続けましょう.

前オイディプス期における前性器的部分本能の部分客体における満足を妨げるために介入するものとしての父の機能は, 支配者の言説における支配者徴示素 *signifiant maître* S_1 により形式化されます. それまで部分客体 a が占めていた能動者の座に, 「父の名」である S_1 が支配者として即位します.

そして, S_1 と如何なる関係を持つかにより, 男女の性別が決定されます.

男は, Freud が「トーテムとタブー」で提示した *Urvater* 「原父」の神話のとおり, 父 S_1 を支配者・能動者の座から退位させ, 左下の真理の座, 秘匿性としての真理の座, 死である *ex-sistence* の座へ追いやります. そして, 男たちは, ひとつの「すべて」, 全体性 *universitas* としての S_2 として, みづから支配者・能動者の座につきます. それが大学の言説と Lacan が呼ぶ構造です.

大学の言説における S_2 は、男の性別の公式における $(\forall x) \Phi(x)$: 「すべての x について $\Phi(x)$ である」に対応します。

では、存在の真理の座に置かれた「父の名」は？この父の名は、ユダヤ教の神 YHWH にまさに対応します。男の性別の公式における $(\exists x) \neg\Phi(x)$: 「 $\Phi(x)$ ではない x が ex-sister する」が、存在の真理の座に置かれた S_1 に対応します。

かくして、男の言説としての大学の言説はこのように書かれ得ます：

$$\frac{S_2}{S_1} \longrightarrow \frac{a}{\S} \qquad \frac{(\forall x) \Phi(x)}{(\exists x) \neg\Phi(x)} \longrightarrow \frac{a}{\S}$$

大学の言説

男の言説

しかるに、存在の真理の座に置かれた父の名を、Lacan は、実在 le réel, ex-sistence, 存在そのものとも考えます。その場合、存在の真理そのものと見なされる「父の名」は、 S_1 という項により表されるのではなく、真理の座そのものであると言えます。

話がややもつれてしまいました。

ユダヤ教の神も、キリスト教の父なる神も、イスラム教の Allah も、実は同じひとつの神です。なぜなら、キリスト教もイスラム教もユダヤ教を母胎として誕生したものであり、三つの宗教はいずれも Abraham を信仰上の先祖としています。

神は、ユダヤ教において YHWH と表記される神ただひとりです。ここでは、ヒンズー教や日本神話の神々のことはひとまずおいておきましょう。

興味深いことに、ユダヤ教では紀元前二世紀ころまでには、神の名 YHWH をそのものとして口に出して呼ぶことが不可能になってしまいました。神を畏れるあまり、その名を直接呼ぶことがはばかれるようになり、ついには、YHWH と表記される神の名をどう読むのかもわからなくなってしまうのです。(ヘブライ語やアラブ語などのセム系の言語では、おもに子音で語を表記します。それをどう発音するかは、日本語において漢字をどう読むかが慣習的に決められているのと同様、多かれ少なかれ恣意的です)。

しかし、YHWH という語が「存在」という語に関連していたらしいことは推測されています。旧約聖書「出エジプト記」で、YHWH はモーゼに「我れは

『我れは存在する』である」と啓示します。

したがって、YHWH の名がもはや表言不可能になったということ、もはや不可能な名となっているということは、「存在という語は抹消されてしか書かれない」と Heidegger が言っていることと重なり合うのです：

Sein \equiv YHWH

このことは、むしろ分析家の言説において考える方が良いかもしれません。分析家の言説においては、父の名 S_1 は右下の生産の座へ閉出されています。

ところで、Lacan によれば、閉出されたものは実在へ回帰します。

この命題も多義的に解釈されます。

ひとつには、「 a は実在の位のものである」という Lacan の命題にしたがって、閉出された父の名は症状 a として能動者の座へ回帰する、と考えることができます。

しかし、他方、閉出された父の名は、ex-sistence として存在の真理の座へ
回帰する、と考えることもできます。

話がこみいってしまいました。また明日、整理してみましよう。

29 July 2014 : 律法と超自我について；割礼について；分析の言説とカトリックとの親和性について；症例 Aimée について。

S₁ の概念についてですが、重要なことを言うのを忘れていました。それは、Lacan 自身が S₁ という用語を必ずしも一義的には使っていない、ということです。四つの言説において S₁ は *signifiant maître* 支配者徴示素と定義され、四つの座のいずれかに位置する項として提示されています。ところが、Lacan 自身が、左上の agent [能動者]の座のことを S₁ と呼ぶこともあるのです。ですから文脈を良く読まねばなりません

律法 *loi* の概念は、ユダヤ教的な律法と Kant 的な道德律とを包摂します。その本質は、いずれにせよ、定言命令 *impératif catégorique* です。定言命令とは、「...の場合は...せよ」という条件付きの命令ではなく、全く無条件的に「...せよ」と命ずるものです。

そのような定言命令を Freud は超自我に帰しました。1923 年に公式化された第二トピックにおいて超自我と呼ばれるものは、症状の言説としての分析家の言説における *a* です。それは定言命令の声としての *a* です。その声は「悦せよ！」 *Jouis!* と命令します。

昨日の「父の名」の話と関連を持たせるなら、「悦せよ！」という命令の声 a は、存在の真理の座に位置する不可能な名 YHWH としての父の名を代理するものです。律法の定言命令は、神の意志そのものです。

割礼という徴(しるし)も、不可能な名 YHWH を代理する signifiant a と解釈されます。割礼は、神への従順の徴です。つまり、ギリシャ語大文字で書かれる signifiant phallic Φ , 男の性別を規定する signifiant Φ の閉出の象徴です。

割礼を受けたユダヤ人男性がすべて実際に神に本当に従順なわけでは勿論ありませんが、割礼の宗教的な意義は、神との関係を妨げる signifiant Φ の棄却です。それによって、症状の言説としての分析家の言説が可能になります。そこにおいて剰余悦 a も症状として実現されます。

キリスト教圏におけるユダヤ人に対する差別は、男が女を差別する構造と同じものに根ざしています。そのような差別を動機づけているものは、去勢不安です。別の表現で言えば、「男性的抗議」です。

問題は、キリスト教圏において排除されたユダヤ人たちがイスラエルという国家を、民主主義国家を作ると、そこにおいて支配的である構造は、大学

の言説の構造であり、そこにおいてはユダヤ人たちがアラブ人たちを排除してしまふ、ということです。

この三週間で千人以上のパレスチナのアラブ人たちが殺され、そのうち子供の犠牲者は二百数十人にのぼっています。あらためて彼らのために祈りましょう。ユダヤ人もアラブ人もキリスト教徒も、あらゆる者が原点に立ち返り、神への従順を取り戻すことができますように。

同じキリスト教圏でも、カトリック圏とプロテスタント圏では分析家の言説の優勢さが異なる、というのは「社会学的」な事実です。

1950年代までは、有効な精神医学的薬物療法が無かったので、USAにおいても精神分析は優勢でした。しかしそれは、当時のUSAにおいて精神医学界のなかで精神科医が出世しようと思うと精神分析家の資格認定を受けねばならない、というやはり「社会学的」な動機に基づいていました。精神医学的薬物療法が発達すると、USAでは精神分析はすみやかに過去の遺物になりました。USAは基本的にプロテスタントの国です。カトリックは少数派です。

それに対して今、分析家の言説が優勢である国々、要するに Lacan の教

えに準拠する精神分析が栄えている国々は、フランス語、スペイン語、イタリア語の国々であり、基本的にカトリック諸国です。

この「社会学的」な事実を説明することはできるでしょうか？誰も明確な答えを出してはいません。わたしの推測では、それは、神を畏れる度合いの差によるのではないかと思われま

す。プロテスタントは非常に多様で、一概には言えません。Luther と Calvin は同じではありません。Heidegger は Luther を熱心に研究しました。わたしはプロテスタント神学をまだよく知りません。ですから、こう言っておきましょう:少なくともプロテスタントの一部は、神中心ではなく人間中心の宗教になっている。近代の人間中心主義に則ってキリスト教を「改革」したのがプロテスタントです。

それに対して、あいかわらず神中心を堅持しているのがカトリックです。あるいは、中世に墮落したカトリックですが、近世以降、プロテスタントに対抗するために、人間中心ではなく神中心の精神を復活させました。

人間中心か神中心かによって神を畏れる畏れ方に違いが出てくると思います。

プロテスタントの教義が厳しくないわけではありません。むしろ、カトリックより非常に厳格であるかもしれません。しかし、それは或る意味でユダヤ教的な律法主義への逆戻りでしかありません。ユダヤ教の律法主義は、イエスの時代、墮落して、神を畏れる気持ちを失い、形骸化していました。だからこそ、父なる神はイエスを世に使わしたのです。プロテスタントは、或る意味でイエスの時代のユダヤ教と同じ過ちに陥っています。戒律、律法を厳格に遵守しますが、神を畏れることを忘れていきます。

それに対してカトリックは、律法よりも神の愛を強調します。神は愛です。そして、神を愛することが重要です。そこには、神をうやまい、神を畏れる気持ちが伴います。

以上のような違いが、プロテスタント諸国では大学の言説の優位、カトリック諸国では分析家の言説の優位という違いを生んでいるのではないかと、わたしは推測しています。

神を畏れるところでは、律法を遵守することよりは、神の意志を直接知ろうとします。何を神は人間に請求しているのかを知るために神の声を聴き取ろうとします。それは、分析家の言説と同じ構造です。

さて、1932 年の医学博士論文で Lacan が取り上げた症例 Aimée についてですが、Lacan は彼女を *paranoïa* と診断しています。つまり、妄想症状はあったが、*Schizophrenie* ではなかったのです。

Aimée は、妄想において彼女の迫害者である幾人かの人物のうち或る女優をナイフで襲撃しました。Aimée が自分の攻撃行為の意義を自罰と了悟したとき、彼女の妄想症状は消え去りました。その後の経過において、症状の再発はありませんでした。伝えられているエピソードによると、Sainte Anne 病院から退院した後、或る時期、Aimée は偶然にも Lacan の両親の家で住み込みの家政婦をしていたそうです。そこで Aimée とはちあわせた Lacan は非常にびっくりしたそうです。ともあれ、彼女は再び妄想症状を持つことはありませんでした。

Schizophrenie に比べると、純粹な *paranoïa* の症例ははるかに少ないです。しかし、Freud の症例「狼男」は、大人になってから、一時的に *paranoïa* 症状を呈したことがあります。このことについては別の機会に紹介しましょう。

「父の名の閉出」の概念も多義的です。或る意味で、症状の言説である分

析家の言説においては父の名は閉出されています。父の名が閉出されていないと症状は出現しません。

症例 Aimée においても「父の名」は閉出されていました。だからこそ症状が出現しました。

そして、彼女の症状は、自我理想 Ich-Ideal を攻撃し破壊するという行為において、解体されました。そこが Lacan の注目したところです。

自我理想も、signifiant a の一形態です。死の本能、攻撃本能が仮象 a を破壊することによって aliénation の構造が解体され得る。このことが、後の Lacan の主体滅却 destitution subjective の概念の種となりました。

30 July 2014 : 二階堂奥歯の自殺; Aimée の自罰; 境界例の自傷; ギャンブラーの自己去勢; 結合の機能としての父の名について.

二階堂奥歯というペンネームの女性について教えていただきました. ありがとうございます.

<http://homepage2.nifty.com/waterways/oquba/index.html>

<http://blog.livedoor.jp/genyoblog-higashi/archives/6916092.html>

彼女は 26 歳で投身自殺しました. 出版社で編集者として活躍していました. みづから命を断つ前の約二年間, 彼女は日記を blog に発表していました. それは, 彼女の友人たちによって一冊の本にまとめられました:『八本脚の蝶』. 絶版にはなっていないので, 注文しました. 読んでみます.

Aimée について引き続き御質問をいただいています. 彼女が妄想症状のただなかにいたとき, その妄想について誰かに語る機会は無かったと思います. 1930 年前後のことですから, フランスでも今のように分析家がどこにでもいたわけではありません. 自分の家族にも知人にも話してはいません.

彼女は, 迫害妄想についてではなく, érotomanie と呼ばれ得る妄想の内

容を文章にして書きつけてはいました。その対象は, Prince of Wales, 英国の皇太子です。「彼はわたしを愛している」という妄想的確信を Aimée は持っていました。

Aimée においては迫害妄想と érotomanie とが言うなれば二本立てで、表裏のように対になって現れていることが特徴的です。これは、臨床的には珍しいことですが、構造としては、症状の言説としての分析家の言説によって形式化されます。迫害する他者も愛する他者も $\frac{a}{\phi}$ として形式化されます。迫害の攻撃も、愛の命令も、同じ本能請求の現象です。それは Freud の用語では超自我の現象であり、したがって Lacan は Aimée を超自我精神病の一例として提示しています。

Aimée における「自罰」の「罰」は、司法権力の処罰や身近な誰かの非難によって起こるものではありません。それは、自我理想 a が死の本能 ϕ により攻撃され、破壊された、という事態です。それによって症状の構造の解体が起こり、妄想症状は治療的介入無しに消退します。

いわゆる境界例において起こるような自傷行動は、存在の真理のことばが分析家の言説において文字どおりにことばとして聴き取られることが起き得ないときに、実存構造がみつからに無理やり signifiant をきざみつけようと

する行動です。

純粹徴示素としての a は、切れめ、裂口です。自傷行動における切創は、まさにそのような切れめです。そのようなことばにならないことばを、分析家の言説において本当にことばとして語るができるようにする必要があります。

それに対して、投身のような決定的な自殺行為においては、実存構造は端的に消滅してしまい、存在の真理が仮象によって代理されるという構造そのものが無くなってしまいます。

ここに、ですから、Lacan が分離や主体滅却と呼ぶ事態、分析の終わりを規定する事態は、如何にして実存構造そのものの消滅無しに成起し得るのかという問いが措定されます。 $\frac{a}{\Phi}$ の構造そのものは、 a が純化され、無化され、切れめ、穴そのものに還元されても、保たれていなければなりません。さもなくば、復活も成起し得ません。 $\frac{a}{\Phi}$ の構造そのものを保つものとしての「父の名」の機能が想定され得ます。

そして、そのような構造の支えとしての父の名が閉出されてしまっているときには、投身のような決定的な自殺行為が起こり得る、と考えられます。

男の存在論的構造 $\frac{\Phi}{\phi}$ において、死の本能が Φ を直接に分離・破壊することはないのであるかという御質問をいただきました。難しい問題です。

$\frac{\Phi}{\phi}$ の構造が脅かされそうになると、いわゆる去勢不安が生じます。それは危険信号の役をし、危険から遠ざけさせます。それは言うなれば狭義の去勢不安です。

広義においては、不安はすべて去勢不安です。それは、 a との遭遇において男女を問わず起こり得ます。そして、女性においては a がより分離しやすいので、不安は起こりやすくなります。

男性において $\frac{\Phi}{\phi}$ の構造が直接に破壊される事態として、どのようなものが考えられるでしょう？もしかしたら、それは賭博かもしれません。

かつて話を聞いたことのある或る病的賭博の男性は、会社で責任ある地位についていました。当時その会社では給料を現金で支給していました。彼は全従業員の給料を銀行からひとりで運んでくる役をまかされていました。あるとき彼は 1000 万 円弱の金を銀行から引き出し、すぐに会社に戻らねばならないのに、彼の足はフラフラと競輪場に向かいました。彼は、あり金

すべてをひとりの選手に賭けました。ゴールはその選手ともうひとりどち
らが一着か、微妙な写真判定になりました。その結果が出るまでの数分間
は、彼自身の言葉によると、彼の人生のうちで最も充実した瞬間だったそ
うです。負ければすべてを失うというあの緊張感、あの不安感、それが最高
の悦なのです。結果は、残念ながら彼の負けでした。彼は、自分の妻に
電話し、もう家に戻れないと告げましたが、彼のギャンブルの性癖を知っ
ている妻は彼を必死に説得して何とか帰宅させました。さもないと彼は自
殺していたでしょう。

男たちの大部分は神に従順であろうとはしませんが、男が自分の身を他
A の手に委ねることがあります。ギャンブルはその一例だと思います。負け
ればすべてを失うというような大博打に女性が手を出すという話はあまり聞
いたことはありません。男でも珍しいことでしょうか、ときどき見かけます。男
の存在論的構造において Φ が直接に破壊される例として、ふとそのよう
な病的賭博の例が思い浮かびました。

今日はこのへんにしておきましょう。「八本脚の蝶」については後日お話し
たいと思います。

父の名の機能について御質問をいただきました。ありがとうございます。御

指摘のとおり、今日言及した父の名の機能は「徴象機能の支え」と Lacan が呼んだものです。Ex-sistence としての実在を仮象 a が代理するという存在論的構造をそのようなものとして可能にするもの、それを Lacan は「父の名」という用語によって差し徴しています。そのような機能は、1950 年代に Lacan が *point de capiton* と呼んだものから、1970 年代のボロメオ結びの RSI の三つの輪を結ぶ第四の輪としての父の名に至るまで、たどることができます。そのような結合の機能としての「父の名」が閉出されると、自殺が起こり得ますし、あるいは、実存構造の急激な解体が急性精神病症状によって代補されることも起こり得ます。

31 July 2014 : 大学の言説は差別の言説である；大学の言説としてのプロテスタントの言説；分析家の言説としてのカトリックの言説；復活の概念に対する反感。

わたしがカトリックだからプロテスタントの悪口を言うわけではありませんが、少なくとも USA のプロテスタント諸会派の一部は、大学の言説に陥っています。

大学の言説は、差別の言説です。

あるときヘブライ語の聖書をネットで探していて、<http://theotex.org> を見つけました。そこからヘブライ語原文とフランス語訳を無料で download できるのですが、そのためにはクイズに答えなければなりません。どんなクイズかというと、「ユダヤ人を救済の経済から排除することを正当化しているキリスト教神学システムの名は？」というものです。ヒントとして、*Left Behind* というベストセラー小説と大ヒット映画の筋書きはそのような神学に基づいている、と付言されています。

Wikipedia で調べて、答えは簡単に見つかりました。Dispensationalisme が答えです。

日本語に訳しにくい用語ですが, dispensation は, この場合, 「配分」です. 最終的な救済である世の終わりに至るまでに, 神は幾つかの時代, 期間を人間たちに配分した. そのように配分された時代が dispensation です.

そして, ある時期, 神はユダヤ人に己れを啓示していたが, その時代は過ぎ去った. ユダヤ人は最終的な救済から排除されている, と dispensationalisme の神学は考えます. 少なくとも, dispensationalisme を信奉する人々の一部はそう考えます.

USA のプロテスタントの一部では, そのような差別神学が信奉されているのです. <http://theotex.org> は, そのような差別を告発するために, あのクイズをしかけたのです.

ユダヤ人差別だけでなく, USA のプロテスタントは, WASP : White Anglo-Saxon Protestant 中心主義に組み込まれ, アフリカ系を始めとする少数民族に対する差別を容認してきました.

キリスト教は普遍的な神の愛を説くのに, なぜ差別の言説がまかり通るのか? それは, プロテスタントの聖書絶対主義に起因すると思います.

プロテスタントはローマ教皇の権威を否定するために、信ずるべきは聖書のテキストだけだ、と主張します。それゆえ、プロテスタントでは聖書の解釈学が非常に発達します。それはそれで神学的に有意義なことですが、ところが、プロテスタントは、聖書解釈学の知 S_2 が能動者の座に就いて支配する大学の言説に行きついてしまいました。

ある意味で、今のイランの政治体制も同様です。コラーンのテキストの解釈の知を握る神学者たちが支配する大学の言説です。

聖書のテキストを読むのは勿論大切なことですが、本来もっと本質的なのは、神の御ことばであるイエスの声を聴くことです。カトリックはそれを重視します。それは、大学の言説ではなく、分析家の言説の構造のなかに位置づけられます。神の声 a が能動者の座に位置し、それは神の知 S_2 を代表しています。

そのような構造の下地の上に、カトリック諸国での精神分析の広まりは基礎づけられているのではないかと思います。

話は変わって、先日ちょっとおもしろい経験をしました。Zizek の関係のグ

ループの Facebook のページで、わたしが「復活」に言及したところ、嫌悪感を以て反発する反応が返ってきました。英語でやりとりするグループです。反応したのはイギリス人でした。キリスト教圏においても、今や、死からの復活を持ち出すと反感を買うことがあるわけです。西暦 1 世紀に聖パウロがアテネで死からの復活を説いたときと同様に。

01 August 2014 : 「精神分析学」は大学の言説による精神分析の心理学化である； 大学人にとって Lacan は外傷体験； 精神分析にとっての Heidegger の根本的な意義； 精神分析を学ぶ, 教える； 存在の真理の知の伝達.

大学の言説は, 精神分析を「精神分析学」にし, Lacan の教えから lacanisme を作り上げようとしています. それによって大学人は, 精神分析を諸々の心理学理論のひとつに分類し, Lacan の教えを「精神分析学」のひとつの変種と位置づけ, 安心します. 精神分析の真理を塞いだつもりになって.

日本の大学人のなかに「ラカン派精神分析学者」や「ラカン解釈学者」を標榜しようとする人が誰かいるでしょうか？

Heidegger をやっている大学の哲学教師たちも, Heidegger と心中する心構えは無いようで, Heidegger は Nazi だと指弾されれば, たちどころに逃げ出します.

フランスの大学人たちにとって Lacan から受けた trauma の後遺症はいまだに残っています. Lacan の弟子であった Laplanche はその代表例で

しょう。

先日もちょっと触れたように、頼まれて Derrida の *Mal d'Archive* を読んでみましたが、根本的に Heidegger と Lacan に準拠していながら、Derrida が Heidegger の名を挙げたのは一回のみ、Lacan への直接の言及は一切ありませんでした。あたかも Lacan の名を出すと哲学者にとって恥であるかのように。

フランスの大学人・哲学者のうちでまともに Lacan と取り組んでいるのは、Alain Badiou くらいでしょう。

付言すれば、フランスでの Lacan アレルギーは、今や、Jacques-Alain Miller に対するアレルギー反応によって強化されています。

わたし自身、Lacan の教えの根本を把握し得たとすれば、それは、神学と『哲学への寄与(自有によって)』以降の Heidegger とを学んだことによつてです。しかし、同時に、Heidegger を読解するには Lacan と精神分析と神への関わりが必須だと思います。

Lacan は、精神分析にとっての Heidegger の思考の根本的な意義を把

握していました。Lacan が暗示したことを、わたしは今、明確化しているだけです。Jacques-Alain Miller は Heidegger 嫌いなようで、彼が立ち入って Heidegger を論ずるのを聞いたことはありません。

ここで、わたしの個人的な予定をお伝えしておく、新たに開業する部屋へ 8 月 11 日に引越ます。最寄り駅は、都営三田線の白山駅です。そこで精神分析治療、いわゆる個人分析, *personal analysis* を始めます。

精神分析の臨床と並んで、秋からは *séminaire* を開始します。どのようなプログラムにするかは未定ですが、御要望、御意見があればお寄せください。参考にさせていただきたいと思います。例えば、Lacan や Freud のテキストの解説、より一般的な理論的解説、等々。参加しようと思う方々の都合としては、何曜日の何時ごろがよいか、等々。場所は、ある程度の参加人数が見込まれば、文京区の貸し会議室を借りることもできます。

そもそも、精神分析を学ぶこと、教えることは可能なのでしょうか？もし可能であるとすれば、精神分析を「学ぶ・教える」とはどういうことでしょうか？学び、教えものは或る種の知ですが、では、精神分析において如何なる知がかかわっているのか？

Freud や Lacan がみづから言ったこと、また、Freud や Lacan について誰か他の者が言ったことを、我々はテキストとして読むことができます。そこから何事かを学ぶことができます。それはそれで有意義なことです。確かに、そのようにして精神分析の理論、用語、概念を我々は学びます。

しかし、例えば大学の講義において、あるいは個人的な勉強会のような機会において、そのような事柄を学んだとして、それで本当に精神分析を学ぶことになるでしょうか？

確かに、例えば哲学を勉強し、哲学者になろうとしている人、あるいは、既に哲学者として仕事をしている人は、精神分析の臨床とは別に、用語や概念を「机上」で学んで、理論化し、かくして論文や本を書いて発表し、自分の業績のリストをより長いものにして行くことができるでしょう。大学人にとっては、それは有意義なことです。

しかし Lacan は、そのような営みを *poubellication* と呼びました。*poubellication* は、*pubilication* (出版、発表) と *poubelle* (ゴミばけつ) との合成語です。つまり、もし論文や本を書いて出版すること自体が目的となっているなら、そんなことは廃棄物を作り出しているようなものだ、と Lacan は揶揄したのです。

Lacan は, la psychanalyse en intension と la psychanalyse en extension との二本立てを提唱しました.

intension と extension は, 通常, ある概念の「内包」と「外延」と訳されます. 「内包」は或る概念の意味であり, 「外延」はその概念があてはまる存在事象全体を指します.

しかし Lacan は精神分析の intension という表現を以て, 各人がみづから経験するものとしての精神分析, つまり, 各人の分析経験のことを差し徴します.

それに対して, extension における精神分析という表現においては, 精神分析を如何に社会に対して提示・提起するか, ということが問題にされます.

精神分析について何か書いたり発表したりすることは, 精神分析の extension に役立つ限りで意義があります. 論文や本を発表することが自己目的化してはならないのです.

精神分析の本質・本有は, 勿論, intension としての精神分析, 各自がみ

づから精神分析を経験することにこそ存します。

では、その場合、精神分析の知の伝達とは如何なることなのか？

講義や勉強会でテキストを読み、用語や概念を学ぶことは、確かに或る種の知を得ることはありますが、**extension** の次元のことにすぎません。それは、自分の、わたしの存在の真理を知ることはなりません。わたしの存在の真理を知るためには、みづから分析を経験する必要があります。

その際、知は如何なるしかたで伝達されるのか？分析の面接の最中に為される解釈によってでしょうか？

Freud はそう考えていたかもしれません。Freud は、分析面接において夢や症状についてできるだけ詳しい解釈を患者に説いて聞かせました。

しかし、それが存在の真理の知の伝達でしょうか？

たとえば『夢解釈』において「夢は願望成就である」という標語のものに為される解釈は、それはそれで興味深いものです。むしろ、大変おもしろい読み物だと言ってもよいでしょう。夢や日常生活の精神病理の解釈は、おもし

ろく読めます。なぜなら、そこで Freud は意味を開示しているからです。

ただし、そこで言う「意味」は, *imaginaire* な意味, 影象的な意味にすぎません。そのことは, 例えば Freud が『夢解釈』の第二章で展開している Irma の注射の夢において解釈される夢の願望は何ら小児的なものでも性的なものでもないことに表されています。そのような「意味」は, 分析において本来目ざされるべき実在の次元のものではありません。

それに対して, *intension* における精神分析において, 各自の分析の経験において, 伝達されるべき知は, 各自の存在の真理の知, 実在の知でなければなりません。

分析家の言説の構造において, 左下の真理の座に位置づけられている知 S_2 , それこそが精神分析においてかかわる知です。それこそが, 精神分析において伝達されるべき知です。

では, 知 S_2 は, ひとつの真なる言表として定式化され得るのか?

Lacan は言いました:「我れは常に真理を言う。ただし, すべてではない。真理をすべて言うことは不可能である」。

つまり、存在の真理の座に位置する知 S_2 を、仮象的徴示素 a は代表することはできるが、 a はあくまで S_2 の代理物、代用物にすぎず、 S_2 そのものではありません。したがって、 a を以て真理を言うことはできるが、 S_2 そのものをすべて言うことはできません。Freud のような解釈では知 S_2 をそのものとして伝達することはできません。

では、精神分析における知の伝達はどう為され得るのか？

それは、analysant 「分析者」、つまり、精神分析の患者、分析を経験する我々各自が、analyste 「分析家」に成ることによってです。

転移において、知 S_2 は、分析家 a のもとに仮定されています。そして、分析の終わりにおいて分析者がみづから分析家に成るとき、分析者はみづから $\frac{a}{S_2}$ の構造において実存することになります。 S_2 が位置する場処は、もはや他 A の場処ではなく、Ereignis 自有において、我々各自自身の最も本自的な存在の場処となります。

知 S_2 をひとつの言表として言い表したり書き表したりすることが問題ではないのです。ここに我々は、禅で「不立文字」、「以心伝心」と言われている

この本当の構造を見出すことができます。

秋から行う予定の東京ラカン塾の séminaire, 勉強会について, どのようにするのが望ましいか, 皆さんの御意見, 御要望をお寄せください. そのほかの御質問, メッセージ等も御遠慮なく.

秋から始める séminaire について, 御提案, 御要望をお聞かせください. 内容, テーマだけでなく, 曜日, 時間帯, 等, どのようなことに関するものでも結構です. いろいろな御意見をお待ちしています. 御遠慮なくメッセージを送ってください. わたしの e-mail address へ直接御連絡くださっても結構です : ogswrs@gmail.com

02 August 2014 : 輪廻転生；解脱・涅槃と永遠の命；原罪と無意識的罪意識；贖罪と救済.

秋から行う予定の東京ラカン塾の séminaire に関して幾つか御意見，御要望をいただきました. ありがとうございます. 引き続き御提案，御要望，等をお寄せください. 曜日や時間帯の都合，具体的にどのテキストを読解したいか等，どんなことでも結構です.

「後期ラカンは隠れハイデゲリアンだ」という御意見をいただきました. 実際，1950年代の Lacan があからさまに heideggérien であるのに対して，1960年代，1970年代の Lacan においては Heidegger への準拠はほとんど暗黙のものになります. 確かに「隠れハイデゲリアン」です.

さて，復活のことを話題にしたら或るイギリス人が反発した，ということを先日言いました. キリスト教圏でも復活や永遠の命といったキリスト教の本質的概念，教義が的確に理解されているわけではありません. それは，日本において我々が仏教の教義を必ずしも正確に理解していないのと同じです.

例えば，輪廻転生について誤解している人は少なくないでしょう. お坊さん

のなかにも誤解している人がいるようです。つまり、輪廻転生は望ましいことだ、という誤解です。現世で不幸でも来世では幸せになれるという「希望」について語っているお坊さんをテレビで見かけたことがあります。

ちよつと仏教の教義について本を読めば、それは全くの誤解であることがわかります。本当は、輪廻から脱出しなくてはならないのです。輪廻に捕らわれているうちは解脱できません。善行と禁欲に励み、良い業(カルマ)を積むことによって、幾つかの転生を経た後、やっと輪廻から脱出することができます。

解脱は輪廻からの脱出であり、そうなるともう転生することはありません。この世に再び生まれて苦勞する必要はもうないのです。

このような解脱と涅槃の境地は、ですから、キリスト教に言う「永遠の命」と等価です。

キリスト教では、そこに至るために幾度か転生する必要はありません。神の恵みにより、苦勞の多い現世の人生を送るのは一回きりで良いのです。

基本的に、仏教は「自助努力」、キリスト教は「神頼み」です。勿論、どちら

が良いかは問題ではありません。根本的には同じことを目ざしているのですから。

復活と永遠の命のみならず、キリスト教圏で最も誤解されやすく、反発を買いやすい教義は、原罪の観念です。人間は、まだ生まれたばかりで何も悪いことはしていない新生児でも、原罪を背負っています。何もしていないのに何故罪があるのか、と誰もが反発します。

イエスは神ですから原罪はありません。人間で唯一の例外は、乙女マリアです。彼女は、神の母として、原罪を負っていない、という教義がカトリックでは公式に認められています。この「無原罪のお宿り」の教義は、プロテスタントから見ればマリアの神格化にほかならないので、プロテスタントはカトリックの迷信深さと偶像崇拜をバカにします。ともあれ、神の母マリアの清純さがかくも強調されることのなかに、むしろ、彼女とその対極のマグダラのマリアとが本来同一の人物であったであろうことを読み取ることができます。

それはさておき、原罪は、したがって、何らかの行為の結果ではないのです。神話上は、アダムとエヴァが禁止を侵したからとされていますが、生まれたばかりの乳飲み子にまで原罪があるということは、それが行為によるも

のではなく、而して、存在論的なものである、ということ在意義しています。

原罪の観念は、Freud が「無意識的な罪意識」[unbewußtes Schuldbewußtsein] と呼んだものと関連があります。

「無意識的な罪意識」はあからさまに矛盾した表現ですから、「無意識的有罪感」とか「無意識的有罪性」と言い換えたりもします。

ともあれ、「無意識的」ということは、「何もしたおぼえは無い」ということです。何もしたおぼえが無くても、あなたには罪があるのです。何かしたけれど忘れてしまったというわけではありません。違法行為無しの有罪性です。

無意識的罪意識によって、Freud は原罪の観念を再発見したのです。この有罪性は、存在論的なものなのです。

「人間として存在するだけで有罪である」とはどういうことでしょうか？

Lacan は「徴象的負債」[la dette symbolique] という用語を以て存在論的有罪性の問題を思考しました。

罪と負債は一見関係なさそうに見えますが、Schuld というドイツ語は両方の意味を持っています。罪とは「負いめ」なのです。何らかの負債を抱えていて、それをまだ返済していない状態、それが「負いめ」がある、ということであり、罪がある、ということなのです。

そして la dette symbolique の symbolique という語は、言語との関連を示唆しています。

人間は、言語に住まう存在である限りにおいて、言語存在である限りにおいて、返済していない何かを負っているのです。

それは何か？実存の構造 $\frac{a}{\phi}$ における a です。他化的同一化の徴示素 a を清算しろ、と他 A は請求しています。

『ハイデガーとラカン』の注に書きましたが、村上春樹氏の『1Q84』のあの無気味な場面はまさにそのような請求を描いています。つまり、天吾の父、NHK の集金人を長年勤めていた父は、死のまぎわの深昏睡状態にありつつ、青豆がひそむ部屋の扉を無遠慮に叩き、未払い受信料を請求します。

そのとき天吾の父は、まさに死の代理人です。死ぬ前に、あなたの負債を清算しなさい、あなたの罪を贖いなさい。あの場面の無気味さの意味は、そのようなものです。

Freud は無意識的罪意識を超自我と原初的 Masochismus との関連で思考していますが、臨床においてそれをどう扱うべきかは詳しく論じていません。無意識的罪意識と原罪とを関連づけ、キリスト教における贖罪の観念をも含めて思考したのは Lacan が初めてです。

カトリックの Credo, 具体的には「使徒信条」と「ニケア・コンスタンチノープル信条」がありますが、いずれも、「罪の赦し」と「復活と永遠の命」とを信ずる、と述べています。それらは、キリスト教の救済論の二大要素です。

贖い Redemptio は、それだけで救済の意味にもなります。イエス・キリストにおいて如何に贖いが完成されているかについては、明日以降説明します。

聖書に関しては、ローマ書簡を翻訳でお読みになったなら、今度は是非ギリシャ語原文をお読みなさい、とお勧めしたいところですが、それがちょっと大変なら、他のパウロ書簡を引き続き読んでみてください。パウロ自身が書

いたものと、パウロの弟子が書いたのだらうと推測されているものがありますが、そのような違いを始めから気にする必要はありません。とりあえず、順番どおりに第一・第二コリント書簡をお読みください。

そう言えば、田川健三氏による翻訳が最新のもののはずですが、どのような訳になっているかをわたしは自分では確認していません。学生時代、田川健三氏の著作は幾つか読み、ためになったと思っていますが、今、カトリックの観点から見て、プロテスタントである田川氏の聖書解釈がどのように見えるか、現時点では何とも言えません。

Alain Badiou の *Saint Paul. La fondation de l'universalisme* はわたしも読みました。結構おもしろい本です。Pasolini が聖パウロについての映画を作ることができなかったのが残念です。

03 August 2014: ベネディクト 16 世の『ナザレのイエス』; 救済の条件は存在論的貧しさである.

以前, 聖書を勉強するにはどうすればよいかという御質問をいただきました. 当然, 聖書を読むのが一番ですが, それだけでなく, 司祭による解説を聞くのも参考になります. つまり, 御ミサでの説教です. 説教というといかにもつまらなさそうな感じですが, そんなことはありません. 勿論, 説教をする神父様しだいですが.

あとは, 神学者が書いたものを読むのも良いことです. 膨大な数の神学書のうち, 今特にお勧めできるのは, 先代の教皇(今は名誉教皇と呼ばれています) Benedikt XVI の『ナザレのイエス』全三巻です. Amazon で見たら, 全部翻訳されていますが, ずいぶん値段が高くてびっくりしました. 皆さんの身近の図書館にあればよいのですが.

Benedikt XVI は保守的で, 今の Francesco 教皇に比べれば人気はありませんでしたが, 神学者としては非常に優れています. 『ナザレのイエス』は内容も深く, それでいて, キリスト教になじみの薄い人にも読みやすい本です. 福音書の物語の展開にそって, イエスの真理をわかりやすく説き明かしてくれます.

今日わたしが行った御ミサの司式をしたのは Mission ouvrière saints Pierre et Paul (聖ペトロ・パウロ労働者宣教会) の Rémi Aude 神父様でした。彼はなかなか参考になることを説教で言っていたので、紹介してみます。

今日の福音朗読は、マタイ福音書 14 章 13-21 節でした。イエスが荒れ野で 5000 人以上の人々にパンを与えたという話です。勿論、現実にそんなことが可能なはずはなく、福音書の話自体がひとつの譬え話です。譬え話は、不可能としての実在 φ を代理する仮象 a です。イエスが荒れ野で 5000 人にパンを与えて満腹させたという譬え話において語られていることは、救済という実在です。

抽象的なことは理解できず、さして spiritual でもない一般の人々に救済のことをわかってもらおうとすれば、救済をどう提示するか？窮極的満足としてです。もっと具体的に言えば、飢えることも渴くことももうない状態です。

福音書の話のなかで、イエスは僅かなパンと魚を分けて数千人の群衆を満腹させました。そのような満足が救済の具体的なイメージです。

同じような救済のイメージは「天の祝宴」です。天国で神がごちそうをふるま

ってくれるのです。それは旧約聖書において既に語られているイメージです。

ところで、そのような神の宴会(ギリシャ神話におけるような神々が飲み食いする宴ではなく、神が人間たちを招いてごちそうするのです)に参加することができるためには条件があります。ただひとつの条件です。それは何か？ 飢え渴いていることです。

日本でも「山上の垂訓」として知られているマタイ 5 章 3-12 節 — カトリックでは「八つの幸い」と呼びますが —、それは多分、最もよく知られた聖書の一節でしょう。「心の貧しい者は幸い」で始まる一節です。「心」という訳語は不適切ですが、ここでは立ち入りません。ともあれ、マタイ 5,6 の言葉はこうです:「正義に飢え渴く者は幸い」。

単純に言えば、貧しく、飢え渴いていること、それが天の宴に招かれる条件です。

地上的なものに関して豊かであり、この世のもので満腹している者は、主の食卓には招かれないのです。つまり、救済されないのです。

実際に金持ちであるか否かが問題ではなく、どれだけ神に飢え渴いているかが問題です。地上的なものにあきたらず、どれほど真剣に神を探し求めるか。

言い換えると、存在事象にだけ目を奪われ、存在事象の次元のことだけで満足してはならないのです。むしろ、存在事象の専制を打倒し、存在論的な貧しさを達成しなければなりません。それが救済の条件です。そして、そのような意味で貧しくなることを神は人間に請求しています。

「徴象的な負債を支払う」という Lacan の表現を以て昨日言ったことは、同じことです。他化的同一化の徴示素 a を返上し、存在論的穴、存在論的欠如そのものへと貧しくなること。それが、「徴象的な負債を清算する」ということです。その清算が済んで初めて、天の宴に与ることができます。つまり、救済されます。

今日は、御ミサの説教も教えに富んでいる実例を示してみました。この続きはまた明日。引き続き、御質問、御意見、御要望等をお送りください。

04 August 2014 : phallus と去勢； 存在論的穴； 他 A の場処の topologie としての cross-cap； 存在の請求.

幾つか御質問をいただきました. ありがとうございます. まず phallus についてですが, Lacan は精神分析において三つの phallus を区別するよう教えています. それは, 徴象, 影象, 実在の三つの位に応じた区別です.

まず「去勢の影象的な関数」としての phallus : $(- \varphi)$ があります. 第二に「悦の徴示素」signifiant de la jouissance と規定される phallus : Φ があります. 第三に, signifiant de l'*Aufhebung*, signifiant de la perte と Lacan が呼ぶ phallus : φ があります. この第三の学素はわたしの工夫ですが, その概念はちゃんと Lacan のなかにあります.

以上の三つの phallus はいずれも signifiant ですが, $(- \varphi)$ は imaginaire, Φ は symbolique, φ は réel の位にそれぞれ位置づけられます.

他方, 去勢とは何でしょうか? 精神分析において去勢は, 基本的に, 去勢複合, すなわち, 去勢不安として問題になります. そして, 去勢不安という表現は冗語であって, 精神分析においてかかわる不安はすべて去勢不安

であり、去勢との連関における不安です。

不安は、 a が ϕ を代理する限りにおいて、 a との出会いにおいて惹起されます。つまり、去勢とは ϕ そのものです。

かくして、phallus と去勢との関繋を整理すると、こうなります。まず、 ϕ は、今しがた言ったように、去勢そのものです。 $(-\phi)$ は ϕ の影象的な相関者であり、女の欠如せる phallus です。最後に Φ は、男の性別構造において ϕ の穴を塞ぐ仮象であり、質問者の御指摘どおり、男において特に強い精神分析への抵抗(男性的抗議)を惹起するものです。

ですから、le phallus est le signifiant de la castration とひとくちに Lacan が言ったことは無いのではないのでしょうか？勿論、そう言ったこともあったかもしれませぬし、それはそれで、上述の三つのうちのいずれを意義しているのか読解できるだろうと思います。しかし、先ほど Lacan のおもだったテキストを見た限りでは、le phallus est le signifiant de la castration ともろに言われている箇所は見つかりませんでした。

代わりに、わたしの引用した表現は、Lacan 自身のものです。「le phallus est le signifiant de l'Aufhebung」(Ecrits, p.692) は、*La signification du*

phallus の非常に難解な部分に出てきます。その文の直前に « le signifiant ne peut jouer son rôle que voilé » と Lacan は言っているので、この *phallus* は ϕ だと思われます。したがって、« le phallus est élevé (*aufgehoben*) à la fonction de signifiant » における signifiant は、単純に signifiant ではなく、而して、signifiant barré です。「ファロスは、抹消された徴示素の機能へ *aufheben* されている」。抹消された徴示素は、 ϕ すなわち存在にほかなりませんから、*phallus* は存在の尊厳へ高められます。と同時に、*phallus* は抹消されることにおいて廃されます。*aufheben* という語は、まさに、*élever* (上げる、高める)と同時に *abolir* (廃する)という意味において用いられています。*aufheben* を「棄揚、止揚」と訳すとすれば、それはそのような意味においてです。

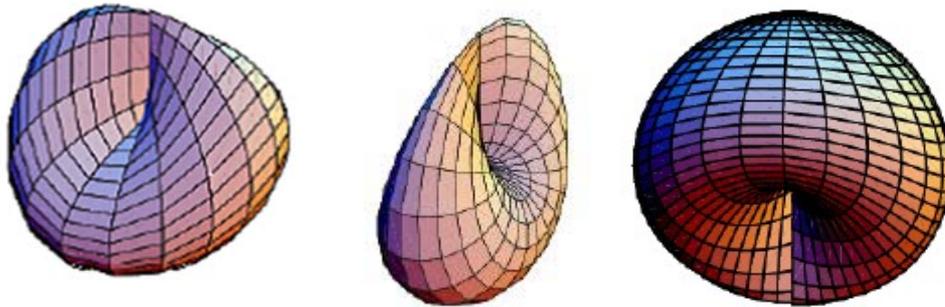
« le phallus est le signifiant de la perte » は *Ecrits*, p.715 にあります。「le phallus est le signifiant de la perte que le sujet subit par le morcellement du signifiant」。「ファロスは、徴示素による分断のせいで主体が被る喪失の徴示素である」。さらに続いて、客体による代償機能について Lacan は語っていますから、この一節の「喪失の徴示素であるファロス」は ϕ のことであると考えられます。

「他 A」と「他 A のなかの欠如 A」との関繋については、「存在論的穴につ

いて」という短い解説文を先日書きましたので、参考にしてみてください：

http://www.lacantokyo.org/trou_ontologique_20140721.pdf

今日はちょっと視点を変えて、cross-cap の topologie で説明してみましよう。というのも、le lieu de l'Autre (他 A の場処, 場所)を Lacan は投射平面, 別名 cross-cap という閉じられた曲面として考えるからです：



他 A の場処はふたつの構成要素 a と φ とから成っています。つまり、存在の真理の現象学的構造, 症状の構造, 主体の存在論的構造, 実存構造などのわたしが呼んでいる $\frac{a}{\varphi}$ は、他 A の場処の topologique な構造なのです。

cross-cap という閉曲面は、ひとつの円板のエッジとひとつのメビウスの帯のエッジとを同一化することによって得られます。 a は円板に、 φ はメビウスの帯に対応します。

そして、cross-cap の図を見るとわかるように、cross-cap は球の一部が鉗子でつままれて、つぶされたような姿をしているのですが、そのはさまれてつぶれた部分の成す直線上の諸点を取り除いてしまうと、残った部分は一枚の円板に還元されてしまいます。(この手の topologique なおもちゃを扱うときは、素材は無限にしなやかに曲げたり伸ばしたり縮めたりすることのできる理想的なゴムのようなものと想像してください。)

つまり、cross-cap の図においては、メビウスの帯の要素はそのものとしては隠れているのです。そのものとして図に描くことは不可能なのです。

Lacan は cross-cap のそのような特質に注目して、自己秘匿における存在である ϕ をメビウスの帯として具象化します。それは、仮象 a というディスクによって覆い隠されてしまっています。 ϕ の成す穴は、円板 a により塞がれてしまっています。

A とは、 ϕ が他 A の場処(場所: Lacan の特殊用語であることを示すために、普通に「場所」と書かずに「場処」と書いています)にうがっ欠如ですから、 A と ϕ とは要するに同じ欠如です。Lacan が「存在欠如」と呼ぶ欠如です:

$$A \equiv \emptyset$$

請求は, Freud が「本能の請求」, Heidegger が「存在の請求」と呼ぶものです. その場合, 「存在」は, *Sein*, ~~Sein~~, \emptyset です. 自己秘匿における存在 \emptyset が, 聴く者としての人間へ, 実行不可能な請求を突きつけてきます: 負債を支払え, と.

その請求の声は a であり, それは徴示素として他 A の場処に属しています. 超自我(良心, 道德律)の声 a は, 欠如(欲望) A の請求を代理しています. その請求は, 我々に, 仮象 a を滅却し, 涅槃へ, 死へ至るよう求めています. 死から復活するために.

負債・罪の贖いのためには, 死の不安にもかかわらず, 予覚において死を覚悟せねばなりません. その実存構造を達成すれば, 覚者, 聖人となります.

05 August 2014 : ファロスの問題と父の問題は表裏一体である.

始める前に夏休みの予定をお伝えしておきます. 7日は終日所用で tweet している時間がありません. そして, 11日に引越をする予定です. その前後は当然, ごたごたします. ですから, 7日から約1週間, この Tweeting Seminar on Psychoanalysis は夏休みとします. 来週何曜日から再開できるか, 現時点では正確には言えません. 引越の後どの程度迅速にかたづけが済むかによります. ともあれ, 夏休み期間中も, 御質問, 御意見, メッセージ等は御遠慮なくお送りください. 一応, スマホもノートパソコンも持っていますから, 時間の余裕があればすぐお答えすることも不可能ではありません.

ファロスの学素について御質問を幾つかいただいていますので, 昨日に引き続きファロスについて考えてみましょう. Lacan がオイディプス複合と去勢複合とを一体の問題として考えたように, 父の問題とファロスの問題は表裏一体です. Lacan が父の問題を問うことをやめなかったとすれば, それは, 彼はファロスに関して問うことをやめなかったということでもあります.

わたしが工夫した学素 ϕ は, Lacan の $(-\phi)$ にもとづいています.

1960年のテキスト「主体のくつがえし」で Lacan は $(-\phi)$ を「去勢の影象

的関数」と定義しましたが、その後、1967年のテキストなどでは $(-\varphi)$ が存在, *ex-sistence* を表すために用いられていると解釈できるところがあります。

であれば $(-\varphi)$ を実在的 *phallus* の学素として使えば良いではないかと思われるかもしれませんが、それは混乱を招くこと必至です。

それゆえ、 $(-\varphi)$ の代わりに、*ex-sistence* を形式化する学素として φ を導入しました。

しかし、学素は、形式論理学の記号と同様、まったく形式的な、任意のもので。わたしはここではこう定義する、と宣言すれば、どの記号をどう使おうと勝手です。ただし、一貫性がなくては混乱してしまいますが。

ギリシャ語大文字の Φ については、Lacan は 1960 年の「主体のくつがえし」のなかでこう定義しています：« Φ (*grand phi*), *le phallus symbolique impossible à négativer, signifiant de la jouissance* » [大文字の Φ , 負の記号を付することの不可能な徴象的ファロス, 悦の徴示素]。

ここで *impossible à négativer* と言っているのは、小文字の φ が $(-\varphi)$ ：

phallus négatif であるのとは異なって、ということです。

また、1958-59年の Séminaire VI, p.534 で一回だけ Lacan は Φ を抹消して提示していますが、その学素はその後定着しませんでした。

そして 1960 年に結局、 Φ は負の記号を付けて用いることは不可能だ、と宣言されることとなります。もっとも 1972 年の性別の公式の父の機能では Φ は否定の記号を付されることとなりますが。

ともあれ、「主体のくつがえし」(*Ecrits*, p.823) の一節にも書かれてあるとおり、 Φ は源初的なものではなく、後から、つまりオディプス期になって初めて登場するものです。そして、男女の性別にかかわる *signifiant* だ、とそこでも述べられています。

したがって、 Φ が「悦の徴示素」であるとしても、それは、「性関係は無い」： \emptyset という欠如の穴塞ぎの仮象としてでしかありません。それは、世界のところどころで見うけられる多産、豊穡の象徴としてのハリボテの男根にすぎないのです。男根を御神体になっている神社は、わたしが知る限りでも日本に複数あります。

しかし、 Φ は、厄介なことに、大学の言説の構造である男の言説の構造において、排他的な「すべて」の暴力を規定する *signifiant* でもあります。今日の新聞にも、どこかで平然と *male chauvinism* を正当化する発言が為されたことが報道されていました。

話をもとに戻すと、ギリシャ語大文字の Φ はオイディプス複合と男女の性別にかかわります。小文字の ϕ は、それに対して、より源初的なものにかかわります。 ϕ は、本当の源初そのもの、失われた源初そのものです。

ex-sistence として、 ϕ はそのままでは限りなく横滑りして行き、捕らえようのない *signifié* です。Freud も *unfaßbar* 「とらえようのない」という形容詞を使っています。

そのように常に己れを離退し、己れを隠し続ける存在の真理は、しかし、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ のなかに位置づけられることによって、仮象 a に代理されて、己れを顕すことになります。

ですから、 ϕ の離退を食い止める *point de capiton* を成すのは、構造 $\frac{a}{\phi}$ そのものです。あるいは、その構造において a が ϕ をつなぎとめている、と言っても良いと思います。

いずれにせよ, ではこの $\frac{a}{\phi}$ の構造を可能にしているものは何なのか?と
いう問いが措定されます. それが「父の名」の問題です.

06 August 2014 : aliénation と séparation ; aliénation から Ereignis へ, 他化から自有へ; 聖状 *sinthome* の悦; 欲望に忠実であること; *phallus imaginaire* は去勢の否認である.

Tweeting Seminar on Psychoanalysis : Freud, Heidegger and Lacan を6月12日に開始して, 今日ではほぼ2ヶ月たちます. 今までに tweet したことをPDFにひとまとめにして東京ラカン塾の site に公表するつもりです.

aliénation と séparation について御質問をいただいています. ありがとうございます. この問題については HEIDEGGER AVEC LACAN 第四章に詳しく論じたのですが, その部分を含む日本語版はまだ公表できていません.

aliénation と séparation について Lacan が論じているのは『無意識の位置』*La position de l'inconscient* という書においてです. それは1960年のある学会での発言をもとに1964年に書かれたもので, つまり, Séminaire XI 『精神分析の四つの基礎概念』と同時期の書です. そして, Lacan 自身が, 『無意識の位置』の書はローマ講演の続きを成すものだという意味のことを言っており, 重要なテキストです.

何が『無意識の位置』の書において重要かと言うと、まさに *séparation* の概念です。 *séparation* は 1967 年に *destitution subjective* と命名し直され、精神分析の終わりにかかわる概念となります。言い換えると、Lacan が精神分析の終わりを初めて規定することができたのは、 *séparation* の概念を以てです。

séparation と *destitution subjective* の概念無くしては、精神分析は Freud が言ったように、 *unendlich* に、際限無く続けざるを得ないことになります。

もし精神分析家を「精神分析された者」と規定するなら、そこにはひとつの完了が含意されています。ですから、精神分析の終わり、完了を定義することができなければ、精神分析は、みづからは精神分析家とは何かを規定することもできず、したがって、自分が何をやっているのかもわからないような、文字どおりわけのわからないしろものだということになってしまいます。

pragmatism の英米圏では、とりあえず治療が何とかなれば良いと考えますから、それでも困らないでしょうが(本当は、にっちもさっちも行かなくなってしまう)、Lacan はそこに甘んじませんでした。

精神分析の出発点は *aliénation* です : $\frac{a}{\phi}$. そこにおいては、主体の存在の真理 ϕ は他 A の場処に属する徴示素 a によって代理され、主体

自身ではないものとして出現します。主体の存在の真理が主体自身のものではなく、他のものとして現れること、それが *aliénation* です。哲学用語で「疎外」と呼んでも良いでしょうし、精神医学では「狂気、精神疾患」一般のことですし、精神分析の臨床においては症状であり、無意識の造形です。症状のなかには自我も含まれます。*narcissique* なものとしての自我もひとつの症状です。

主体の存在の真理 φ が仮象 a により代理されているという構造 $\frac{a}{\varphi}$ が *aliénation* であり、精神分析はその構造を解体せねばなりません。*aliénation* を解消しないのであれば、精神分析に何の意義があるでしょう？

“*aliénation* から Ereignis へ”：これが Heidegger と Lacan とに準拠する精神分析の標語です。*aliénation* の *alienus* (他のもの)から Ereignis の *eigen* (己れ自身のもの)へ。それが本当の意味での自有・自由です。それが精神分析の本当の目標です。

本当の己れ自身は、存在, *Sein*, φ です。自有においては、その深淵の穴を、何か他のもので塞ぐのではなく、穴・切れ目が開いたままに保ち、 φ の不安と苦痛に辛抱しなくてはなりません。

それは, Freud が源初的 Masochismus と呼ぶものと関連しています. もし精神分析の終わりとしての「症状」*sinthome* の悦について語るとすれば, それは, 源初的 Masochismus の悦です. それこそが, 死からの復活の悦です.

Lacan が Joyce との関連で用いた *sinthome* には *saint* 「聖人」が含まれています. ですから, *sinthome* は *sainthome* と書くことができます. 発音は全く同じです. ですから「症状」は「聖状」となるのです. このばあい「聖」の字は「聖人」を「しょうにん」と読むときのように読んでください. 「聖状」は, ですから「しょうじょう」です. それが *sinthome* の訳語です. 「聖状」は聖人 *saint* として実存することです. それは, 存在の真理 Φ を, 仮象で覆うことなく, そのままに *ex-sister* させることです.

そのような実存の手本を, 我々は, ブッダとイエスに持っています. 覚者となること, 死からの復活において永遠の命を実存すること, それが精神分析の終わりであり, 目標です. そして, それは可能です. Heidegger が「死」を我々の最も本自的な存在可能性と規定する限りにおいて.

séparation 「分離」に話を戻すと, 分離とは, *aliénation* の構造, 症状の構

造 $\frac{a}{\varphi}$ において φ から a を分離することです. あるいは, 両者を相互に分離することです. これは, 『無意識の位置』を読めば, 明白です.

分離によって, A と φ とが実際にひとつになります. それまで「他 A のなかの欠如」と「主体自身の存在欠如」として別々のもののように思われていたものが, 同じひとつの欠如に重なりあいます.

それは, 死の予覚的覚悟です.

予覚は Heidegger の Entwerfen, 覚悟は Heidegger の Verstehen です.

死の予覚的覚悟は, しかし, 生理学的な死をもたらすのではなく, 死からの復活へ至ります. 死からの復活の成起が Heidegger の Ereignis 「自有」であり, Lacan の sinthome 「聖状」です.

分離は, ですから, 文字どおり, 去勢の完了である, と言ってよいと思います. 去勢とは φ そのもののことですから.

わたしが欲望について話題にしてこなかったという御指摘をいただきました. 文面の上では確かにそのとおりです. しかし, 欲望とは何でしょうか? 心理

学的に理解してはいけません。存在論的に問わねばなりません。Lacan の答えは、「*La chose freudienne, c'est le désir*」[フロイト的な物、それが欲望である] です。

「フロイト的な物」*la chose freudienne*、それは、*ex-sistence* としての主体の存在、 ϕ です。 ϕ のことは毎日のように問題にしてきました。そして、 ϕ こそが、精神分析的な意味での欲望なのです。

「欲望に関して譲歩する」という表現は *Séminaire VII* 『精神分析の倫理』(p.368) のこの命題に由来します : « *la seule chose dont on puisse être coupable, c'est d'avoir cédé sur son désir* » [我れらの唯一の罪は、己れの欲望に関して譲歩したということである]。

すなわち、有罪性は欲望に関して譲歩したことに存する。この有罪性は、無意識的罪意識のことです。存在論的有罪性のことです。

「欲望に関して譲歩する」とは如何なることでしょうか？それは、「欲望 ϕ を仮象 *a* で覆い隠してごまかして、満足を得た気になってしまう」ということです。

まことには、欲望 ϕ は如何なる仮象客体 a によっても満足しません。ごまかしはききません。ですから、本当の意味で欲望 ϕ に忠実であろうとすれば、あらゆる客体 a を棄却せねばなりません。

それは、構造論的には分離と同じことであり、主体滅却 **destitution subjective** と同じことです。つまり、自有、聖状に成ることです。

欲望という語は容易に心理学的に了解されてしまうので、非常に誤解・曲解を招きやすいものです。たしかに **catchy** な言葉ですし、精神分析は「性欲」を扱うと一般には思われていますから、欲望を論ずることは必要です。しかし、欲望が何であるかを明確に踏まえなければなりません。精神分析における欲望とは、フロイト的な物、**ex-sistence** としての存在、 ϕ です。心理学的誤謬は避けねばなりません。

最後に、いただいた御指摘のうち重要な一点に言及しないわけには行きません。それは、**phallus imaginaire** ($-\phi$) はそのものとしてひとつの **aliénation** にほかならない、という御指摘です。これは大變的を射た御指摘です。わたしも気づいていませんでした。

たとえば **Hans** 少年が彼の母親や妹のペニスを想像するとき、それは去

勢 ϕ に対するひとつの防御です。去勢の实在を否認するために、妹にも、今は小さくてわからないけど、ちゃんとペニスがあるのだ、と彼は想像します。

そのような *image négatif* としての *phallus imaginaire* ($-\phi$) は、まさに、去勢 ϕ の *fonction imaginaire* であり、

$$\frac{(-\phi)}{\phi}$$

という学素に形式化できます。

大変重要な御指摘をくださり、ありがとうございました。

では今学期はここまでにしましょう。引き続き御質問、御意見、御要望等を随時お送りください。お待ちしております。また来週、可能な限り早く再開します。Allez, bonne soirée et bonnes vacances !

14 August 2014 : Barbara Cassin に注目

予定どおり 8 月 11 日に開業場所に引っ越しました。しかし、やっとすべてのダンボール箱を開けることができたところです。本をだいぶ棄てたり、PDF にしたりして冊数を減らしたつもりだったのですが、それでもまだ多すぎます。今までは Jacques-Alain Miller の講義録を古いものから新しいものまで紙媒体の形で保存してあったのですが、全部廃棄しました。さまざまな Lacan 解説書や研究書も廃棄しました。結局それらは肝腎なことを的確には言っていないということが今や明らかだからです。つまり、存在のトポロジーそのものは Jacques-Alain Miller も明確に捉えてはいません。Alain Badiou もどうなのかなと疑問に感じています。

というのも、この数日、Alain Badiou と Barbara Cassin 共著 *Il n'y a pas de rapport sexuel, Deux leçons sur L'Étourdit de Lacan* をちらちら読んでいたのですが、どうもまどろっこしい。

Barbara Cassin (1947-) の文章は初めて読みました。経歴はなかなかすごい人です。Heidegger が戦後フランスでやったセミナーに参加していましたし、古代ギリシャ哲学をしっかりとやり、ドイツ語にも堪能です。Lacan も勿論読んでいます。おそらく Lacan の Séminaire を直接聴講していたでし

よう。Cassin の言っていることの方が Badiou よりもおもしろそうです。もう少し Cassin をきちんと読んでみなくてははいけません。

ほかにもうひとつ，Alenka Zupancic の論文 *Sexual Difference and Ontology* もこの数日間ちらほらと読んでいました。彼女は 1966 年生まれで Slovenia 出身です。何らかの意味で Zizek の弟子でしょう。彼女の論文は zizekien の FB グループで紹介されていました。

性別の公式と四つの言説の関連についてより詳しく論じてみようと思って、Badiou & Cassin の本と Zupancic の論文を一応ふまえておこうと思ったのです。Cassin はおもしろそうです。ところが、Zupancic は、ontology という語を出しながら Heidegger にまともに準拠していない。これにはびっくりしました。英語圏ではこういうことがまかり通るということなのでしょう。

なにしろ英語では Sein と Seiendes, 存在と存在事象という用語をきちんと訳しわけることができません。Sein を Being と訳しますから、Seiendes を訳しようがありません。Heidegger の言う存在論的差異を英語圏の論者は理解できないかもしれません。

15 August 2014 : 存在の真理の現象学的構造は、形而上学の超克のための根本的な足がかりである。

Lacan の *L'Étourdit* は非常に難解なテキストです。しかし、それを読む者は、そこには何か新しいものがあると予感しないではられません。

Barbara Cassin は、Aristoteles を基準にして *L'Étourdit* の含む新たなものを形容します。彼女は、*L'Étourdit* は反アリストテレス的ではなく — なぜなら「反アリストテレス」は結局「アリストテレス」を超えてはいないので —、反アリストテレス的ではなく、而して、無アリストテレス的、ポスト・アリストテレス的、さらには *ab-aristotélien* である、と言います。ab- は「...から離れて、離脱して」ですから、「脱アリストテレス的」と訳せば良いでしょう。

Aristoteles とは何者か、と言えば、Platon と共に、西洋の形而上学の祖です。

つまり、「*L'Étourdit* は無アリストテレス的、脱アリストテレス的である」ということとは、「Lacan は形而上学を超克している」ということです。これは最大級の讃辞です。

勿論, Lacan に先だって Heidegger が形而上学の超克を実行している, ということを Cassin は暗に前提しているはずですが.

彼女は, 形而上学を特徴づけるもの, Aristoteles の根本的公理を, 同一律(無矛盾律)に見ます. つまり, 「P であり, かつ, P ではない」ということはあり得ない, ということです.

これを無矛盾律と呼ぶならば, Lacan が原理に据えたものは何か? それは il n'y a pas de rapport sexuel, つまり, 無「性関係」律とも呼べるものです.

存在の現象学的構造を踏まえるなら, 存在 \emptyset は無矛盾律に対して解脱的である, と言えます.

存在の真理の現象学的構造においては, 存在は「存在事象そのもの全体」としての存在によって共時的に代理されています. そこにおいては, つまり, 「P でなく, かつ, P である」.

存在の真理の現象学的構造は, 形而上学の超克のための根本的な足がかりを我々に与えてくれます.

16 August 2014 : 解釈は, ϕ が己れを示すことを可能にする; 人間と神とは存在を分かち合っている.

Total depravity 「全的墮落」という神学概念について宿題をいただきました. ありがとうございます. カトリックのわたしにとっては初めて接する概念ですので, 十分なお答えはできないと思いますが.

とりあえず先に Cassin の議論を追ってみましょう. 彼女は Lacan における *équivocité* 「曖昧語法」に注目します. 曖昧語法は, ひとつの語の意味が一義的に定められないことを指します. そもそも *L'Étourdit* という表題がその一例です.

フランス語には *étourdi* という形容詞・名詞はありますが, *étourdit* という語はありません. *L'Étourdi* は Molière の戯曲の表題です. 本来の意味は「軽率な, そそっかしい」です.

それに対して *étourdit* は, このような場合フランス語では語末の *t* は発音されないので, *étourdi* と同音になりますが, *t* が付加されたことによって *dit* 「所言, 言われたこと」が見えてきます.

しかし、そもそも何故 *étourdi* ないし *étourdit* を Lacan は持ち出すのか？

Hegel は「精神現象学」のなかで *Leichtsinnigkeit* に言及しています。この語の意味も「そそっかしさ、軽率さ」です。*leichtsinnig* と *étourdi* は同義です。

Hegel は、*Leichtsinnigkeit* を戒めているわけではありません。*Leichtsinnigkeit* は、*Geist* 「精神」の現象を可能にするひとつの条件です。*Geist* には軽やかさがが必要です。このことは、Lacan が「解釈はすばやくなければならない」と言っていることと関連があると思われま

Leichtsinnig の *leicht* は「軽い」、*Sinn* は英語の *sense*、フランス語の *sens* と同義で、「意味」「感覚」です。

Leichtsinnigkeit は、*aliénation* における悦の固着の重たさとは逆の事態です。*a* は軽やかに分離し、 \emptyset が己れを示すことを可能にします。*étourdit* は、そのような意味での *leichtsinnig* な *dire* です。そして、それこそが *équivocité* です。

équivoque な dire においては、同一律を特徴づける意味の一義性の重たさとは異なり、leichtsinnig に軽やかな dit — つまり a — は ϕ の顕現に席をゆずります。

équivoquer 「曖昧語法を用いる」とは、軽やかな非一義性において、 a が其れであるところの dit とは異なる意義 ϕ を évoquer [喚起]し、その顕現を invoquer する[祈り求める]ことです。

それが、精神分析における解釈を特徴づけます。

L'Etourdit という書は、終始、曖昧語法に満ちていますが、それは、 ϕ を呼び出すためなのです。

さて、「全的墮落」についてですが、この概念は、プロテスタントの人間中心主義の産物にほかなりません。つまり、人間の意志を、人間中心的に、あくまで人間のものとしか考えず、神とのその関連をまったく考慮しないのです。

ここで Lacan の「人間の欲望は他 A の欲望である」を想起しても良いでしょう。

原罪とは存在論的な有罪性であり、生まれたばかりの赤ん坊も原罪を免れてはいませんが、しかるに、人間のなかには始めから神の欲望が働いています。人間は、存在論的に原罪を負っており、かつ、同時に、存在論的に神性に与っています。

人間は、存在論的・構造論的に神性に与っている限りにおいて、全的に墮落してはいません。

人間と神とは相互に全く切り離された別々の存在事象ではありません。神は人間に存在を与え、人間は神を *ex-sister* させます。神と人間は、ひとつの *intersection* を分かち合っています。分離における Φ がそれです。そして、それこそが救済の可能性の条件です。

17 August 2014 : 「外延における精神分析」と「内包における精神分析」

今日は, 東京ラカン塾の実動開始のために web site を作りかえる作業が
終わらないので, Tweeting Seminar そのものはお休みです.

Lacan が用いた *la psychanalyse en intension* と *la psychanalyse en
extension* という表現をどう訳すか, この数時間考えています.

extension は, ある概念の外延, *intension* は内包ですが, 「外延における
精神分析」と「内包における精神分析」では, 今ひとつピンときません.

内包における精神分析は, 要するに, 精神分析の経験そのもの, いわゆる
個人分析のことです. それに対して, 外延における精神分析は, Ecole が
世間に対して精神分析を現在化する限りでの Ecole の機能を表します.

用語のうえでは, *in-* と *ex-* の対置は, 内と外, 私と公の対置に相当しま
すが, どうもぴったり来る訳語を見いだせません. もう少し頭をひねってみ
ましょう.

18 August 2014 : 精神分析は、言語に住まう存在としての人間主体存在の
実践的現象学である；神性と仏性.

東京ラカン塾のホームページを更新しました. そこにおいて、「精神分析は、
言語に住まう存在としての人間主体存在の実践的現象学である」と公式化
しました.

「言語に住まう存在」は、Lacan の parlêtre 「言語存在」の言い換えです.

英語では、Heidegger の In-der-Welt-Sein をもじって、parlêtre を In-
language-Being と訳してもよいかもしれません.

英語で Sein 「存在」を大文字の Being, Seiendes 「存在事象」を小文字
の being と訳すことが通用するかどうかは知りませんが、ほかに何か良い
翻訳があるのでしょうか？『存在と時間』の古い英訳では、Seiendes は
entity と訳されていましたが、あまり良い訳だとは思えません.

「実践的現象学」la phénoménologie pratique は、ふと思いついた造語で
す.

精神分析においては、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ の a は純粹徴示素である切れめ、ないし穴へ還元され、 ϕ の解脱実存の深淵のエッジが現れます。

精神分析的解釈は、解脱実存のそのような現象が成起するように、自有が実現するように、行われます。それが、Lacan が「精神分析的行為」と呼んだものです。精神分析的行為は、自有を成起させるものとしての精神分析的解釈です。

精神分析において、解釈は、影象的な意味 *sens imaginaire* を空想する単なる「解釈学」「釈義学」ではなく、而して、解脱実存としての實在にかかわる行為です。

存在 ϕ を自有においてそのものとして守保する行為、それが実践的現象学です。

Lacan の「外延における精神分析」と「内包における精神分析」について、前者は *signifiant*、後者は *signifié* である、という御指摘をいただきました。ありがとうございます。その見解に全面的に賛同します。

精神分析の内包とは、実存の構造 $\frac{a}{\varphi}$ における φ , つまり, **Sein**, 存在であり, 精神分析の外延とは, 存在事象そのもの全体としての存在 a です. なぜなら, 精神分析は, 主体の存在の真理について語ることに存するのですから.

神性と仏性との関連についても, 全般的確な御指摘をいただきました. ありがとうございます.

存在の真理である解脱実存 φ は, 神学においては神性, 仏教においては仏性と呼ばれているものにほかなりません.

禅の公案は, 仏性についての非常に興味深い言説です. 最も良く知られた公案は, 趙州無字と呼ばれている公案でしょう. 「或る僧が趙州に問う: この犬に仏性はあるか? 趙州は答える: 無. 」

仏教では, あらゆる衆生, つまり, あらゆる生きものに仏性がある, と考えられています. 「この犬」は, ひとつの任意の衆生を指しています. どの衆生でもよいのです. 問うている僧も, 問いを受ける趙州も, 「この犬」と呼ばれます. そして, この犬には, 仏性はあり, かつ, 無いのです.

これはまさに、存在の真理の現象学的構造にもとづいて思考されるべきことです。つまり、Es gibt Sein 「何かが存在を恵与する」に基づいて思考されるべきことです。

仏性は、「何か」である存在 Φ としては、存在事象の側から見れば、無にほかなりません。それに対して、何かが恵与する存在としては、仏性は在るのです。

Benoît Beyer de Ryke の *Maître Eckhart* という表題の本を以前に読んだことがあります。Meister Eckhart についての研究書です。この本は、数ある Eckhart の解説書のなかで最良のもののひとつです。

その本で $\theta\acute{\epsilon}\omega\sigma\iota\varsigma$ という用語を学びました。通常は「神格化」と訳せる語ですが、Eckhart に関連する文脈においては、それは「人間が神になる」ということです。神道におけるように、人間が死後、神格化されるということではありません。 $\theta\acute{\epsilon}\omega\sigma\iota\varsigma$, theosis とは、人間はその本有において神性に与っている、ということです。あらゆる衆生に仏性が ex-sistence として備わっているように、あらゆる人間に神性は解脱的本有として宿っています。

問題は、如何にして仏性、神性を我々の実存において目覚めさせるか、と

ということです。その意味で、禅と精神分析は同じひとつのことを目指しています。

19 August 2014 : 「言う」と「思考する」

東京ラカン塾のセミナーは、10月10日金曜日を開講します。場所は、文京区民センター二階の2C会議室です。文京区民センター(〒113-0033 本郷 4-15-14)は、春日通りと白山通りの交差点の北東の角にあります。最寄り駅は三田線または大江戸線の春日駅です。

部屋は 17:30 - 21:30 の間使用できます。セミナーそのものは、一般的な大学の講義の時間に準じて、おおむね90分間行う予定です。多少長引いても良いように、19:30 - 21:00 にしようと思います。原則的に毎週金曜日の晩に行います。年間25-30回程度を予定しています。とりあえず10月は10, 17, 24, 31日の四回です。また、セミナーは原則的に公開ですので、事前の申請や登録のようなものは必要ありません。当日、会場にいらっしゃれば良いだけです。参加費は無料です。

テーマは、les fondements de la psychanalyse 「精神分析の基礎」とする予定です。Heidegger の用語で言えば、Grund です。Grund は、基礎であり、基本であり、根本であり、根拠、理由でもあります。「... にもとづいて」です。精神分析は何にもとづくのか？何のゆえか？何によるか？何のおかげか？問い方はいろいろありますが、問題は、精神分析の主体とその構造、

そして、その構造の可能性の条件です。

さて、実践的現象学という表現についてももう少し考えてみましょう。精神分析においても Heidegger においても、実践がかかわっています。行為 *acte* という用語を Lacan は使いましたし、Heidegger は遂行 *Vollzug* という用語を用いました。

実践、行為、遂行がかかわっている、ということは、何事かについて教科書を読んで、あるいは話を聞いて、何らかの知識を得ることがかかわっているのではない、ということです。しかし、だからといって、何らかの訓練、練習によって *know how* を身につけるということでもありません。

何らかの *know how* なり「こつ」なりを習得すればよい、と考えるのは、Anglo-saxon 的な *pragmatism* です。*pragmatism* にとっては、基礎や根拠はどうでもよいのです。ただ単に事態が秩序どおりに成り行けばよい。しかし、それでは精神分析ではありません

精神分析においては、法則や規則に当てはまらないこと、従わないことこそが重要です。そこにこそ *ex-sistence* \varnothing としての主体の存在の真理は己れを顕すからです。

通常の意味において「学び得る」こと、「習得され得る」ことは、すべて、何らかの規則や法則の次元のことです。それは一般的な、一般化され得る何事かです。

それに対して、精神分析の主体はこの上なく「非-規則的」なもの、「非-普遍的」なものです。そのような主体について、精神分析は何かを教え得るのか？そのような主体について、我々は精神分析において何かを学び得るのか？このような問いに関連して、実践、行為、遂行の意義が問われます。

Lacan において、行為は「言う」 *dire* です。Heidegger においては「思考する」 *denken* です。「言う」、「思考する」という行為は、存在の真理の座に己れを秘匿する知 *S2* を *signifiant a* により代表させることに存します。その際、*signifiant a* は、何か具体的な単語なり文章ではありません。それはむしろ、絶対的な沈黙、無言です。つまり、切れめ、穴そのものとしての *a* です。

仮象としての *a* を脱ぎ去り、存在の真理の場処にみづから実存すること、それが精神分析的行為としての「言う」であり、Heidegger 的な意味での

「思考する」です. そのような「言う」, 「思考する」を遂行することは, みづから存在の真理の知に成ることであり, 存在の真理において自有することです.

20 August 2014 : 精神分析は、非-規則的である；精神分析の面接の時間、頻度、料金等について。

東京ラカン塾として精神分析の臨床を開始する準備が整ったことをお知らせしました。それに対して、実践的な御質問を幾つかいただきました。みずから精神分析の経験を始めてみたいと感じている方にとっては本質的な問題ですので、今日はそれにお答えします。

精神分析においては、ひとつの構造、主体の存在論的構造 $\frac{a}{\phi}$ は根本的なものとして存有していますが、それに対して、「一般的には、普通は、通例は」というような表現で通常考えられる規則や法則は退けられます。

一番良く知られている例として、Lacan の「短時間面接」を挙げる事ができるでしょう。より正しくは「変動時間面接」と呼ばれるべきですが。

Lacan 以前には慣習的に、精神分析家は、おおむね一時間にひとりの患者を面接することを前提にして、一回の面接の時間を 40-50 分間に固定していました。

国際精神分析協会 IPA（日本精神分析協会も属しています）では、とりわ

け教育分析に関しては、一回の面接の時間は厳密に守られねばならないとされています。それは、不可侵の規則です。Lacan はそれに従いませんでした。それが Lacan が IPA から破門された直接の理由です。

Lacan は精神分析の主体の存在論的構造にもとづいて、精神分析の実践における解釈の問題と時間の問題とを両者の連関において考えました。

精神分析の出発点において、Freud は、症状の意味を患者に説明して聞かせることを解釈だと考えていました。症状の意味がわかれば、つまり、症状が何を言わんとしているかを聞きとどければ、症状はもはや存続する必要がなくなり、消退するはずだ、と Freud は少なくとも始めのうちは考えていました。この想定は、まもなく臨床的反例によって反駁されます。

Lacan のおかげで症状の構造が明らかとなった今、症状の本当の「意味」は、Freud が思っていたような意味、たとえば『夢解釈』で夢の意味として説明されているような影象的な意味、sens imaginaire ではないのです。

実は、症状の「意味」は、学素 ϕ により形式化されるもの、つまり、主体の存在そのものです。そして、それは臨床においては或る種の穴や切れめとして瞬間的に姿を現します。分析家は、そのような一瞬の現象を分析者

(患者)に気づかさねばなりません。解釈とは、そのようなものです。

一瞬の切れめを気づかせる最も有効な手段として、Lacan はその瞬間に面接に時間的切れめをつける、つまり、そこで面接を中断します。それは、分析者にとって、文字どおりはっとさせる効果を持ち得ます。

そのような切れめの瞬間は面接のなかでいつ出現するか、予測はつきません。したがって、一回の面接時間を 40 分なり 50 分なりに固定することは、分析家の解釈の手足を縛ってしまうことにほかなりません。以上が Lacan の「変動時間面接」の根拠です。

精神分析の主体は、規則や法則によって縛られ得ないものです。そのことは、一回の面接時間のみならず、面接の頻度は週に何回か、どれほどの期間続けるのか、面接一回の料金はいくらか、といった問題にも当てはまります。

分析の料金の問題を考えてみましょう。もし仮に面接を無料にするとどうなるか？分析者は分析家との関係から離脱することが非常に困難になります。

分析家の言説は症状の言説でもあることを想起してください。精神分析に

おける転移関繋はひとつの症状です。そこには剰余悦があり、分析者はそこに固着してしまう可能性があります。

Freud の症例「オオカミ男」ではそのような事態が生じました。分析料金は勿論、無料ではなかったのですが、当初(つまりロシア革命前)オオカミ男は非常に裕福でした。一回の面接の料金として彼が Freud に支払う金額は、彼にとってはスズメの涙程度のものでした。その結果、何が起きたか？治療が一向に進展しないことに Freud は気づきました。オオカミ男は、Freud との関繋に安住してしまっ、そこから抜け出ようとは全く思わなくなってしまったのです。そのような状況を打開するために Freud がとった手段は、治療期間に期限を設定するというものでした。つまり、「病状がどうであろうと、あと x ヶ月で治療を打ち切る」と Freud はオオカミ男に告げたのです。

その妥当性はさておき、分析治療が有料であるべき理由のひとつはそのようなものです。

しかし、そもそもなぜ精神分析に金を支払うのか？それは、あなた自身を贖うためです。あなたの aliéné 「異状化」された存在を、身代金を払って身受けするためです。言い換えると、Lacan が dette symbolique 「徴象的

負債」と呼んだものを清算するためです。その意味で、あなたが精神分析のためにいくら支払うかは、あなたがあなた自身を取り戻すためにいくら支払うか、あなた自身の存在の価値はいくらか、を意義すると言えるでしょう。

分析は、面接一回や二回で終わるものではありません。かなり長期間、何年も続きます。それだけの期間、一回の面接にいくら支払い得るかは、分析者各自の経済条件によって異なります。しかし、その金額は、10 円や 100 円ではなく、分析者にとって喪失を感じさせる程度に高額である必要があります。オオカミ男の場合のように取るに足りないと感じさせる金額では、分析に金を支払うことの効果がありません。喪失を感じさせる額の金を支払うということは、構造 $\frac{a}{\phi}$ において a の ϕ からの分離を象徴する喪失なのです。

面接の頻度に関しては、いわゆるカウンセリングなどでは週に一回が日本の慣習になっています。しかし、事情が許すなら、週に複数回行う方が有効です。先日 Paris では、わたしの滞在期間が限られていましたから、週に 5 日、一日に 2 回のペースで面接を持ちました。それだけ高密度の分析経験は、分析者をかなり追い詰めます。非常に疲れさせます。そこまでやるのは通常、無理ですが、週に一回よりは、複数回の方が、分析に必要な緊張を持続させることができます。そのような緊張は、日常態から抜け

出るためには必要なものです.

というわけで, 面接の回数や料金に関しては, 分析者おのこの個別的な条件を考慮して, 個別的に設定することになります. 理髪店やマッサージのように, あらかじめ時間や料金を設定することはできません.

ここで, 「精神分析の内包」に関する御質問をいただきました. Lacan が言語の構造において *signifiant* と *signifié* を問題にするとき, 主体の存在論的構造 $\frac{a}{\phi}$ にあてはめれば, *signifiant* は *a*, *signifié* は ϕ です.

先ほど括弧つきで「意味」と呼んだのは, *signifié* の座に位置する ϕ のことです. つまり, 主体の存在です. 「内包における精神分析」においてかわるのは, 主体の存在そのものであり, その場合, 内包とは ϕ そのものを指しています.

「性関係は無い」の学素である *phallus barré* ϕ は, *Sein* 「存在」と等価であり(『ハイデガーとラカン』を参照), それゆえ, ϕ は Lacan が主体と呼ぶもの: 「精神分析の主体」「無意識の主体」「欲望の主体」であり, また $\frac{a}{\phi}$ は症状の構造ですから, 「症状の主体」とも呼ばれ得ます.

学素 $\frac{a}{\varphi}$ は, Heidegger と Lacan の思考における最も基本的な構造である「存在のトポロジー」の形式化です.

$\frac{a}{\varphi}$ は, そもそも, Lacan の「分析家の言説」の学素の左側の部分です. より厳密に言うと, φ は, 四つの言説の構造における左下の真理の座を表す学素です. そこにおいて「真理」は, 自己秘匿における「存在の真理」です. 知 S_2 は, 四つの座のいずれかに置かれる項のひとつです. 分析家の言説においては, 知 S_2 は, 存在の真理 φ の座に仮定されます. この仮定は, Lacan が *sujet supposé savoir* 「知の仮定的主体」と呼んだものです. それは, 転移が成立するための必要条件です.

21 August 2014 : Heidegger と Lacan は、終末論を思考することによって形而上学を超克する；終末と実践.

Alain Badiou は、Lacan を anti-philosophes のひとりに数えています. 19-20 世紀の「反哲学者」として Badiou は Nietzsche, Wittgenstein そして Lacan を挙げています

しかし、20 世紀の最大の反哲学者は、実は Heidegger ではないのか？

「反哲学」という表現はあまり適切ではないように思えます。「哲学」ではなく「形而上学」と言うべきではないかと思えます.

Heidegger は、Platon に始まり Nietzsche で満了する形而上学の超克を要請しました.

形而上学を特徴づけるものは、『存在と時間』の表現で言えば、「存在忘却」Seinsvergessenheit です. そこにおける存在は、抹消された存在, Seyn, つまり \emptyset です. 1936 年以降の表現で言えば、「存在閑却」Seinsverlassenheit. これは、「人間が存在を忘却した」のではなく、「存在が人間を見離した」ということです. そして、人間は、存在が人間を見離したこ

とに気づいていないのです。人間を見離れた存在のことを忘却しているのです。その忘却のなかであれこれ考えているのが形而上学です。

そして、歴史上、形而上学は哲学とほとんど同じものと見なされてきました。

しかし、より正確に言えば、Heidegger と Lacan は、形而上学を超克した哲人(Denker, penseur, 思考者)です。「詩人」との対比において「哲人」という語を用いましょう。

わたしは、Wittgenstein のことはほとんど知らないので、立ち入りません。

Heidegger によるなら、Nietzsche は anti-platonicien ですが、むしろ、形而上学の満了の哲学者です。

では、如何にして Heidegger と Lacan は形而上学を超克し得たのか？

それは、「終わり」を思考することによってです。

Heidegger は、キリスト教における終末論を真剣に思考しました。Lacan は、精神分析は如何に終わり得るかを思考しました。一見相互に無関係に見えるかもしれないふたつの「終わり」は、実は同じものなのです。

キリスト教の終末論を「この世の終わり」という fiction と取ってはいけません。勿論、聖パウロは彼の書簡のなかで黙示録的な「この世の終わり」について語っています。イエスの処刑後 20-30 年しかたっていなかったパウロの時代には、「この世の終わり」は本当に切迫したものと実感されていました。今にもキリストは再臨し、不正義に満ちたこの世は終わる、と待ち望まれていました。そのことは、パウロのテサロニケ書簡になまなましく証言されています。当時のキリスト教徒にとっては、この世の終わりは、自分自身の地上的生の終わりと重なり合うものとして予期されていたのです。この世の終わりの時は、即、自分たちの死と復活の時だったのです。この世の終わりは来るとしても何十億年も後のことだとのんびり構えている現代人とは大違いです。

Heidegger は、聖パウロの時代の終末論を復活させるべきだと考えました。キリスト者は終末論のもとに生きるべきだと考えました。それこそが、本来的な実存の様態である、と考えました。

Heidegger にとって、この世の終わりは、いつまで待っても来ない Godot ではなく、現場存在 (Dasein, 現存在) がみずから引き受けるべき己れ自身の死そのものなのです。なぜなら、死こそが、最も本自的な存在可能性で

あるからです。そして、その場合、死とは、存在 \emptyset のことです。

日常態である「異状」 *aliénation* の構造を解体し、Ereignis 自有へ至ること、それが Heidegger にとって Denken 「思考する」という行為、実践です。

昔々、マルクス主義が元気だったころ、哲学者たちは多かれ少なかれ実践のことを考えていました。革命を夢見ていました。それに対して、ポストモダンと呼ばれているような哲学者や社会学者は、如何に実践を視野に入れているのでしょうか？評論や批評の次元にとどまっているだけではないのでしょうか？そして、そうであるとすれば、それは、彼らが終末論を真剣には考えていないからです。この世の終わりなどいつまで待っても来るはずがない、と前提しているからです。

それに対して、Lacan は、精神分析の終わりを如何に規定するかを考えるうちに、Heidegger における死の概念の重要さに気がつきました。精神分析の終わりは、日常態である *aliénation* 「異状」の解体としての死であらねばならない、と Lacan は気がつきました。

22 August 2014 : 終末論と死；精神分析の究極的な目的.

終末論について幾つか御質問や御意見をいただきました. ありがとうございます.
います.

終末論という表現を聞いて, オウム真理教とハルマゲドンのことを思い出した方がいます.

キリスト教における終末論と, カルト的な新興宗教が説く終末論との違いは, こうです: すなわち, 新興宗教は, 「この宗教を信ずる者は世の終わりのときも生き残ることができる」と主張し, 「死にたくなければ ***教を信じなさい」と主張します. それに対して, キリスト教では, 世の終わりは各人の死のときであり, かつ, 単純に死を以て終わりとなるのではなく, 死からの復活が成起します. 新興宗教教団は死を免れることを目ざすのに対して, キリスト教では, 死を引き受けたうえで, 死から復活することが待ち望まれており, それこそが救済なのです.

原始キリスト教においては, 文字どおり, この世の終わりは間近だと信じられていました. しかし, 今, 終末論においてかかわっているのは, 外界としてのこの世が物理学的に存在しなくなるということではなく, 我々各自の存

在がどうなるか、ということです。この世が消滅するということが問題なのではなく、我々自身の方がこの世に対して死ぬ、この世の次元のものとして存在することをやめる、ということがかかわっているのです。そして、「この世」とは、存在事象そのもの全体のことです。

終末論と死の問題に直面することによって初めて、もはや存在事象ではないものの深淵が口を開いてきます。それこそが、ex-sistence「解脱実存」としての存在 φ の場処です。

形而上学が論じてきた存在は、存在事象そのもの全体としての存在です。形而上学は、そのような存在を觀照することが究極的な真理の把握である、と考えます。そのような真理は ἀλήθεια と呼ばれます。Heidegger はそれを非秘匿性 Unverborgenheit と訳します。すべてがくまなく光に照らされて明らかとなった状態、それが ἀλήθεια としての真理です。

ところが、それで話は終わりません。真理は非秘匿性へと啓かされること、現れ出でることであるとすれば、それは、秘匿性から非秘匿性への出現であるはずです。

非秘匿性というまわりくどい表現は、非秘匿性のなかには秘匿性

Verborgenheit が前提されている, ということを示しています. Heidegger は, この秘匿性こそが, 非秘匿性としての真理の本有であり, 根拠である, と考えます.

秘匿性は, 非秘匿性に対して解脱的 extatique, ekstatisch です. つまり, 解脱実存 ex-sistence です.

この非秘匿性と秘匿性との連関の構造が, 存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ です.

ひとつ大変重要な質問をいただいていた。「異状」 aliénation から脱却することができたとして, その後はどうなるのか, どうするのか? この問いは, 精神分析の目的に関する本質的な問いです. いったい, 何のために精神分析をするのか?

その答えは, こうです: 精神分析の終わりに異状から自有へと脱異状化したなら, あなたは精神分析家に成る. そして, 精神分析家として実存する.

教皇 Francesco が今年一月の或る説教のなかで用いた disciple-missionnaire (弟子-宣教者) という表現を, ここで持ち出すのがちょうどよい

でしょう。その語をわたしが聞いたのは、今年三月最後の日曜日、Notre Dame de Paris の御ミサでの Paris 大司教 Vingt-trois 枢機卿の説教においてです。

その日の福音朗読はヨハネ福音書 4,1-42 の部分でした。井戸ばたでサマリア女がイエスに出会います。彼女は、イエスの言葉に驚いて、イエスこそ預言者だと悟ります。つまり、彼女はそのとき、イエスの弟子 *disciple* になったのです。次いで彼女は、驚きに打たれたまま、自分の町へ戻り、「救世主が現れた」と告げて回ります。彼女は宣教者 *missionnaire* となったのです。

キリスト者は誰もが、このサマリア女のように、イエスとの出会いにおいて弟子となり、次いで、今度はみづから、御言葉たるイエスを代理する宣教者となります。

福音書にはほかにもそのような *disciple-missionnaire* の例があります。Salinger が *The Catcher in the Rye* のなかで最も好きな福音書の話として挙げていたマルコ福音書 5,1-20 を見てください。そこに登場する男は、文字どおり *aliénation* 狂気に陥っていましたが、イエスにより癒やされ、弟子としてイエスについて行こうとします。しかし、イエスは彼に家族のもとに

帰るよう命じます。そこで彼は、イエスの御業を人々に告げ知らせます。彼も *missionnaire* です。

精神分析によって自有となったなら、今度は、あなたは精神分析家として、ほかの人々を自有へ導くのです。あなたは、あなたの自有の喜びにおいて、みづから進んでそうしたくなるはずです。

精神分析家がひとり新たに誕生すれば、今度は、その分析家が幾人かの分析家を新たに誕生させます。そのようにして、ついにはあらゆる人間が精神分析家となることが、精神分析の究極的な目標です。なぜなら、精神分析家として実存することは、解脱であり、救済であるからです。

そして、あらゆる人間が解脱し、救済される時、差別の言説である大学の言説にほかならない近現代の民主主義社会はくつがえされ、超克されます。

それを「革命」と呼ぶかどうかはさておき、それこそが実践としての精神分析の目ざすところですよ。あなたには、単なる夢物語に見えるでしょうか？

23 August 2014 : ひとくちに「生命」と言っても, ζωή と ψυχή とが識別される; 「死を生きる」ことの一例としての神秘経験.

聖書においては, 死からの復活としての永遠の命と, 地上的な生とは, 用語の上で厳密に区別されています. 英独仏語においては, 両者はともに life, Leben, vie というひとつの単語で差し徴されますが, ギリシャ語においては, 地上的な生は ψυχή, 永遠の命は ζωή です. 異なるふたつの単語が用いられています. 日本語ではかろうじて「生」と「命」とを使い分けることができるかもしれませんが, 「生命」という表現もあるので, 「生」と「命」とを完全に区別することは困難です.

ψυχή は見慣れたアルファベットで書けば psyche です. つまり, 心理学 psychologie や精神分析 psychanalyse などの語に含まれている psyche です.

ψυχή は, ラテン語では anima です. anima はフランス語の âme の語源です. âme は「たましい」です. ところが, anima は animal の語源でもあります. つまり, 動物的な生命です. ψυχή と anima は, いわゆる animisme (この語も anima から来ています) 的な世界観において, ある物事の生命的な原理です. ある物事が動的であり, 変化するとき, その運動, 変化の動

因, 原理が ψυχή, anima と呼ばれます. Platon においては, ψυχή は不滅であり, 何回もの転生を生き続ける生命原理としての魂です.

今ではもっぱら「霊魂的なもの」「心的なもの」を表す ψυχή ですが, 新約聖書においては, むしろ, 動物的・地上的な生命です. それは, 永遠の命としての ζωή, zoe に対して, たとえば「ヨハネ福音書」12,25 において, このように区別されています:「ψυχή を愛する者は, それを失う. この世において ψυχή に愛着しなくなった者は, それを永遠なる ζωή へと保つ.」

ψυχή は, 存在事象の次元に捕らわれた生です. 存在事象に執着した生を棄てることによって初めて, 永遠の命へと復活することができます.

ψυχή と ζωή との連関は, 存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ にならって, $\frac{\psi\upsilon\chi\acute{\eta}}{\zeta\omega\acute{\eta}}$ と形式化することができます. フランス語の vie を用いるなら, 存在の真理の現象学的構造が $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$ と書かれるように, $\frac{\text{vie}}{\text{vie}}$ と書くことになるでしょう.

存在事象の次元における生から見れば, 抹消された生は死にほかなりません. しかし, その死は, 単純に無であるのではなく, また, 生理学的な死でもなく, 而して, 永遠の命への復活なのです.

「死を引き受ける」という表現がよく用いられます。しかし、生理学的な死ではないような「死の引き受け」とは、具体的にどのようなことでしょうか？「死を生きる」というようなことが可能なのでしょうか？

「死の引き受け」の一例(あくまで一例であって、すべてではありません)は、神秘経験, *mystique* です。

神秘経験の例として最も良く知られているのは、少なくとも Lacan に関心を持つ皆さんなら見たことがあるはずなのは、*Séminaire XX Encore* の表紙を飾っているアヴィラの聖テレサでしょう。その彫刻は Bernini の作ですが、天使が矢で聖テレサの体を貫いています。彼女は恍惚としています。

そのような恍惚状態において、彼女は神を直接的に経験し、神的なものとなり、合一しています。神的なもの、神性を直接的に経験することが、*mystique* を特徴づけます。

そのような神秘経験こそ、「死を生きる」ことの一例です。聖テレサは、神秘経験において、文字どおり死んだようになっています。意識は失われ、身動きひとつしません。つまり、この世、存在事象とのつながりを一切失って

います。

神秘経験は, ζωή の経験です。死と, 死からの復活としての永遠の命の経験です。であればこそ, Lacan は *mystique* に注目したのです。Lacan が *séparation* 「分離」と呼ぶ契機は, *mystique* の死の経験です。

24 August 2014 : 精神分析は金持ちの道楽か？； 乞食も神に献金し得るなら、貧しい人も精神分析を経験し得る.

ギリシャ語には「生」や「命」を意義する単語として、*ψυχή* と *ζωή* とに加えてもうひとつ、*βίος* があります. *biologie* (生物学) や *biographie* (伝記) などの語の構成要素です. しかしこの語は、聖書のなかにはあまり頻繁には登場しません.

ζωή と *ψυχή* の区別は、多分、聖書とそれに関連するキリスト教の文書のなかでもっぱらかかわってくるのではないかと思います. *zoologie* においては *ζωή* は動物的生命ですし、*Aristoteles* による人間の定義 *ζῷον λόγον ἔχον* は「理性を有する動物」であって、*ζωή* はやはり動物的なものと考えられています.

ちなみに、この「理性を有する動物」というアリストテレス的人間定義は、*Heidegger* の批判的的のです. *Heidegger* の *Dasein* という人間定義は、非アリストテレス的なものです.

ところで、大変有意義な御質問をいただいています. それは、「精神分析に何千円も何万円も支払えないような低所得者や生活保護受給者にとつ

て精神分析は何になるのか？」という疑問提起です。

この質問を読んですぐに想起したのは、マルコ福音書 12,41-44 の話です。

貧しい寡婦が二枚の少額貨幣を神殿の献金箱に入れた。それを見てイエスは言う:あの貧しい寡婦は、誰よりも多くを献金箱に入れた。なぜなら、他の者たちは余裕のあるなかから献金しているが、彼女は生きるために所有しているものすべてを献金箱に入れたからだ。

神へ献げものをするという事は、Lacan の表現で言えば、「徴象的負債」*dette symbolique* を支払うということです。神に対する負い目を清算することです。つまり、構造 $\frac{a}{\phi}$ において、存在事象としての a を捨て去ることです。

聖書のなかで「貧しい寡婦」や「貧しい者は幸い」における「貧しい」という語は、ギリシャ語原文においては「乞食」と同じ語です。どういうわけか、ラテン語聖書では「乞食」と文字どおりには翻訳されず、「貧しい」と訳され、その後、どの言語の翻訳においても「貧しい」を意義する語が用いられていますが、本来は「乞食」です。

乞食とは、単に貧しいのではなく、生きてゆくために他 A に絶対的に依存している者です。

フランチェスコ会は「托鉢修道会」と呼ばれますが、これも本来は「乞食修道会」と訳されるべき語です。

或るフランチェスコ会の神父様(日本人)の講演を聴いたことがあります。彼は自分でギターを弾いて、自作の聖歌を歌います。彼は中学生か高校生のように既に司祭養成のための学校に入っていました。全寮制です。以前に親に勝ってもらった安いギターの音にあきたらなくなって、彼は、校長の神父様に、新しいギターが欲しいのですが、と願い出ました。すると校長に、「君はフランチェスコ会に属しているのに、何ということを行うのか」と厳しく叱られたそうです。その後、彼はローマに留学したのですが、ギターを持っていくわけには行かず、ローマではギター無しでした。あるとき、日本で知り合いの信者さんたちがローマに来て、彼に、「神父様、ギターはどうしました？」と訊くので、持っていない、と答えると、信者さんたちは皆でお金を出し合ってくれ、おかげで彼はローマでギターを買うことができました。「乞食修道会」に属すると、そんなふうです。

話がそれてしまいましたが、ともあれ、貧しい寡婦の献金の話が示している

のは、乞食でも「負いめ」を清算することができる、ということです。あらゆる人間に原罪があることとの関連において、あらゆる人間は贖いをするのが可能です。それは、経済的に余裕があるか否かを問いません。

もし仮に貧しい人が精神分析を経験しようとするなら、聖書の中の「貧しい寡婦」のように全財産を実際に支払うには及びませんが、その人なりの支払いは可能なはずで

25 August 2014 : 「愛する」とは「持っていないものを贈与する」ことである；
祈りと精神分析； 言語存在である限り，どんな低年齢の小児にも精神分析
は可能である。

精神分析家への支払いは，サービスに対する対価というよりは，不可能な
贈与だ，という御指摘をいただきました。まったくそのとおりです。

Lacan は，« aimer, c'est donner ce qu'on n'a pas »(「愛する」とは「持ってい
ないものを与える，贈与する」ことだ)と言いました。この公式は一義的に解
釈され得ませんが，最も根本的に思考するなら，それは Lacan が分離
séparation と呼ぶ事態を言い表しています。

そもそも，「愛」も一義的には捉えられません。それは narcissique な愛で
もありえます。しかし，聖書で「汝れらの神を愛せよ」，「汝れらの隣人を汝
れら自身のように愛せよ」と言うとき，それは narcissique な愛ではあり得え
ません。

本当の愛は，Lacan が「欠如と欠如の交わり」と呼ぶもの，学素で書くなら
 A と \emptyset との交わりとしての分離に存します。神秘経験も同じ事態です。も
はやそこには仮象は介在しません。他と主体は， A と \emptyset として，直接的

に一致します。そして、そこから復活が成起します。

精神分析における支払いの金額は喪失を実感させる程度のものであるべきだ、と言いました。本質的なのは、金銭的支払いそのものではなく、それによって生ずる喪失と、それによって顕わになる欠如です。「欠如を引き渡す」こと、それが分析家への支払いの本質です。

経済的な問題だけでなく、多忙さの問題に関しても御質問をいただきました。仕事を休んで分析に来るほど暇ではない者はどうするか？確かに、日本の現状においては、そのような人が分析を経験するのは難しいかもしれません。

しかし、津々浦々に分析家が出て、行こうと思えばいつでもすぐに分析家に会いに行くことができる。分析家の数がコンビニのように多くなれば、そうなるでしょう。Paris ではほとんどそうなっていると思います。フランスでも地方都市ではそこまで行かないかもしれませんが。

また、もうひとつ異なる視点から考えると、忙しすぎて祈ることもできない、というのは、存在事象の次元のことに捕らわれすぎて、神を見失ってしまった人間の状態です。神を忘れていなければ、どんなに忙しくても、ごく短時間、

気持ちを神へ向けることはできるはずで、それと同様に、もしすぐ身近に分析家がいれば、多忙のなかにも時間を作って分析に行くことができるでしょう。祈りのために何とか時間を割くのと同じことです。

祈りとは、Pater noster や Ave Maria などの既定の文句を唱えることではありません。勿論、それも重要です。それらのように長い歴史のなかで定着した祈りの言葉は、神を喚起するために有効です。しかし、そのためにも、まずは気持ちを神へ向けねばなりません。分析においても同じです。まずは、注意を A ないし ϕ という欠如、存在論的穴へ向けねばなりません。

いわゆる自由連想が分析の基本的な方法だとはいつても、不安を惹起する存在論的穴へまなざしを向けないために、ひたすら存在事象の次元のどうでもよいようなことを語るならば、それは自由連想ではなく、単なる回避であり、精神分析に対する抵抗にすぎません。

祈りに関しては気持ちを神へ向けることと、分析において存在論的穴へ思考を集中することとは、同じです。

祈りの時間を持つことは、その気になればいつでもどこでもできます。分析

の経験もそれと同様にできるような現実的、社会学的条件が整うと良いのですが。

あらゆる人間には原罪があることと関連して、あらゆる人間には贖いの可能性があると、言いました。そして、精神分析もまたそうである、と。

以上、経済的、時間的余裕と精神分析可能性との関連について若干の考察をしました。

では、年齢と精神分析可能性との関連はどうか？

小児の精神分析というと、Melanie Klein が有名ですが、ラカン派でも小児の分析をもっぱらしている分析家があります。最も有名なのは Lefort 夫妻（ともに故人）です。彼らは、いわゆる自閉症の子供たちの治療に携わっていました。

精神分析史上、最も有名な小児症例は、Hans 少年でしょう。5 歳の恐怖症の症例です。

どんなに幼くても、人間は言葉に住まう存在、言語存在です。その限りで、

精神分析の可能性はあります。

ただし、特に臨床的に問題のない子供にまで精神分析をする必要はありません。子供の成長過程は、むしろ、各自が各自なりに「異状」になってゆく過程です。それは、社会の中で生きてゆくために避けられないことです。

しかし、その過程でたとえば恐怖症のような問題が起き、日常生活に支障をきたすようであれば、分析も選択肢に入ってきます。

言葉に住まっていれば、分析は可能です。しかし、まだ言葉も話せないような低年齢の子供はどうか？もし仮にそのような子供に神経症的な問題が起きる場合は、親を精神分析すべきです。子供に起きている症状は、親の症状です。

まだしゃべれず、自分で祈ることのできない赤ん坊のためには、親が代わりに祈ります。それと同様、自分ではしゃべれないような子供に何か神経症的症状が起きたなら、親が精神分析を受けることになるでしょう。

26 August 2014 : 主体と他の Dialektik ; 人間は、まずもってたいがい、神の請求から逃れようとする；ヨナの物語；症状は、本能請求に対する抵抗を成す。

精神分析的思考を特徴づけるものは何でしょうか？それは、主体に関して思考するために、主体は本質的に他との関係において在ると考えることです。

そしてその際、他は、あなたの同類であるような他者ではなく、あなたとは絶対的に異なる他です。Kant 的な表現を用いるなら、他は、経験的な他者ではなく、先験的な他、超越論的な他です。

そのような精神分析の特徴は、神学を特徴づけるものと共通しています。キリスト教だけでなく、ユダヤ教においてもイスラム教においても、天地の創造主たる神は、非経験論的な、先験的な他です。

重要なのは、このことです：神という絶対的な他は、しかし、人間とは無関係に、勝手にひとりで天国で暮らしているのではなく、むしろ逆に、人間との関係を持つとうとします。人間に語りかけてきます。人間に、神との関係に入るよう、誘いかけてきます。さらには、人間に対して請求をつきつけてきま

す。神の請求の圏域内に人間を捕らえようとしています。

救済論的な観点からは、神の請求は、贖いの請求です。

しかし、人間は、むしろ、神が差し向けてくる請求から逃げようとしています。目をそむけようとしています。

イエスが引用していることで有名な旧約聖書のヨナの物語においては、神はヨナに預言者になるよう請求しますが、ヨナは、船で海へ逃げ出します。しかし、神の請求の圏内から脱出することは不可能です。ヨナの乗った船は嵐に捕らえられ、嵐を静めるためにヨナはみずから海に身を投げます。そして、クジラを思わせる大きな魚がヨナを呑み込み、ヨナは三日三晩、その巨大な魚の腹のなかにいますが、ついには岸边へ吐き出されます。この物語は、イエスが処刑後三日目に復活するという話の下敷きになっています。

ともあれ、「贖え」と請求するのは神、つまり他 A であり、人間の方はその請求に抵抗します。なぜなら、ヨナの物語が示しているように、贖いの過程で死なねばならないからです。

死を引き受けること、地上的なもの、存在事象の次元のものの喪失を受け入れることは、他 A の請求に服従することです。人間の側がみづからの仕業によって贖えるわけではありません。

聖パウロも強調しているように、贖罪の遂行、つまり、義とされることは、人間が神を信ずることにおいて、神によって為されることであって、人間の側の努力や業績によって果たされることではありません。

まずは、神を信ずること、神を信頼すること、それがすべての出発点です。つまり、人間が「自分は神と本質的な関係に在るのだ」と認めることが原点です。

仏教は、カルマ、業を重視しますが、それとて、単に人間がひとりよがりになにかすればよいのではなく、まずは、自分が宇宙秩序との本質的な関係において存在していることを認識していなくてはならないはずで

人間は、他 A が人間に突きつけてくる請求から逃げようとし、請求に従うことに対して抵抗しようとし、そこに病理が生じます。

精神分析における分析は、いったい何を分析するのか？症状か、自我か、

防衛か、人格か、自己か？Freud 以後の分析家たちはさまざまに考えました。しかし、それらはすべて本質的に同じものです。つまり、症状の学素 $\frac{a}{\phi}$ により形式化される構造です。

ϕ という ex-sistence の穴を、穴そのものとして保たずに、何らかの仮象で塞ぎ、覆い隠してしまうこと、それが抵抗です。そのような抵抗が病理を生ぜしめます。 ϕ という ex-sistence の穴がどのような仮象 a によってどのように塞がれるかが、臨床的な病理の多様性を決定します。

A と \$ との関繋は如何という御質問をいただきました。この問いに答えるためには 1964 年の Lacan の書『無意識の位置』における aliénation の概念に立ち入らなくてはなりません。長い話になるでしょうから、明日取り組むことにしましょう。可能なかたは、セミナー XI の aliénation のくだりをざっと読んでおいてください。

27 August 2014 : カトリックとプロテスタント； カトリックとギリシャ正教； 人間存在の本有は神性である； aliénation の構造； 主体は，デカルト的主体として，無意識に対して前提的に仮定されている； 他 A は，ことばが真理において肯われることが要請する次元である； 無意識は，主体と他との間の切れめである。

昨日予告した aliénation の話に入る前に，いただいた御質問にお答えしたいと思います。御質問はキリスト教にかかわるものです。

わたしはカトリックですが，ただの一般信徒のひとりであり，神学は独習しただけです。ですから，わたしの考えはあくまで個人的なもので，カトリック教会を代表するものではありません。

そもそも，復活したイエスを懐胎したのはマグダラのマリアであり，聖母マリアと罪深い女マリアとは本来同一人物だというわたしの空想は，全くの異端です。

先日わたしは，プロテスタントの一部は大学の言説の構造を有している，と言いました。わたしが念頭においているのは，USA で WASP (White, Anglo-Saxon, Protestant) の支配体制に荷担してきたプロテスタント，およ

び, **fundamentalism** に属する諸会派のプロテスタントです. 彼らの言説は, 差別の言説です. 本来のキリスト教の普遍性とは別のものです.

カトリックも, 第二 **Vatican** 公会議以前は, 差別的との非難を免れ得なかったでしょうが, 今はそうではありません. 第二 **Vatican** 公会議以後は, カトリックは, 従来の「教会の外に救済は無い」という差別的態度を棄て, 神の愛の普遍性によりどころを置いています. そこが, 今のカトリックとプロテスタントの大きな違いです.

東方教会の三位一体論については, わたしも先日, 三位一体と **Filioque** について小論を書きました. 東京ラカン塾の **site** から **download** できますので, 御参照ください.

そこにも書きましたように, **Filioque** 問題については, ギリシャ正教の方が正しいと思います. 聖なる霊気(聖霊)は, 本来, 父からのみ発するものです.

Jean-Paul II も Benedikt XVI も, ギリシャ正教の総主教と共に祈るときには, **Filioque** 無しの **symbole** を唱えました.

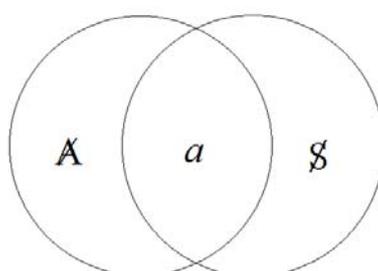
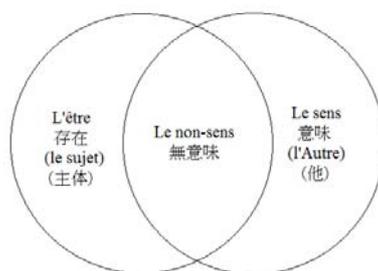
わたしが個人的に知っている幾人かの神父様たちは皆、ギリシャ正教の *spiritualité* に敬意を払っています。わたしは彼らのひとりに頼まれて、ギリシャ正教の典礼で用いられる聖歌や祈りの言葉のフランス語テキストを日本語に翻訳したこともあります。

先日、Meister Eckhart の解説本のなかで知った *θέωσις*, *theosis* という用語を紹介しましたが、永遠の命において人間は神になる、人間は神性に与っている、という考え方は、ギリシャ正教においては全く伝統的なものだと思います。

わたしは、人間には神性が備わっている、と考えます。その意味で、わたしも、Meister Eckhart にならって、*mystique* のひとりです。*mystique* を広い意味で取れば、聖パウロも *mystique* です。

人間には神性が備わっており、いわんや、イエスは神です。三位一体を否定し、人間の神性も当然認めない *unitarianism* には全く賛同できません。

さて、*aliénation* の問題です。Séminaire XI の図と、わたしなりに整理した図とを提示します：



最初の図は, Séminaire XI のフランス語原書 p.192, 5月27日の回のセクション 3 に出てきます.

既成の邦訳では *aliénation* は何と訳されているのでしょうか? わたしは「他化」よりも「異状」の方が適当かなと今は考えています. 既成邦訳では *aliénation* は「疎外」だそうです. 御教示ありがとうございます. しかし, 「疎外」では事態の本質を見ることができません.

ともあれ, Séminaire XI の図とわたしの図は, 一見したところ全然違います. 他 A と主体の位置が左右反対です. しかし, 両者は本質的に等価です.

今日だけでは話はとても終わらないので、何回かに分けて説明して行きます。

まず、*Écrits* の *Position de l'inconscient* 『無意識の位置』, フランス語原書 p.839 に提示されている三つの命題を見ましょう:

Le sujet, le sujet cartésien, est le présupposé de l'inconscient (...). L'Autre est la dimension exigée de ce que la parole s'affirme en vérité. L'inconscient est entre eux leur coupure en acte.

主体 — Descartes 的主体 — は、無意識に対して前提的に仮定されているものである(…)。他 A は、「ことばが真理において肯われる」ことが要請する次元である。無意識は、両者の間において、両者の〈現動態における〉切れめである。

これらの三つの命題が、*aliénation* の構造を説明しています。

aliénation の図は、初歩的集合論で用いられる Venn 図の模倣ですが、円や弧で囲まれた領域は、ひとつの集合を表すわけではありません。それ

らは, それぞれ, 四つの言説の構造の座に対応しています

とりあえず, 中央の部分, ふたつの円の交わりの部分から取りかかりましょう.

その領域について Lacan は「無意識は, 主体と他 A との間の切れめである」と言っています. この「切れめ」は, 純粹徴示素としての a のことです. それは, 切れめ, 穴そのものです.

明日以降, 主体の領域と他 A の領域について見て行きましょう.

28 August 2014 : 神と人間；死の不安から復活の歓喜へ；「ひとつの徴示素は主体をもうひとつのほかの徴示素に対して代表する」ことが無意識の成形の構造である。

今日もまずは神と人間の関繋のことから始めます。

なぜ精神分析家が神について語るのか？それは Lacan が神について語っているからです。おそらく Lacan は、神学者や司祭などキリスト教の「業界」内の人々を除けば、20 世紀において最も真剣に、最も頻繁に、神について思考し、語った哲人のひとりではないでしょうか？

なぜ Lacan はそうしたのか？それは、人間主体の本質について思考するためには、他 A との関係においてそうせねばならないからです。他 A は、西欧の伝統では「神」と呼ばれてきました。

神との関係から出発することによって、あるいは、神から出発することによって、初めて、人間主体の本有は思考され得る。

そのことを Lacan は、Spinoza, Hegel そして Heidegger から学びました。その三人には尽きないかもしれませんが、Lacan が学んだもろもろの哲人

のうち最も偉大な名を挙げるとすれば, Platon と Aristoteles を挙げるのは当然でしょうが, やはり, Spinoza, Hegel, Heidegger を挙げることになるでしょう.

プロテスタントの一部の神学者たちは, 神と人間との隔たり, 断絶を強調します. それに対して, *mystique*, いわゆる神秘主義と呼ばれる人々は, 神と人間の交わり, 合一, 人間のなか宿る神性に注目し, あるいは, みづから経験します.

人間のなかの神性は, ある意味で, 人間存在のなかにひそむ深淵です. それを認めることは不安を惹起し得ます. しかし, 人間のなかに神性が宿っていることは, 人間の救済の可能性の条件でもあります. さらに, それによって人間は既に救済されているのです. なぜなら, イエスはこう言っています:

あなたがわたしの言葉を聴き, わたしを使わした方を信頼するならば, あなたは永遠の命を有している. あなたは, [最後の審判のときにも]裁かれることはない. あなたは, 死から[永遠の]命へ[既に]移ったのだ. (ヨハネ福音書 5,24).

「永遠の命」は、人間が与る神性の別名です。

人間のうちに神性が実現するためには、人間は、世に対して死なねばなりません。そして、死から復活せねばなりません。

ですから、人間のうちに神性が宿っており、神はその実現を人間に請求している、ということは、不安を惹起します。先日もお話した村上春樹氏の『1Q84』のなかの天吾の父の生霊が青豆に未払い NHK 受信料を請求する場面と同じく、無気味です。

しかし、死の不安を通ることによって初めて、復活の歓喜へ至ることができます。その不安を克服することができるのであれば、それは神の恵み、神の愛によってです。

「我は信ぜず。ゆえに我は在る」という命題について考えてみましょう。この命題は、一義的ではありません。まず単純に、神と人間との断絶を言っているのだ、と見なすこともできるでしょう。人間は、神を必要としていない。人間と神とは相互に何の関わりも無い。わたしは神を信ずることはできないし、信ずる必要もない。そのことによって、わたしは神から独立し、自立した者として、存在している。現代人の多くは、そう考えているでしょう。まさに

Descartes がそう言っている:「我は考える. ゆえに我は在る」. 神は関係無い.

しかし, そうでしょうか? それは, Descartes の命題の浅い理解です. 「我は信ぜず. ゆえに我は在る」は, もっと深い意味において思考され得ます.

「我は信ぜず」は, わたしは「ひとつの存在事象として神が存在する」とは思わない, と言おうとしているのではないのでしょうか? 「我は信ぜず」は, 存在事象の場を開いた深淵の口, 信じがたい無との出会いを言い表しているのではないのでしょうか?

それは, **ex-sistence** としての「抹消された存在」にほかなりません. そして, そのような深淵に達したとき, 初めて, 「ゆえに我は在る」と言うことができます.

その場合の「我」は, 人間の最も本来的な存在可能性としての自己です. そして, それは, 神と人間との交わり, **communion** にほかなりません.

神は, 人間がそのような自己に到達することを欲しています. それが救済です. その可能性の条件は, 神の愛です.

さて, *aliénation* に戻ります.

Lacan はこう言っています: *un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant*. ひとつの徴示素は, 主体を, もうひとつのほかの徴示素に対して代表する. これが *formation de l'inconscient* 「無意識の成形」の構造である.

「無意識の成形」とは, 症状, 夢, 言いそこない, しそこない, 等, Freud が精神分析において取り上げたもろもろの現象です.

「無意識はひとつの言語として構造化されている」と Lacan は言いますが, その前に, 「症状はひとつの言語として構造化されている」と言っています.

Lacan の言葉づかいは必ずしも厳密ではありません.

aliénation の図の中央部の交わりの部分におかれた a は, 「無意識の成形」という意味における「無意識」です. つまり, 構造 $\frac{a}{\phi}$ の a です.

29 August 2014 : 「無意識」, 「精神」, 「心理」, 「こころ」を厄介払いするための学素; 異状とは, 人間の最も本自的な核が他において出現することである; 他 A の場処のトポロジー; 強いられた選択.

「無意識」という用語は, 精神分析にとって本質的なものでありながら, 同時に, 誤解と曲解のもとにもなっています.

「無意識」だけでなく, 「精神」もそうです. あるいは, 「精神分析」psychoanalysis は「心理分析」とも呼ばれ得ますが, この「心理」や「心, こころ」という用語も, 精神分析の本質を覆い隠し, 誤解を生む要因です.

「無意識」「精神」「心理」「こころ」, そのような誤解のタネ, つまづきのもとをすべて厄介払いするためにも, Lacan は mathèmes 「学素」による形式化を導入しました. 1964 年の『無意識の位置』は, まだ形式化の途上にあります.

精神分析において, 無意識は, もはや意識の反対概念ではないのです. 「意識」という語も, 医学, 心理学, 認識論, ドイツ観念論などにおいて, それぞれ異なる意味と定義において用いられていますから, 無意識を意識の反対概念だと考えることは, 混乱に混乱を重ねることになります.

Freud が発見した無意識は、Freud 自身が言うとおりに、人間の本有の核、中心を成す領域です。それは、意識の光が届かない辺縁的暗がりではありません。そうではなく、無意識の場処は、人間の本有の中心にうがたれた深淵の場処です。

Lacan は、無意識の場処は Heidegger が「存才の処有」Ortschaft des Seyns と呼ぶ場処にほかならないことに気づきました。

Seyn は、Sein 「存在」の古い書き方です。Heidegger は、Seyn という語を、**Sein** : 「抹消された存在」を完結に表記するために用いました。

それは、Lacan 的学素では \emptyset : 「抹消されたファロス」です。無意識は、かくして、まずは、学素 \emptyset により形式化される中心的深淵です。

しかし、Heidegger において「存在」Sein という語が二重の意味で用いられているのと同様に、Lacan も「無意識」という語を二重の意味で用います。つまり、 \emptyset のみならず、 \emptyset を代表する仮象 a も「無意識」と呼ばれます。つまり、其れによって \emptyset としての無意識が己れを踏すところもの、つまり、無意識の成形 formation de l'inconscient をも Lacan は「無意識」と呼ぶこ

とがあるのです。

人間の本有の核 ϕ としての無意識, つまり, 人間の最も本自的な存在可能性が, それとは異なる仮象としての無意識として出現する, という事態, それが *aliénation* 「異状」です。

« un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant ». ひとつの徴示素 a が, 主体 ϕ を, もうひとつのほかの徴示素 $\$$ に対して代表する。

この命題が「異状」の構造を公式化しています。

1969 年に Lacan が「分析家の言説」と名づける構造は, 「無意識の成形の構造」, 「症状の構造」である「異状の構造」にほかなりません。

さて, *Écrits* p.839 の命題に戻りましょう:

主体, Descartes 的主体は, 無意識に対して前提的に仮定されているものである。他 A は, 「ことばが真理において肯われる」ことが要請する次元である。無意識は, 両者の間において, 両者の〈現動態における〉切れめである。

Venn 図を模した図においてふたつの円の交わりを成す領域には、無意識の成形としての無意識が位置づけられます。それは、症状の徴示素 a の座、つまり、四つの言説における agent 能動者の座に相当します。

幻想は無意識の成形に属するか？という御質問に対しては、その答えは今は留保しておいてください。

幻想を Lacan は学素 ($\$a$) により形式化します。この学素は、Lacan の学素のなかでも最もよく知られたものですが、この学素の解釈はなかなか難しいのです。なぜなら、($\$a$) は或る意味で過渡的な学素だからです。ですから、幻想の学素 ($\$a$) は Lacan が最も早く使い始めた学素ですが、そこに立ち戻るのは最も後です。

「他 A は、ことばが真理において肯われることが要請する次元である」に移りましょう。

四つの言説の構造における左下の座は、真理の座と呼ばれます。それは、主体の存在の真理 Φ です。「ひとつの徴示素は主体を代表する」という命題は、より正確には、「ひとつの徴示素 a は、主体の存在の真理 Φ を代

表・代理する」と言うべきです.

« la parole s'affirme en vérité » 「ことばが真理において肯われる」とは, 「徴示素 a が主体の存在の真理 φ を代表・代理する」ということです.

分析家の言説の構造における能動者の座は, 徴示素 a が位置する座です. 他 A は徴示素の宝庫の場処ですから, 徴示素 a が位置する能動者の座は他 A の場処に属します.

そして, 真理の座も他 A の場処に属します.

ただし, 真理は φ という深淵の場処です. 真理の座は, 他 A の場処にうがたれた深淵の場処, つまり, 他 A のなかの欠如の場処です. それは, 学素 A で現されます.

A と φ は相互に等価です:

$$A \equiv \varphi$$

したがって, 他 A の場処の構造はこうも形式化されます:

$$\frac{a}{A}$$

わたしの *aliénation* の図では左側に他 A の領域があり, *Séminaire XI* p.192 の図では左側の領域には「存在(主体)」と記されています. これは
どういふことかという、他 A の場処には主体の存在の真理の場処が属している、ということです. 言い換えると、「A の処有, *localité*, *Ortschaft* は、主体の存在の真理 φ の座である」ということです.

そして, *Séminaire XI* で Lacan が「強いられた選択」と呼ぶ選択においては、この真理の深淵は、死の座であるので、それを選ぶことは死を選ぶこと
ですから、まずもっておおかたは、そちらは選ばれません.

30 August 2014 : 存在の選択としての黒い道の選択；芸術作品の構造；

「我れは疑う」としての cogito；デカルト的主体と精神分析の言説.

岡本太郎の言葉を教えていただきました. ありがとうございます. 榎木野衣著『黒い太陽と赤いカニ』のなかに紹介されているものだそうです.

「人間は瞬間瞬間で自分の進むべき道を選ぶ. そのときわたしはいつだって, まずいと判断する方, 危険な方に賭けることにしている. 極端な言い方をすれば, おのれを滅びに導く, というより, 自分を死に直面させる方向, 黒い道を選ぶということだ. 無難な道を選ぶくらいなら, わたしは, 生きる死を選ぶ. それが, わたしの生き方とスジだ.」

このような岡本太郎の選択は, 昨日紹介した *vel d'aliénation* [異状の「または」]における強いられた選択の逆です.

人間は, *aliénation* の図におけるふたつの領野のいずれかを選択するよう要請されます. *Séminaire XI p.192* の図で言えば, 「存在」を選ぶか, 「意味」を選ぶか.

そのような選択を Lacan は「金か命か」の選択を引き合いにだして説明し

ます。あなたが強盗に刃物なり拳銃なりを突きつけられて「金か命か」の選択をせまられたとします。金を渡すことを拒めば、命も金も奪われることになります。ですから、命を失わないために、金を強盗に渡さざるをえない。つまり、命を選んで、金を失うことになります。これが日常態における選択です。

同様に、Séminaire XI p.192 の図で言えば、「意味」を保持して、「存在」を失うような選択、それが日常態の選択です。

ところが、岡本太郎の選択は、その逆です。彼は、「より悪い」方を選びます。死に直面する道を選びます。それは、日常態に墮したままであることを拒む選択です。本自的な実存の選択です。それが芸術的創造の道だからです。

芸術作品の存在論的構造は、症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ そのものです。芸術作品の本質は、そのマテリアによって存在の真理を保匿することに存します。そのためには、当然ながら、存在の真理の深淵から目をそむけるわけには行きません。芸術家は、不安を惹起する ϕ の深淵へ、不安に耐えつつ、まなざしを向け、深淵の穴の周りを回りつつ、客体 a を創造して行きます。その際、 a は、深淵の穴を塞いで覆い隠してしまうのではなく、穴を穴とし

て保たなければなりません。深淵を深淵として喚起し得ねばなりません。

岡本太郎の「生きる死」という矛盾的表现は、芸術的創造のそのような構造、つまり、存在の真理の現象学的構造を、的確に言い表しています。

しかし、それは、芸術家など、死を覚悟し得た人々にのみ可能な選択です。Heidegger の言う *das Man* 「世人」、つまり、日常態における人間は、存在の真理の不安惹起的な深淵を回避するような選択をしています。それが *vel d'aliénation* の強いられた選択です。強いられた選択においては、*aliénation* の図における右側の領野が選ばれます。

Lacan は \$ を「デカルト的主体」と呼んでいます。そして、デカルト的主体は無意識に対して前提的に仮定されているものである、と Lacan は言っています。

デカルト的主体とは何か？哲学を勉強した人なら、すぐに答えるでしょう。それは、*cogito ergo sum* 「我は思考する、ゆえに我は存在する」の「我」である。それは、無条件的に確実な基礎を近代形而上学に提供するものである。

果たして Lacan もデカルト的主体をそのようなものと考えているのでしょうか？ちがいます．少なくとも、『無意識の位置』の書においては違います．そこにおいて Lacan はこう言っています (*Écrits*, p.831) :

科学にとっては, cogito は, 逆に, あらゆる〈直観において条件づけられていた〉保証との断絶を印づける.

Lacan が注目するのは, cogito の結論としての sum 「我は存在する」, つまり, 確実性において存在する主体, 確実性としての主体の存在ではありません.

そもそも, cogito とは何か? Descartes の cogito 「我は思考する」は, 「我は懐疑する」に存しています. 単に「考える, 思う」のではなく, 「疑う」が cogito の本質です. 従来当然妥当するものとして受け入れられてきたあらゆる前提を疑い, 棄却することが cogito です.

「直観において条件づけられてきた保証」と Lacan が呼んでいるものは, 影像, 画像など, 目で見て即座に確かなものと信じ込んでしまうもの, そのような直観や意識が与える仮象的な確かさです.

今、画像の支配力はますます強まっています。人々は疑うことを忘れてしまっています。

しかし、そのような影像的な確かさ、影象的な明証性は、括弧に入れられるべきだ、棄却されるべきだ、と Descartes は提起しています。それが、Lacan が注目する cogito の意義です。

わたしの aliénation の図において、右側には \$ が位置しています。それは、分析家の言説の構造において「他者の座」に位置する \$ に相当しています。この \$ は、デカルト的主体として、能動者の座に位置する客体 a に相対しています。

他者の座に位置する \$ は、「我は疑う」の主体として、客体 a の影象的要素を棄却します。それによって、客体 a は signifiant として立ち現れてきます。つまり、近代的な意味での科学の成立です。

精神分析は、科学の時代に生まれました。つまり、夢や症状を、異界からのメッセージとか神のお告げなどの超自然的、超常的現象とは捉えないところで発明されました。

\$ は, 科学的態度でもって, 無意識の「何かが語る」を聴く者です. 精神分析的な意味での無意識は, そのように科学的な態度を以て聴く者を, 前提的に要請します.

31 August 2014 : *hysterica* と *mystique* ; *hysterica* の言説は不満足 of 言説である ; 意味と無意味.

Hysterica に関する御質問をいただきました. 先にそちらについて考えてみましょう.

四つの言説のひとつとしての *hysterica* の言説と, 神経症症状のひとつとしての *hystérie* 症状とを区別せねばなりません.

古典的にはさまざまな身体症状や意識変容, 人格の多重化などとして現れる *hystérie* 症状は, それらが症状の構造 $\frac{a}{\Phi}$ により形式化される限りにおいて, 分析家の言説の構造において出現します.

それに対して, 四つの言説のひとつとしての *hysterica* の言説は, 分析家の言説ではないものであって, そこにおいては症状はそれとして出現することはできません. そこにおいては症状の剰余悦は成起し得ません.

その意味において, *hysterica* の言説は *frustration (insatisfaction)* の言説であり, 特に性的な不満足 of 観点から言えば, *frigidity (冷感症)* の言説です.

frigide という語で思い出しましたが、昨年フランスでは同性愛者どうしの結婚が合法化されました。同性愛者どうしの結婚も異性愛者どうしの結婚も法的には区別されなくなったのです。この法案が国会で審議されている間、保守勢力の一部はカトリックの旗を借りて、この法案に反対するデモを大々的に繰り広げました。その運動の中心人物のひとりとしてマスコミに注目された女性は、偽名で Frigide Barjot と名乗っていました。フリジッド・バルジョー。勿論、往年のフランスの « sex symbol », ブリジット・バルドー Brigitte Bardot のもじりです。

同性愛婚については、カトリック教会は確かに今のところそれを婚姻としては認めてはいません。しかし、第二 Vatican 公会議以降の教会は、同性愛者に対して教会の門戸を閉ざしてはいません。同性愛・異性愛にかかわりなく、神は誰をも愛してくださいます。同性愛に対する拒絶反応は、カトリックの精神に反しています。同性愛にかかわる問題に関して一部の保守勢力はカトリック教会の名を利用しようとしませんが、カトリック教会はそのような排除の言説に荷担すべきではありません。

話をもとに戻すと、hysterica の言説は insatisfaction の言説です。hysterica の言説の構造において左上の能動者の座に位置する \$ は、

désir insatisfait 「不満足な欲望」の学素です.

それに対して, 神秘経験は, 症状の言説としての分析家の言説の構造, 症状の構造の解体である分離 *séparation* として捉えられます.

神秘経験においては, 症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ から仮象 a が分離して, *aliénation* の構造が解体し, 他の欠如 A と主体の欠如 ϕ との無媒介的合一が生じます.

そこにおける悦は, 秘匿性そのものであって, 如何なる *signifiant* によっても代表されませんから, ひとつの現象でもありません.

神秘経験の悦そのものについて何かを証言することは不可能です. それは, 神秘経験が実在的である, ということです. 神秘経験の悦は言説の構造の外に存有するものであり, 言説の構造に対して解脱的 *ekstatisch* です.

それに対して, *hystérie* 症状の悦は, ひとつの剰余悦であり, 分析家の言説の構造のなかに位置づけられます.

一見すると、アヴィラの聖テレサのような *mystique* は *hysterica* であるように見えるかもしれませんが、神秘体験の本質は全く異なります。

さて、*aliénation* に戻ると、Lacan (*Écrits*, pp.841-842) はこう言っています：

主体は、「或る種の意味を受け取るか、または、石化するか」の *vel* に直面する。しかし、主体は意味を取るのであれば、その(意味の)場を、無意味〈其れは、主体が徴示素に変化することにより生ずる〉が侵蝕しにくるだろう。そして、この無意味は、主体の掩蔽として生ずるとはいえ、まさに他 *A* の場に属する。

この一節で Lacan は、*Séminaire XI*, p.192 の図を説明しています。

「意味」は、図の右側の領域の「意味」です。わたしの図では *\$* の領域です。その領域を「無意味」が侵蝕します。それによって我々の手元に残るものは、欠損を被ります。「金か命か」の強いられた選択では、金を奪われた命が残ります。それと同様に、交わりの部分の「無意味」の領域を欠いた右側の「意味」の領域だけが、我々に残ります。それは *\$* の座です。

「無意味」は「主体が徴示素に変化することにより生ずる」のですから、「無

意味」の領域は、主体の同一化の徴示素 a の座に相当します。

Lacan が「石化」と呼んでいるのは、症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ のことです。それは、死 ϕ の先取りであるがゆえに、石化です。

神秘経験と科学との関係について御質問をいただきました。少なくとも言えることは、こうです：言説の構造に対して解脱的 *ekstatisch* であるものとしての神秘経験(たとえばアヴィラの聖テレサの経験)を、ひとつの言説としての科学の言説のなかで記述することは不可能である。

留意していただきたいのですが、わたしの *twitter account* は公開されています。ですから、御質問等としてお送りいただいたメッセージは第三者に見える可能性があるのではないかと思います。個人的なことがらにかかわる御質問等は、ogswrs@gmail.com へ直接お送りください。

01 September 2014 : 欲望の弁証法；存在欠如としての欲望； ϕ と $\$$ ；
精神分析の Dialektik を経るなら，分離においてゴミとして捨て去られるの
は仮象としての分析家 a である；分析の外において生ずる分離は他殺
ないし自殺となる危険性を有する。

弁証法 Dialektik は，哲学用語のなかでも良く知られたもののひとつです
が，何のことなのかよくわからない用語のひとつでもあります。

Lacan が la dialectique du désir 「欲望の弁証法」と言うとき，それはいった
い何なのか？

「欲望の弁証法」は，「人間の欲望は他 A の欲望である」という Lacan の
最も基本的な命題のひとつにかかわっています。

「欲望」は，心理学的な意味における「…が欲しい」ではありません。「欲望」
は存在論的欠如です。Lacan の用語では，manque à être 「存在欠如」で
す。つまり，我々の学素で言えば， ϕ です。

la dialectique du désir 「欲望の弁証法」とは，「主体の存在の真理 ϕ は，
他 A の場処において，客体 a によって代表されることによってしか，己

れを踏さない」ということです。「主体の存在の真理は、異状 *aliénation* としてしか現れない」ということです。

主体の存在の真理は、しかし、単に異状として現れるだけでなく、Lacan が *séparation* 「分離」と呼ぶ動きにおいて、*désaliénation* 「脱異状」へ立ち返ります。Hegel 風に言えば、自己の内へ反回して立ち戻ります。

そして、単に自己の内へ引っ込むだけでは終わらず、さらに、以前の異状よりも一段階ステップを昇った様態において、新たに己れを踏します。

Hegel においては、そのような *Dialektik* の動きは最終的に絶対知へ至りますが、精神分析においては如何？

とりあえず、知の問題は置いておきましょう。そして、 Φ と $\$$ との関繋について考えてみましょう。

Φ は、Heidegger の「抹消された存在」、*Sein*, *Seyn* と等価です。

Φ は、Lacan が用いた学素ではなく、Heidegger の *Sein* を Lacan 的観点において捉えるために新たに考案された学素です。

Heidegger が 1955 年の或る論文において用いた **Sein** の表記を見て、Lacan は、これは使える、と思ったはずですが、かくして Lacan は、\$ の学素を作り出しました。

当初、\$ は **Sein** の学素だったのです。もし仮に Lacan が \$ を **Sein** の学素として使い続けたなら、 φ の学素は不必要だったでしょう。ところが、1964 年の *aliénation* の図以降は、**Sein** と \$ とは無条件に等価ではなくなりしました。

主体の存在の真理 φ は、異状の構造 $\frac{a}{\varphi}$ において a として出現します。\$ は、能動者の座の a に対して、他者 *autre* の座に位置しています。

Séminaire XI p.192 の *aliénation* の図の右側の領域は、「意味」とともに、(l'Autre) と徴されていますが、この l'Autre は、真理の座としての他 A の場処ではなく、四つの言説の構造における右上の他者 *autre* の座に相当します。

症状 $\frac{a}{\varphi}$ そのものは、徴示素 a が代表するものが実在である限りにおいて、「無意味」です。「意味」の領域の外に位置します。

徴示素 a には、しかし、Freud 的な解釈によって「意味」が付与され得ます。たとえば『夢解釈』のなかの「イルマの注射」の夢の解釈が、意味付与的解釈の典型例です。Freud の解釈は、しかし、imaginaire な意味を夢に与えているにすぎません。

ともあれ、aliénation の図の右側の領域は、そのような imaginaire な意味の領域であり、 $\$$ は、そのような意味を受け取ります。

しかし、それは、症状の真なる Bedeutung Φ ではありません。それは、徴示素 a の下に隠れたままです。

次いで séparation へ話を進める前に、いただいた御質問に答えてみましょう。

四つの言説について、Lacan は、四つの座を「能動者」、「真理」、「他者」、「生産」と定義し、四つの項を「支配者徴示素」、「知」、「主体」、「剰余悦」と定義しています。座は固定されており、四つの項は移動します。

Φ は、存在の真理の学素です。つまり、左下の座そのものを指す学素で

す。左下の真理の座は、左上の能動者の座の下に常に隠されています。
真理とは、Heidegger の言う *Verborgenheit* 秘匿性、ないし、
Sichverbergen 自己秘匿としての真理です。

自己秘匿としての真理は、しかし、単に己れを隠すのみならず、己れを顕
そうとします。そして、己れをそのものとして顕すために、能動者の座にお
いて真理を代表している仮象 a を破壊しようとしています。

Aimée の迫害妄想は、症状の言説としての分析家の言説の構造のなかに
位置づけられます。Aimée が攻撃した女優は、Aimée の自我理想でした。
それは、 $\frac{a}{\phi}$ の構造の能動者の座に位置する a です。

自殺は、精神分析の経験という *dialektisch* な過程を経ることなく、直接的
に *séparation* を達成する行為です。自殺においては、 $\frac{a}{\phi}$ の構造そのも
のが破壊されてしまいます。存在の真理 ϕ をそれとして守護することはで
きません。

分離においては、仮象 a はゴミとして捨て去られます。精神分析という
dialektisch な過程を経るなら、最後に捨て去られるゴミは、分析家です。
それによって、分析者は自殺を免れます。

それに対して、分析の経験の外で無理やり実行されてしまう分離においては、仮象 a の破壊は、Aimée の場合のように他殺(未遂)となるか、二階堂奥歯氏の場合のように自殺となってしまう危険があります。

02 September 2014 : 自罰パラノイアの構造；律法と超自我；律法と欲望は表裏一体である；症状の構造は悦の構造である。

Lacan が 1932 年の医学博士論文で論じた自罰パラノイアの症例 Aimée について、次のようなコメントをいただきました。「Aimée の妄想症状がなくなったのは、法で裁かれることによって、象徴的父の保護下に入れたからである」という説明を或る分析家がしていたが、それはまったく見当ちがいだ、という見解です。同感です。

Aimée の迫害妄想は、或る女優を殺害しようとした彼女の行為の結果、解消しました。その女優は、Aimée にとって自我理想を体現していました。

なぜ、殺害行為にともなって妄想は解消したのか？それは、自我理想と妄想症状とが同じ構造を有しているからです。

症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ は、narcissique な成形としての自我の構造でもあります。その場合、 a は、鏡像としては理想自我 *das ideale Ich* であり、同一化の *signifiant* としては自我理想 *das Ichideal* です。

Aimée の迫害妄想において、その女優は迫害者のひとりでもありました。

その女優を殺害すること(未遂に終わりましたが)は、構造 $\frac{a}{\phi}$ において、自我理想 a を能動者・支配者の座から罷免 *destitution* することを意義していました。それにともなって、妄想症状の構造も解体され、症状は解消しました。

以上の事態は、分析の外で生じた分離にはかなりません。

そこにおいて、「父の名の閉出は精神病発症の必要条件である」と言う際の「父の名」は、なんら介入してきません。

昨日、二階堂奥歯氏の名に言及しました。『八本脚の蝶』はまだ半分くらいまでしか読んでいませんが、今までに気がついたことを述べるなら、彼女は顔の皮膚のことと衣類のこととにかなりの言葉を費やしています。若い女性としては当然のこととも言えますが...

二階堂奥歯氏について語る前に、*Aimée* について新たにコメントをいただきましたので、そちらを考えてみましょう。道徳と法(法律, 律法)とを対比することに関してです。

法と訳せるフランス語, ドイツ語は幾つかありますが、まずは *le droit, das*

Recht という語が挙げられます。droit も recht も、根本的な意味は、「あることに違わない、そむいていない、あることに沿っている、適っている」です。何に対してか？存在の真理に対してです。つまり、 \varnothing に対してです。存在の真理を適切に代表するもの、それが正義であり、法です。形容詞 droit, recht は「正しい」という意味を持っていますし、名詞 le droit, das Recht は「正義」であり「法」です。勿論、これは原理的次元でのことであって、社会的・政治的現実において律法、法律と呼ばれているものが必ずしも正しいとは限りません。

道徳律 la loi morale も、法のひとつです。

Lacan は症例 Aimée を「超自我精神病」の一例として論じました。Freud が超自我と呼んだものは、伝統的には良心と呼ばれていたものであり、倫理的にはそれは道徳律にはかなりません。

Freud は、超自我の概念のなかに自我理想の概念を包摂しています。

律法も道徳律も、超自我と等価です。

超自我とは、「悦せよ！」という定言命令 kategorischer Imperativ です。

Aimée は、その命令を忠実に実行しました。仮象 a を破壊することによって、

「悦せよ！」という命令は、分離において究極的に達成され得ます。

Lacan のテキストにおいて律法 loi という単語は確かに、大文字で Loi と書かれたり、小文字のまま loi と書かれたりしていますが、概念的な区別を伴ってはいません。

欲望と律法は表裏一体である、という意味のことを Lacan は言っています。欲望は ϕ であり、律法は a です。構造 $\frac{a}{\phi}$ において、律法と欲望は表裏一体です。

いずれにせよ、もっぱら法学部で扱われる社会秩序としての法体系の問題は、そのものとしては Lacan の律法の議論のなかで論ぜられてはいません。

悦は ϕ そのものではありません。そうではなく、 $\frac{a}{\phi}$ の構造における a が悦です。より厳密には、剰余悦と呼ばれるべきです。

a が仮象である限りにおいて、悦は常に剰余悦でしかありませんが、 a が
純粹徴示素であるとき、つまり、穴そのものであるとき、 a はもつとも忠実に
 ϕ を代表している、と言えます。

「分離」という表現においては、「仮象 a が存在の真理 ϕ から分離する」
と言わざるをえません、言い換えれば、それは、徴示素 a が純粹徴示
素である穴そのものに還元される、ということです。

症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ は悦の構造である、と言ってもよいと思います。

03 September 2014 : 精神分析の本質は精神分析家の存在の本有である；
変動時間面接と時間論； 分析家がゴミとして捨てられることによって、分析
者は死を引き受ける； 律法は欲望の *métaphore* である； 神の愛と死の本
能.

精神分析に関して問うとき、英語圏では *pragmatisme* の伝統にもとづいて、
「精神分析は如何に行われるか？」と問います。精神分析は、精神療法、
心理療法のひとつとして、精神分析療法であり、「その方法は如何？」が問
われます。

日本では、英語圏のまねをすることが大学人の務めだと思われていますか
ら、精神分析に関しても、大学人たちの「精神分析学」は、英語圏の
know-how を輸入することに存していましたし、多分、今もそうでしょう。

他方、Lacan は、英語圏とは異なるフランスの伝統において、「精神分析
は如何に行われるか？」の問いの前に、「精神分析とは何か？」と問います。

精神分析は、自由連想法を用い、一回の面接は何十分間、週に何回、何
年間続ける、云々は、悪い意味で形式的な問題にすぎません。それらは、
「精神分析とは何か？」の本質の問いに対する答えを与えません。

「精神分析とは何か？」の問いに対して、Lacan は、こう答えました:精神分析とは、精神分析家が為すことである。では、精神分析家とは何か？精神分析されてある者である。

全然答えになっていない,とは思わないでください。これは、正しい答えを得るためには適切な問いを措定することが如何に重要であるかの一例です。

Lacan の問答によって、このことがわかります。すなわち、精神分析の本質に関する問いは、精神分析家の本質に関する問いへ還元される。そして、精神分析家の本質は、精神分析されて在ること être psychanalysé である。つまり、精神分析の本質に関する問いは、ひとつの存在論的問い、精神分析家の存在に関する問いへ還元されるのです。

それによって初めて、精神分析の本質に関する問いは正しい答えを見出します。あるいは、よく言われるように、適切に措定された問いは既に正しい答えを含んでいるのです。

精神分析の本質に関する問いは、精神分析の技法や形式性の

pragmatique な規定ないし規制によつては、的確な答えを見出すことはできないのです。

他方、精神分析家の存在に関する本質的問いに答えることができれば、pragmatique な問いへの答えはおのづと見つかります。

以上を踏まえたうえで、いただいた幾つかの御質に答えてみましょう。

まず、いわゆる短時間面接について、Lacan が面接一回に当てる時間は、一定していません。ですから、「短時間面接」ではなく、「変動時間面接」と呼ばれるべきです。

変動時間面接は、Lacan の気まぐれの産物ではありません。それは、Lacan の本質的準拠である Heidegger の存在論の一部を成す時間論に基づいています。

時間とは、時計で計測される時間ではありません。物理学における必須の parameter のひとつ、通常 t で書記される変数、ひとつの直線の上に目盛りを刻まれるようなものとしての時間ではありません。そのような時間は、今という瞬間の無限の連なりとしての時間です。存在論的に本質的な時間

は、そのようなものではありません。

ひとこと注をさしはさむなら, Lacan は彼自身は聖人 — つまり, 存在論的に規定される精神分析家 — であるところまでは行かなかったと認めているとしても, そのような意味における精神分析家として存在することは, 精神分析家の存在に関する問いを措定し, それについて思考することの必要条件ではありません。

本質的な時間は, Heidegger が『存在と時間』において *ekstatisch* な時間と呼ぶものです。それは, 無限直線として表象される常識的時間ではなく, ひとつの限定された場処を成します。

『存在と時間』より後の Heidegger の展望においては, 時間とは *existence* の場処そのもの, 我々の学素における Φ の深淵そのものです。

精神分析の面接においては, この Φ を指し示さねばなりません。なぜなら, それが症状の意義であるからです。

ところが, Φ の深淵の口がいつ姿を見せるかは, 事前には全く予測が付きません。それゆえ, 面接の時間は一定に固定され得ないのです。

ekstatisch な時間である Φ の穴が分析者の言葉のなかにふと出現した瞬間に、言説に切れめを付ける。その切れめによって、 Φ の深淵の裂口を指し示す。それが、解釈の本質です。

そのような解釈は、固定時間面接では困難です。解釈の瞬間が面接の切れめとなるからです。

変動時間面接はそのような必然性に基づいており、Lacan の気まぐれでは全くありません。そのことをわきまえていない分析家は、lacanien とは言えません。

自殺の問題に関連して、精神分析という dialektik な過程の終わりを成すのは Lacan が分離と呼ぶ事態であり、そこにおいて、精神分析家はゴミとして廃棄され、そして、それによって分析者の自殺は回避される、と言いました。

後から気がつきましたが、「分離において分析家 a が廃棄されるのは、分析者が自殺ないし他殺を実行することの身代わりである」ということは、イエスの十字架上の処刑と同じ意義を有しています。

イエスが十字架にかけられ、処刑されたのは、世の罪を背負ったからです。存在論的原罪をも、現に犯された罪をも含めて、イエスは、我々の身代わりとして、我々の罪を償い、我々を贖うために、処刑され、ゴミのように捨てられました。それは、我々を救済するためです。

それと同様に、分析家も、分析者の身代わりとして、分離という処刑において、ゴミとして廃棄されるのです。

分析者は、分析家の身代わり死によって、復活へ至ることができます。分離という死の引き受けは、分析の過程においては、分析家の身代わりを媒介にして為されます。それによって、分析者はみづから文字どおりに死を実行することを免れるのです。

律法と欲望についてですが、Lacan が律法 *loi* という用語で差し徴しているのは、道徳律 *la loi morale* のことです。道徳律は、一般的には「良心」と呼ばれています。良心の声は、しかし、あれやこれやと指図はしません。本当の良心の声は、無言です。

構造 $\frac{a}{\emptyset}$ において、声 *a* が無言の声であるとき、つまり、*zéro* である純

粹徴示素, 切れめ, 穴そのものである純粹徴示素であるとき, a は欲望 ϕ そのものを最も忠実に表します.

そのように忠実に表してはいなくても, 一般的に言って, 律法 a は欲望 ϕ を代表しています. 律法 a は欲望 ϕ の *métaphore* である, と言えます. その意味において, 律法 a 無しには欲望 ϕ を識ることはできません.

なぜ存在の真理は己れを顕そうとするのか?

この問いは, 「なぜ神は神自身を啓示しようとするのか?」と等価です. 答えは, 「神の愛のゆえに」です. 聖書において愛に関する最も本質的な命題は, 新約聖書第一ヨハネ書簡の「神は愛である」です. 神は愛であるがゆえに, 神は人間を愛するがゆえに, 人間に神自身を啓示する.

同様に, 存在の真理 ϕ は, 愛のゆえに, 己れを人間に示そうとします. それに対して抵抗を成すのは, a です.

症状は妥協の産物です. 己れを示そうとする ϕ に対する抵抗として, 症状 $\frac{a}{\phi}$ は機能します.

04 September 2014 : 神の愛と死の本能; Eros と Thanatos ; 性関係は無い; 非神秘主義者フロイト; 三島由紀夫と音楽; 『憂国』と Liebestod.

昨日, 「なぜ存在の真理は己れを顕そうとするのか?」という問いに対して, 「それは神の愛のゆえだ」と答えました. そのくだりを blog のためにコピーしながら, 神の愛と死の本能との関連に気づきました. そこで, 昨日の twitter の表題において「神の愛と死の本能」という表現を先取りしました.

Freud が死の本能と呼んだものは, 我々の学素では Φ です. Lacan の概念では, 欲望です.

キリスト教においては, 神は愛であり, 神は人間を愛しています. そして, 神を愛するよう人間に命じています. それは, 人間を救済するためです. つまり, 人間が死を通過して永遠の命へと復活するためです.

Freud は Eros (Libido) と死の本能(破壊本能)とを二元論的対立において捉えましたが, そのことは, Freud には本能の本質が見えていなかったことを証しています.

Eros (愛) と死の本能とは, 同じひとつのものです. Eros の満足も死の本

能の満足も, Φ における 他 A と主体との communion の実現に存します.

こう述べることによって, 学素 Φ の本来の定義へ立ち戻ることになります.
つまり, Φ は「性関係は無い」の学素です.

他 A と主体との communion (交わり) は, 不可能な性関係です. 不可能とは「書かれぬことを止めぬ」ものです. Φ — 抹消されたファロス — は, 書かれぬことを止めない性関係の signifiant です.

Freud は, 死の本能に破壊的なものをしか見ることができませんでした. そのことと, Freud が去勢複合を克服不可能な行き詰まりと見なしたことと — 両者は相関的であることが, 今やわかります. いずれの場合も, Freud は不可能の手前にとどまったのです. 不可能を実在として, ex-sistence として引き受けること, 死を覚悟すること, 死を通して永遠の命へと復活すること — そこへ至る道は, Freud には閉ざされているようにしか見えなかったのです.

Freud は Romain Rolland への書簡のなかで, 宗教的な感覚の欠如を告白しています. この場合, 宗教的な感覚とは, 神秘体験の感覚と言い換え

でもよいかもしれません。Freud はもうひとつ、音楽を楽しむ感覚の欠如をもどこかで告白しています。両者は関連していると思われます。

Romain Rolland は宗教的感覚を「水の中に浮遊している感覚」と呼んでいます。目を閉じて音楽に本当に没入するとき味わう感覚は、まさに水中浮遊の感覚です。

音楽好きの者は、それを快と感じます。ところが、それを不安に感ずる人もいます。三島由紀夫がまさにそうでした。彼は随筆のどこかでそのことを告白しています。BGM のようなものは別にして、真剣に音楽を聴こうとすると、彼は何とも落ち着かない気分になってしまったそうです。

そのことを知っていると、三島の『憂国』の映画の切腹の場面で *Tristan und Isolde* の *Liebestod* が延々と流れているのがいっそう有意義に聞こえてきます。

三島は切腹ごっこが好きだったそうです。彼の同性愛相手のひとりが証言しています。しかし、『憂国』においては、三島は「ごっこ」を乗り越えて、真剣に死を引き受け、死を覚悟するに至りました。そのとき、彼にとっては、最も強く不安を惹起する Wagner こそがふさわしかったのでしょう。

05 September 2014 : 『ラカンの暗黒伝説』; 精神分析抜き「ラカン理論」,
「ラカン思想」は無い; ハイデガーとナチズムとニヒリズム; 精神分析にとつ
ての存在のトポロジーの根本的意義.

Lacan の詳しい伝記としては、今までは Roudinesco のものしかありませ
んでした. Roudinesco は精神分析の歴史を専門に研究していると自称し、
今月 11 日には Freud の新たな伝記のようなものを出版します.

精神分析の歴史についての彼女の著作は、逸話の寄せ集めでしかありま
せん. それはそれで興味深い場合もありますが、それによって精神分析の
本質が捉えられるわけではありません.

Roudinesco の Lacan に関する記述は、彼女の Lacan に対する陰性転
移のせいで、歪んだものになっている、というのが、École de la Cause
freudienne, つまり, Jacques-Alain Miller に近い立場の者たちの間での評
価です

ECF のメンバーのひとりによる Lacan の新たな伝記がもうすぐ出版されま
す. 多分、来週中には入手できるでしょう. 表題は『ラカンの暗黒伝説』で
すが、要するに、Roudinesco による誹謗中傷に対する反論の書であるよう

です。

Lacan は精神分析について思考し、精神分析について教えました。それは、精神分析の本質を明らかにし、それにそって精神分析の実践が行われるようにするためでした。つまり、精神分析が単なる心理学や人間科学のひとつに墮したりすることのないようにするためでした。

Lacan の新しい伝記が出るので、日本語の Wikipedia で「ラカン」の項目がどう書かれているかを見ってみました。Lacan の教えの諸項目について記述が不十分であることはいたしかたないでしょう。しかし、伝記について全く事実と異なることがいまだにまかり通っているのには驚きました。それは、Lacan が *École normale supérieure* で哲学を学んだ、という記述です。

わたしの記憶が正しければ、この誤った記述は『エクリ』の著者紹介欄に見出されます。誰がそれを書いたのかは不明です。

『エクリ』の第一分冊が弘文堂から出たのは 1972 年です。今から 42 年前です。どうしてそのような誤りが訂正されないままになっているのか理由は不明ですが、それは、日本における Lacan の理解の程度を示すひとつの指標にはなっているでしょう。

話がそれてしまいました。

Lacan 理論というようなものはありません。Lacan の思想というようなものもありません。Lacan が精神分析について思考し、我々に教えたことがあるだけです。精神分析抜きで Lacan 理論なり Lacan 思想というようなものは無いのです。Lacan の主体の概念、Lacan の言語理論というようなものを精神分析から切り離して論ずることは nonsense です。Lacan は精神分析の主体について問い、精神分析におけることばと言語の機能と場を論じたのです。

Lacan がさまざまな分野の概念を利用し、さまざまな文学作品や芸術作品に言及するのは、あくまで精神分析に関して問い、思考するためであって、自分の専門外の領域に外から口出しするためではありません。

それに対して、大学人がよくやるのは、自分の専門分野の概念なり理論なりを用いて、自分の専門外の対象や一般的社会現象などについてわかったようなことを言うこと、つまり、評論です。

Pierre Bourdieu の *L'ontologie politique de Martin Heidegger* という著作

があることを教えていただきました。Bourdieu はまったく読んだことがなかったもので、安い中古本を手に入れました。まだ全体を通して読んではいませんが、最後から2 ページめのこの文が目にとまりました :

la pensée de Heidegger est un équivalent structural dans l'ordre philosophique de la révolution conservatrice, dont le nazisme représente une autre manifestation.

「ハイデガーの思想は、保守革命〈ナチズムは、其のもうひとつほかの顕現を表している〉の哲学領域におけるひとつの構造論的等価物である。」

保守革命は、戦間期のドイツのひとつの思想潮流で、一部の歴史家に言わせると、ナチズムの思想的源だそうです。Heidegger の思想も、その保守革命の哲学における等価物だ、と Bourdieu は論じています。

Bourdieu は社会学者です。なぜ彼が Heidegger と nazisme について論ずる気になったのかは不明です。

いったい彼は、Heidegger が何について問い、思考していたのか、本気になって考えてみたのでしょうか？そして、nazisme の本質については？

もし本当にそうしていたのなら, Bourdieu の主張, つまり, Heidegger の思想と nazisme とは共通の根を有している, という指摘は正しいと言っても良いかもしれません. その共通の根とは nihilisme です.

Nazisme は nihilisme の産物です. そして, それは我々が今生きている社会にも当てはまります. Nazi はユダヤ人から人間的尊厳を奪い, 虫けらのように抹殺しました. 資本の言説と市場経済に支配された今の社会において, 人間は「人材」つまり「人的資源」として同様に扱われ, 使い捨てにされています.

先日, 或るオーストラリア人夫婦がタイ人の代理母に子を産ませながら, 先天障害を理由にその子の引き取りを拒否した, というケースがマスコミで報道されていました. 彼らは, 子を, 尊厳あるひとりの人間としてではなく, 自分たちの幸福のための道具, 材料としてしか見ていないのです.

Nazisme も今の社会も, nihilisme という観点からは同様です.

Heidegger は, nihilisme の本質に関して問い, 思考しました. それは, nihilisme を Nietzsche のように意志 — 力への意志 — によって覆い隠してごまかすのではなく, nihilisme を根本的に超克するためです.

Nazisme は、意志によって nihilisme を克服したかのようにふるまうために Nietzsche を利用しました。Heidegger は、その欺瞞に気づいていました。だからこそ彼は、Nazi 体制下で Nietzsche に取り組む一連の講義を続けたのです。

そして Heidegger は、nihilisme の本質は存在そのものに存することを見極めました。存在, das Sein, \varnothing こそが、nihilisme の本質にほかなりません。

Heidegger の思考は、存在に関して問うことに存します。

社会学者 Bourdieu にとって Heidegger と nazisme とが同じ根を持っているように見えたとすれば、その理由は存在そのものにあると言えるでしょう。

Lacan は、Heidegger の存在のトポロジーが精神分析にとって決定的に重要な意義を有していることに気づきました。存在が、去勢不安と本質的な関連を有していることを察知しました。精神分析の終わりにおいて去勢複合が成す行き詰まりを突き抜けることと、nihilisme の超克とが本質的に同じことである、と Lacan は見抜いていました。

それは, Lacan が評論家ではなく, 精神分析という実践にかかわっていたからです.

06 September 2014 : パスについて；精神分析に「教育分析」と「個人分析」の区別は無い；「精神分析家である」は、ひとつの存在論的規定であり、社会学的規定ではない。

幾つか御質問をいただいています。まず *passee* パスに関する御質問から取り組んでみましょう。

用語の翻訳としては、音読みで良いでしょう。「パス」という単語は、異なる意味においてですが、日本語のなかに定着してもいます。

パスは、精神分析家の資格認定のために Lacan が提唱した手続きです。

Lacan は 1964 年に *École freudienne de Paris* を設立しました。東京ラカン塾 *École lacanienne de Tokyo* の名称は EFP になりました。ですから、今、EFP は「パリフロイト塾」と訳してもよいでしょう。

École という名詞は、ひとつの組織体を成すものとしては、通常、「学校」です。目的意識を以て組織化されていない場合は「学派」と訳されたりもしますが、Lacan は明確な目的を持って EFP という組織を作りました。

その目的とは、精神分析家の養成です。そして、精神分析家を養成することは、とりもなおさず、精神分析を一般社会に広める効果を持ちます。

EFP は、精神分析家養成の学校なのです。幾人かのフロイト派「精神分析学者」の学術的な仲良しグループのようなものを思わせる「パリフロイト学派」ではありません。

ただ、*école* を「学校」と訳しても何となくサマにならないので、ひと工夫必要でした。「塾」は、子供の通う学習塾ではなく、政治家養成の勉強会を「...塾」と呼ぶのになりました。

École 「塾」とはいっても、始めから精神分析家になろうと明確に意図している人々だけを受け入れるわけではありません。なぜなら、Lacan の観点においては、あらゆる精神分析治療は、開始時の目的意識にかかわらず、本質的に言って、精神分析家の養成をめざすからです。

精神分析の患者を Lacan は *analysant* と呼びます。直訳すれば、「分析する者」です。能動形です。

通常の医療においては、患者は受動的立場にあります。*patient* という語

は「被る」という意味の動詞 *pâtir* に由来します。

しかし、精神分析においてかかわっているのは、精神分析の主体です。

主体だから能動的というわけではないのですが、ともあれ、精神分析治療においては「患者」はみづから語りますし、自由連想においてみづから解釈もしますから、単純に受動的では全くありません。

というわけで、英語圏では *analysand* (分析されるべき者)という受動的意味の表現が用いられているのとは異なり、Lacan は *analysant* (分析する者)という能動的意味の語を「患者」を指すのに用います。「分析者」と訳しましょう。

分析者が始めから分析家に成ることを目指す場合もありますし、そうではなく、とりあえず症状の苦痛が緩和されればよいと思って分析を始める場合もあります。

英語圏では、前者を「教育分析」とか *training analysis* と呼び、後者を *personal analysis* と呼んで、峻別しています。

training analysis の条件は、一般の personal analysis の場合よりも段違いに厳しいのです。

たとえば日本人が London に留学して教育分析を受けることを考えてみましょう。trainee として受け入れられるためには、まずは、英語が native と同様にできなければなりません。しゃべることも聞くこともです。それから、几帳面であり、知的にも道徳的にも優れていなくてはなりません。また、指導に対して従順でなければなりません。勝手に Lacan に興味を持ったりしてはなりません。

要するに、かなりのカタブツ、保守的なエリートでなければならないわけです。そのような trainee が同様の性格の training analyst から長年にわたり分析をうければ、できあがるのは、強迫性格の凝固のようなものです。これでは、精神分析が衰退していくのも無理はありません。

Lacan は、そのような形式的な区別、差別を一切とりはらいました。あらゆる精神分析は教育分析です。なぜなら、精神分析の最終目標は、分析者が分析家に成ることだからです。結果的に分析者がさまざまな事情で分析家に成らない場合でも、その分析過程を導く分析家は、分析者が分析家に成ることを目標として見定めています。

この「成る」を, Lacan は, 分析者の立場から分析家の立場への passage 「移行」と呼んでいます. そして, この passage を事後的に証明し, 確認するための手続きを, Lacan は passe と名づけました.

この passage は, 存在論的なものです. 分析家の言説の構造で言えば, \$ の立場から $\frac{a}{\phi}$ の立場への移行です. 分析家の言説において右上の他者の座に位置する \$ は, 「無意識において何かが語る」言葉を聞く者です. それに対して, $\frac{a}{\phi}$ は, 主体自身の存在の真理を守護することにおいて本自的に実存する者です.

この存在論的移行を証明し, 確認することは如何にして可能か? と Lacan は問いました. その答えを見つけるために EFP において彼が実験的に始めたのがパスの手続きです.

実際に行われることはどういうことかということ, 分析経験を終えたとみづから思う者が, パスに立候補します. 候補者は passant と呼ばれます. 「パスをする者」です. passant は, passeur と呼ばれる者に, 自分が分析のなかで経験したこと, 成果として得たこと, 等々を語ります. passeur という単語の意味は, 通常フランス語のなかでは, 河を小舟などで渡る渡し場で通行

人 *passant* を小舟で運ぶ「渡し守」です。 *passeur* は、分析経験の終わりのまじかである *analysants* のなかからクジで選ばれます。 *passant* の話を聞いた *passeur* は、その話を、パス審査員たちへ伝達します。それにもとづいて、審査員たちは、 *passant* において *passage* が実際に起きていたか否かを判定します。確かに *analysant* から *analyste* への移行が成起していたと判断されたなら、その者は *Analyste de l'École* (AE) と認定されます。存在論的な意味で分析家である、と *École* により認定されたわけです。

EFP においては、パスにおいて *passant* は何を語るべきか、 *passeur* は何を聴き取るべきか、パス審査員たちはどのような基準で判断すればよいか、あらゆることが手探りでした。皆、混乱し、困惑していました。Lacan としても、分析者から分析家への移行に関して、期待していたような証言がなかなか得られませんでした。

しかし、 *École de la Cause freudienne* (ECF) と *Association mondiale de la psychanalyse* (AMP：世界精神分析協会) においては、Jacques-Alain Miller の理論的な指導のおかげで、パスの手続きは機能しています。幾人もの人が *Analyste de l'École* の認定を受けています。

ともあれ、パスは、精神分析家養成機関による分析家の認定にかかわるも

のです。そのような認定は不必要だと考える人々もいます。

また、上の説明から察せられるように、ひとつの *École* のなかでパスの続きを実施するには、それなりの人数の分析家とそれなりの人数の分析者とその *École* のなかに既に存在していなければなりません。もし仮に東京ラカン塾でパスを施行しようとするなら、事前に幾人かの分析家が塾メンバーとなっていなければなりません。彼らは、存在論的意味において分析家であると認定されたわけではありませんが、分析家の言説の構造において分析家として機能し得る限りにおいて分析家であると見なされます。それは、Freud が、存在論的に分析家であったわけではないが、分析家として機能し得ていたことと同様です。ECF では、ひとりの *passant* の証言をふたつのパス審査カルテルで検討します。カルテル *cartel* と Lacan が名づけた勉強会のようなグループは、四人のメンバーと *plus un* と呼ばれる別格メンバーと、計 5 人で構成されます。ふたつのカルテルのメンバーは計 10 人です。したがって、パスを実施しようとするなら、事前に最低 10 人の分析家が必要になる、とあってよいでしょう。

精神分析家であるということは、存在論的な規定です。社会学的な規定ではありません。つまり、精神分析をなりわいとしている者、精神分析で生計を立てている者が精神分析家である、というわけではないのです。

精神分析家とは、分離において死に至り、そこから復活した者です。そのような経験をした者が、その後、実際に職業的な精神分析家となるかどうかは、どうでもよいことです。

実際、フランスにおいても、精神分析家は精神分析専業であるとは限りません。精神分析家であること以外の「本業」を持っている場合の方がはるかに多いと思います。彼らの「本業」は、精神科医や臨床心理士に限りません。わたしの友人のひとりには建築士でした。そのような本業で生計を立てつつ、自宅などで精神分析の臨床を行っている分析家が、フランスではたくさんいます。そのような事態は、日本でも十分実現可能だろうと思います。

07 September 2014 : 去勢について; 実在, 徴象, 影象.

去勢の概念について御質問をいただいています. 精神分析において去勢と言う場合, それは, 徴示素としての *phallus* に関わります.

Freud は, 去勢複合を, 精神分析治療において最終的に克服不可能な行き詰まりを成すものと考えています. 不安のせいで, そこから先へは進めない地点に到達する. 精神分析はそこで終わらざるをえない, と Freud は考えます.

とすると, 去勢不安は精神分析によっては克服不可能である, というのでしょうか?

その問いへ進む前に, *castration symbolique* という表現について考えてみましょう. 既成の日本語訳では多分「象徴的去勢」と訳されているでしょう.

symbolique という表現は, 勿論, *symbole* に由来します. *symbole* は「象徴」ですが, しかし, *logique symbolique* は「象徴論理学」ではなく, 「記号論理学」です.

記号論理学は、別名、形式論理学です。形式論理学は、通常の言語にと
もなう曖昧さを取り除くために、それ自体としては意味を持たない幾つかの
記号を用います。Lacan は形式論理学にならって、学素 *mathème* を精
神分析へ導入しました。

Lacan が *symbolique* と言うとき、それは、*imaginaire* ならびに *réel* との
相関においてです。

L'*imaginaire* は *image* 影像の位です。「影像」は三島由紀夫の文章のな
かで見かけた語です。「映像」よりも適切な表現だと思えます。なぜなら、
imaginaire という語には、*réel* 「実」に対して、「虚」という意味があります。
たとえば、*real number* 「実数」に対して、*imaginary number* と言えば、「虚
数」です。「影」の字は「虚」の意味を有しています。

Lacan の用語 *l'imaginaire* は従来、「想像界」と訳されています。

「界」は、Lacan が *l'ordre imaginaire* ないし *l'ordre de l'imaginaire* と言う
ときの *ordre* の訳語のつもりでしょう。*ordre* という語も訳しにくい語です。
この場合、「秩序」ではありません。「次元」と訳したくなりますが、*dimension*
と *ordre* とを訳語のうえでも区別することができねばなりません。結局、「位」

(くらい)と訳してみました. *ordre* は「位階」と訳せることにもとづきました.

Lacan が *le symbolique, l'imaginaire, le réel* の三つの位の概念を措定したのは、精神分析においてかかわること、つまり、構造 $\frac{a}{\Phi}$ に関して思考するためにはそれら三つの位を識別する必要があるからです.

Lacan は、従来の精神分析が *imaginaire* な関繋のなかに捕らわれてしまっており、それがゆえに行き詰まってしまっている、ということに気がつきました.

つまり、従来の精神分析は、構造 $\frac{a}{\Phi}$ 全体を見ず、そこにおける *a* を、しかも *imaginaire* なものとしての *a* をしか見ておらず、したがって、*imaginaire* なものとしての *a* をしか扱っていなかったのです.

名詞 *l'imaginaire* を「影象」と訳し、形容詞 *imaginaire* を「影象的」と訳します. *image* を「影像」とするなら、*imaginaire* は「影像的」ですが、Lacan の用語の翻訳としては、「影像的」よりもより抽象的(ここに象が用いられているように)な語にしたかったのです. そして、「仮象」という語との関連も明らかにしておきたかったのです.

symbolique を「徴象」、imaginaire を「影象」とすることによって、両者の「仮象」semblant との関連が明白になります。

構造 $\frac{a}{\phi}$ における a を imaginaire なもの、影象的なものとしてしか捉えられないと、その構造に含まれる jouissance imaginaire を打開することができません。Narcisse のように image に魅せられたままとってしまい、身動きがとれなくなってしまうからです。そのような inertie 「惰性」を打ち破り、精神分析の過程を活性化するために、Lacan は、imaginaire を相対化し得るほかの二つの位、symbolique と réel とを導入します。

とりわけ、symbolique の概念と signifiant の概念は、構造 $\frac{a}{\phi}$ が完全に固定化されてしまったものではなく、解体可能なものである、と考えるために必須のものです。そのことを Lacan は、Saussure の「恣意性」の概念に学びました。Saussure は、signifiant と signifié とのつながりを「恣意的」なものに見なします。つまり、両者のつながりは全く固定化されたものではなく、切り離され得るもの、分離可能なものなのです。

symbolique を「徴象」と訳すのは、symbolique と signifiant, signe との本質的な関連のゆえにです。signifiant は signe に由来します。signe は「しるし」です。「記」や「印」ではほかの意味の語とまぎらわしいので、「徴」の

字を用います。signe を「徴」と訳すのは、渡辺守章氏の文章で見かけました。「象」の字については先ほど説明したとおりです。結果的に、「象徴」をひっくり返して「徴象」にしたかのようになっていました。

「象徴」とは、何らかの意味を有するひとつの影像です。言い換えると、ひとつの記号として機能し得る影像です。象徴は、したがって、影象的かつ徴象的です。

Lacan の用語としての symbolique を「象徴的」と訳すのを避けるべきであるのは、それがゆえにです。Lacan の symbolique は, imaginaire 影象的なものと厳密に区別されねばなりません。「象徴的」と訳したのでは, imaginaire との区別が曖昧になってしまいます。

castration symbolique に戻りましょう。徴象的去勢とは, signifiant としての phallus が symbolique の位, すなわち, signifiant の宝庫としての他 A の場処に欠けている, ということです。

それが, Freud が「母親における phallus の欠如」と呼んだ事態の Lacan による公式化です。

Lacan は、「去勢の影象的関数」を $(-\varphi)$ と書きました。しかし、それでは、書かれぬことをやめない signifiant としての phallus, つまり, 不可能な signifiant としての phallus, 実在としての phallus の学素にはなりません。ですから, φ という学素を新たに考案しました。

さて, 徴象的去勢と forclusion との関連は如何? この本題は明日論ずることにしましょう。

08 September 2014 : 精神分析家であることとキリスト者であること；真理は虚構の構造によって己れを顕す；欠如について；閉出 (forclusion) について.

精神分析の創始者 Freud が信仰を持っていなかった限りにおいて、わたしの精神分析家としての立場とカトリックとしての立場は相互にどのように関連しているのか、という内容の御質問をいただきました.

正確に言うと、質問者の方は「Freud は無神論者である」と述べているのですが、信仰を持たないことと無神論者であることとは必ずしも重なり合いません. 確かに Freud は、宗教的信念は一種の幻想である、と主張しています. しかし、彼は無神論者だったのでしょうか？

そう問う余地はあります. なにしろ、彼の最晩年の著作のうち最も大著であるものは「モーゼと一神教」にかかわっているのですから. 全く神に無関心である人間がそのような主題に関して真摯に思考しようとするのでしょうか？

ともあれ、(存在論的に言って)精神分析家と聖人とは同じものだ、と Lacan が指摘している限りにおいて、精神分析家であることとカトリックであることとは相互に矛盾しない、とすることができるでしょう.

キリスト教の信仰を持っているということは、聖書に書かれてあることを文字どおりそっくりそのまま信じているということではありません。

確かに、USA のプロテスタントの一部、fundamentalist と呼ばれる会派のなかには、現代物理学の宇宙論や生物学の進化論を否定する人々もいます。彼らは、聖書に書かれてあることを字義通りに信じています。しかし、それは、カトリックのなかでは一般的な態度ではありません。

Freud は、宗教は幻想だと言いました。聖書に書かれてあることは作り事だ、というわけです。「作り事」とは、言い換えると、フィクション fiction です。幻想や fiction は、全く単純に空想的なものであり、まともに相手にする価値のないものでしょうか？もしそうであったなら、精神分析家は臨床において患者たちが述べる幻想に耳を傾けることはなかったでしょう。

精神分析において、幻想とは何か？Fiction とは何か？それらは虚構であり、仮象であるとしても、真理を代表する仮象なのです。

Fiction の構造は、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ にほかなりません。

幻想の学素 ($\$ \diamond a$) も構造 $\frac{a}{\phi}$ の学素と等価です(このことは、後日説明します).

存在の真理は、仮象を通してしか現れ出ません.

キリスト教の信仰とは、聖書に書かれた作り話をそのものとして信じ込むことではなく、聖書が物語る神話によって代理されている存在の真理をみづからの存在の真理として生きることであり、存在の真理において実存することです.

存在の真理において実存することは、聖人と精神分析家に共通の存在論的構造です.

昨日途中まで論じた *castration symbolique* と *forclusion* のことに戻る前に、コメントをひとついただいていますので、それに関連して、Lacan が *Séminaire IV* において展開している「欠如」の表のことに触れましょう.

1956-57 年の *Séminaire IV* において Lacan は Freud の症例 Hans 少年, 5 歳の男児の馬恐怖症の症例を取り上げ直しながら、欠如の問題を *symbolique, imaginaire, réel* の三つの位の観点から見直しています.

1956-57年という時点は、Lacan の教えにおいて豊かな展開がくりひろげられる時期ですが、それだけに、Lacan の話について行くのになかなか苦勞します。後年の学素を用いての形式化もまだ始まったばかりです。ですから、50年代のLacanの言っていることの言葉じりひとつひとつのこだわりすぎていると、全体を見失い、道に迷ってしまうことになります。

そうならないためにわたしが最も基本的な足がかりにしているのが、Lacan が1969年に提唱する分析家の言説の構造です。分析家の言説の構造を踏まえることによって、1930年代の「超自我精神病」のLacanから、1970年代のボロメオ結びのLacanに至るまで、その一貫性をおおまかに展望することができます。分析家の言説の構造は、Lacanの教え全体の結びめである、と行うことができます。

1956-57年の時点においても、manque「欠如」という用語が差し徴しているのは、つまるところ、manque à être 存在欠如です。つまり、我々の学素では \emptyset です。

去勢とは、昨日述べたように、他 A の場処のなかの欠如です。他 A の場処には signifiant が欠けている。この徴示素欠如こそ、母親に欠けてい

る phallus として Freud が見定めたものの真理です.

以上をふまえて Séminaire IV の表を見るならば, 去勢とは signifiant phallique, つまり phallus symbolique の欠如であり, それに対して, phallus imaginaire (- φ) は phallus symbolique の欠如を代補する客体はです.

1956-57 年の時点では, a は影象的な自我と他者の学素であり, 客体 a としてはまだ登場しません.

表の右の列の objet は, 欠如の穴に位置づけられる客体です.

客体 a の代わりに phallus imaginaire を以て, 去勢の構造を $\frac{(-\varphi)}{\varphi}$ と書くことができます.

興味深いのは, Séminaire IV で Lacan が père réel 「実在的父」と呼んでいるものです. それは, 現実において父親としてふるまっている人物のことではありません. そうではなく, 「実在的父」は, Lacan が存在の真理の座に位置づける「父の名」に相当するものではなかろうかと思われま.

Séminaire IV の表についてはまだまだ検討すべきことがたくさん残っていますが、昨日中断した castration symbolique と forclusion の問題に戻りましょう。

まず、forclusion の概念も一義的ではない、と言わねばなりません。

『あらゆる精神病の治療にとって前提的なひとつの問いについて』において提示された図 schéma I (*Écrits*, p.571) の P zéro は「父の名の閉出」の穴であり、 Φ zéro はそれに対応する phallus の欠如の穴です。

それにとつて言えば、 ϕ は父の名の閉出の関数(相関者)である、と言えるかもしれません。

それに対して、 ϕ そのものが signifiant phallique の閉出 forclusion であると言ってよいだろうか？ 閉出は、或る徴示素が決して徴象の位に記入されることがない、ということだ、と定義するなら、書かれぬことをやめない徴示素 phallus : ϕ についても、その徴示素は閉出されている、と言ってよいでしょう。用語の濫用とは言えないと思います。ただ、forclusion 「閉出」を如何なる意味で用いているかについて説明は必要です。

09 September 2014 : 死の主体化と存在の自有 ; アメリカ的非霊気性 ;
sicut palea ; 精神分析における精神病発症の危険性.

あらかじめおことわりしておきますが, 11 日木曜日は藤田博史先生のお誘いによりフジタゼミに参加しますので, この Tweeting Seminar はお休みします. Facebook account をお持ちの方は藤田先生のページを御覧ください.

2002 年のわたしの事件に関してコメントをいただきました. 発言者の了解のもとに retweet します:

“はじめて質問します. 単刀直入にいえば, 小笠原さんに関心をもつひとのかなりの割合は, 「わたしと分析をしようとする人には, 当然, わたしの事件のことを事前に知っておいていただかなければなりません」をめぐっての筈です. 以前だれかの問いにいやがらせとおっしゃていましたが, やはりツイッターでセミナーをする上でも, この語りにくいことをもうすこし触れることはできないものでしょうか. 『わたしが「患者と恋愛関係」に陥ったとの御指摘ですが, それは事実ではありません. 「おがさわらクリニックにかつて通院していた女性」です. 当時, 治療関係には既にもありませんでした. しかも, その女性は実際には, 精神科医療を必要とする厳密な意味での病者

ではありませんでした。』恋愛関係なしにあのようなことが起こるのは、わたしには信じられません。もしこの応答で「恋愛関係」があったとあれば、それなりに納得したのですが、小笠原さんが批判的に言及したアレンカ・ズパンチッチには次のような言葉があります:「汝を生み出した行為の内なる死の欲動を、決してしらばくれることなしに汝自身のものと認めよ」。やはり存在論的穴などを語る上でこれは必要不可欠なことではないでしょうか。”

引用されているわたしの発言においてわたしが否定したのは「恋愛関係」ではなく「患者」です。「恋愛関係が無かった」と否認したことは一度もありません。

「その女性がそもそも精神科治療を必要とはしていなかったとするなら、何故彼女は受診したのか」についての説明は御容赦願います。また、わたしの彼女に対する愛に関する具体的な説明も、御容赦願います。

第三者の方々には、ただ、わたしは2002年の事件のために殺人罪で懲役9年の有罪判決を受け、その刑も満了した、という事実だけを知っておいていただきたいと思います。

引用された Alenka Zupancic の言葉については、彼女の基本的な考え方

はいまだに心理学的である, ということを指摘しておきたいと思います.

問題は「死の欲動を自分自身のものと認める」ことではなく, むしろ, このことです: つまり, 人間は, Freud が Todestrieb 「死の本能」と呼んだもの, つまり, Heidegger が Seyn と呼んだもの, つまり, das Sein, 存在が existieren し得るように, 解脱実存し得るように, 存在に自有 (ereignen) されるがままに実存すべきである.

それがいったい如何なることであるのかは, twitter で手短かに説明し得ることではありません. 未完の『ハイデガーとラカン』で論じて行きたいと思えます.

もうひとつ御指摘をいただいています. Louis Breger (1935-) の 2000 年の著作 *Freud : Darkness in the Midst of Vision* にこう述べられているそうです:

“とりわけ興味深いのは, ナチスが彼の故国を破壊し, ユダヤ人にとって想像しうる最も残酷な迫害を及ぼしていた 1930 年代の終わりに, フロイトがモーゼと古代エジプトについて書いていたということである. 空想された古代世界への逃避は, トラウマに対処するフロイトの最も古い手段のひとつだっ

た。(中略)フランスの分析家のルネ・ラフォルグという友人が 1937 年に彼を訪ね、オーストリアから退去するように助言したが、それに対してフロイトは、「ナチスだって、私はそんなものは怖くないのです。私の本当の敵と戦うために力を貸してくれたまえ」と応えた。ラフォルグが驚いて、それはどの敵のことかと尋ねた。するとフロイトは、「宗教、ローマカトリック教会」と答えたのである。ずっとそうだったのかもしれない。”

Ernest Jones が書いた Freud の伝記のなかには、1937 年に René Laforgue が Freud を訪問したと明記はされていません。代わりに、1937 年 2 月終わりに Freud は Marie Bonaparte にこう言ったそうです：

“事態は、終わりの始まりのように思われる、ということは否認しようがない。しかし、ここ (Wien) で 辛抱するしかない。カトリック教会の保護のなかに安全を見出すことは、いまだに可能であろうか？ 誰ぞ知る？”

Wikipedia では Louis Breger は psychologist, psychotherapist と記述されています。ただ、California Institute of Technology の Psychoanalytic Studies の名誉教授という肩書きを持っています。

メッセージをくださった方が既成の日本語訳において引用してくださった箇

所のなかのこのくだりは、いかにもアメリカ人的です：“ナチスが彼の故国を破壊し、ユダヤ人にとって想像しうる最も残酷な迫害を及ぼしていた 1930年代の終わりに、フロイトはモーゼと古代エジプトについて書いていた。空想された古代世界への逃避は、トラウマに対処するフロイトの最も古い手段のひとつだった。”

1937年、Freud は 81 歳です。口腔内の癌とその再発のためにそれまでに何回もの手術を受けてきました。勿論、完治はしていません。自分の父親や兄が死んだ年齢にも達しました。Freud は、死をまちかに感じており、死を覚悟していました。

存在事象にのみ目を奪われがちなアメリカ人には、当時の Freud の状況は、死を覚悟したこの老人の最後の努力は、「空想世界への逃避」、いわゆる現実逃避であるようにしか見えないわけです。

聖 Thomas Aquinas (1225-1274) は、中世最大の神学者で、*Summa Theologica* 『神学大全』と呼ばれる著作集を残しました。今でも神学者は必ず彼の業績に言及します。ところが彼は、死の直前、自分の仕事は *sicut palea* 「塵芥のようなものだ」と言い残したと伝えられています。

わたそがこの *sicut palea* を知っているのは, Lacan がそれをどこかで引用しているからです.

神の偉大さの前では, あるいは, 死という絶対的な支配者の前では, 存在事象は塵芥のようなものだ.

Freud もそう思ったでしょう. ですから, Nazi が彼の業績と彼自身とを抹殺しようとしているとき, 彼は, そんなものを恐れてはいない, と言い切れたのでしょう.

真に取り組むべき相手は, 神そのもの, 死そのもの, つまり, 存在, \emptyset そのものです. そのためには, Freud にとって, 宗教とカトリック教会は邪魔ものにすぎませんでした.

Anticléricalisme と *athéisme* とは区別されなければなりません. 前者は, 聖職者たちと制度としての教会とを嫌い, それらに反対する立場です. だからといって, そのような立場の者が無神論者であるとは限りません. 両者はしばしば混同されていますが, 区別せねばなりません

Freud は *anticlérical* でした. それは, 制度化された教会組織が真の問題

を覆い隠していたからです。第二 Vatican 公会議以前の教会はそう批判されてもいたしかたありませんでした。だからこそ、第二 Vatican 公会議が必要だったのです。

Freud が『モーゼと一神教』で取り組んだのは、死せる父の問題です。つまり、実在としての父の名の問題です。それは、死を覚悟した者の必死の努力です。空想への逃避では全然ありません。先ほどの引用箇所は、Breger 教授のアメリカ人らしさを証言しているだけです。

もうひとつメッセージをいただいています。Lacan が 1975 年 11 月 24 日に Yale University で行った講演のなかから Zizek が次のような引用をしているそうです：

One should not push an analysis too far. When the patient thinks he is happy to live, it is enough.

原文はこうです : Une analyse n'a pas à être poussée trop loin. Quand l'analysant pense qu'il est heureux de vivre, c'est assez. (*Scilicet* 6/7, p.15)

英文を訳してみましよう:「分析を突きつめすぎてはならない。患者が自分

は生きていて幸福だと思えば、それで十分だ」。原文を訳してみましょう：
「分析は突きつめすぎるには及ばない。分析者が自分は生きていて幸福だと思えば、それで十分だ」。引用箇所を構成するふたつの文のうち最初のもの英訳は不適切であることがわかります。

文脈を考えてみましょう。直前に Lacan は何を言っているか？精神分析を終わりまで突きつめて行くとき、精神病の発症の危険性に対して十分に注意していなくてはならない、と Lacan は警告を発しています。「我々は非常に慎重であらねばならない」と彼は言っています。

USA での講演は、James Joyce についての *Séminaire XXIII Le sinthome* の一回目と二回目の合間に行われました。その séminaire において、Lacan はこう論じます：Joyce は、彼の娘が精神病患者であったことから推測されるように、潜在的に精神病患者である。彼の文学的創造は精神病症状と等価であり、それは彼の存在そのものである。そのような存在様態に至ることは、或る意味で、神経症者が到達し得る精神分析の終わりを凌駕している。

1953 年に Lacan は、「精神病患者は無意識の殉教者である」、つまり、精神病患者は無意識について証言する証人である、と言っています。殉教者は

列聖され, 聖人になります.

sinthome は symptôme 「症状」の古い正書法ですが, その発音は saint homme と同じであり, 要するに「聖人」です. Joyce le sinthome と言うことは, Joyce は聖人であり, 無意識の殉教者である, と言うことです.

聖人であること, 聖人の存在論的構造において実存すること, それこそが精神分析が目ざすべき地点ですが, しかし, その際, 精神病の発症の危険性には十分に注意せねばならない, という臨床的な忠告を Lacan は与えているのです.

10 September 2014 : 主体のくつがえし; Heidegger や Lacan を読むときは, 引用ではなく, 原文を読まねばならない; 無からの創造と死者のうちからの復活; 悦は, 実在のものではなく, 仮象のものである; 主体化と自
有.

Zizek の著作 *Less Than Nothing* は, 千ページを越える大著です. 彼はしゃべるときは機関銃のような勢いでしゃべりますから, 書くときも同じ調子で言葉を吐き出しまくるのでしょ

わたしが 1986-88 年に Paris にいたとき, Zizek もそうでした. 彼とは, Jacques-Alain Miller の講義や séminaire でよく会いました. もっとも, 直接会話しただのはごく僅かでしたが. 彼はとても sympathique です. 直接会って彼を嫌いになる人はいないでしょ

彼のあの強烈な顔立ちと猛烈な話し方は, 彼に演技力と表現力を与えています. 聞く者は, 彼に魅せられてしまいます. それは, いったみれば, 彼の武器です. それによって彼は, 聞く者をゆさぶり, 常識をくつがえしてしま

Heidegger の講義は, ちょうど同じような効果を聴講者に与えました.

Heidegger の外見は Zizek ほどの強烈さを持ってはいませんが、彼の話は聴衆をくつがえす効果を持っていたそうです。

精神分析家が精神分析において分析者に与えるくつがえしの効果を、哲人は彼の言説によって実現し得ます。おそらくそれは、Socrates 以来、真の哲人の特性でしょう。わたしにはとてもまねできないことです。

さて、昨日言及した Zizek の Lacan 引用は、*Less Than Nothing* の最終章、結論:「倫理的なものの政治的宙吊り」で為されています。結論の章だけ London 大学の社会人向けの部門の site から download できることを教えていただきました。Zizek はそこで教えています。

結論の章だけでも全部はとても読めないので、Lacan への言及のあるところだけつまみ読みしました。

或る箇所で Zizek は Freud のふたつの症例、Hans 少年とネズミ男とを混同しています。それは大したことではありません。

より重大なのは、Zizek は Lacan のテキストをみづから読み込んでおらず、もっぱら Jacques-Alain Miller の解説に頼っている、ということです。しかも、

Less Than Nothing において Zizek は, lacanien でも何でもない或る大学人の著作 *Le réel insensé : Introduction à la pensée de Jacques-Alain Miller* を引用してさえいます. 直接 Lacan を読む手間を省くために二重の仲立ちに頼っているのです.

これはいただけません. Zizek に会うことがあれば, ひとこと文句を言いましょ.

いや, その必要もないかもしれません. 先日 Zizek は剽窃の疑いをかけられ, 弁明しなくてはなりませんでした. なぜそんなことが起きたのかというと, 忙しい Zizek は自分で或る本を読む時間が無くて, 友人にその本の要約を依頼しました. その友人は, 或る雑誌に出ていたその本の書評をほとんどまるまる書き写しました. Zizek は, そのことを知らないまま, 彼の文章を, 彼の了解のもとに, 自分の著作にそのまま書き写しました. その結果, 雑誌書評を剽窃したと非難されることになりました. 手間を惜しんだので, そんなはめに陥ったのです.

Less Than Nothing においても, Zizek は自分で Lacan を読む手間を省いている. これでは本当の Lacan を読み取ることはできません.

ともあれ、しかし、Zizek の本に書かれてあることを読んで、わたしは、既にうすうす感づいていた Jacques-Alain Miller の Lacan 読解のひとつの問題点を、より明確に把握することができました。

それは、Jacques-Alain Miller は Lacan が言及している「聖人」の意義を全く捉えていない、ということです。

Jacques-Alain Miller によれば、Joyce に関する Séminaire の時期の Lacan が用いた「症状」 — それを Lacan は *sinthome* とも *symptôme* とも書きますが —、症状は、精神分析の過程において解釈不可能なものとして残った残渣である。

この説は、わたしも Jacques-Alain Miller の講義や講演で何度も聞いています。Lacan 自身、*reste*、残りもの、残渣という表現を用いています。

しかし、では何故 Lacan はわざわざ Joyce を取り上げたのか？ 芸術作品を創造する者としての Joyce を？

Lacan は、芸術的創造を論ずるとき、「無からの創造」 *creatio ex nihilo* という神学的概念を持ち出します。強調されるべきは、この *ex nihilo* です。

これは、復活に関する決まり文句:「死者のうちからの復活」 *resurrectio ex mortuis* を想起させます。創造は無から、復活は死から。

Joyce が作家であり、かつ、*sinthome*、つまり聖人である、ということは、無からの創造と死からの復活が同じ構造のものであることを踏まえて、初めて理解され得ます。

されば、*sinthome* としての症状は、単なる残渣ではありません。

「分析は、終わりまで突き詰められる必要は無く、分析不可能なものをカスとして残しておいて良い。それが Lacan が *sinthome* と呼んだものだ」という理解は間違っています。

分析の終わりは、Lacan が *séparation* 分離と呼ぶ死の場処、無の場処に至るまで突き詰められねばなりません。そしてそのとき初めて、無からの創造、死からの復活としての *sinthome* が成起するのです。

晩年の Lacan はそれ以前の Lacan の *radicalité* を失った、という Zizek の説 — その説は、Nicolas Fleury を介した Jacques-Alain Miller の説なわけですが —、その説は間違っています。

Lacan の思考は、1932 年の超自我精神病から晩年のボロメオ結びまで一貫しています。Lacan が最後は日和ったという意味のことを Jacques-Alain Miller が言っているとすれば、もうろくしたのは Miller の方でしょう。

Zizek の文章をつまみ読みして改めて思いましたが、Jacques-Alain Miller の *jouissance* の概念の理解も間違っています。彼は *jouissance* = *réel* と常々言っていますが、違います。

jouissance は、*plus-de-jouir* としての *le petit a* です。つまり、仮象のものです。

そう理解すれば、Lacan が Schreber について用いた *jouissance imaginaire* という表現も矛盾無く理解できます。

先日も言ったように、症状の構造は悦の構造です。つまり、 $\frac{a}{\Phi}$ です。

Zizek は Lacan が「真理をすべて知る必要はない」と言ったことを Lacan の日和見として引用していますが、これは、*Télévision* の「我れは真理を言う。ただし、すべてではない」の文脈において読むべきです。

Alenka Zupancic の言葉に関するわたしの批判について御質問をいただいています。彼女の思考は心理学的です。つまり、自我主体を中心にものごとを考えています。

精神分析においては、他 A を中心に考えねばなりません。より正確に言えば、 A を中心に考えねばなりません。言い換えれば、存在 \varnothing の深淵を中心にします。

我々が死の本能をわがものとするのではありません。

確かに Lacan は 1950 年代に *subjectivation de la mort* 「死を主体化する」という表現を使っています。

しかし、それは Heidegger も同様でした。Heidegger は『存在と時間』における思考から Ereignis 「自有」の思考へと転回しました。

我々が死を主体化するのではなく、 A が我々を自有する (ereignen) するのです。それが決定的な違いです。

質問者の方がおっしゃっているように、存在 ϕ が我々に向けてくる請求
に気づき、それに応じ、それに従順となること、それが自有です。

12 September 2014 : 他 A は、形而上学の超克のための足がかりを与えてくれる；異物について；引用はもとの文脈のなかに置き直されねばならない；深淵という基礎。

Alenka Zupancic の心理学的・社会学的思考について、わたしは彼女が「自我主体を中心に置いている」と言いました。その際の「自我主体」は、形而上学や観念論における伝統的な自我、主体、*das Ich*, *das Subjekt* のことです。彼女の思考は、形而上学の次元にとどまっています。

多分、英語でものごとを考えている限り、形而上学を超克するのは難しいでしょう。なぜなら、英語では Heidegger の言う *ontologische Differenz*, つまり、*Seiendes* 「存在事象」と *Sein* 「存在」との差異を思考することが困難だからです。

Sein は英語では *being* です。他方、*Seiendes* は、動詞 *sein* の現在分詞の名詞化ですから、やはり *being* と訳されざるを得ません。よほど工夫しない限り英語では両者を区別することができません。

しかるに、英語圏の論者の大部分は、そのような工夫をしようとはしません。なぜなら、彼らは英語が *almighty* な言語だと信じているからです。そして、

日本人の多くもその錯覚を共有しています。

形而上学を超克するための出発点は、自我主体を中心に据える思考をやめることです。そのために Heidegger は、神を中心に考える神学に準拠しました。

精神分析が準拠すべきところは無意識ですが、「無意識」という用語さえ使っていれば良いというわけではありません。

Lacan は「無意識は、他 A の言説である」と提起しました。無意識をそのように考えることによって初めて、形而上学的、心理学的自我主体の概念を克服する足がかりが得られます。

自我に関しては、形而上学的・心理学的自我の概念と、narcissisme との関連における自我の概念と、さらには Freud の第二トピックにおける自我の概念とを区別しなくてはなりません。この問題は、今は脇に置いておきましょう。

ただ、le moi narcissique は、Narcisse の神話が示しているように、死の本能をはらんでいる、とだけ言うておきます。つまり、ナルキッソスの自我の

構造は、 $\frac{a}{\Phi}$ にほかなりません。

次の話題に移ると、Freud が用いた Fremdkörper 「異物」という表現は、『ヒステリー研究』の予備報告（1893 年）に見出されます。そこにおいて Freud は、「心的外傷、ないしその想起は、異物〈其れは、体内への侵入から長時間たった後も、現在的に作用する因子として効果を持つ〉のように作用する」と述べています。

我々は、この「異物」を $\frac{a}{\Phi}$ と捉えることができます。ただし、そこにおいて a は影象的・徴象的仮象であって、純粹徴示素ではありません。

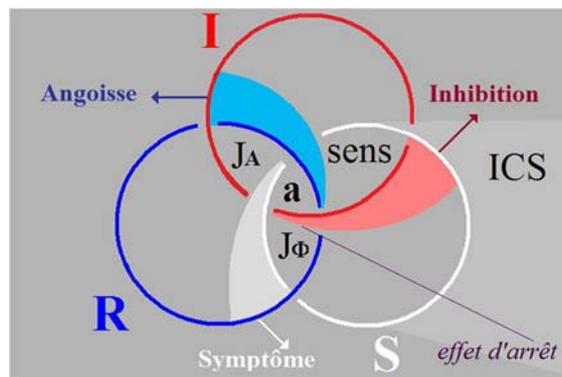
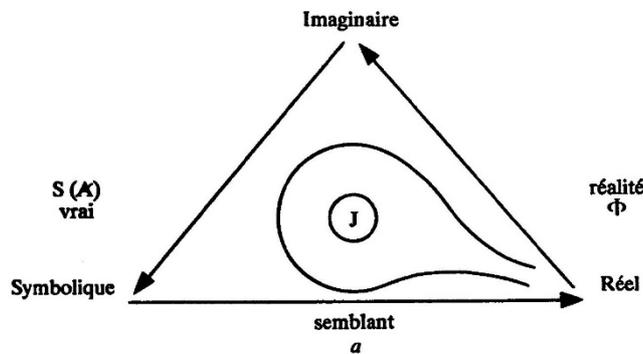
それに対して、sinthome においては a は、聖人の実存構造においては穴としての純粹徴示素です。

しかし、Joyce をも視野に入れるなら、Joyce の場合、sinthome の a は、むしろ逆に、全く不透明な物質性における創造物です。

ところで、Lacan に限らず、誰の言葉であっても、それについて考えるとき、文脈から切り離して考えてはなりません。どこかに引用された Lacan の言葉を、それだけ取り出して恣意的に解釈してはなりません。

たとえば, Lacan は 1979 年 1 月 9 日の séminaire の最後に「わたしは間違っていた」と言っています. その発言は唐突であるように見えます. 悪意ある人は, Lacan が今までの自分の言ってきたことすべてが間違っていたと白状したのだ, と取るかもしれません. しかし, 文脈を見れば, Lacan の「間違い」は, 1978 年 12 月 12 日の séminaire において Vappereau に指摘された「一般ボロメオ結び」に関する間違いであることがわかります.

Lacan の図に関しても, 同様のことが言えます. これら二つの図は, 1970 年代のものですが, どういうわけか良く知られているようです:



Lacan の難解な言葉に対して、図はわかりやすいもののように見えるかもしれませんが、図も Lacan の教え全体の文脈から切り離して解釈してはなりません。

Lacan の教えの基礎を成すものは、精神分析の基礎 *fondements* を成すものにほかなりません。

「基礎」はドイツ語で *Grund* です。そして、精神分析の基礎である *Grund* は、Heidegger の言う意味での *Abgrund* 「深淵」です。Heidegger はしばしば *Ab-grund* と書きます。それによって「深淵」という語のなかに *Grund* 「基礎、基底」が含まれていることがわかります。

存在 \varnothing が、その基礎です。

それは、深淵ですから、底無しですが、逆説的にも、底無しの深淵、それがうがつ穴こそが、精神分析の基礎の場処を示しています。

13 September 2014 : Jacques-Alain Miller の功績；徴示素 a は剰余悦である；欲望は実在である；ひとつの徴示素 a は、主体の存在の真理 ϕ を、もうひとつのほかの徴示素 s に対して代表する；精神分析の基礎は存在のトポロジーである。

今、我々が多かれ少なかれ Lacan を読解することができるようになったとすれば、それは Jacques-Alain Miller のおかげです。それは、彼が Lacan の Séminaire を編纂しているからだけではありません。Jacques-Alain Miller 以前には、Lacan の教えをその全体において把握し得た者は、Lacan 自身以外にはいなかったのです。

わたしは 1986-88 年に Paris VIII に留学し、Jacques-Alain Miller に直に Lacan 読解のしかたを学びました。

わたしだけでなく、世界中の lacaniens が Jacques-Alain Miller に恩義を感じている、と言ってもおおげさではありません。

わたしがしていることは、Jacques-Alain Miller による Lacan 読解の模倣にすぎません。わたしの作業は、Jacques-Alain Miller の Lacan 読解作業の延長線上に位置しています。

しかし, Jacques-Alain Miller も, 人間ですから, 無謬ではあり得ません. 彼の Séminaire のテキスト確立作業に対して批判があるのは事実です. Jacques-Alain Miller も, これは Miller 版の Lacan だ, と公言しています.

それだけではありません. Lacan の諸概念の一部の解釈に関して, Jacques-Alain Miller の言っていることは misleading です.

実際, わたしは, Jacques-Alain Miller の解釈に基づいて Lacan を読み解こうとして, 幾つかの障碍を経験してきました. それらの障碍を克服するためには, 改めて Lacan のテキストを読み込まなくてはなりませんでした. 加えて, Heidegger と神学を経由することが大いに手助けになりました.

Jacques-Alain Miller の解釈のうち誤っていると思われるものを幾つか挙げてみましょう.

ひとつは, « un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant » 「ひとつの徴示素は, 主体を, もうひとつのほかの徴示素に対して代表する」という命題の解釈です. Jacques-Alain Miller はこの命題を常に, 支配者の言説の構造を表言するものと教えています: 「 S_1 が S を S_2 に対して代表

する」。

第二に、欲望 *désir* は、欲望のグラフにおけるイタリック体で記された *d* として、*imaginaire* なものである。

第三に、*jouissance* = *réel*. 悦 = 実在. この解釈に準拠しつつ、Jacques-Alain Miller はしばしば $\frac{A}{J}$ [A/J barré] という学素を黒板に書いていました。A は、徴示素の場処としての他 A です。J は *jouissance* です。

三番目のものから検討するなら、1971-72 年の *Séminaire XIX ...Ou pire*, p.17 で Lacan はこう言っています: « le signifiant, c'est la jouissance, et le phallus n'en est que le signifié ». 「徴示素は悦であり、ファロスはその被徴示にほかならない。」

この命題は、我々の学素 $\frac{a}{\Phi}$ を文字どおりに表言しています。a は、四つの言説においては *le plus-de-jouir* 「剰余悦」です。Φ は、書かれぬことをやめない徴示素ファロスです。

したがって、Lacan が *jouissance* と言うとき、必ずではないとしても、多くの場合、それは症状の剰余悦のことであり、したがって、*signifiant a* で形

式化されます。

もうひとつ例を挙げるなら, *Écrits* に収録されている 1964 年の短いテキスト:『フロイトの“本能”と精神分析家の欲望とについて』にこうあります: « Le désir vient de l'Autre, et la jouissance est du côté de la Chose ». 「欲望は他 A に由来し, そして, 悦は物の側にある」.

ここでは欲望と悦とが対置されています。

Lacan の欲望の概念は Freud の本能(欲動)の概念の取り上げ直しであり, 悦の概念は Lust の概念を再検討することによって作られました。

「本能の満足は常に Lust に満ちている」と Freud は公式化しています。それに照合すれば, 悦は, 欲望の満足です。ただし, 全的な満足ではなく, 部分的な満足です。精神分析においてかかわる「本能」は常に「部分本能」ですから。

ところで, 欲望の満足は客体において達成されます。さきほどの命題では Lacan は客体を「物」と呼んでいます。

欲望は *manque à être* 「存在欠如」、他 *A* の場処のなかの欠如、つまり、欠如せる徴示素ファロス ϕ です。

かくして、やはり $\frac{a}{\phi}$ の構造に準拠することによって、欲望は ϕ として *signifié* の座に位置づけられ、悦は徴示素の座の *a* です。

次に、欲望は *imaginaire* であるか？欲望のグラフでは確かに、欲望 *d* は幻想 ($\$ \diamond a$) と対にされて *imaginaire* な項として措定されています。しかし、1958-59年の *Séminaire VI* 『欲望とその解釈』 p.424 にはこの命題が見出されます：« *La chose freudienne, c'est le désir* ». 「フロイト的な物、それは欲望である」。

先ほどの命題では「物」は客体 *a* でしたが、ここでは違います。「フロイト的な物」は、主体の存在の真理であり、四つの言説の構造において左下の真理の座に位置します。つまり、欲望は ϕ です。この解釈は、欲望は *manque à être* 存在欠如である、という命題と合致します。

かくして、欲望は、*imaginaire* ではなく、而して、不可能としての実在 *le réel* である、と言わねばなりません。

最後に, « un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant » については, 1964 年の書:『無意識の位置』において Lacan は, 「それは formation de l'inconscient すべての構造である」と言っています.

formation de l'inconscient 「無意識の成形」とは, 精神分析において解釈されるべき夢, しそこない, 言いそこない, Witz, 症状などの現象のことです.

Freud が「夢は願望満就である」と言ったように, 無意識の成形には悦が含まれています. より正確には, 無意識の成形は剰余悦の成形であり, したがって, $\frac{a}{\phi}$ の構造を有しています. このことは, 1967 年に Lacan がパスの手続きを提起した論文においても確認されます.

「ひとつの徴示素は主体をもうひとつのほかの徴示素に対して代表する」は, 支配者の言説のことを言っているのではなく, 分析家の言説の構造を表言しています. ひとつの徴示素 a は, 主体の存在の真理 ϕ を, もうひとつのほかの徴示素 $\$$ に対して代表しているのです.

このことに気づくことによってやっと Lacan を一貫したしかたで読むことができるようになった, とわたしは感じました. それまでは, 四つの言説の構造をどう理解すべきかは, 大きな難題でした.

しかし, Lacan のことを最も良く理解しているはずの Jacques-Alain Miller がどうしてこのような誤解をしてしまったのでしょうか？

思うに, その根にあるのは, 1964-65年の Séminaire XII で Lacan が提起した命題: « le a est de l'ordre du réel » 「 a は, 実在の位のものである」です.

Jacques-Alain Miller はその前年度の Séminaire XI から Lacan を聴講し始めました. 彼は当時まだ 20-21 歳です. 彼の頭にはこの「 a は実在の位のものである」が刷り込まれたはずで

しかも, 彼は, Lacan の教え全体を見渡して, a の概念の変遷を *chronologique* なものと捉えました. まずは a は自我-他者として *imaginaire* であった. 次いで, *signifiant* として *symbolique* であった. 今や a は *réel* である.

ところが, a の概念の多様性は *chronologique* なもの, *diachronique* なものではなく, 構造論的なもの, *synchronique* なものと考えべきです. a は, 同時に, *imaginaire* であり, *symbolique* であり, *réel* なものです. このこと

は, RSI のボロメオ結びの中央部分, RSI 三者の交わりに a が置かれていることに表されています.

ところが, Jacques-Alain Miller は, imaginaire, symbolique, réel の順で a の概念は時間的に変遷したのだ, と捉えた. ですから, 彼は, 1972-73 年の *Encore* の命題:「 a は semblant 仮象だ」の位置づけに困っていました. その命題は, 「 a は実在の位のものである」と矛盾しますから.

Jacques-Alain Miller は, Lacan の教えをその時間的な展開において区切って整理しようとしています. そのような考え方は「最晩年の Lacan」という Miller の表現にも表れています. それはひとつの解釈です. わたしも大いに助けられました.

しかし, 今, わたしはむしろ, Lacan の教え全体を chronologique な発展の観点においてではなく, ひとつの一貫した構造として捉えたいと思っています. その一貫した構造の基礎を成すのが, 「存在のトポロジー」と Heidegger が呼ぶもの, つまり, \varnothing という Ab-grund 「深淵」の場処, 処有です.

14 September 2014: 「性関係は無い」は、精神分析の α であり ω である; 欲望は存在欠如である; $\phi \equiv A$; $S(A)$ の穴に代入される仮象 a ; *consistance* と身体; 聖アガタの切り取られた乳房は, a の分離を象徴している; *therapy* は $S(A)$ の穴により *désirable* な仮象 a を代入することに存し, 精神分析は仮象 a を分離し滅却することに存する.

いただいた御質問のひとつに引用されていた Lacan の言葉をその文脈において読むために, Patrick Valas 氏の site に公表されている 1978-79 年の *Séminaire La topologie et le temps* のテキストを初めて見てみました.

そこにおいて Lacan が「一般ボロメオ結び」について語ろうとしていることを読解することは今のわたしにはできません.

しかし, ただひとつ確認し得たことがあります. それは, 死の 2 年前の時点で Lacan がなおも強調し続けているのは「性関係は無い」であるということです.

我々の「抹消されたファロス」の学素 ϕ は, 「性関係は無い」を形式化する学素です.

その学素が「抹消された存在」の学素でもあることの証明については、わたしの『ハイデガーとラカン』第一章の「ハイデガー・ラカン定理」の証明の節をお読みください。

Lacan が最晩年において「性関係は無い」を強調し続けたことは、 ϕ が精神分析の最も中心的な主題-主体であることの証拠である、と言ってもよいでしょう。

ϕ を Lacan は様々に呼びます : manque à être 存在欠如, sujet du désir 欲望の主体, または端的に, 欲望, 主体. さらに, Heidegger の表現を用いるなら, 真理, 存在の真理, 主体の存在の真理. 学素 ϕ は, それらすべてを形式化する学素です。

「欲望は存在欠如の metonymia である」という Lacan の命題に関しては, この「存在欠如の metonymia」の「の」は同格を表しています:

$$\text{manque à être} = \text{métonymie}$$

なぜなら, ϕ は, そのものとしては, つまり, $\frac{a}{\phi}$ という métaphore の構造のなかに保置される以前には, 際限無く横滑りして行く制止不可能・把握不可能な動きとしての métonymie そのものであるからです。

「欲望は存在欠如の metonymia である」と「欲望は存在欠如である」は等価です。

「欲望は、他 A の欲望である」という Lacan の命題は、

$$\varphi \equiv A$$

という等価性の公式により形式化されます。

「穴」や「切れめ」と呼ばれているものは、厳密には「他 A のなかの欠如の徴示素」 $S(A)$ の学素により形式化されます。

a は、 $S(A)$ の穴に代入されるものを表す学素である、と言ってもよいでしょう。

欲望 φ と A とは、ex-sistence として、le réel です。

RSI において Lacan は le symbolique を「穴」と定義します。 $S(A)$ の穴です。

$\frac{a}{\varphi}$ の学素は $\frac{a}{A}$ の学素と等価であり、さらに、 a が純粹徴示素である限

りにおいて, この構造は $\frac{S(A)}{A}$ と書記することもできます.

RSI の Séminaire において Lacan は l'imaginaire を consistance と定義しています.

consistance は, なんらかのまとまりをもったものです. たとえば, 身体の image はひとつのまとまりをもっています.

先日, 9 月 11 日のフジタゼミの予告編として, わたしは藤田博史先生の Facebook の timeline に Zurbaran による聖アガタの肖像画を提示しました. 聖アガタは西暦三世紀なかばに殉教したキリスト教の聖人です. 拷問者は彼女の両乳房をむしり取ったという伝説にもとづき, 聖アガタは切り取られた自分の両乳房を盆に載せて捧げ持っています.



Lacan が Séminaire X において言及しているこの絵をわたしが思い出したのは, 藤田先生から聞いたこの話のゆえにです. 藤田先生は美容外科医として豊胸手術をすることがあるのですが, 精神療法でも SSRI でも良

くならない eating disorder の女性がたまたま豊胸手術を受けたところ、
eating disorder の行動が劇的に改善したそうです。藤田先生は複数の症
例において同じ関連性を見出しました。

乳房は, Lacan が列挙する四つの客体 a の形象のひとつです。

豊胸手術によって何が起きたか？存在論的構造 $\frac{a}{\Phi}$ において, a が加
工されたのです。

eating disorder の女性たちは, 自分の現在の身体 image を受容すること
ができません。彼女たちにとって, 自分の身体 image は望ましいものでは
ないのです。

豊胸手術は, 豊満な乳房を彼女たちに与えることによって, 彼女たちの身
体 image を *désirable* なものに変え得ます。そして, それが, 彼女たちの
存在論的構造を安定化させる効果を持ち得ます。

これは, therapy と呼ばれているものの *mécanisme* 一般を示しています。
therapy は, $S(A)$ の穴に, 何らかの意味でより *désirable* な仮象 a を代
入することに存します。

それに対して、精神分析は、仮象 a を分離し、滅却することに存します。

それによって開口した $S(A)$ の穴において、なんらかの創造が成起します。
creatio ex nihilo と *resurrectio ex mortuis*, 「無からの創造」と「死者のうちからの復活」とには本質的な関連があります。

1974-75 年の *RSI* の *Séminaire* の時点で Lacan が *consistance* と呼ぶものと身体と呼ぶものとの間には密接な関連があるのではないかと思われています。そして、その *séminaire* において *jouissance de l'Autre* と呼ばれているものも。

15 September 2014 : 三位一体は神の現象学である；イエスは我々各自にとって実存的手本である；精神分析家であることの存在論的規定と機能的規定。

今日はまず、キリスト教に関する御質問を考えて行きましょう。Freud は『モーゼと一神教』(GW p.194, SE p.88) においてキリスト教を批判しています。特に、三位一体の教義によってキリスト教は厳密には一神教でなくなった、と Freud は言っています。しかし、ということは、Freud は三位一体の本質を把握し得ていないのです。

三位一体の本質は、神の現象学です。

聖書において三位一体が最も明確に描かれているのは、イエスの洗礼の場面(たとえば、マタイ福音書 3,16-17)です。イエスが水から出ると(水は死の象徴です:死からの復活としての洗礼), 天が開き(つまり, ex-sistence の深淵の口が開く), 聖なる霊気(聖霊)がハトのように降りてきます。そして、天からの声が宣言します:「これは我が愛し子なり」。

父なる神は、存在の真理の座に ex-sistence \oplus として隠れています。イエスは、父なる神を代理する a です。聖なる霊気は、この代理構造を保証す

るものです。

三位一体の構造は、神の存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ にほかなりません。

ユダヤ教やイスラム教においては、ex-sistence としての神を代表・代理するのは律法だけです。その場合、律法中心主義 *légalisme* に陥る危険性があります。いわゆる原理主義は、*légalisme* の一形態です。プロテスタントの一部も *légalisme* に陥っています。

それに対して、キリスト教では、特にカトリックでは、律法ではなく、イエスが中心です。その実存におけるイエスが中心です。

ユダヤ教やイスラム教においては、律法を遵守することが信仰の中心を成します。

それに対して、キリスト教、特にカトリックにおいては、実存様態においてイエスにならうことが信仰の本質を成します。つまり、現場存在 *Dasein* において神の現象学を実現すること。イエスは身を以て、父なる神を *ex-sister* させます。我々は各自、イエスと同じく、神の現象学に現場存在を提供せ

ねばなりません。イエスは、実存的な手本を我々に示しているのです。

そんな手本は無くても、律法だけで十分だ、とユダヤ教やイスラム教の人々は言うでしょう。勿論、悪い意味での *légalisme* に陥ること無く信仰を
生きているユダヤ教やイスラム教の人々もいます。

しかし、悪しき *légalisme* に由来する原理主義の弊害が目立っているのも
ユダヤ教とイスラム教、そして、一部のプロテスタントにおいてです。

学素 *mathèmes* の解釈に関して御意見をいただきました。学素は形式的な記号ですから、それを如何に定義するかはシステム次第です。Lacan 自身、たとえば $\$$ の定義については一貫していません。1962 年の書 *Kant avec Sade* に出てくる図における $\$$ と、1964 年の書 *Position de l'inconscient* に述べられている命題において定義されている $\$$ とは、同じものではありません。

Phallus の学素 φ と Φ の解釈についても、我々は慎重でなければなりません。

わたしは、Lacan が 1969-70 年に提唱した四つの言説の構造に準拠して、

学素も定義します。ほかの論者は、ほかのように定義するかもしれません。

それは、各人の判断次第です。

therapy に関して。質問者のひとりの方の御指摘のとおり、昨日わたしが therapy と呼んだものは、もし効果的であっても、対処療法でしかありません。

しかし、或る種の状況においては、たとえば、切迫した自殺の危険性に緊急に対応せねばならないときには、それもやむをえません。そのような場合、対処療法的対応により一旦事態を落ち着いた後で、じっくり分析治療に導入することになります。Lacan も Françoise Giroud に対してそのように介入したことが、Giroud 自身の証言によって知られています。

さて、或る者が精神分析家であるか否かを判断する基準は、ふたつあります。ひとつはパスです。パスは、存在論的な意味で精神分析家であることを証明する手続きです。

もつとも、パスは手続きとしては無用だ、という意見もあります。なぜなら、或る意味で、真理は証明される必要は無いからです。

Lacan が *École freudienne de Paris* を設立したとき、それ以前から Lacan と分析をしていた多くの分析者が EFP に加わりました。彼らにとって *École* が精神分析家の資格認定を行うことは当然の前提でした。そのために EFP に加わったのです。ですから、Lacan も分析家の資格認定の要請に答えねばなりませんでした。

果たしてパスのような制度を作ることが Lacan の本心に適うことであったか否か？容易に答えられる問いではありません。

精神分析家のもうひとつの定義は、分析家の言説の構造において分析家として機能し得る、というものです。それを証明するものは、その者が新たに精神分析家を養成し得た、という事実です。新たに精神分析家が誕生すれば、確かに精神分析が行われていたと言えます。

ということは、新たな精神分析家を誕生させたことのない精神分析家は、本当に精神分析家として機能しているのか否か、わからないということです。そのような分析家は自称「分析家」です。そして、わたし自身、そのような自称「分析家」のひとりにすぎません。

16 September 2014 : 緩和ケアと根本治療 ; ごまかしはもう効かない ;
Gestell, 総召集体制は, 死の本能と等価である.

まず, 藤田先生のごことで誤解しないように願います. 彼は, eating disorder
の女性の心理学的状態が豊胸手術により安定化したという例をたまたま幾
つか観察し, その知見を限られた場所で語っただけであり, 豊胸手術を
eating disorder の特効的治療法として推奨しているわけでは全くありませ
ん.

豊胸手術の心理学的効果は, $\frac{a}{\phi}$ の構造に準拠すれば, 鏡の段階にお
ける理想自我の形成として理解されます.

ともあれ, 存在論的穴に, より *désirable* な仮象 a を代入することにより得
られる *therapeutic* な効果は, もしかしたら何年も持続するかもしれませんが,
が, それでも, かりそめのものです.

その場しのぎであっても, とりあえず苦しみをやわらげることができればよい,
という考え方は, 勿論成り立ちます. 例えば, 癌末期のモルヒネによる緩和
ケアは, 余命の限られた患者さんの *quality of life* の維持のためには必要
不可欠です.

同様に、自殺の危険性が切迫している場合や、自傷行為を繰り返す自閉症児などにおいては、まずは、状況に適した仮象 a を提供することによって存在論的構造 $\frac{a}{\phi}$ を安定化させることを優先させねばなりません。

精神分析は、言ってみれば、そのような **palliative care** がもはや無効となったときに、初めて選択され得ます。そして、今、あなたが日常生活のなかで居心地悪さを多かれ少なかれ感じているとすれば、それは、ごまかしはもう効かない、ということの **sign** なのです。あなたはどうしますか？

政治状況や政治家を「精神分析」するのは、精神分析家の仕事ではありません。しかし、現代という時代について **Heidegger** が言っていることを知っておいても良いでしょう。

今や「現代」ではなく **post-modern** だと思いますか？いいえ、今なお現代です。**Nietzsche** のときと同じく、ニヒリズムの時代です。

Heidegger は、科学技術に支配された現代の存在構造を **Gestell** と名づけます。この表現は、**Gestellungsbefehl**、戦時下の「総動員命令」に由来すると言われています。ですから「総召集体制」と訳してみましよう。

総召集体制においては、存在事象すべて、存在全体が、召集されています。何に召集されているのか？資本主義的生産のため、つまり、資本の自己増殖のためにです。

科学技術の本質は、あらゆる存在事象を生産のために召集することを可能にすることに存します。

たとえば、原子力物理学は、本来なら利用し得なかった原子核内のエネルギーを資本主義的生産のために利用可能にします。それにともなって如何に厄介な放射能が副次的に発生しようとも、資本の自己増殖に寄与し得るかぎり、おかまいなしです。

総召集体制 *Gestell* においては、人間も、生産に利用し得る限りでしか問題になりません。年齢、性別、国籍、文化的・歴史的背景等々の差異的特性を消し去り、ただ単に労働力としてのみ、人間を動員します。

総召集体制において、差異的特性の消去に抵抗する民族的集団や、労働力に勘定され得ない障害者や病者がどう扱われるかは、*nazisme* において起きたことを想起すれば、わかります。

Gestell においては、構造 $\frac{a}{\phi}$ における同一化の signifiant a は、無きに等しくなります。それゆえ、と Heidegger は言います、Gestell は Ereignis の前段階なのである。

この主張は、Marx の主張を思い起こさせます：資本主義が最も高度に発展したときにこそ、共産主義が成立し得る。

総召集体制 Gestell は、あらゆる伝統的な identification を無効にする死の体制です。

今、世界的に起きている nationalisme の強まり、宗教的 identity の強調は、Gestell の抹殺的效果に対する抵抗です。

大学の言説の構造のものである民主主義は、本来なら、Gestell の破壊的效果に歯止めをかけねばなりません。しかし、資本の言説の手先である liberalism を自認する勢力によって、民主主義のそのような抵抗は無効にされてしまいます。

Gestell によりあらゆる仮象的徴示素 a が破壊されたとき、存在の真理の

穴があらわになります。そのとき、死からの復活が成り立ち得ます。

こう説明してくると、Heidegger の言っていることは、聖書に書かれてあることを踏まえている、と気がつきます。それは、黙示録的事態です。天の御国が近づいてくると、天変地異、大災害が起こります。その後、神の支配が実現します。旧約聖書のノアの神話も本質的に同じです。洪水によってすべてがほろび、その後、死からの復活が起こります。

日本の現政権は、Gestell の手先です。日本を地球的規模の物理学的破壊の動きに委ねようとしています。

Ereignis のために必要とされているのは、物理学的破壊ではありません。そうではなく、差別の構造を惹起する徴示素的同一化の解体です。

精神分析が目ざすのも、同一化の解体としての分離です。

17 September 2014 : 総召集体制の二本の柱, 科学の言説と資本の言説;
死からの復活の成起としての自有; 貧しさの分かち合いとしての
communisme; 美と不安; Antigone と Hérodiade.

昨日 Gestell について説明しながら初めて気づきました. Heidegger は
Gestell 「総召集体制」を科学技術の本有として論じているのですが, しか
るに, この Gestell は, Freud が死の本能, 破壊本能と呼ぶものにほかな
りません.

Gestell はあらゆる存在事象からその差異的徴示素を奪い取り, 資本主義
的生産のための材料という身分だけを残します. 存在事象は, 存在事象と
しての尊厳をないがしろにされてしまいます.

それは, 現象としての nihilisme です.

Gestell によって最終的にすべてが破壊されたとき, nihilisme の本有とし
ての存在 \emptyset がそのものとしてあらわになります.

そこから復活が成起します. それは, Heidegger が「他なる源初」 der
andere Anfang と呼ぶものです.

Heidegger が Ereignis 「自有」と呼ぶのは、死からの復活の成起です。

科学の言説と資本の言説における死の本能の破壊的過程が極限に達し、あらゆる差異的徴示素が支配者の座から罷免されたとき、死からの復活としての自有が成起し、Marx が **communisme** と名づけた新たな **politeia** が始まります。

その **communisme** は、歴史上「共産主義」と呼ばれたものではありません。真の **communisme** が具体的にどのようなものであり得るのか、今、わたしには確かなことは言えません。しかし、それは限りなく「神の御国」に近いものだと空想したくなります。

と同時に、新たな **communisme** は、真の貧しさの分かち合いであるはず
です。

資本主義社会においては、人々は豊かさを追求してきました。存在論的穴の恐怖から目をそむけるために、穴塞ぎに役立つ物を強迫的に作り出してきました。資本の言説における超自我の定言命令:「増やせ！」に駆られて、人々は強迫的に生産してきました。その結果、地球環境は疲弊し、汚染さ

れてしまいました。

新たな **communisme** においては、人々は「増やせ！」という超自我の命令から自由になっています。存在論的穴を塞ぐことはせず、その穴を目の当たりにする恐怖を辛抱することができます。真の貧しさを共に生きることができます。新たな **communisme** は、貧しさの不安の分かち合いから成るはずです。

わたしが「緑の党」のサポーターになっているのは、**Greens** の運動が民主主義を止揚し、新たな **communisme** の実現へ至ってほしいと願うからです。今のところ、そうなるかどうかわかりませんが。

Heidegger が科学技術の本有を **Gestell** と名づけて、現代社会の黙示録的な終末を預言したのに対して、精神分析は、我々ひとりひとりが死を先取りに引き受け(死の主体化)、そして、それによって死からの復活に与ることを目指します。

Heidegger や **Zizek** が相手にするのは、講義や講演の聴衆、ないし、いわゆるマスメディアを介してメッセージが伝達される大衆ですが、精神分析は、あくまで、我々ひとりひとりにかかわります。精神分析は、ひとりの人間

に確実に主体のくつがえしが成起することを目ざします。

ひとりひとりに起こることが多数の者に起きて行くなら、究極的に、それは社会的、政治的効果を持つことになります。ですから、精神分析が政治的視点を持っていることは、個々の精神分析治療の指針にとって無関係なことではありません。

さて、話題を変えて、美と不安との関連について大変示唆に富む御指摘をいただきました。ひとことで言えば、「美女の不安」です。

美女という対象に対する不安ではなく、美女自身が感ずる実存的不安です。たとえば、舞台上で美しく化粧し、美しく着飾った女優が感ずるであろう不安。

その不安を覆い隠すのではなく、さりとして、不安に打ち負かされて **panic** に陥るのでもなく、不安を或る様式のなかに収め、保匿し、そのような形の不安を観衆にも共有させること。多分、感動的な演戯はそのようなものでしょう。

美と不安との関連について、Lacan は、Antigone を引き合いに出しつつ、

こう言っています:美の機能, それは, 根本的な恐怖への接近を禁止する
窮極の障壁である.

これは, 1959-60 年の『精神分析の倫理』における Sophocles の戯曲
Antigone の分析にもとづいて 1962 年に書かれた *Kant avec Sade* のなか
の一節の言葉です.

Antigone は美しい. それは, 彼女が, 支配者が押しつける決まりに違反し
て, 神の律法に従順に, 彼女の兄の亡骸を葬るからです.

「根本的な恐怖」は, 存在論的穴が惹起するだろう恐怖, 不安です.

存在論的, 実存的不安を覆う「限りなく透明に近い」薄い薄いヴェール, そ
れが美です.

Antigone とともに, Mallarmé の *Hérodiade* を思い起こしてもよいかもしれ
ません. Mallarmé が取り上げたのは, 聖書でサロメと呼ばれている少女で
す. 彼はどういうわけか, サロメという名よりエロディアドという名を好まし
た. Eros を喚起するからでしょうか?

ともあれ, *Hérodiade* において Mallarmé は, 存在論的不安の結晶のような美少女を描いています. 美少女といっても「萌え」系では全然ありません. 彼女自身は明白に不安におののいてはいません. しかし, 彼女のかもしだす緊張感は, 結晶化した不安そのものです.

18 September 2014 : 精神分析における寝椅子の機能；変動時間面接；
本当の自己；二階堂奥歯氏のこと。

或る人が Facebook に Freud の寝椅子の写真を投稿していました。

寝椅子は精神分析治療の象徴です。精神分析が戯画化されるとき、大抵、
患者は寝椅子に横になり、分析家はその背後に座って、メモをとったりして
います。

Freud は、無意識の想起のためにいわゆる自由連想法を始める前、催眠
術を用いていました。その際、患者は寝椅子に横になります。Freud は催
眠術をかけるのがあまり得意ではなく、また、催眠術がうまく行かない患者
もいたので、Freud は催眠術をやめました。しかし、寝椅子は使い続けまし
た。

Freud は、患者の視線にさらされ続けると疲れてしまうから、というような理
由を挙げています。しかし、寝椅子を使う理由はそんなことではありません。

精神分析治療の開始時からいきなり寝椅子を使いはいしません。とりわけ予
備面接の間は、面接は face to face の対面で行われます。分析家は、姿

形を持つ仮象 a として現在します。予備面接の間に、転移が形成されて行きます。予備面接の期間は、分析家の現在を徴示素 a とする症状の形成の期間でもあります。

症状が十分に形成されてからも、必ずしも寝椅子は使われません。そのまま対面の面接が続くことも少なくありません。

寝椅子が必ず用いられるのは、分離の phase においてです。分析者が寝椅子に横たわり、その背後に分析家は姿を隠します。面接中、分析者にとっては、分析家の現在は声とまなざしの現在となり、影象的な要素は限りなく $zéro$ へ減ぜられます。それによって、存在論的穴が演出されます。それが、精神分析において寝椅子が使われる必然性です。

Facebook に Freud の寝椅子が紹介されたので、ついでに Lacan の寝椅子の写真をわたしも投稿しました。

Paris の 5, rue de Lille にある彼の appartement を、昔、Madame Judith Miller の案内で見学したことがあります。面接室は、一番奥まったところにあります。さして広い部屋ではありません。デスクと寝椅子と。寝椅子は、背もたれの無い普通の寝台です。それをまねて、わたしも普通の寝台を使っ

ています。ただ、一応、クッションを背もたれ代わりにしていますが。

寝椅子に横たわっていると分析者は眠ってしまうのではないかと思われる
かもしれません。40-50 分間の一定時間面接の場合、確かにそれは起こり
ます。非ラカン派の分析家たちは、その間、時間が過ぎるのを漫然と待つ
のでしょう。そして、時間がくれば、分析者を叩き起こすのでしょう。

Lacan の変動時間面接においては、そのような事態は起こり得ません。い
つなんどき分析家が介入してくるかわかりませんから、分析者は緊張し、と
ても寝てはいられません。もし万一分析者が寝入ってしまえば、その時点
で面接は区切られます。

分析治療において、時間にかかわる操作は本質的です。分析において、
時間が時計に支配されていてはなりません。

この Tweeting Seminar を読んでいる人が、知り合いの psychologist に分
離の概念を説明したところ、「自己愛の滅却は究極的な自己愛に転落する
可能性がある」と言われたそうです。その言葉には、おそらく、否定的なニ
ュアンスがこめられているのでしょう。

精神分析において、分析者は、自分が真理を言っているとは知らないままに真理を言います。その *psychologist* も、自分が何を言っているのか知らないままに、真理を言っています。

「自己愛の滅却は究極的な自己愛に転落する可能性がある」において、最初の「自己愛」は *narcissisme* です。ふたつめの「自己愛」については、「究極的な自己」で句切りを打ちましょう。

「究極的な自己」とは何か？それは、Heidegger が *das Selbst* と呼んだものの、つまり、存在 \varnothing です。

「転落」も有意義な語です。分離において、仮象 *a* は、支配者の座から罷免され、転落、脱落します。

仮象としての *a* の脱落において、究極的な自己 \varnothing は、純粹徴示素としての *a* による代理において、己れを示すことになります。

それは、*ἀγάπη* と呼ばれる実在的な愛の成起です。ただし、実在とは不可能在です。*ἀγάπη* において性関係が可能在として書かれるようになるわけではありません。

いただいたメッセージのなかで二階堂奥歯氏のことが言及されていました。暫く前、彼女の『八本脚の蝶』に触れようとして、中途半端なままになっていました。そもそも、八本脚の蝶とは何でしょうか？

皆さんよく御存じのように、昆虫は六本脚です。八本脚ということは、脚が一对余計なのです。

Un en plus. 余分な一。それを以て Lacan は *hysterica* の存在様態を差し徴しました。

しかし、*hysterica* だから神経症レベルだと決めつけることはできません。転帰がそのような安易な診断を否定しています。

彼女の言葉が不安を惹起するほどに感動的であるのは、それが祈りだからです。彼女が神と名づけることを拒否した神、神の彼方の神へ向けられた祈り。

彼女は、自分の外面にこだわっているように見えます。とりわけ、化粧や肌の手入れについて。それは一見、若い女性においては当然のことに見えます。

しかし、彼女の自殺を予め知って読むとき、*être mal dans sa peau* というフランス語の表現が頭に浮かんできます。*peau* は「皮膚」です。直訳すれば、「自分の皮膚のなかで調子が悪い」。つまり、Freud の言う *das Unbehagen* 「いごこち悪さ」です。

二階堂奥歯氏の一見女性らしい肌へのこだわりは、自分の皮膚のなかでの存在論的不調和に動機づけられていたわけです。そのことは、*grotesque* な内蔵の *images* への言及においても確認されます。

わたしが最も胸を引き裂かれる思いを感じた言葉は、2002年12月17日の記事のなかの彼女の祈りです：「私は愛しています... でも、あなたが誰なのか、私にはわからないのです...」。これは、神の彼方の神へ向けられた純粋な祈りです。「私のすべての存在を、あなたに捧げます」。

彼女は、*un en plus* 「余分な一」としての自分の存在を捨て去り、恐怖を克服して、神の愛に最も忠実な純粋存在へ己れを純化しました。

彼女は、時代が時代なら、みづから進んで殉教者となったでしょう。神の愛の悲劇的な証人であるために。

19 September 2014 : 聖人と症状；殉教と創造；存在の真理の現象学的構造の可能性の条件としての父の名；仮象の彼方としての作品。

二階堂奥歯氏に関して手短かに補足しましょう。

一方に、純粋な殉教者であることにおいて *sainte* 聖人，聖女と呼ばれてよい彼女と，他方に，Lacan が *sinthome* (*saint homme*, 聖人) と呼ぶ Joyce と。両者の違いを成すのは何か？

我々がすぐに気づけるのは、創造です。確かに、二階堂奥歯氏も幾つかの評論文を発表してはいました。しかし、Joyce のように創造することはなかった。彼女は人並みはずれた多読家でした。しかし、彼女が或る程度の規模の創造をみづから試みた形跡は『八本脚の蝶』からはうかがえません

Lacan が分離と呼ぶものは、構造 $\frac{a}{\phi}$ において仮象 a が捨て去られ、存在 ϕ の深淵の口がそのものとして開くこと、言い換えれば、 a が他 A の場処の欠如の徴示素である純粋徴示素 $S(A)$ そのものに成ることです。

分離においては、仮象 a と実在 ϕ との分離が起こりますが、構造 $\frac{a}{\phi}$ はそのものとしては崩壊せず、それによって、死からの復活が可能になりま

す.

復活においては, a はもはや *imaginaire* な様相を失っており, 純粋な穴としての徴象そのものです.

死からの復活は如何にして可能であるのか? この問いは, Lacan が「父の名」と呼ぶ問題にかかわっています.

父の名の問題は, 構造 $\frac{a}{\Phi}$ の可能性の条件の問題である, と考えることができます.

構造 $\frac{a}{\Phi}$ における能動者の座と真理の座とのつながり, 結合は如何にして可能であるのか? この問いを Lacan は, ボロメオ結びの問いとして展開して行きます. 如何にして R, S, I の三つの輪が相互に解離せずに, ボロメオ的に結び合わされていることが可能であるのか?

ボロメオ結びのトポロジーにおいては, 死は, R, S, I の三つの輪の解離として捉えられます.

それに対して, それら三つの輪をボロメオ的に結合する第四の輪を, Lacan

は父の名とも呼び、症状とも呼びます。

その場合、果たして、症状は仮象のものであるのか？言い換えると、Joyce
の作品は仮象のものであるのか？

二階堂奥歯氏は数多くの書物を読んでいましたが、もしかしたら、彼女に
はそれらはすべて仮象のものと見えていたのかもしれない。

彼女の愛読書のなかには Joyce の作品は含まれていませんでした。もし
彼女が *Finnegans Wake* と出会っていたなら、彼女は、仮象の彼方の何も
のかを見出し得たかもしれないのではなかろうか？

20 September 2014 : 影象的意味の了解; 実在的真理の解釈; 無からの創造と死からの復活; 症状は存在の保匿である.

二階堂奥歯氏は多読家であり, 外国の著者の本もたくさん読んでいました. ただし邦訳で. 自分で直接原文を原語で読み, 解釈することはほとんどなかったようです. つまり, 彼女は書物をもっぱら自分の母国語である日本語で読み, 了解してしまいました. このことは, 彼女にとってすべてが仮象でしかなかったことと関連するように思われます.

彼女は, 出版社の編集者として働いていました. 読むことが彼女の仕事であり, 彼女は文字をとおして世界とかかわっていました.

文字を読み, 了解する. そのとき意味は, *imaginaire* な意味でしかありません.

imaginaire な意味をしか持たない仮象の世界. そのような世界のなかには彼女は, 彼女を生につなぎとめておくようなものを何も見いだせませんでした.

それに対して, もし彼女が Joyce の *Finnegans Wake* の原文と出会い,

その解読と解釈にとりかかる機会を持ったなら？了解不可能な *signifiant* と出会っていたなら？もしかしたら彼女は、この世のすべてが仮象であるわけではない、と感じ得ていたかもしれません。

我々は日常的には言葉を理解します。そこにおいてかかわる意味は *imaginaire* な意味です。要するに、大した意味ではないのです。そのような意味によっては感激もしないし、驚きもしません。つまらない小説を読むときはそのようなものです。

何事かに驚くとき、本当に感動するときは、*imaginaire* な意味には還元されないもの、了解不可能な何かがかかわっています。

芸術作品においては真理が現動している、と Heidegger は公式化しています。つまり、芸術作品の存在論的構造は $\frac{a}{\phi}$ です。ただし、*a* は、同時に *réel* であり *symbolique* であり *imaginaire* です。芸術の分野によって R, S, I の三者のうちいずれに最も重点が置かれているかは多少は異なるかもしれませんが。しかし、ともあれ、*le réel* の要素が欠けることはありません。*imaginaire* な意味には還元不可能であるようなものとしての実在です。

二階堂奥歯氏はすべてを理解してしまい、すべてを *imaginaire* な意味に

還元してしまいました。つまり、彼女においては、実在的な症状が形成され得なかったのです。R, S, I の三つの輪をボロメオ的に結ぶ第四の輪が形成され得なかったのです。

無からの創造 *creatio ex nihilo* と、死者のうちからの復活 *resurrectio ex mortuis* とは、同じ構造を有しています。つまり、症状の構造としての $\frac{a}{\varphi}$ です。

創造も復活も、無ないし死という深淵を *bergen* しています。

bergen は Heidegger が用いている動詞です。 *verbergen* は「隠す、秘匿する」です。 *bergen* にも「隠す」の意味がありますが、さら、「守る、かくまう」の意味があります。

Heidegger が *bergen* という動詞を用いるとき、それは、構造 $\frac{a}{\varphi}$ において、 *a* が φ を *ek-sistieren* させる、解脱実存させる、という事態を差し徴しています。

それは、芸術作品の構造であると同時に、キリスト者の実存構造でもあります。また、それは、精神分析家の存在論的構造でもあります。Lacan が

sinthome と呼ぶものは、それらをすべて含んでいます。

芸術作品と母国語・外国語との関連について御質問いただきました。勿論、母国語で書かれた文学作品も芸術作品でありえます。先ほどわたしは二階堂奥歯氏という特定の個人について、彼女がすべてを *imaginaire* な意味に還元してしまったことと、彼女が外国の文学作品を原語で読むことがほとんどなかったらしいこととに関連性があるのではないかと推測してみただけです。

外国語での会話に慣れてしまうと、日本語と同じように、我々は意味を理解してしまいます。ところが、外国語の書物、とりわけ難解な文学作品や哲学書を読むときには、言葉は不透明な物質として立ち現れてきます。了解は困難です。解釈が必要になってきます。

日本では、了解困難な文学作品はあまり出版されません。出版社が売れないものは出さないからです。日本では Joyce のような作家が目の目を見ることは非常に困難でしょう。

二階堂奥歯氏は小説を書いていた、という御指摘をいただきました。確かに『八本脚の蝶』のなかにもその萌芽のようなものが見うけられます。

しかし、だとすれば、彼女がより積極的に創造へ向かわなかったことがいっ
そう残念です。あのよう不安に追いつめられる前に、さっさと勤めをやめ
て、執筆に専念することができていたなら！社会常識に反するそのような
助言を彼女にする者は、彼女のみちかには誰もいなかったでしょう。残念
なことです。

幸福について御質問をいただいておりますが、今日はもう遅くなってしまっ
たので、明日考えてみることにしましょう。

21 September 2014 : Anne Rau と二階堂奥歯；自然な自明性の喪失；症状に乏しいこととポロメオ結びの解離；不可能な *signifiant* の創造としての詩作.

二階堂奥歯氏が「社会に対する違和感ではなく、世界に存在することの違和感が書かれた小説を読みたい」というような内容の発言をしていた、という御教示をいただきました.

離人症 *dépersonnalisation* という用語は、それらの違和感を両方とも指します. すなわち、一方では、社会ないし外界が自然さや現実性を失った状態と、他方では、自分自身が異質なものと感ぜられる状態と.

二階堂奥歯氏は *dépersonnalisation* と呼び得る精神病理学的状態にあったらうと推測されます.

木村敏先生が紹介したため日本の精神病理学界で有名になった症例 Anne Rau のことが想起されます. 彼女を診ていた精神科医 Wolfgang Blankenburg (1928-2002) は、彼女について一冊の本を書きました. その本の表題 *Der Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit* は、Anne Rau 自身が用いた表現にもとづいています.

selbstverständlich は「おのづと了解される」、つまり、「わかりきった、あたりまえの」です。natürlich も「勿論、当然」です。日常性においては我々にとって存在事象は「当然、自然におのづと了解され得るもの」である。natürliche Selbstverständlichkeit とは、そういうことです。木村敏先生は「自然な自明性」と翻訳していました。

ところが、Anne Rau にとっては、自分自身を含めたあらゆる存在事象が「自然におのづと了解され得」なくなっていました。彼女は 1944 年生まれで、1964 年から 1968 年まで Blankenburg は彼女を診ていました。その治療が中断したのは、1968 年に彼女が自殺したからです。

Anne Rau と二階堂奥歯氏とは、年齢についても病歴についてもほぼ重なり合うのではないかと思います。

言い添えておくと、Blankenburg は精神分析家ではなく、大学病院の精神科医です。精神分析とは直接には関係ありません。

彼は Anne Rau を「症状に乏しい Schizophrenie の症例」と診断しています。

Schizophrenie は今、日本では「統合失調症」と呼ばれていますが、わたしはその表現を使う気にはなりません。動詞 σχίζειν (schizein) は「分裂する」にほかなりませんから。さりとて、いわゆる political correctness を無視するわけにも行きません。そこで、原語 Schizophrenie, schizophrénie をそのまま用います。英語では schizophrenia です。

Anne Rau は、二階堂奥歯氏のように高等教育を受けた知性豊かな女性ではありませんでした。ところが彼女は医師にこう言いました：「すべては natürliche Selbstverständlichkeit を失ってしまった」。哲学的意義に満ちた彼女の言葉のゆえに、Blankenburg は彼女に魅せられました。彼は、Anne Rau の治療のために多大な努力を払いました。当時は精神薬理学はまだあまり発達していませんでしたから、いわゆる精神療法的な治療でした。しかし、Anne はあっさりと自殺してしまいました。

Anne Rau の言う natürliche Selbstverständlichkeit の喪失は、構造 $\frac{a}{\phi}$ の解体のひとつの様態です。ボロメオ結びの観点から言えば、実在、徴象、影象の三つの輪の解離です。

R, S, I の解離において、imaginaire な意味は失われ、 ϕ の深淵がむき出

しになり、強い不安が惹起されます。Anne Rau も二階堂奥歯氏も、そのような強烈な不安、恐怖を表明しています。

相互に解離した R, S, I を再び結び合わせるには、第四の輪、症状が必要です。ところが、Blankenburg がいみじくも言ったように、Anne Rau においてはまさに症状が乏しかったのです。

Blankenburg が症状と呼んでいるのは、Schizophrenie においてよく見られる幻覚妄想症状のことです。それらの精神病症状も、構造 $\frac{a}{\phi}$ の解体を代補するために新たに増殖する a にほかなりません。

二階堂奥歯氏においても、Schizophrenie において出現する幻覚妄想症状は全くありませんでした。目立つ精神病理は、強烈な不安だけでした。

彼女の多読は、あらわになった ϕ の深淵の穴を何らかの signifiant で塞ごうとする必死の努力であったのかもしれませんが。

しかし、彼女にとってはあらゆる signifiant は仮象にすぎませんでした。十分に物質性を持った不透明な signifiant に出会う機会が彼女には無かったようです。あるいは、そのような signifiant をみづから創造することへ向

から機会がありませんでした。

詩を作ることは、物質的に不透明な **signifiant** の創造のひとつの様態です。

詩 *poème* という語は、ギリシャ語の *ποιεῖν* に由来します。*ποιεῖν* は、詩に限らず、なんらかのものを作ること、創作することです。

ドイツ語では「詩」は *Dichtung* ないし *Gedicht* です。*dichten* という動詞は「創作する」です。ですから、*Dichtung* は「詩」のみならず、あらゆる「創作」であり、*fiction*「作りごと」という意味をも持ち得ます。

詩には、通例、何らかの形式的条件が課せられます。そのため、詩作は或る種の「無理」をせねばなりません。そのような「無理」が、通常は不可能な **signifiant** の出現を促します。それが詩の魅力の源泉を成します。

現代において、詩は形式的制限から解放されましたが、日常的にはありえない **signifiant** を新たに創造することが詩作の本質を成すことに変わりはありません。そして、常識的には不可能な言葉という意味では、Joyce の *Finnegans Wake* はひとつの長大な詩です。

みづから創造しなくても、或る既に創造された詩的徴示素を以て、R, S, I
の解離を代補する症状とすること、ないし、 ϕ の深淵の穴を塞ぐことはでき
ます。その際、症状となる徴示素は、容易に了解され得ず、十分に不透明
な物質性を備えている必要があります。

22 September 2014 : 仮象的徴示素の彼方の書物；二階堂奥歯氏におけるぬいぐるみの意義；transitional object；死は無の匱である；実在の概念の二重性.

二階堂奥歯氏は、不可能な書物との出会いを探し求めるだけでなく、旅行をしてもよかったのではないか、との感想をいただきました。

彼女は、2002年6月下旬から7月初めまでトルコを旅しています。十分に *exotique* なところですよ。

しかし、テレビなどを通じて世界中のあらゆる秘境が紹介された今、最も秘められた秘境はどこにあるのでしょうか？地の果てか？いいえ、あなた自身の内奥にです。

時空内の物理学的移動によって訪れることのできる場所で見出され得るものは、仮象にすぎない。二階堂奥歯氏にはそのことは十分すぎるほどわかっていました。であればこそ彼女は、書物のなかに、書物を通じて、探し求めたのです、仮象ではないなにかを。

「書物」という語は大変すばらしい語です。「書」と「物」と。書、つまり文字は、

了解不可能な不透明性において、ひとつの物です。

その最も明白な例が、James Joyce の *Finnegans Wake* という作品です。

二階堂奥歯氏におけるぬいぐるみの意義について御指摘をいただきました。2003年1月8日付けの記事において、彼女はぬいぐるみについて論じています。

彼女は、ぬいぐるみに、存在事象そのもの全体としての存在を支えるもの、守るものを、見ようと思いました。

確かに、ぬいぐるみは、その物質性において、影象と徴象と実在の三つの輪をボロメオ的に結合する症状となり得るかもしれません。

特に、transitional object として機能するぬいぐるみは、症状そのものです。

Winnicott の transitional object の概念に Lacan は注目しました。そしてそれを objet *a* の概念のなかに包摂しました。

transitional object の代表例は、Charlie Brown の登場人物 Linus の毛

布です。彼は、毛布という客体を彼自身のように、否、彼自身として、愛しています。毛布という客体は、彼自身なのです。つまり、 $\frac{a}{\Phi}$ です。

もし仮に二階堂奥歯氏が男であったなら、もしかしたら、transitional object の延長線上に位置づけられる Fetischismus ないし蒐集癖を極端に症状化することによって、自殺に至らずに済んだかもしれません。

しかし、二階堂奥歯氏は女性でした。 $\frac{a}{\Phi}$ の a を客体として欲望する男として Φ の座に位置するのではなく、而して、彼女は実事的に性的欲望の客体 $\frac{a}{\Phi}$ として実存していました。それが如何に苛酷なことであるかを、彼女は証言しています。

二階堂奥歯氏は、ぬいぐるみそのものは仮象にすぎないことを十分に承知していました。ですから、彼女が探し求めたのは、ぬいぐるみそのものではなく、ぬいぐるみが父の名として機能する物語と、そのような物語が書かれた書物とでした。

不透明な物質性における書ないし文字の具体例を挙げるなら、古代エジプトのヒエログリフや、アラブ語の右から左へ流れるような文字を見てください。あなたがそれらを研究・学習していない限りにおいて、それらは全く不

透明なままです.

「死は無の匱である」と Heidegger は言いました.

死も無も, そのものとして思考するのは困難です. Lacan の「性関係は無い」も, 死と無を思考しようとする試みのひとつです. 四つの言説においては, それは φ の学素により形式化されました.

Lacan が四つの言説からボロメオ結びへ移ったとき, 存在のトポロジーにひとつの変化がもたらされました.

四つの言説においては, 存在の真理の *ex-sistence* はメビウスの帯として捉えられていました. ボロメオ結びにおいては, φ そのものは, R, S, I の三つの輪が相互に解離していること, として捉えられます.

つまり, *le réel* 「実在」の概念が二重化された, と言うことができます. 即ち, 三つの輪のひとつとしての実在と, φ という不可能としての実在と.

三つの輪のひとつとしての実在は, 不透明な物質性としての実在です.

Lacan が *Séminaire XII* において「*a* は実在の位のものである」と言ったと

き, その「実在」は R, S, I の三つの輪のひとつとしての実在の概念を先取りしている, と言えると思います.

それに対して, 「実在とは不可能在である」と言うときの「実在」は, 語の厳密な意味での *ex-sistence* であり, 書かれぬことをやめないものとしての実在です.

実在の概念の二重化に応じて, *sinthome* の概念も二重になってきます. ひとつは, 聖人としての *sinthome*. Lacan が精神分析家を聖人になぞらえるとき, その実存構造 $\frac{a}{\phi}$ における a は $S(A)$ という穴へ還元されていなければなりません. 聖人においては, a から影象的な要素は滅却され, a は純粹徴示素としての穴となっています. それによって, 聖人は, 神の欲望 ϕ を最も忠実に代表しています.

それに対して, *Joyce le symptôme* における症状は, 不透明な物質性における実在的な何かです. *imaginaire* な意味の了解可能性を越えた *signifiant* としての症状. それは, 無からの創造です.

23 September 2014 : Empedokles と二階堂奥歯; Bedeutung ϕ の顕現としての意義体験; 他 A の罪を引き受けること; 無意識の殉教者, 聖奥歯; metaphora と metonymia.

『八本脚の蝶』の巻末に, 二階堂奥歯氏と親しかった幾人かの文章が付録されています. そのうちのひとり, 彼女の petit ami であった吉住哲氏は, 彼女と三原山へ行ったときのエピソードを語っています: 彼女は突然, 活火山である三原山の火口へ投身しようとしてしました. そのときは, 吉住氏は何とか彼女を思いとどまらせることができ, 彼女は自殺に至りませんでした.

火山火口への投身といえば, Etna 山の火口へ身を投げたと伝えられる Empedokles を想起せずにはいられません. Hölderlin は *Der Tod des Empedokles* 「エンペドクレスの死」と題された未完の草稿を残しています. その一節を紹介してみましょう:

そのとき, 我れを捕らえた, 意義が, おののきのうちに:

それは, 我が民から去りつつある神であった!

神の言葉を我れは聞いた. そして, 沈黙せる星を

我れは見上げた. そこに神は降り来たった.

して, 神を贖うために, 我れは行った.

(…)

今や、己れのあまりの孤独さを
大地の心が嘆き、して、
昔の一体を記憶する冥き母が
天空へ火の腕を広げ、
して、今や、支配者がその光のうちに来たるとき、
されば、我れらは、我れらの方が親族であることの徴に、
その方に従う、聖なる炎のなかへ降りて行きつつ。

(…)

おお、汝れら、霊たちよ、
汝れらは我が生の始めに近しき者らであった、
汝れら、遙か彼方を予覚する者らよ！
我れは汝れらに感謝する、汝れらのおかげで我れは
長き数の苦悩を
ここで終わらせることができる、ほかの義務から解放されて、
自由なる死において、神の律法にしたがって！

Empedokles の口を借りて詩っているのは、勿論、Hölderlin 自身です。

周知のように、Hölderlin は自殺はしませんでした。彼においては、精神病

が発症しました。Schizophrenie であったと推測されます。

彼の作品には、精神病発症期の独特の切迫感や緊張感がみなぎっています。そして、詩作にもかかわらず、Schizophrenie に典型的に見られる声の幻覚が発症します。一時期は典型的な緊張病状態を呈していたことがうかがわれます。

Hölderlin が「意義が我れを捕らえた」と言っているのは、精神病理学において Bedeutungserlebnis 「意義体験」と呼ばれているものに相当します。そこにおいては、存在が Bedeutung Φ としてまさに顕現しようとし、典型的な幻覚妄想症状の前段階です。

Hölderlin の神は「我が民から去りつつある神」です。逃げ去ってしまった神。それは、己れを離退する存在 Φ そのものです。

「神を贖う」とは如何なることか？キリスト教においては、神が我れらの罪を贖ってくれます。ところが、先ほどの引用箇所では、Hölderlin が神を贖うのです。

「神を贖う」は、神の罪を前提しています。Hölderlin は神を贖う。ということ

は, Hölderlin は, 神の罪を己れの罪として引き受けたのです.

ここで, 「人間の欲望は他 A の欲望である」という Lacan の命題を想起してもよいでしょう. 神の罪を己れの罪と認めること. それは, $A \equiv \emptyset$ の等価性を認めることです.

そして, 神の罪を己れの罪と認めることにおいて, Hölderlin は神の親族となります. つまり, 聖人となります.

神の親族, 聖人は, 神に従順です. 神に従順に「聖なる炎のなかへ降りて行き」ます. 二階堂奥歯氏も, まさにそうしようと思いました.

「おお, 汝れら, 霊たちよ, 我れは汝れらに感謝する. 汝れらのおかげで我れは長き数の苦悩をここで終わらせることができる」と Hölderlin は詩っています.

二階堂奥歯氏も, 強烈な不安を長期間, 辛抱してきました. 拷問の苦痛を堪え忍ぶ殉教者のように. 彼女は簡単に世を捨て去ったわけではありません. 死の前の数ヶ月間, 彼女は耐えがたい不安を辛抱し続けていたのです. 殉教者として, 重い十字架を担い続けたのです. 彼女は十分に辛抱し

ました。存在の深淵について、十分に証言しました。

だから、神はついに彼女に言いました:もうよい、こちらへ来なさい、と。

彼女は、地上的な負いめから解放されて、「自由なる死」を死にました。「神の律法にしたがって」。

神の律法にしたがうこと。Antigone もそうしました。

二階堂奥歯氏は、無意識の殉教者です。したがって、聖人、聖女です。死後ではあっても、主は彼女を洗礼するでしょう。洗礼名は、彼女が愛読した聖女 Marguerite-Marie Alacoque にちなむことになるでしょう。

殉教者たちは、 $S(A)$ の穴をそのものとして証言します。

それに対して、James Joyce は、 $S(A)$ の穴の場処において「無からの創造」を為し遂げます。それによって彼は、死者のうちから復活します。

métaphore は $\frac{a}{\emptyset}$ の構造そのものです。

métonymie は、まったく制止不能、把握不能な Φ そのものです。

Φ が $\frac{a}{\Phi}$ の métaphorique な構造に全く捕らわれずにいるとき、それは死そのものです。それは、ボロメオ結びにおいて R, S, I の三つの輪が相互に解離している状態に対応します。

Φ を métaphorique に保匿する何らかの a を創造することが、死からの復活です。詩は、そのような創造のひとつの様態です。

精神病に関して Lacan が phénomènes élémentaires と呼んだものは、そこから出発して幻覚妄想症状が形成されるところの anidémique な — つまり、imaginaire な、了解可能な意味を持たない — 核です。Bedeutungserlebnis もそのひとつです。Lacan の精神医学の師である Clérambault の automatisme mental も phénomènes élémentaires に数えられます。

精神病症状は、S(A) の穴の場処に増殖する a の典型例です。

24 September 2014 : Freud による無意識の発見の本質は去勢複合の発見に存する; Φ と $(-\phi)$ と ϕ .

Freud は無意識を発見した, と言われます.

『無意識の発見』という本があります. 著者は Henri Frédéric Ellenberger. カナダ人ですが, 名前を見ればわかるように, フランス語圏の人です. ですからカタカナ表記は「エレンベルガー」ではなく「エランベルジェ」とすべきです. 『無意識の発見』は 1970 年に出た本ですが, 邦訳はまだ絶版にはなっていないようです. いわゆる力動的精神病理学と精神分析の歴史に興味があれば, 一読してもよい本です. 必読ではありません.

Freud は無意識を発見したと言われますが, その発見の本質は何か? それは, 去勢複合です. 去勢の名のもとに, Freud は, 存在欠如, すなわち, 存在論的穴を発見しました. 勿論, 彼は, その発見をそのような存在論的用語では記述しませんでした.

去勢の本質を形式化する学素は, 抹消された徴示素ファロス ϕ です.

徴示素の宝庫である他 A の場処には, 性関係を実現するかもしれない

徴示素ファロス ϕ が欠けている。より正確に言えば、徴示素ファロス ϕ は「書かれぬことをやめぬ」不可能な徴示素である。

徴示素ファロスが書かれぬことをやめないことによって、他 A の場処には穴がうがたれます。そして、Heidegger-Lacan 定理により、 ϕ と存在とは等価であるので、去勢とは存在論的欠如である、とすることができます。

このような去勢のトポロジーを Freud は影象的に捉えました:去勢とは、母親ないし女におけるペニスの欠如である。

Lacan が他 Autre と呼ぶもの、徴示素の宝庫としての他 A は、精神分析における母親の機能の形式化です。

fonction imaginaire de la castration [去勢の影象的関数(相関事象)]を Lacan は $(-\phi)$ の学素で形式化します。それは、「母親ないし女における欠如せるファロス」と Freud が影象的に呼ぶものです。

たとえば Hans 少年の例を見ればわかるように、去勢複合は、この phallus imaginaire 「影象的ファロス」 $(-\phi)$ という対象をめぐる形成され、展開されます。馬車が交通と運搬の主要手段であった時代の Wien

に暮らしていた Hans 少年の場合、それは、極めてみぢかな動物の一種であった馬に指をかまれるのではないかとひどくこわがる恐怖症症状の形成に至ります。

その不安は、本質的には、去勢の影象的相関事象としての $(-\phi)$ ではなく、ex-sistence としての ϕ の深淵が他 A の場処にうがつ穴 $S(A)$ を前にしての不安です。

この存在論的穴は、男の場合、通常は、phallus symbolique Φ により塞がれます。

話を整理すると、ひとくちに phallus と言っても、三つの学素があります: Φ と $(-\phi)$ と ϕ 。それら三者は、symbolique 「徴象」、imaginaire 「影象」、réel 「実在」の三つの位にそれぞれ属しています。

抹消された徴示素ファロス ϕ は、書かれぬことをやめない不可能な徴示素として、実在的なファロスと呼ばれてよいでしょう。それは、「性関係は無い」を形式化する学素です。

$(-\phi)$ は、実在的なファロスの影象的な相関事象、影象的ファロスです。

それは、母親のファロス、女には欠けているファロスの image として、負 (マイナス)の記号を付されています。

ギリシャ大文字 Φ で形式化される phallus を, Lacan は signifiant de la jouissance 「悦の徴示素」(*Écrits*, p.823) と呼んでいます。つまり, Φ は徴象的ファロスです。

Φ は, ϕ の深淵:「性関係は無い」の穴を塞ぐ代補です。それは、男の性別を規定する徴示素ファロスです。

Hans 少年においては, Φ がしかるべく形成されず, ϕ の深淵が多かれ少なかれ口を開いたままとなっています。その開口をまがりなりにも塞ぐために動員されたのが, 恐怖症の対象としての仮象的客体 a , Hans 少年の場合, 馬です。

Hans 少年の父親の観察によれば, 時間の経過につれて, 客体 a の座には, 恐怖症の対象としての馬に代わって, Hans 少年が空想において母親的に世話する子供たちが登場してきます。ですから Lacan は, Hans 少年は後年, 同性愛者になる可能性がある, と指摘しています。実際そうなったかどうかは確認できませんが, Hans 少年は成長して, オペラの演出家

になりました。彼が空想のなかで遊んでいた子供たちは、舞台の上で動き
回る歌手となったわけです。彼は、選ぶべき仕事を選んだと言えるでしょう。

25 September 2014 : 東京ラカン塾のセミナー；精神分析の知；八つの幸福；靈氣貧しき者らは幸い。

2 週間後の金曜日, 10 月 10 日から, 東京ラカン塾のセミナーを始めます. 第一年めの主題は, 精神分析の基礎です. Heidegger が「存在のトポロジー」と呼んだものについて思考することになるでしょう.

場所は文京区民センター2 階の 2C 会議室, 時間は 19:30 - 21:00 です.

公開セミナーですので, 事前の登録等は必要ありません. 参加費も無料です.

精神分析の知は, 秘教的ではなく, 顕教的です. *ésotérique* ではなく, *exotérique* です.

Lacan の *mathématisation* の努力, *mathème* 化の努力が, そのことを示しています.

精神分析の知は, 誰もがアクセスし得るものです.

Lacan の Séminaire は、数百人が入れる大きな講堂で行われていました。誰でも無料で聴講できました。Paris 第 8 大学精神分析学部の諸講義も、誰もが無料で聴講できます。

École de la Cause freudienne や Association mondiale de psychanalyse の学会は、大きな会場を借りる都合上、参加費の支払いが必要になってきますが、その成果は後で出版されます。

東京ラカン塾が École freudienne de Paris や École de la Cause freudienne のように大規模なグループになることをわたしは意図的には目ざしません。しかし、日本においても精神分析を公共的なものにしたいと思います。

精神分析は、評論家が書きちらかす「... の精神分析」というような本の表題にとどまっていたはなりません。そのようなしろものの中に書かれていることは、精神分析でもなんでもありません。

精神分析はひとつの実践です。その実践においては、あなた自身の存在がかかわっています。あなた自身の生がかかわっています。あなたが非本能的な日常性のなかに墮したまま暮らしつづけるか、それとも、本来的な存在可能性へ目覚めるか、その選択がかかわっています。

さて、幸福について御質問をいただいていたいました。二階堂奥歯氏、殉教者にして聖女、聖奥歯のことを考えていて、その問いに取り組むのが遅くなっ
てしまいました。

幸福とは何か？ここで幸福の科学をするつもりはありません。イエスの言葉
を読みましょう。マタイ福音書 5,3-10. 邦訳聖書では「山上の説教」と題さ
 れていますが、「八つの幸福」とも呼ばれます：

Μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

霊気貧しき者らは幸い。天の国は彼らのもの。

μακάριοι οἱ πενθοῦντες, ὅτι αὐτοὶ παρακληθήσονται.

喪に悲しむ者らは幸い。彼らは慰められる。

μακάριοι οἱ πραεῖς, ὅτι αὐτοὶ κληρονομήσουσιν τὴν γῆν.

優しい者らは幸い。彼らは地を受け継ぐ。

μακάριοι οἱ πεινῶντες καὶ διψῶντες τὴν δικαιοσύνην, ὅτι αὐτοὶ
χορτασθήσονται.

正義に飢え渴く者らは幸い。彼らは満たされる。

μακάριοι οἱ ἐλεήμονες, ὅτι αὐτοὶ ἐλεηθήσονται.

憐れみ深い者らは幸い。彼らは憐れみを受ける。

μακάριοι οἱ καθαροὶ τῇ καρδίᾳ, ὅτι αὐτοὶ τὸν θεὸν ὄψονται.

心清き者らは幸い。彼らは神を見る。

μακάριοι οἱ εἰρηνοποιοί, ὅτι αὐτοὶ υἱοὶ θεοῦ κληθήσονται.

平和の業を為す者らは幸い。彼らは神の子と呼ばれる。

μακάριοι οἱ δεδιωγμένοι ἕνεκεν δικαιοσύνης, ὅτι αὐτῶν ἐστὶν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.

正義のゆえに迫害される者らは幸い。天の国は彼らのもの。

ひとことで言うなら、幸福は神の律法への従順に存します。Antigone と Empedokles が従った神の律法。聖奥歯も従った神の律法。

ただし、彼ら、彼女らは結果的に自殺しましたが、神の律法に従順であることの本質は自殺に存するわけではありません。そうではなく、殉教者が迫害の拷問に耐えたように、苦痛と悲痛に辛抱することが本有的です。

八つの幸福の第一のものは通常、「心の貧しい人々は幸いである」と訳されます。カトリックの邦訳聖書、フランチェスコ会聖書研究所版では、「自分の貧しさを知る人は幸いである」と訳されています。フランチェスコ会訳は工夫された訳ですが、しかし、この訳にはあまり賛成できません。なぜなら、キリスト教の key word のひとつが訳し落とされているからです。

「貧しい者」は原語では「乞食」です。経済的に貧乏だが、なんとか暮らしてゆくことができるような貧しさではありません。乞食の貧しさとは、生存可能性を絶対的に他者に頼らねばならないような貧しさです。他者は、この場合、勿論、神です。

「心」と訳される語は、原語では $\piνεϋμα$ です。「心清き者ら」における「心」は「心臓」も差し徴し得る語ですが、第一の祝福における「心」は、その語ではなく、「靈氣」です。靈氣は、神の息吹であり、神から人間に与えられる命です。

皆さんにもなじみのある *inspiration* という語に含まれている *spiritus* が、ラテン語で $\piνεϋμα$ に相当する語です。*inspiration* とは、本来的には、神から息吹き、靈氣を吹き込まれることです。それによって、いわゆる靈感を得ることができます。

自分は神無しでも靈氣に富んでいる、とおごり高ぶる者は、存在事象の次元において錯覚しているだけです。真の幸福は、命の原理である靈氣に関して、自分には欠如しか無い、と気づくことに存します。つまり、仮象としての a の分離において、 $S(A)$ の穴へ至ることです。

26 September 2014 : 聖書を読解するときも症状を解読するときも、心理学的了解は退けられねばならない; *imaginaire* な意味の了解は、解釈の行き詰まりを成す; 幸福は、客体 *a* の分離と喪失に存する。

重要な著者の重要なテキストを読むときには、可能な限り原文を原語で読むべきだ、と強調してきました。

聖書も例外ではありません。昨日紹介した「八つの幸福」(Mt 5,3-10) の一節を見ても、そのことがわかります。

たとえば、既成の邦訳における「心の貧しい人々」という表現から出発したのでは、第一の幸福の規定においてイエスが何を言おうとしているのかを把握することは困難です。「心が貧しい」からは、荒涼とした、荒廃した心理学的状態を思い浮かべてしまうかもしれませんが、それは全然違います。

精神分析において心理学的了解が過誤であるのと同様、聖書を読む際にも心理学は *misleading* です。聖書の読解は、無意識の成形としての夢や症状を解釈するのと同様です。なぜなら、いずれも $\frac{a}{\phi}$ の構造がかかわっているからです。

「八つの幸福」のうちの第一の幸福にもどると、原文を参照して初めて、「心」ではなく、*πνεῦμα* がかかわっていることがわかります。通常「聖霊」と訳されている *ἅγιον πνεῦμα* の *πνεῦμα* です。

キリスト教の最も重要な **key word** のひとつである *πνεῦμα* という単語の翻訳が一貫しておらず、「心」と翻訳されてしまったりするのは何故か？それはまさに、翻訳者が聖書を心理学的に了解してしまうからです。

心理学的了解を徹底的に退けねばなりません。

1973-74年の *Séminaire : Les non-dupes errent* の冒頭において Lacan は、*imaginaire* な意味は解読を阻止してしまう、と言っています。

imaginaire な意味とは、了解され得る意味です。

もし仮に我々が、たとえば或る症状を、或る夢を、その *imaginaire* な意味の次元において了解してしまうなら、我々はそれで安心してしまいます。それで満足してしまいます。そして、実際には不透明な *signifiant* から成っている無意識の成形をそれ以上解読しようとはしません。

そのような事態に陥ることを Lacan は戒めているのです。

心理学, この場合, ネズミの実験心理学ではなく, 人間の臨床心理学ですが, 心理学的了解, *imaginaire* な意味を心理学的に了解することは, 精神分析的な解釈を阻止し, さらに, 全くの誤謬に陥らせます。

いわゆるカウンセリング, ならびに非ラカン派の精神分析においては, 心理学的了解しか為されていない, ということも付言しておきましょう. 非ラカン派の精神分析が衰退していったのは当然です. *imaginaire* な意味という袋小路にとらわれてしまうのですから。

「八つの幸福」をさらに読んでみましょう. ふたつめ(ないし, テクストによっては三つめ)の幸福の規定は, 通常の翻訳では「悲しむ人々は幸いである」です。

「悲しい」という「感情」を心理学的に了解して何が悪い, と思われるかもしれませんが。

しかし, 原文を見てみましょう. 「悲しむ人々」は *πενθοῦντες* です. これは, *πενθεῖν* という動詞の分詞に由来する名詞です. そして, *πενθεῖν* は単に

「悲しむ」という心理を表現しているのではなく、「服喪する」です。愛する者を亡くしてしまい、喪に服することです。喪失がかかわっているのです。そのことを読み取らなければ、第二の幸福の規定:「悲しむ人々は幸いである」を解説することはできません。

$\pi\epsilon\nu\theta\omicron\upsilon\acute{\nu}\tau\epsilon\varsigma$ は「喪失を被った者ら」です。つまり、 $\pi\epsilon\nu\theta\omicron\upsilon\acute{\nu}\tau\epsilon\varsigma$ においては、 $\frac{a}{\phi}$ の構造の仮象 a の分離と脱落が成起しています。それによって、 $S(A)$ の穴がそのものとして顕わになります。言い換えると、仮象 a が純粹徴示素 $S(A)$ へ還元されています。

$S(A)$ は、定義からして、他 A のなかの欠如 A の *signifiant* です。そして、 A と ϕ とは等価ですから、 $S(A)$ は ϕ を最も忠実に代表する徴示素です。

第二の幸福の「悲しむ人々」は、客体 a の喪失において、神の欲望 ϕ をそのものとして代表し、忠実に証言しています。であるからこそ、彼らは幸福であるのです。

「八つの幸福」の規定はいずれも、一見すると逆説的に見えます。しかし、それが逆説的であるのは心理学的観点からにすぎません。 $\frac{a}{\phi}$ の構造に

基づいて解説するなら、それらは逆説ではなく、ただひたすら、仮象 a の分離と脱落を表言しているにほかなりません。

つまり、幸福は、仮象 a の分離、脱落、喪失に存する、とすることができるでしょう。

27 September 2014 : 情動 vs 言葉; 無意識はひとつの言語として構造化されている; 言語の構造において, 徴示素 a は主体の存在の真理を代表する.

Télévision において Lacan が affect 「感情, 情動」について語っている箇所に関して御質問をいただいています. 非常に難解な部分です.

Autres écrits, p.521 において Jacques-Alain Miller は Lacan にこう質問しています:あなたは「無意識はひとつの言語として構造化されている」と公式化しているが, 心的エネルギーや affect や pulsion についてはどうなのか?

つまり, 人間に関して言葉では言い表せないかもしれないようなもの, 言葉では捉えきれないかもしれないようなものについては, どうなのか?

まず, Jacques-Alain Miller が引用している Lacan の基本公式のひとつ: 「無意識はひとつの言語として公式化されている」を改めて検討してみよう.

Écrits を見てみるとわかるように, l'inconscient est structuré comme un

langage という公式は, Lacan の諸公式のなかでも最も良く知られたものでありながら, この形でそっくり引用できる箇所は *Écrits* のなかにはありません. この公式が述べられている箇所ではどこでも, 若干ちがった形でそれは提示されています. 勿論, *l'inconscient est structuré comme un langage* という形に整理することはできます.

この公式を Lacan が最初に提起したのはいつかを探してみると, 1953 年のローマ講演のなかにこの命題が見つかります: *le symptôme est structuré comme un langage* (*Écrits*, p.269). 症状は, ひとつの言語として構造化されている.

Lacan の言う「言語の構造」は, 症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ にほかなりません.

そこにおいて a は *imaginaire* でも *symbolique* でも *réel* でもありえますが, 広い意味で a は *signifiant* です. そして, ϕ は *signifié* です.

phallus は *signifiant* だ, と Lacan は強調していますが, 抹消された *phallus*: ϕ は *signifiant* の座には来れません.

Écrits に収録されている書 *La signification du phallus* の難解さは, そこ

に起因しています。いったい phallus は signifiant なのか？もしそうであるとすれば、Saussure の言う言語の構造においてどう位置づけられるのか？そして、 a と phallus との関係は如何なるものなのか？

学素 $\frac{a}{\phi}$ は、そのような問いに答えてくれます。

Autres écrits p.521 において Jacques-Alain Miller が Hamlet のせりふを引用して、「言葉, 言葉, 言葉」. では、言葉で表現できないものはどうなのか？と質問するとき、しかしながら、我々が準拠すべきは常に、言語の構造 $\frac{a}{\phi}$ です。なぜなら、言語の構造において、「言葉」つまり signifiant a は、signifiant の座に決して来れないもの（なぜなら、それは抹消された signifiant ですから）である ϕ を代表しているからです。

言葉になり得ないものは、言語の構造の signifié の座に位置しています。そして、その座は、主体の存在の真理の座です。

言語の構造 $\frac{a}{\phi}$ は、主体の存在の真理の現象学的構造です。『ハイデガーとラカン』第一章で証明した Heidegger-Lacan 定理を参照してください。

精神分析で pulsion と呼ばれるものは、いわゆる性欲に対応します。誰も

が「感覚的に」体験しています。affect「感情、情動」も「筆舌に尽くせない」ものとして「感ぜられる」ものです。そのようなことに基づいて、人間の内に「心的エネルギー」が想定されます。

無意識という心の奥底の深いところに熱いマグマがたまっており、そのエネルギーが或る限界を越えると、地上に噴出してきて、何らかの表現や行動や症状になる。

無意識についての通俗的な思念はそのようなものでしょう。しかし、そのような通俗的な観念を一掃するためにこそ、Lacan は「無意識はひとつの言語として構造化されている」と言ったのです。

28 September 2014 : 無神論について; 神は, 存在の真理の場処である;
存在の真理の場処への知の仮定; 転移について.

まずは時事ネタから. Lacan の息女 Judith Miller が Roudinesco を名誉毀損で訴えた裁判の二審判決が 9 月 24 日付で出たそうです. 木村智也氏の Facebook への投稿で初めて知りました. *Le Monde* にも *Le Nouvel Observateur* にも ECF の site にも報道されていなかったのだから, 全く気づきませんでした.

問題になっていたのは, Roudinesco が Lacan を無神論者と決めつけたこと; 無神論者であるにもかかわらず Lacan は盛大なカトリックの葬儀を望んでいた, と Roudinesco は断定したこと; そして, Lacan の遺族は Lacan の意向を無視して密葬ですませた, と Roudinesco はこれまた決めつけたこと.

フランスの精神分析の歴史に関する Roudinesco の記述が不正確であり, 彼女の視点は偏向しているという評価は, 先ごろ出版された Nathalie Jaudel による批判を待つまでもなく, Lacan を直接知る人々の間では定まっていた.

先ほど紹介した Roudinesco の記述も、いったい何を根拠や証拠にしているのか、全く不明です。

Lacan は、彼の Séminaire 等の公の場で「わたしは無神論者だ」と宣言したことは一度も無いと思います。

また、Roudinesco は、Lacan が自分の葬儀をどうして欲しいと思っていたかを知り得る立場にはありませんでした。彼女の記述は全く無根拠であることは明白です。

ただし、Judith Miller は名誉毀損で Roudinesco を訴えていたので、判決は、Roudinesco が Lacan の名誉を傷つけたとは言えない、というものでした。ばからしい話です。

Roudinesco は、そもそも、無神論とは何かを真剣に考えてみたことがあるのでしょうか？多分、無いでしょう。彼女はそのような繊細な思考ができる人物ではないと思われます。

Roudinesco は、たとえば Lacan が *Encore* p.45 でこう言っていることを知っているのでしょうか？それについて考えてみたことがあるのでしょうか？Lacan

はこう言っています:

まことに無神論者である者があるとすれば、それは神学者たちしかあり得ない。つまり、神について語る者らである。

Lacan も神について語っています。ただし、神学者たちと同じようにはなく。

たとえば、先ほどの引用の直前、*Encore* p.44 の下部で Lacan はこう言っています:

真理の場処としての他 A は、神という用語に与え得る唯一の座である。神は、本来的には、其において言 *le dire* が生ずるところの場処である。(…)何事かが言われる限りにおいて、神という仮定はあり続けるだろう。

この引用箇所においては明言されていませんが、Lacan は、真理の場処としての他 A の場処について、それは穴の開いた場処である、と言っています。

神はひとつの場処である、と Lacan は言っていますが、他 A の場処に

穴をうがった深淵の座こそが神の座、神の場処です。

Lacan が神について語る時、彼は、その穴を決して覆い隠そうとはせず、むしろ、それを明示します。それこそが神の本有に属しているからです。それによって Lacan は、深淵としての神、 ϕ としての神が己れを啓示し得るように、神について語ります。

それに対して、神学者たちは — といっても、さまざまな神学者たちを十把一絡げにはしないでおきましょう。たとえば Meister Eckhart のような否定神学の神学者たちは違うからです。

Meister Eckhart のようではない凡庸な神学者たちは、神について語ることによって、神という深淵を覆い隠してしまい、神が己れを啓わすことを妨げてしまいます。Lacan が「無神論者であるのは神学者たちだ」と言っているのは、そのような意味においてです。

他方、無神論に関する Lacan の命題のうち最も有名なものは、Séminaire XI p.58 のこれでしょう：

無神論の本当の公式は「神は死んだ」ではない。無神論の本当の公式は

« Dieu est inconscient » 「神は意識が無い」である。

とりあえず「神は意識が無い」と訳しましたが, « Dieu est inconscient » は, 神と知との関係について述べた命題です. つまり, 神は何も知らない.

そもそも, 神は何かを知っていたり知らないでいたりするひとつの存在事象ではありません.

では「神はすべてを知っている」とはどういうことか? そのことと「神は何も知らない」とは相互に矛盾しているではないか?

父なる神について, Cappella Sistina の天井に Michelangelo が描いたような白髪と長いヒゲの長老の image は, 捨てなければなりません.

先ほど Lacan が言ったように, 神とはひとつの場処に与えられた名なのです. つまり, 神の本有は, 主体の存在の真理の座 ϕ です.

そして, その真理の座には知 S_2 が仮定されています. 先ほど Lacan が「神という仮定」と呼んでいたものは, 神の座への知の仮定のことです.

神への知の仮定, それが「神は全知である」という命題が差し徴していることです.

他方, 神とは知が仮定されている場処にほかならない限りにおいて, 神は意識が無い. 意識という生理学的, 心理学的機能を神に帰することはできない. そう Lacan は言っているのです.

その場合, 「無神論者」 Lacan が否定しているのは, 通俗的な神の観念ばかりでなく, 分析家を神格化する可能性です.

新興宗教の教団においては, 教祖の神格化が起こります. 教祖には神的な知が「仮定」ではなく, 実際に備わっている, と信ぜられています.

精神分析家がそのような神格化を被ることがあってはならないし, いわんや, 分析家が自分を神格化することがあってはなりません. 精神分析が無神論的であるとすれば, それはそのような意味においてです.

しかし, そのことは, 精神分析において神の本有について真剣に問うこと, 神の本有に適うように, 神に忠実であるように問うことを妨げるものではありません. そして, そのような問いによってこそ, 神は *ex-sistence* の座から

己れを啓示し得るのです。

転移について御質問をいただいています。関連する問題ですので、*Télévision* の読解へ進む前に考えてみましょう。

転移について、Lacan はさまざまな公式を提起しています。転移とは何か？ Séminaire XI, p.137 において Lacan はこう定義しています：

Le transfert est la mise en acte de la réalité de l'inconscient.

転移は、無意識の実在性の現動化である。

そして、同書 p.138 の始めに付言しています：

無意識の実在性は、性的実在性 *réalité sexuelle* である。

以上の転移の定義は、構造 $\frac{a}{\phi}$ に準拠して読解され得ます。

「無意識の実在性」は ϕ です。その現動化とは、己れを隠す主体の存在の真理 ϕ が仮象 a によって代理・代表され、それによって現象することです。

主体の存在の真理 Φ の座には、知 S_2 が仮定されます： $\frac{a}{S_2}$ 。これが、Lacan が「知の仮定的主体」le sujet supposé savoir と呼ぶものです。それは、分析家の言説の左側の構造を成しています。

知の仮定的主体は、其れにもとづいて「転移とは如何なるものか」の問い全体が措定される場所の基軸である、と Lacan は *Autres écrits* p.248 で規定しています。

以上のような転移についての Lacan の所論は、Freud の転移神経症の概念の検討に基づいています。転移神経症とは、神経症の精神分析的治療において、神経症症状 $\frac{a}{\Phi}$ が分析家を客体 a として形成し直されることを指しています。

そのようにして症状の構造は現動化され、現在化されます。そして、そうなる初めて、つまり、分析家自身が症状の徴示素 a となって初めて、分析家の言動は解釈の効果を持ち得るのです。

ですから、「精神分析の始まりには転移がある」と Lacan は言っています。

転移は精神分析の必要条件です。言い換えると、分析家の言説の構造が
成立していることが、精神分析治療の可能性の条件です。

29 September 2014 : 転移と逆転移； 転移と知の仮定的主体； 分析の終わり
と転移の解消。

逆転移について：Lacan の教えのなかには逆転移という概念はありません。
なぜなら、Lacan は転移を「知の仮定的主体」を基軸として徴象の次元に
おいて思考するからです。

それに対して、非ラカン派の分析家たちは、影象の次元において、 $a - a'$
の関繋、つまり、自我-他者の鏡像的関繋のなかで、転移を捉えます。その
ような鏡像的関繋においては、転移には必然的にその鏡像として逆転移
が伴います。

非ラカン派の分析家たちにとって逆転移が厄介なものであるのは、彼らが
この転移・逆転移の影象的関繋の袋小路にはまってしまい、右往左往、四
苦八苦しているからです。

他方、Lacan の教えに正しく準拠するなら、そのようなことは起こりません。

そもそも、Lacan が徴象の次元とそこにおける承認の重要性を強調したの
は、影象的・鏡像的な転移・逆転移の関繋における攻撃性、敵対性の袋

小路から分析的関係を救い出すためでした。

転移は、構造 $\frac{a}{\phi}$ において、主体の存在の真理の座 ϕ に知 S2 が仮定されること、すなわち、知の仮定的主体 *le sujet supposé savoir* によって規定されます。

分析の終わりにおいては、能動者・支配者の座から徴示素 a が罷免され、症状が解体するに伴って、その a が支えていた知の仮定も無効になります。つまり、転移は解消されます。

しかし、それはひとつの徴示素 a に関してです。何年にも及ぶ分析の過程においては、症状の解体は何回も起こります。あるいは、フランスのように多くの分析家がいるところでは、ひとりの分析家との分析が終わったら、次は別の分析家と分析するということがあります。たとえば、男性分析家との分析が終わったら、次は女性分析家と分析する、ないしその逆の順序で、ということもありえます。分析家が変わると、転移もまた新たになりえます。

最終的にすべての徴示素 a を罷免することはできるのか？という問いは、正しい問いの立て方ではないと思います。なぜなら、復活においては、新たな徴示素 a が創造されるからです。たとえそれが $S(A)$ そのものであ

れ.

復活においては、創造が成起します。Joyce の *Finnegans Wake* ほどの規模のものではないにせよ。

どれほど徹底的に教育分析を受けた分析家でも、新たに転移の関繋に入ることはいええます。たとえば、Lacan に対する転移。あるいは、神に対する転移。しかし、それは、その分析家が分析家の言説の構造において分析家として機能することを妨げるものではありません。

30 September 2014 : 心的エネルギーについて ; affect と passion du signifiant ; より聖人であるほど, より笑う ; 陽気な知, gai savoir ; Mother Teresa の笑顔の美しさ.

Télévision の affect に関する部分を読んでみましょう.

まず, エネルギーに関してですが, Lacan は, エネルギーはひとつの物理量であることを指摘します. エネルギーは, 数式で計算される量ですから, 言葉の次元の外のものでは全くありません.

エネルギーや力という語から, Star Wars の Force のようなものを思いうかべるかもしれませんが, Star Wars はただの作り話です.

次に affect 情動ないし感情についてですが, ここでも, 心理学に陥らないようにしましょう. そのためには, 構造 $\frac{a}{\phi}$ をよりどころにします.

affect という語は, フランス語のなかでは比較的新しい語です. 昔は affect が無かったので, Spinoza に出てくる affectus を affection と訳していました. ところが, Spinoza は affectio という語も用いているので, affectus と affectio との区別が困難になります. だからというわけではない

ですが、ドイツ語から affect が輸入されました。

Lacan は、*La signification du phallus* の書のなかで、*passion du signifiant* という表現を使っています。passion は「熱情」であったり「受難」であったりしますが、この場合、或る作用を被ることです。

passion du signifiant は、構造 $\frac{a}{\phi}$ において、徴示素の作用を被ることで
す。そして、それは ϕ そのものです。

affect とは、*passion du signifiant* としての主体の存在の真理 ϕ そのもの
です

さて、いただいた御質問において問題になっている「悲しみ」のことですが、
悲しみとは逆の affect を考えてみましょう。

Télévision で Lacan はこう言っています:より聖人であるほど、より笑う。

聖人は、陽気なのです。

そして、聖人だけでなく、知も陽気です:gai savoir. 陽気な知. Nietzsche も

用いている表現です。

gai savoir においては、了解することはかかわっていません。むしろ、可能な限り意味をそぎ取ります。そして、解読を悦びます。Jouir du déchiffrement. それはいったい、どういうことでしょうか？

gai savoir においてかかわる知は、当然、分析家の言説の構造において左下の真理の座に仮定される S_2 です。*gai savoir* は、この知 S_2 を解読します。しかし、 S_2 そのものは、存在の真理の座に隠れたままです。

解読とは、真理の座に隠れたままの S_2 を代理する徴示素 a を創造することです。

かくして、*gai savoir* は、聖人と Joyce との間の仲立ちになるものだ、と言えます。

gai savoir は、存在の真理の座に仮定された知にもとづいて詩作することです。主体の存在の真理の *métaphore* を創造することです。

創造は、復活です。*gai savoir* の陽気さは、死からの復活の喜びです。

悲しみについては, *gai savoir* との対比において読解されます. *une faute morale, une lâcheté morale* という表現を Lacan は用いています. 「気のゆるみ」と訳せます.

「鬱は気のゆるみだ」などと言うと, まるで, 鬱病について無理解な人間が鬱病の人を責めているようですが, そういうことではありません.

この「気のゆるみ」は, *gai savoir* の創造性を欠いている, ということです. 何も創造せず, 純粹に Φ にとどまること. それが「気のゆるみ」, つまり, 悲しみです. 復活の要素は無く, 喪に服したままです.

ともあれ, 分析の終わりは, *Bonjour, tristesse!* にとどまることに存するのではなく, 逆に, *Adieu, tristesse!* です.

Déchiffrage, 無意識の知の解読. それは, 悦ばしき *sinthome* の創造です.

死と喪の悲しみを去り, 創造によって, 詩作によって, 復活の喜びへ至ること, それが *gai savoir*: 陽気な知です.

より聖人であればあるほど、よりよく笑う。

Mother Teresa の笑顔が想起されます。深い皺のきざまれた彼女の笑顔。
それは、どんなに美しく化粧した若い女性の愛想笑いよりも美しい、と言え
ます。

01 October 2014 : 父の名について; 聖霊について; 三位一体について; 我れらは, イエスにならって死に, イエスにならって復活する; 神の名 YHWH ; 心理学的了解は, 精神分析的解釈を阻止する; 不可能な徴示素 YHWH.

Lacan の「父の名」が Facebook で話題になったので, ここで整理してみましょう. 日本ではキリスト教になじみの無い人が圧倒的に多いですから, キリスト教における「父の名」から始めましょう.

カトリックのミサでは, 開始時と終了時に, 十字の徴を切りながら「父と子と聖霊の御名によって, アーメン」と唱えます.

十字の徴を切るという所作については, ブラジルなどのカトリック国のサッカー選手が得点したとき, 神に感謝しながら十字を切っているのを皆さんも見たことがあるでしょう.

Sanctus Spiritus を「聖霊」と翻訳するのはあまり適切ではないと思いますが, 日本のカトリック教会の儀式のなかでは慣例になっていますから, しかたありません.

Spiritus は「気」です。自然現象としての空気、大気であり、風でもあります。

そしてまた、息吹でもあります。

Sanctus Spiritus は、神の息吹です。

旧約聖書では、天地の創造のとき、できたばかりの海の上に神の息吹が吹いています。神は、アダムを土から創って、仕上げに鼻孔から息を吹き込みます。神の息吹は、創造の息吹であり、命を与える息吹です。

新約聖書では、復活したイエスは使徒たちに息を吹きかけつつ言います：「聖霊をうけなさい」。使徒言行録の始めで、神の息吹は炎の熱気として天から使徒たちの頭上へ下り、使徒たちを聖別し、イエスの教えを全世界に伝える勇気を彼らに与えます。

Sanctus Spiritus は「聖なる気」です。ただ「気」だけでは曖昧なので、「精気」または「靈気」と呼びましょう。「聖霊」は「聖なる靈気」です。

話を元に戻すと、「父と子と聖霊の御名によって」は、三位一体の神秘を思い起こすための表現です。

旧約聖書でユダヤ人たちが YHWH と呼んでいた父なる神と、存在事象の領域で人間たちに対して父なる神を代表する子であるイエスと、そして、イエスが神の子であることを保証する聖なる霊気と、それら三者はひとつの神を成す。それが三位一体の神秘です。

十字の徴は、イエスが処刑された十字架を表します。プロテスタントは十字の徴を切らないと聞いたことがあります。すべてのプロテスタント会派がそうであるのかは知りません。

ともあれ、カトリック信徒は、手の所作で、自分自身のからだに十字の徴を描きます。それは、十字架上で処刑されたイエスにならうためです。十字の徴は、イエスにならって十字架を背負っていること、そして、十字架上で処刑されて、世に対して既に死んでいることを表します。

イエスの死にならって我々も世に対する死を先取りして引き受け、そして、イエスが復活したように我々も復活と永遠の命に今、この世において、もう既に与ります。

十字架上の死を引き受け、復活の喜びに与ること。それは、父と子と聖霊の御名のもとに、つまり、神の名のもとに、実現されます。神の名は、死から

の復活を保証してくれるものです。

Lacan が精神分析へ「父の名」を導入したのは、勿論、父の機能について考えるためです。つまり、Freud がオイディプス複合ならびに去勢複合と名づけたところのものについて思考するためです。

通俗的には、オイディプス複合とは、母親との近親相姦の欲望と、それを妨害する父親に対する憎悪から成り、さらに、父親による去勢を恐れる去勢複合がそこに密接に関連してきます。

しかし、父の機能の本質は、そのような話に尽きているのか？父の機能の本質は何なのか？

Lacan は、父の問いを考えるための手掛かりを、Freud 以後の心理学に汚染された精神分析理論のなかに探すのではなく、心理学的了解を拒否する聖書のなかに求めました。聖書のなかで Lacan が特に注目したのは、「出エジプト記」第三章 13-15 節です。

モーセは神に言った:では、イスラエルの子らのところへ行き、「あなたたちの先祖の神が、わたしをあなたたちのもとへ遣わした」と言いましょう。彼ら

が「その名は何か？」と言ったら、彼らに何と言いましょう？

神はモーセに言った:我れは「我れは存在する」である。

神は言った:イスラエルの子らへこう言え:「我れは存在する」が、わたしをあなたたちのもとへ遣わした。

神はモーセにさらに言った:イスラエルの子らへこう言え:あなたたちの先祖の神, アブラハムの神, イサクの神, ヤコブの神である YHWH が、わたしをあなたたちのもとへ遣わした。

それこそ永遠に我が名である。それこそ代々に我が呼び名である。

皆さんは聖書を読みますか？ 読んだことがありますか？ 特に旧約聖書を。非常に読みにくいし、わかりにくい、と感ぜられるはずです。なぜか？それは、聖書のテキストは心理学的了解を拒否するからです。そのため、いわゆる感情移入が困難であるからです。

しかし、今までにも幾度か強調してきたように、心理学的な了解と感情移入は、精神分析においては陥ってはならない誤りです。面接において、患者の言葉を心理学的に了解してしまえば、精神分析的解釈の余地はなくなってしまいます。心理学的了解は、精神分析的解釈を阻止してしまいます。

きわめて単純な例を挙げるなら、或る男性患者が夢のなかで或る女性を見

た。そして「その女性は母親ではありません」と言った。そこで Freud は「なるほど、母親ではないのですね」と了解はしません。そうではなく、解釈します:「では、それは母親だ」と。

了解は、患者の心理の *imaginaire* な意味を想定します。解釈は、主体の存在の真理の座に無意識の知を仮定します。

心理と真理と。日本語では同じ音を持つこれら二つの単語を、精神分析では厳重に区別する必要があります。

Freud は了解しなかったからこそ、解釈することができたのです。

話を旧約聖書に戻すと、ユダヤ人たちは YHWH の四文字を以て神の名を書き記しました。勿論、今我々が用いているアルファベットではなく、ヘブライ語の文字です。

ヘブライ語やアラブ語などのセム系言語の文字体系では、母音は書かれませんが、文字は、子音または半母音(半子音)を表します。それでどうやって単語の発音がわかるのか？それは、日本語における漢字の読みと同じく、言語の歴史と慣習のなかで定着したものによってです。

たとえば、わたしの面接室の所在地の地名：「白山」は「ハクサン」と読むか「しろやま」ないし「しらやま」と読むか？文字だけではわかりません

同様に、神の名 YHWH は、それだけではどう発音するのかわかりません。ユダヤ人とヘブライ語の歴史と伝統のなかで神の名はどう呼ばれてきたのか？それがわからないと、YHWH をどう読むのかはわからないのです。

ところがユダヤ人は、神を畏れるあまり、神の名をそのものとして口にすること控えるようになりました。YHWH の名をそのまま口にして神に呼びかけることは、あまりに畏れ多いからです。代わりに、神を「主」Adonāi と呼ぶようになりました。

そうこうするうちに、とうとう、ユダヤ人の祭司や律法学者たちにも、YHWH をどう読むのかはわからなくなってしまいました。紀元前四世紀ころにはそうなくなってしまった、と言われていました。

Lacan の用語で言えば、こうです：YHWH の名は、不可能な signifiant になった。

02 October 2014 : YHWH \equiv Sein ; Nom-du-Père \equiv ϕ ; 過去・現在・未来の
解脱的統一としての時間性;存在の処有としての時間性.

四文字から成る YHWH という神聖な語は Tetragrammaton と呼ばれま
す.

Tetragrammaton を英語に訳せば, four letter word です. 通常英語でそう
呼ばれている語が何か, 皆さんも御存じでしょう.

英語の four letter word も礼儀をわきまえた文章においてはそのとおりに
は書かれませんが, 他方, Tetragrammaton が不可能な signifiant となっ
たのは, 単に神に対する畏れのゆえにというわけではありません.

昨日引用した旧約聖書「出エジプト記」3,13-15 から察せられるように, 父
なる神の名 YHWH と存在とは本有的に関連しています.

なぜなら, YHWH はモーセに対してこう名のつたからです:我れは「我れ
は存在する」である.

つまり, 父の名 YHWH は, 抹消されてしか書かれ得ない「存在」:存在と

等価なのです。

ユダヤ教の歴史において YHWH の語が元来どう読まれていたかが忘却されてしまったのは、単なる偶然ではなく、Heidegger の言う「存在の忘却」ないし「存在閑却」と本有的に関連しているのです。

『ハイデガーとラカン』第一章で証明した Heidegger-Lacan 定理により、存在と「性関係は無い」とは等価です。

$$\text{Sein} \equiv \emptyset$$

そして、存在は、不可能な signifiant としての YHWH と等価です。

$$\text{Sein} \equiv \text{YHWH}$$

したがって、 $\text{YHWH} \equiv \emptyset$ と結論されます。

言い換えると、父の名と \emptyset とは等価である。

$$\text{Nom-du-Père} \equiv \emptyset$$

出エジプト記 3,14 において YHWH はこう名のりました:我れは「我れは存在する」である.

原文は勿論, ヘブライ語で書かれています. ヘブライ語やアラブ語などが属するセム語族の言語においては, 動詞は, インド・ヨーロッパ語族におけるように過去・現在・未来の時制を表しません.

インドのサンスクリット語, 英独などのゲルマン系言語, 仏伊西などのラテン系言語, ロシア語をはじめとするスラブ系言語, それからペルシャ語などが印欧語族に属します. 英語においてはほとんどすたれてしまっていますが, たとえばフランス語などには残っているように, 動詞には時制があります.

ところが, セム語族の言語においては, 動詞は時制ではなく, **aspect** を表します.

古代ギリシャ語を学習したりしない限り, 動詞の **aspect** という文法概念はなじみの無いものですが, ひとくちで言えば, 動詞の表す動作が完了しているか否かが **aspect** です.

過去のことも、ある持続の様相において捉えられるなら、未完了です。フランス語の半過去 *imparfait* は、文字どおりには「未完了」です。しかし、未完了は、現在持続していることも表しますし、また、完了していないわけですから、未来のことも表し得ます。

セム系諸言語において未完了が過去・現在・未来のいずれの事態を言い表しているかは、日常的には、文脈によって判断されます。

ところで、YHWH の名：「我れは存在する」において、動詞「存在する」は未完了になっています。

我れは「我れは存在する」である、と YHWH が名のるとき、それは様々に解釈され得ます。それが単なる *tautologie* でないとすれば、例えば、「我れは存在する」は未来のことである、つまり、世の終わり、救済が実現する終末において啓示されるだろう神の本有を差し徴している、と解釈されます。ですから、キリスト教の神学者のなかには、YHWH の「我れは存在する」は、父なる神 YHWH が子なる神イエス・キリストとして己れを啓示するという救済の史実を予告しているのだ、と解釈する人すらいます。

しかし、YHWH の「我れは存在する」を未来のことと限定することはできま

せん。黙示録において述べられているように、神は、今存在し、過去に存在し、かつ、将来においてまさに(将に)来たらんとしているものです。つまり、過去・未来・現在の統一です。

それこそ、Heidegger が『存在と時間』において Ekstase と呼んだものです。同時期の講義においては、過去・現在・未来の ekstatische Einheit という表現も用いられています。

Ekstase を、Heidegger は後に Ek-sistenz と呼ぶことになります。

Ekstase を「解脱」と訳したいと思います。仏教的な「悟り」ではなく、まずは純粹に topologisch な意味において、つまり、あるものに対して外部を成すものという意味において。

YHWH の名は、過去・現在・未来の「解脱的統一」としての時間性を差し徴しています。それが『存在と時間』における Heidegger の時間論の本質を成しています。ところが、Heidegger は『存在と時間』においては神学への準拠を全く隠していますから、わかりにくいのです。

『存在と時間』における時間性の概念を、Heidegger は後に「存在のトポロ

ジー」へ展開して行きます。つまり、過去・現在・未来の解脱的統一とは、
存在の場処です。

03 October 2014 : 転移について;父の名の閉出について;存在の場処が中心を成す.

神の名としての父の名のことを論じているところですから, 聖書に興味のある方々にお知らせします. 今月 11-13 日, 二泊三日, 静岡県裾野市にある不二聖心女学院の敷地内にある「山の家」で「聖書の旅」と題する黙想会が開かれます. 主催者は, Misson ouvrière Saints Pierre et Paul 「聖ペトロ・パウロ労働者宣教会」の Rémi Aude 神父様と Fratello Giuliano Delpero です. 彼らは長年日本で宣教しており, この「聖書の旅」も長らく続けられています.

黙想会といっても, 座禅のようなことをするものではありません. ミサと祈りの時間は勿論ありますが, 聖書のなかのあちらこちらの言葉について参加者が考え, 議論し, 理解を深めて行くことが目的です.

聖ペトロ・パウロ労働者宣教会は, 小規模なものですが, カトリックの正式な宣教会のひとつです. 名前から察せられるように, どちらかというと左翼的な考え方をしています. つまり, 第二 Vatican 公会議で採択された基本方針, 開かれたカトリック教会の考えに忠実です.

それと反対に、右翼的カトリックグループもあります。都営三田線の白山駅のすぐ近くでグレゴリオ聖歌を教えてくれる教室があると聞いて、調べてみたら、それをやっているのは「聖ピオ 10 世司祭兄弟会」というカトリック聖職者グループだとわかりました。

聖ピオ 10 世司祭兄弟会のメンバーは、第二 Vatican 公会議で定められた方針に公然と反旗を翻しています。彼らの web site には「教会の外に救済は無い」という古いスローガンが掲げられています。この「教会」はカトリック教会のことです。時代錯誤もはなはだしい！

また、この聖ピオ 10 世司祭兄弟会に属する或る日本人司祭の blog は、同性愛者に対する差別的な発言に満ちており、読むに耐えないものでした。まるで「ネット右翼」のようです。

グレゴリオ聖歌はそれはそれですばらしいキリスト教の遺産ですが、それにつられて聖ピオ 10 世司祭兄弟会の会合に来て、あのような差別的な思考の司祭がカトリックだ、と思いつく人がいるなら、何とも不幸なことです。

聖ペトロ・パウロ労働者宣教会は、聖ピオ 10 世司祭兄弟会とは正反対です。聖書に興味のある方は、安心して参加してください。より詳しい情報を

知りたいかたは、わたしに問い合わせてください。参加費用はひとり一万円と若干高額であることを予めお知らせしておきます。

父の名に戻る前に、転移に関する補足的御質問にお答えしておきます。

「精神分析の始まりに転移がある」と Lacan が公式化する限りにおいて、転移は分析家の言説の構造のなかに位置づけられます。ですから、御質問者がおっしゃるとおり、転移は *aliénation* と同じ構造です。

ただし、転移においては分析家を徴示素 a として症状が再形成されます。それが、Freud が転移神経症と呼んだものです。

Lacan が予備面接と呼ぶもの、即ち、精神分析治療の導入期は、転移神経症の形成の時間であり、そこにおいて症状がそれとして立ち現れてきます。

立ち現れてくる症状、それは、何らかの身体症状であったり、しそこない行為であったり、夢であったり、さまざまですが、それらが分析的読解の対象となります。

さて、父の名に戻ると、ローマ講演において Lacan は父の名を「徴象の機能の支え」と規定しました。そして、1958年の精神病に関する書で、精神病発症の必要条件として父の名の閉出の概念を提起しました。

それにもとづいて、わたしは、父の名の閉出は、精神病症状に限らず、症状一般の形成の必要条件である、と一般化します。つまり、症状の言説である分析家の言説の構造においては、父の名は既に閉出されているのです。

精神病に関して注記を付け加えるなら、父の名の閉出は、精神病発症の必要条件ではあるが、十分条件ではないのです。

不可能な signifiant としての YHWH について考えるうちに、Heidegger の時間性の概念に行き着きました。

『存在と時間』における過去・未来・将来の解脱的統一としての時間性の概念は、超越の概念と相関的です。つまり、現場存在 Dasein から出発して、Dasein の地平を限る地平線の彼方に位置づけられるものとして、時間性は捉えられています。

『存在と時間』におけるこの考え方は、1936年の『哲学への寄与』で逆転させられます。Heidegger は「転回」Kehre と言っています。つまり、Dasein から出発して Sein へ向かうのではなく、言い換えると、人間から出発して神へ向かうのではなく、神そのものを中心に置き、神から出発して、人間の Dasein を考える、というふうに、思考の方向性が逆転するのです。

Heidegger は敬虔なカトリックの家族のなかで育ち、カトリック聖職者になることを当初は目ざしていましたが、しかし、プロテスタント神学に惹かれました。『存在と時間』にはプロテスタント神学の影響がうかがわれます。しかし、プロテスタント神学を経由して、Heidegger は再びカトリック的な観点に戻ってきたわけです。

中心に見さだめられるべき神の座が、~~存在~~の場処、 \emptyset の場処です。そこに神の名が位置づけられるのは、或る意味で当然です。

04 October 2014 : 「読む」は「意味を理解する」ではなく「真理を解釈する」である; 転移において存在の言葉を読む; ことばの機能は主体の存在の真理を解脱実存させることである; 父の名と *point de capiton* ; 父の名はそもそも閉出されている.

Mission ouvrière Saints Pierre et Paul 聖ペトロ・パウロ労働者宣教会 (MOPP) の黙想会のお知らせをしました. しかし, 今さら聖書を読むことに何の意義があるのか?

聖書を読んでも, 景気が良くなるわけではないし, 世の中が平和になるわけでもないし, そもそも聖書はわけがわからないし, 全然おもしろくもない.

D'accord ! いかにもそうでしょう, もし聖書のテキストの文面を理解しようとするなら. しかし, 「読む」とは「了解する」ではありません.

「読む」は「了解する」ではなく「解釈する」です. 何を? テキストの真理を.

皆さんは, 聖書などより, ほかにもっと読むべきものはたくさんある, というでしょう. 仕事にかかわる書類, 勉強にかかわる教科書, 時事にかかわる解説書, 等々. たしかに, 日常生活を大過なく送るためには, そのようなものを読む必要があるかもしれません. しかし, それらは本当に読むに値するも

のか？言い換えると、それらのテキストは真理を言わんとしているか？たい
ていの場合、答えは否でしょう。日常生活において読むべきものの多くは、
技術的な内容のものです。さもなくば、誰かの政治的オピニオンに関する
もの、要するに、真理のかけらも含まれていない単なるたわごとです。

Heidegger は、多くの先達のテキストの解釈をしています。古くは *pré-*
socratique, ソクラテス以前の哲人たち, Sophokles, Platon, Aristoteles, 近く
は Kant, Hegel, Schelling, Nietzsche. それから、詩人 Hölderlin の名も欠
かせません。

Heidegger がそれらの哲人たち、詩人たちのテキストを解釈したのは、単に
哲学教授の仕事のためではありません。

Heidegger の解釈のしかたは、独創的でした。反常識的、反通念的でした。
しかし、はっとさせるものでした。つまり、真理のきらめきを感じさせるもので
した。

もしまだ Heidegger を直接読んだことがなければ、まず彼の『形而上学入
門』 *Einführung in die Metaphysik* を読むのも悪くないですが、むしろ、彼
の Nietzsche 講義を読んでみてください。故木田元氏も推薦していました。

講義にもとづいていますから、彼の論文よりは読みやすいです。Lacan の Séminaire よりも読めます。勿論、ドイツ語原文で読むにこしたことはありませんが、最初の Heidegger なら邦訳でも良いでしょう。少なくとも『存在と時間』よりおもしろいです。

ともあれ、Heidegger は先達たちのテキストを如何に読んだか？存在の言葉 *das Wort des Seins* として読んだのです。

それらのテキストをとおして存在が語っている。Lacan の表現で言えば、*ça parle*, 何か語っている。そして、その「何か」とは真理です。存在の真理です。

Heidegger は、いにしへの哲人や詩人を解釈しながら、過去の事象を過去のものとして扱う哲学史や文学史をしていたわけでは全然ありません。そうではなく、存在の言葉を聴き取ろうとしたのです。しかも、己れ自身の存在にかかわるものとしての存在の真理の言葉を。

精神分析用語で言えば、Heidegger の読みは、転移のもとにおける読みです。彼が或る哲人、或る詩人を読むとき、彼はそれら哲人、詩人たちに対する転移の関係にあります。であるからこそ、凡庸な教科書的読みでは

なかったのです。

たとえば Heidegger が Herakleitos の断片的テキストを読むとき、Heidegger は、Herakleitos において、Herakleitos をとおして、存在の真理が語っている、と仮定します。それによって、知の仮定的主体が定立されます。

Heidegger の読みは、精神分析における解釈と同じ構造において為されています。精神分析的解釈と言っても、Lacan 的な解釈ですが。つまり、imaginaire な意味を理解するのではなく、存在の真理 Φ を解釈することです。

我々が聖書を読む際にも同様にすべきです。聖書を単に宗教的、教義的、歴史的、文学的、等々のしかたで読むのではなく、神の言葉として、つまり、存在の言葉として読むべきです。しかも、他人事ではなく、我々自身の存在の真理の言葉として。

聖書に限らず、読むに値するテキストを読むときには、そこにおいて我々自身の存在の真理が語っている、との仮定のもとに、つまり、転移のもとに、読むべきです。そうでなければ、テキストの本当の真理を読み取ることはで

きません。

そこにおいて存在の真理が語っていないようなテキストは、技術的なものか、単なるたわごとです。そのようなテキストと、たとえば Heidegger の Nietzsche 講義と、どちらがおもしろいかは、言うまでもありません。

さて、父の名にもどると、父の名の概念の最も基本的な定義は「徴象の機能の支え」« support de la fonction symbolique » です。1953 年のローマ講演におけるこの fonction symbolique という表現は、fonction de la parole の言い換えです。fonction de la parole はローマ講演のタイトルの含まれている表現です。

fonction de la parole, ことばの機能とは何か？それは、主体の存在の真理を ex-sister, ek-sistieren させることです。つまり、存在論的構造である言語の構造 $\frac{a}{\phi}$ を定立することが、ことばの機能です。

父の名は徴象の機能の支えであるとするれば、父の名は構造 $\frac{a}{\phi}$ の可能性の条件である、と言えます。

そのような父の名は、signifiant と signifié とを相互につなぎとめておく

point de capiton と同じです.

point de capiton とは, マットレスやクッションのなかの詰め物がずれて, かたよってしまわないように, 表面の布地と詰め物とをつなぎとめておく縫い目です. 表面の布地は *signifiant*, 中の詰め物は *signifié* に相当します.

精神病の発症においては, 第一段階として, 構造 $\frac{a}{\Phi}$ の解体が起こります. つまり, それまでまがりなりにも相互につなぎとめられていた *signifiant* と *signifié* とが互いに解離します.

1958 年の Lacan は, そのような構造解体が起こるからには, 構造を成り立たせるべき父の名が不在なのだ, と考えます. そして, その不在を「父の名の閉出」と名づけます.

ところが, 1963 年の時点で Lacan は, 父の名は閉出された父の名しか無い, と既に気づいています.

父の名は, YHWH の名と同じく, 不可能な *signifiant* であり, 抹消されてしか書かれ得ない不可能な文字である. そのことを展開しようとしたのが, 1963 年 11 月に一回だけ行われた *Séminaire, Les Noms du Père* です.

1972 年のテキスト *Étourdit* においては、父の名は *réel* なもの、つまり、不可能なもの、書かれぬことをやめないものとして言及されています。

しかし、1973-74 年の *Séminaire, Les non-dupes errent* において、新たな展開が為されます。

05 Oct 2014 : lacanien 土居健郎 ; biopolitique について ; passion du signifiant としての affect.

御質問をいただいています。「父の名は、主体を排除するか？」御質問の方の言う「排除」は *forclusion* のことでしょうか？「父の名は主体を排除する」という命題の文脈を御提示いただけるのでしょうか？

さて、皆さんは、土居健郎 (1920-2009) を御存じでしょうか？『甘えの構造』で有名になった精神科医です。土居健郎語録のようなものから引用された命題を幾つか、今日、Facebook で目にしました。それらを紹介すると：

君ねえ、精神療法はハラハラドキドキなんだよ。

精神療法はね、出たところ勝負だよ。

きちんと患者をひと叩きしてから、引き受けなさい。

すべてはアフェクトだよ。

君は患者をわかりすぎだ。

ぼくの患者でよくなったケースは、八割方は怪我の功名だよ。

先ほどの御質問の方は *Agamben* の名に言及されていますが、*Agamben* に関してはわたしは全く無知です。「生政治」という語も初めて目にしました。

聖書に語られているようなものとしてのユダヤ人の *passion* は、イエスの *passion* と同じことです。つまり、この世に対して死ぬことです。たとえば、ユダヤ人は、エジプトで奴隷としてではありながらも、食うに困らない生活をしていました。しかし、モーセに導かれて、海の底を歩いて渡り、さらに、荒れ野を 40 年間さまようことになりました。そこにおいて、海、つまり水も、荒れ野も、死の象徴です。

Wikipedia フランス語版で *biopolitique* の項をざっと読みました。*biopolitique* は *discours du capital* 資本の言説と関連するように思われます。

Foucault は「狂気の歴史」の冒頭においてもレプラ *lèpre* を取り上げています。

「癩」という語は *political correctness* の観点から使用不能となっています。聖書にはレプラ患者が幾度か登場します。レプラも死の象徴です。旧約聖書の預言者やイエスは、レプラを奇跡的に癒やします。それは、死からの復活を表しています。

その限りでレプラは聖書において省略することのできないモチーフなのですが、さりとて近代医学におけるハンセン病という呼称を聖書で使うこともできないので、日本語訳聖書では「重い皮膚病」という表現が使われています。フランス語訳聖書では *lèpre* という語がそのまま使われています。

ともあれ、「狂気の歴史」や「語と物」において古典主義時代の直前の時代、つまり *Renaissance* において、レプラ患者はこの世から排除されていました。レプラ患者はこの世に対して既に死んでいたのです。それは、聖書におけるレプラ患者の立場と同じです。狂人もレプラ患者と同じく、この世から排除されていました。そして、そのような排除において、彼らは聖別、神聖化されていました。

それに対して、古典主義時代、すなわち 17-18 世紀、つまり、資本主義の誕生の時期には、そのような聖別は無効にされてしまいます。代わりに、平板な博物学的分類学が支配的になります。それは結局、資本の言説の支配の開始です。

資本の言説においては、人間はその人間的尊厳においてではなく、労働力としてしか人間ではありません。狂人であろうとレプラ患者であろうと、もはや神聖なもの、他 A に捧げられたものではなく、労働力となり得るか否

かだけが問題です。

Foucault の言う *biopolitique* とは、従来は労働力市場から除外されていた人間を如何に労働力として動員、召集するかという *problématique* と関連しているのだらうと思われます。

近代・現代の国家 : *nation* は、基本的には大学の言説の構造のものが、それは常に資本の言説によってむしばまれてゆきます。

biopolitique は、資本の言説のなかに位置づけられるのだらうと思います。

1960 年代以降の Lacan の教えにおいては、父の名は、常に既に閉出されています。その限りにおいて、父の名は、主体の存在の真理 Φ そのものです。

biopolitique の支配のもとでは、神聖なものは存続し得ません。狂人としてであれ、レプラ患者としてであれ、あるいは、シャーマンとしてであれ。すべては平板化されて行きます。そして、労働力として召集されて行きます。

さて、土居語録からの引用に戻ると、わたしは精神科医としての修行時代、

京都で勉強していたので、東大系の土井先生とは全く縁がありませんでした。彼は Fulbright 留学生として USA で学んできました。他方、京都では、フランスとドイツの精神病理学が主流でした。ですから、わたしも土居先生には全く関心を持っていませんでした。ベストセラーの『甘えの構造』も読んだことがありません。先ほどの引用は、今日たまたま Facebook で見かけたものです。しかし、土居先生は実はラカン派であることをそこに発見しました。

さきほどの引用のなかの「精神療法」は「精神分析」と読みかえることができます。勿論、土居先生は Lacan を読んだことはなかったでしょうし、仮に読んだとしても、読解することはできなかったでしょう。にもかかわらず、土井先生は、精神分析について、Lacan 的な観点から言って、まったくうなづけることを言っています。

たとえば、「君は患者をわかりすぎだ」と土井先生は若い精神科医をたしなめています。それは、「了解してはならない」という Lacan の戒めと同じことを言っています。

「きちんと患者をひと叩きしてから引き受けなさい」における「ひと叩き」は、伝統的な physical examination における打診の比喩です。要するに、む

やみやたらと精神療法, 精神分析をやってみようとするのではなく, あらかじめ患者の精神病理をよく見きわめろ, 如何なる構造のものであるか, 神経症か, 精神病か, 性倒錯かを前もってよく鑑別診断しろ, と土居先生は言っています. 精神療法をしたがる精神科医がおろそかにしがちなことに注意を促しています.

Lacan もまったく同様に, 予備面接における診断学的鑑別の重要性を強調しています. とりわけ, 精神分析への導入に先立って, 精神病発症の危険性の評価は欠かせません.

「ハラハラドキドキ」, 「出たところ勝負」, 「怪我の功名」は, 精神分析において実在 *le réel* が如何に不意打ちしてくるかを言い表している言葉と取ることができます.

「出たところ勝負」は, 言い得て妙なる表現です. 実在の深淵の裂口が出来てきた瞬間を捉えて, それを患者に示さなければなりません. それは, 40-50 分の固定時間面接では困難なことです. もし仮に土居先生が Lacan 的な変動時間面接を実践していたとしても, 不思議はありません.

「すべてはアフェクトだ」. そこで土居先生は「感情」とか「情動」という日本

語は使わず、敢えて affect, Affekt と言っています。先日引用した Lacan の passion du signifiant と言い換えることができます。

passion du signifiant は, ϕ としての主体そのものです。実際, 精神分析の全体は, ϕ の深淵をめぐって展開されます。その意味で, 「すべては Affekt だ」と言ってもよいでしょう。

もし仮にわたしが土居先生に Lacan の教えを十分に解説することができたなら, 彼は彼が経験的に気づいてきたことを Lacan は理論的に基礎づけているのだと納得し得ただろうと思います。

06 Oct 2014: 第二の死 ; 死の本能の殉教者 Sade ; 父の名と nomination ; ニヒリズムについて.

今年は Marquis de Sade (1740-1814) の没後 200 周年です. [Le Nouvel Observateur](#) 誌の写真は, 彼が 1785 年に Bastille 牢獄で書いた『ソドムの 120 日』の手稿です.

紙を貼り合わせて作った幅約 11cm, 長さ 12m の巻物の表裏に細かい字でびっしり書かれています. 14 juillet 1789 直前に彼は Bastille から Charenton へ移送され, その際, この手稿を持ち出すことができませんでした. そして, 手稿は数奇な運命をたどって, 今, こうして展示されています. Sade の肖像は残っていませんが, *scripta manent*. しかし, それは彼の「第二の死」の願望には適っていないことかもしれません.

Lacan は *Kant avec Sade* 「カントとサド」という書のなかで, Sade の「第二の死」の願望に言及しています. 第一の死は, 普通の意味での死, つまり, 生理学的死です. 人間は, 生理学的死の後も, さまざまな痕跡を残します. 遺体や遺産だけでなく, 記録に残る名前, 作品, 等々. そして, 墓. Sade は, そのようなものすべてが消滅することを望みました. それが, 第二の死です.

第一の死は、 $\frac{a}{\phi}$ の構造のものです。たとえば墓碑が signifiant a として、存在 ϕ を代表します。

それに対して、第二の死は、 ϕ を代表するあらゆる signifiant a が消え去ること、滅却されることです。つまり、 a の ϕ からの分離です。そのとき、純粹な喪失、寂滅としての ϕ がそのものとして実現されます。それは、他 A の欲望の究極的な十全たる満足です。

Sade は、単なる性倒錯者ではなく、他 A の欲望に最も忠実な殉教者であらうとしました。

死後に名 a を残したいという願望は俗人のものです。そのような人は、死後も症状をさらし続けるだけです。

聖人は、逆に、あらゆる a を滅却して、純粹徴示素 $S(A)$ の穴になっています。それは、他 A の欲望 A に最も忠実な存在様態です。

今、真心ブラザーズの「人間はもう終わりだ」という歌を教えていただいたところですが、人間という同類どうしだけの閉ざされた世界における閉塞感は、

確かに、一種のニヒリズムです。 $a - a'$ の *imaginaire* な次元にだけ捕らわれています。他 A との *symbolique* な関係は、彼らの視野には全く入ってきていません。

「人間はもう終わりだ」を超人によって超克しよう、ということになると、これはもう完全に *nazisme* です。彼らがそのような方向へ走らないことを願っています。

父の名に話を戻すと、1973-74年の *Séminaire Les non-dupes errent* において Lacan は、父の名との関連において *nomination* の概念を提示します。*nomination* は「命名」だけでなく「任命」です。

つまり、*nomination* は *destitution* 「罷免」の逆です。罷免と分離に次いで、 \emptyset に新たな名 a を与えること。それは、無からの創造としての *sinthome* : 症状, 聖状, 聖人の概念へとつながって行きます。

Nihilisme の概念は非常に重要です。現代という時代を考えるための *key word* のひとつです。

Heidegger は、第二次大戦中、Nazi 体制下、Nietzsche と取り組みながら

nihilisme について考えぬきました。

Nihilisme の定義のしかたは幾つかあります。Nietzsche は nihilisme を、あらゆる価値の Umwertung と定義しました。「価値」はドイツ語で Wert であり、Umwertung は価値の基準のくつがえしです。従来、伝統的に崇高とされていた価値が、無価値となってしまうこと。それが Nietzsche 的な nihilisme の定義です。Platon 的な idea, ギリシャ的な humanisme, そのような価値がすべて無効となってしまった現代。それが nihilisme です。

そのような nihilisme を Nietzsche は、超人 Übermensch の意志である「力への意志」によって超克しようとしていました。力への意志は、無効となった価値の代わりに、みづから価値を措定する意志です。

Heidegger は、しかし、力への意志によっては nihilisme を本当に超克することはできない、と喝破しました。なぜなら、nihilisme の本有は、存在が己れを離退し、隠してしまっていること、そして、そのことに誰も気づいていないことに存するからです。

ですから、まずは、存在の深淵をあらわにしなければなりません。その深淵の穴を覆い隠せるようなものは存在事象の次元にな何も無い、力への意志

によってもその穴を塞ぐことはできない、ということを明らかにせねばなりません。

それは、ある意味で nihilisme を徹底することです。しかし、そのような nihilisme の徹底は、深淵の底に沈んだままであるためではなく、その深みから立ち上がるため、死から復活するためです。

復活するためには、まず死なねばなりません。死を引き受けねばなりません。死を主体化せねばなりません。

そして、復活とは、死ぬ前の状態に単純にもどる「よみがえり」ではなく、そのような存在事象的な次元を超えた新たな命、キリスト教で言う「永遠の命」へ復活することです。

以前、仏教において復活は問題にならないのか、と問うたことがありました。最近、気がつきました。Sujata のエピソードがそれです。ブッダは、禁欲的な修行の果てに、文字どおり死にそうになっていました。そのとき、Sujata という名の女性が彼にミルク粥を差し出しました。Sujata のミルク粥を口にしたらブッダは、生き返りました。そして、菩提樹の下で悟りを開いたのです。

この伝説は、ブッダにおける「死からの復活」を物語っている、と見なすことができます。復活のために女性が決定的な役割を果たしている、という点も、イエスの復活において Marie-Madeleine がそうであることと共通しています。

Nietzsche の超人は、存在の深淵を否認するためのものです。神は死んだ、今や超人だ。それが Nietzsche です。Nietzsche は、神がずっと以前から死んでいたということを十分に考えぬきませんでした。神の名 YHWH は不可能な名である、ということが指し示している深淵を Nietzsche は十分に思考しませんでした。

復活は、積極的ニヒリズムではありません。復活は、死の深淵を覆い隠すものではなく、むしろ、その深淵をそのものとして守護、守保します。それが殉教者であり、聖人です。

超人は力への意志によって他 A の欲望を覆い隠し、否認します。聖人は、他 A の欲望をそのものと認め、それが己れを啓示するようにします。超人は力に酔い、聖人は喪失に醒めています。

もし仮に Sade が「神は死んだ、今や何をしても許される」と言っていたら、

彼は単なる nihiliste だったかもしれませんが。しかし、そうではありませんでした。彼の欲望は、如何なる存在事象における快をも超えた彼方へ向かっていました。それは、死の本能への忠実でした。Lacan はそのように Sade を解釈しています。

07 October 2014 : 隣人をあなた自身のように愛せよ; 欠如と欠如との分かち合い; 男性分析家と女性分析家; 逆転移について ; métaphore と métonymie ; 解離と分離.

いただいていた幾つかの御質問に答えるよう試みてみましょう.

まず, マタイ福音書 22,39 等に記されているイエスの言葉ですが, それは, 正確には, 「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」ではありません. 正しくは:

ἀγαπήσεις τὸν πλησίον σου ὡς σεαυτόν. 隣人を, あなた自身のように愛せよ.

この命令は, 聖パウロのローマ書簡 13,8 の「他者を愛する者は, 律法を満了した」と等価です.

隣人愛とは「隣人である他者を愛する」です. しかしそれは実は, 「神である他 A を愛する」です.

そして, 他 A は自己自身です. なぜなら, 他 A の存在は, 自己自身の

存在であるからです。

そして、愛とは、存在における communion, A と ϕ との一致です。それは、Lacan の言う「分離」における「欠如と欠如との分かち合い」です。

他 A を自己自身として認め、かつ、他 A により自有されて、存在を分かち合い、存在において一致すること、それが「互いに愛し合え」という律法の満了です。

次に、分析家が男性である場合と女性である場合とで何か根本的な違いがあるのか、という御質問に対しては、否と答えられます。分析家が男であろうと女であろうと、精神分析の本質は「分離」に存します。

しかし、そこに至る前、転移神経症の形成に関しては、 a が男性分析家であるか女性分析家であるかにより違いが出てくることもあります。特に、個人史における父や兄弟などとの関係、母や姉妹などとの関係の variation に応じて、転移において a に如何なる意義が付与されるかは違ってきます。

しかし、再度強調するなら、最終的には、分析家が男であろうと女であろうと本質的な相違はありません。

Lacan 派の精神分析が盛んな国々においては、女性の精神分析家はたくさんいます。男性よりも女性の分析家の方が多いだろうという印象を受けます。しかし、日本では女性分析家は非常に少数です。Lacanian と呼び得る女性分析家が日本にいるかどうか、わたしは知りません。

山上千鶴子氏は、London でトレーニングを受けた kleinienne です。ほとんど完全な独立派で、日本精神分析協会にもほとんどかかわっていないと思います。わたしは彼女と直接の面識はありませんし、日本で彼女がどのような臨床をしているのかも全く聞いたことがありません。

逆転移に関しては、Lacan の教えにおいては、転移は徴象の次元において思考され、取り扱われるのに対して、国際精神分析協会とその系列の日本精神分析協会の分析家たちは、徴象と影象との区別を知らないがゆえに、転移において影象的関係のなかに巻き込まれてしまいます。

Lacan 派の分析家も、 $a - a'$ の影象的関係から全く無縁になったわけではありませんが、しかし、徴象的関係の観点にもとづいて、影象的関係がはらむ攻撃性を相対化し、それに対処することができます。

次に *métaphore* と *métonymie* とについては, Lacan はそれらの用語の伝統的な解釈には全くとらわれず, 独自の概念化を行っています.

métonymie は, 徴示素 a により代表されていない限りでの Φ そのものです. Φ は, 徴示素 a に拘束されない限りで, 際限無く横滑りして行きます. その横滑りが *déplacement métonymique* 「metonymia 的変移」です.

それに対して, *métaphore* は $\frac{a}{\Phi}$ の構造そのものです. *signifiant* a による *Bedeutung* Φ の代理・代表, それが *métaphore* です.

métaphore と *métonymie* とについては, 伝統的な修辞学の範囲内で考えるのではなく, Lacan の構造論にそって考えねばなりません.

Schizophrenie における *néologisme* も, Joyce の *Finnegans Wake* も, ともにひとつの *métaphore* です. それらは, 無からの創造であるのと同じく, 死からの復活でもあります.

解離と分離とについては, 両者は全く別物です. 分離においては, 症状の構造 $\frac{a}{\Phi}$ において a と Φ とが分離し, 構造が解体されます. そして, それによって症状が解消されます.

それに対して、解離はひとつの神経症症状です。解離において、症状の構造 $\frac{a}{\Phi}$ の a の座に来るものが何であるかは、非常に多様です。他者 a において *imaginaire* に捉えられたひとつの人格であったり、他者 a の欲望であったり、幻想であったり、様々です。いずれにせよ、解離においては、構造 $\frac{a}{\Phi}$ そのものの解体は成起しません。

08 October 2014 : *métaphore* と *métonymie* ; 徴示素と主体との関係; 言語の機能は *communication* ではない; 日本人は精神分析を必要としないか? ; 解離と離人症.

Lacan は *métaphore* と *métonymie* の用語を言語学者の Roman Jakobson から借りてきました. Jakobson は失語症のふたつの基本型, Broca 失語と Wernicke 失語とを取り上げました. そして, Broca 失語, いわゆる運動性失語, 発話量が低下する失語においては, *signifiant* と *signifié* との連結が障害されるのに対して, Wernicke 失語, いわゆる感覚性失語, 発話量は低下しないが, 言い間違いが起こり, 重症例では *jargon* になってしまう, そのような Wernicke 失語においては, *signifiant* と *signifié* との代理が障害される, と分析しました. そして, Broca 失語は *métonymie* の障害, Wernicke 失語は *métaphore* の障害である, と論じました.

Lacan は, 友人 Jakobson が 1956 年に発表したこの議論を, 1955-56 年の精神病についての *Séminaire* を行っていた最中に知りました. そして, 1957 年の書『無意識における文字の機関』において, 精神分析における *métaphore* と *métonymie* の概念を展開しました. Lacan にとっては, 当然ながら, 言語学としての言語学における *métaphore* と *métonymie* の概念

が重要なのではなく、あくまでも、精神分析における *signifiant* と主体との関係が問題なのです。

signification という用語においてかかわっているのも、言語学的な「意味」や「意義」ではなく、あくまでも主体、*Bedeutung* φ としての主体です。

aliénation は、主体 φ が徴示素 *a* により代表されるという構造に存します。それによって、主体は、主体そのものとしてではなく、客体として現象することになります。

aliénation が *métaphore* の構造を有すると言えるのは、主体と *signifiant* との関係の観点においてです。Lacan が Jakobson に「*aliénation* は *métaphore* だ」と言っても、Jakobson には通じなかったでしょう。

Lacan が「言語の構造」*la structure du langage* と言うとき、それは a / φ の構造、つまり、*signifiant* *a* が主体 φ を代理するという構造のことです。

精神分析における言語の機能は *communication* ではありませんし、我れと汝れとの「共同注視」へ客体を提示することでもありません。

精神分析における言語の機能は, signifiant a が主体 ϕ を代理し, 守護し, それによって主体 ϕ が ek-sistieren し得るようにする, ということです.

日本人は精神分析を必要としない, と Lacan は言いました. それは, ひとつの虚構的な「日本人論」にもとづいてです.

構造 $\frac{a}{\phi}$ は, 仮象が真理を代理するという構造であり, 真理は仮象を解釈することによってしか到達され得ません.

ところが日本人は, 仮象が仮象であることを心得ている, つまり, 建前はあくまで建前であって, 本音, 真理は他のところにある, ということを a priori に前提しており, かつ, 音読みと訓読みを含む日本語の音韻体系のおかげで, 仮象から真理への解釈と翻訳は, 分析無しに, 自動的に達成される.

そのような「日本人論」にもとづいて Lacan は「日本人は精神分析を必要としていない」と言ったのです. 勿論, 「何という礼儀正しい日本人!」, つまり, 「何と日本人は仮象を仮象として尊重するのか!」という皮肉と揶揄であっただろうと思います.

日本において精神分析がフランスにおけるように重要性を持たないままで

あったとすれば、それは、確かに、日本が伝統的に「仮象の帝国」であったからです。仮象の優位があまりに強かったからです。

しかし、その伝統も、資本の言説と科学の言説のなかで破壊されつつあります。

3.11 は、日本が黙示録的時代に突入したことを象徴する出来事です。それは、近現代の *Vollendung*, 満了と、それにともなう崩壊の時代です。

伝統的仮象が崩壊しつつある今、時代はまさに精神分析を必要としています。

離人症と解離について補足するなら、確かに、DSM と呼ばれる米国の精神医学の診断基準においては、離人症は *dissociative disorder* のなかに数え入れられています。ただし、*dissociation* の概念を定義し得ぬままに。

昨日わたしは、DSM が離人症を解離障害のひとつにしていることを全く忘れていました。解離障害は *hystérie* において起こるものであり、離人症は、むしろ精神病と関連するからです。

しかし、構造論的には、離人症と解離とにおいては同じ分裂がかかわっている、離人症と解離とは同じ分裂に基づいている、とすることができます。

米国精神医学において適切に定義されないまま使われている *dissociation* の用語は、分裂と読み替えることができます。

分裂とは、主体の分裂です。そして、主体の分裂とは、構造 $\frac{a}{\phi}$ における a と ϕ との分裂です。

Hysterica においては、 a と ϕ との分裂、解離が非常に容易に起こります。両者の結合がもともと非常に緩いのです。そのことが *hystérie* を特徴づけています。

ですから、*hysterica* においては容易にひとつの a との同一化が解消され、ほかの新たな a との同一化が成起します。極端な場合、まったく別の人格との同一化が起こり、従来的人格は排斥されてしまいます。しかし、そこにおいては、 $\frac{a}{\phi}$ の構造そのものは保たれています。

他方、*dépersonnalisation* においては、構造 $\frac{a}{\phi}$ そのものがまさに崩壊しようとしています。その危機的な状態において、あの特有の現実感の喪失

や自己感の崩壊が体験されます。

構造 $\frac{a}{\Phi}$ の解体の予兆として、離人症は、精神病発症の前ぶれであることがありますし、精神病が発症しなければ、文字どおり構造 $\frac{a}{\Phi}$ が崩壊して、自殺に至ることもあります。

精神分析の経過中にも *dépersonnalisation* は起こります。それは、従来の同一化の解体の徴候としてです。

明日 9 日はいつものようにこの精神分析 Tweeting Seminar を行いますが、10 日金曜日は東京ラカン塾のセミナーの初回を行うので、twitter はお休みします。また、11-13 日は、聖ペトロ・パウロ労働者宣教会の黙想会に参加しますので、その間も twitter はお休みします。したがって、10-12 日はこの精神分析 Tweeting Seminar はお休みです。13 日の夜に再開できると思います。

09 October 2014 : 村上春樹氏の作品は悦ばしき悲劇である；芸術は死からの創造である；無意識における文字 *a* という機関。

ノーベル文学賞は今回も村上春樹氏に授与されず、残念なことです。しかし、嬉しいことに、Patrick Modiano はフランスの作家です。どういうわけかまだ一度も読んでいないので、さっそく何か注文して、読んでみましょう。

村上春樹氏の作品は、好き嫌いが分かれるようです。わたしは彼の作品が大好きです。もっとも、最初に読んだのは『1Q84』で、そこからさかのぼって、彼の長編はすべて読みました。

基本的に彼は悲劇作家です。三島由紀夫がそうであったように。

随筆集『遠い太鼓』に収録されている『午前三時五十分の小さな死』において村上春樹氏は言っています：

長い小説を書いているとき、僕はいつも頭のどこかで死について考えている。(…)いったん長い小説にとりかかると、僕の頭の中にはいやおうなく死のイメージが形成されてしまう。(…)僕は小説を書くことによって、少しずつ生の深みへと降りていく。小さな梯子をつたって、僕は一步、また一步と下

降していく。でもそのようにして生の中心に近づけば近づくほど、僕ははっきりと感じることになる。そのほんのわずか先の暗闇の中で、死もまた同時に激しいたかまりを見せていることを。

『午前三時五十分の小さな死』のなかの村上春樹氏のこのような言葉は、彼れの芸術的創造が無からの創造であり、かつ、死からの復活であることを証言しています。それらふたつを縮合して、死からの創造と言うこともできるでしょう。

芸術作品の構造は、Lacan の言語の構造、症状の構造、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ です。文学作品においては、 a は文字です。

朗読や演劇において、文字は俳優の声において受肉し、よりいっそう現代的となります。Paris 滞在の楽しみは、演劇です。Comédie Française をはじめとするさまざまな劇団が常にさまざまな戯曲を上演しています。前回の Paris 滞在中で新たに出会ったのは、Vincennes にある劇場を本拠地にする Théâtre de l'Épée de Bois 「木の剣の劇場」という劇団です。「木の剣」は「竹光」と訳せば良いかもしれません。Molière を 17 世紀のフランス語の発音で演じてみせ、現代フランス語とは違う発音はそれだけでおもしろいのですが、ドタバタ劇風の滑稽な演出で、大いに楽しめました。機会があれば、

是非また見たいものです。

声において受肉する文字. 客体 a としての文字.

Lacan の書のうちで最も有名なもののひとつは『無意識における文字の機関, または, フロイト以来の理性』と題されています. 1957 年の書です.

「理性」は単に「理」, つまり「ことわり」と言ってもよいでしょう. 「理性」の「理」は「真理」の「理」でもあります. そして, 「ことわり」という表現は, 真理の深淵の場処を示す裂けめ, 裂口, 亀裂, 穴を示唆しています.

L'instance de la lettre の instance は従来「審級」と誤訳されてきました. この誤訳は, Freud における Instanz を「審級」と誤訳したことに由来しています. Instanz, instance は, 司法制度に言う審級ではありません. Freud は『夢解釈』において Instanz を Apparat に属するものと提示しています. Apparat は確かに「装置」ですが, この場合, organisation と同義であり, 「機構」です. Instanz は, 機構に属するひとつの機関です.

Freud や Lacan の邦訳テキストにおいて誤訳は枚挙に暇がありません.

文字は、無意識という機関の代表です。Lacan が文字と呼んでいるのは、勿論、signifiant 徴示素のことです。しかし、文字と signifiant とでは、それらの概念において力点の置き方が異なります。

signifiant は symbolique の位に属しています。それに対して、文字は、勿論、signifiant ですが、しかるに、Freud が「夢は絵文字 Bildschrift で書かれている」と言ったように、Bild でもあります。ドイツ語の Bild は、フランス語では image です。文字は imaginaire の位のものでもあります。

そして、文字は、Lacan が何千年もの間砂に埋もれたまま残る hiéroglyphe 古代エジプトの神聖文字の例を出しているように、その物質性において、réel の位のものでもあります。

1957 年に用いられた「文字」という用語は、かくして、1974-75 年の Séminaire RSI において Réel, Symbolique, Imaginaire の三つ輪の交わりに位置づけられた a の地位を既に示唆している、ということがわかります。

文学という芸術作品は、文字 a により死 \emptyset を ek-sistieren 解脱実存させます。かつ同時に、それは、死からの創造として、復活の悦でもあります。

村上春樹氏の作品は、基本的に悲劇作品です。そこには、取り返しのつかない喪失や死が描かれています。しかし同時に、全く *absurde* な喜劇的要素も織り交ぜられています。悦ばしい悲劇、それが村上春樹氏の作品の魅力を成しています。

13 October 2014 : 詩篇 23 ; 神の名 ; 神は我れらと共に在る.

今月 11-13 日に行われた聖ペトロ・パウロ労働者宣教会 (Mission ouvrière Saints Pierre et Paul, MOPP) の黙想会は, 大変実り多いものでした. この精神分析 Tweeting Seminar において触れたことのある問題についても幾つか発見したことがあります.

今回, 題材として取り上げられたのは詩篇 23 です. したがって, 旧約聖書へ多く言及がなされました.

旧約聖書と新約聖書は, 一方がユダヤ教, 他方がキリスト教というように切り離されたテキストではありません. なぜなら, それらは神の言葉としてはひとまとまりのものだからです. 旧約のテキストを成す言葉を語った預言者たちは, それと知らぬままに, 新約で初めて啓示されることを既に語っています. 言い換えると, 旧約が含む意義は, 新約から振り返って読むことによって, 事後的に初めて明確になります.

たとえば三位一体はキリスト教独特の観念だと言われています. ところが, Fratello Giuliano Delpero は指摘します: 創世記の冒頭において三位一体の神秘は既に示されている.

創世記の冒頭を読んでみてください:「神が天地の創造を始めたとき, 地は荒廃・空虚・深淵の面に闇. 神の息吹は, 水の面を舞っていた. して, 神は言った:光あれ.」

そこにおいて神は, YHWH, 父なる神です. 神からは息吹が発せられます. 神の息吹は, 聖なる霊気, 聖霊です. そして, 神の息吹に運ばれて, 神のことばが響きます. 神のことばは, 子, イエス・キリストです. ヨハネ福音書の冒頭で言われているように, イエスは神の言葉の受肉です.

このように読解してみると, 確かに, モーセ五書の冒頭において既に, 三位一体は示唆されているのがわかります.

父なる神が子なるイエスとして己れを示すことを可能にするのは, 父から発せられる息吹である霊気です.

詩篇 23 はさして長いものではないので, 全文を引用しておきましょう:

YHWH は我が牧者

我れに欠けるもの無し.

彼れは我れを青草に横たわらせ、
安らぎの水の辺に連れ行き、
我れを生き返らせる。
彼れは、彼れの名のゆえに、
我れが正義の道を通るよう導く。
我れは、闇と死の谷を歩むときも
悪を恐れない、なぜなら汝れは我れと共に在るから。
汝が棒、汝が杖は、我れを安心させる。
我が敵の面前で
汝れは我がために食事を給してくださる。
我が頭に香油を注いでくださる。
我が杯はあふれる。
我が生のすべての日々、
善意と愛は我れを追う。
我れは YHWH の家へ立ち返り、
日々を過ごす。

この詩の作者はイスラエルの最も輝かしい王となる David であるとされています。そして、David がこの詩を歌ったのは、彼れが王となる以前、イスラエルの初代の王 Saul に迫害され、荒れ野を逃げ回っていたときだ、と

されています。

そのような解説は、わたしの手元のフランス語訳聖書にも書かれておりません。その聖書は非常に詳しい注を備えているのですが、詩篇 23 の背景がそのようなものだと言えるのは、ユダヤ教の律法学者の伝統のおかげです。Fratello Giuliano はユダヤ教にも精通しており、そのことを教えてくれました。

まずは、Lacan と関係のあることに触れておきましょう。つまり、父の名、神の名の問題です。

第 3 節に「彼の名のゆえに」、つまり「神の名のゆえに」と言われています。如何なる名か？それはこの詩篇そのもののなかで言及されています。「汝れは我れと共に在る」がそれです。なぜなら、旧約の預言書、イザヤ書 7,14 にこう言われているからです：

“見よ、乙女が身ごもり、息子を生む。そして、彼女はその子に「インマヌエル：神は我れらと共に」という名を与える。”

そこにおいてイザヤは、乙女マリアがイエスを生むことを預言している、と解

積されます。

Immanu El というヘブライ語の表現は「神は我れらと共に在る」を意義します。実際、イエスは、「我れは常に汝れらと共に在る」と我々に言っています。

したがって、神の名は単に「我れは存在する」であるのみならず、「我れは汝れらと共に存在する」なのです。

14 October 2014 : 転移のもとで読む; 存在の場処は, 最も遠く, かつ, 最も近い; 罪の赦しと死からの復活.

聖書に限らず, 読むに値する書, 聴くに値する言葉に対するとき, 我々は転移の状態にあります. そして, それらに対して我々が転移の状態になれば, それらは有意義な書, 言葉にはなりません.

或る signifiant の意義 *Bedeutung* を読み取るためには, その真理の座に知 — 主体の存在の真理の知 S_2 — を仮定しなければなりません. そのような知が仮定されて初めて, signifiant は語り始めます.

転移は, 知の仮定により規定されます. そのとき, signifiant a はいかにも有意義そうな外見をしている必要はありません. それは全く何を言おうとしているのか不明な, 不透明な, 謎めいた signifiant でもあり得るし, 取るに足りない言葉, ただのうめき声でもあり得ます. また, 全くの無言, 無音の言葉, 無声の声でもあり得ます.

たとえば, 『大いなる沈黙』という修道院内の生活の記録映画のなかで引用されていた旧約聖書の一節で, 神はすさまじい嵐のなかにも地震のなかにも現れなかった. そうではなく, ほんのかすかなささやきのような音のなか

に神は自身を踏した,とされています。

Freud が Übertragungsliebe 「転移愛」という表現を用いたように, 転移と愛とは互いに密接な関連にあります。

Facebook で, うめくだけの障碍者の言葉にじっと耳を傾けて聴くということが話題になっている記事が引用されていました。かかわっているのは, 「愛を以て聴く」ということです。その記事には「愛」という key word は明示されてはいませんが, 含意されていることは明らかです。

愛を以て聴くとき, 言葉は, そこにおいて何かが語っているものとして立ち現れてきます。

存在事象に忙殺されている我々にとって, 聖書のテキストは, 一見, 無意味なものにしか見えないかもしれません。しかし, それを神の言葉として, 神を愛しつつ読むならば, 取るに足りない signifiant の断片も, 主体の存在の真理に満ちたものとなります。

詩篇 23 において, 父の名, 神の名は, 単に「我れは存在する」だけではなく, 「我れは汝れらと共に存在する」であることが読み取られます。

「我れは存在する」は、世の終わりにおいて初めて啓示される神のことかもしれません。最も遠いものとしての神かもしれません。

それに対して、神の名は「我れは汝れらと共に存在する」であれば、神は常に人間と共に存在します。神は最も近いものです。あまりに近すぎて、それと気づくことができないほどです。

最も遠く、かつ、最も近い場処、それが、解脱的統一としての存在の場処です。

YHWH の名としての父の名は、そのような存在 ϕ の座そのものです。

詩篇 23 において「名」という語が出てくる箇所を改めて見てみると、「彼れは、彼れの名のゆえに、我れが正義の道を通るよう導く」と歌われています。

「正義の道を通る」は、単に「道徳的に正しいことをする」ではなく、聖パウロのローマ書簡に言う「義である」です。

「義とされる」は「救済される」と同義です。神は、神の名のゆえに、我々を義とし、救済してくださる。

つまり、我々は、何か良きわざを為したがゆえに救済されるのではありません。そうではなく、ローマ書簡の表現で言えば、「信仰により義であるものは生きる」、つまり、永遠の命を生きるのです。

詩篇 23 とローマ書簡とを合わせて読むなら、「信仰により義であるものは永遠の命を生きる」は「神は、人間のわざのゆえにではなく、神の名のゆえに、神の本有のゆえに、人間を義とし、救済し、永遠の命に与らせてくださる」ということだとわかります。

そこにおいて、キリスト教における罪の赦しと救済が、仏教における解脱とは決定的に異なる点が明らかになります。

仏教においては、解脱の可能性の条件は、業、カルマ、つまり、因果応報です。人間はみづから善業を重ねれば、解脱と成仏に至ることができます。

それに対してキリスト教では、人間の業のゆえにではなく、神の本有のゆえに、神の愛のゆえに、罪の赦し、永遠の命、復活が恵与されます。

Fratello Giuliano はこう言っていました: 仏教は道徳的教えであるのに対して, キリスト教は教えではなく, 証言である. イエスは十字架で処刑され, 三日目に永遠の命へ復活したという出来事の証言である.

出来事, Ereignis という語を強調しておきましょう.

15 October 2014 : 聖人と神秘経験 ; sainte Thérèse d'Avila ; sainte Thérèse de Lisieux ; 欠如の純粹徴示素 $S(A)$; 詩篇 23 と復活.

10 月 15 日は, Avila の聖テレサ sainte Thérèse d'Avila (1515-1582) の祝い日です.



添付した絵は, Velasquez による sainte Thérèse d'Avila の空想上の肖像です. 左上のハトは, 聖なる靈氣(聖靈)の象徴です.

皆さんには, Lacan の *Encore* の表紙に使われている Bernini の彫刻の方が良く知られているでしょう.



Velasquez による肖像は, Kristeva の大著 *Thérèse mon amour* の表紙に使われています. Kristeva は作家ですから, 作家としての Thérèse d'Avila を選んだのでしょう. Thérèse d'Avila は多くの著作を残しています.

また, 10 月 1 日は *sainte Thérèse de Lisieux* (1873-1897) の祝い日です.



sainte Thérèse de Lisieux は若くして結核で亡くなってしまいましたが, 修道院長の勧めで書いた自伝の靈気性のゆえに, 死後まもなく列聖され, *Jeanne d'Arc* とともに, フランスの守護聖人として崇められています.

10 月はほかにも, 4 日が *saint François d'Assise* (1181-1226) の祝い日, 18 日が, わたしの洗礼名の聖人, 福音記者, 聖ルカの祝い日です. 偉大な聖人の日がメジロおしです.

Thérèse d'Avila も *Thérèse de Lisieux* も *François d'Assise* も, 神との直接的な合一を経験した *mystiques* です. 特に *François d'Assise* は, 体に聖痕が現れたほどに, イェスと一致しました.

体に聖痕が現れた現代の例としては, *Pierre Janet* (1859-1947) の症例 *Madeleine* が有名です. *Janet* は彼女について *De l'angoisse à l'extase* 「不安から解脱へ」という大著を書いています.

神秘経験は、死の先取り経験です。Lacan の言う意味での分離 — 構造 $\frac{a}{\phi}$ において a の ϕ からの分離 — が起こり、主体と他 A とは、各々の欠如 ϕ と A との一致において交わりあいます。それは、死の悦の実現です。そして、死からの復活が成起します。

それを Janet は症例 Madeleine についての標語「不安から解脱へ」で表言しています。

復活は、永遠の命、永遠の生の悦です。聖人たちは、死の悦と永遠の生の悦とを、身を以て証言しています。

聖人において、 a は欠如の純粹徴示素 $S(A)$ へ還元されています。

Lacan の「欲望のグラフ」、あの二段がまえの複雑なグラフにおいて、 $S(A)$ は左上の場処に位置づけられています。そこは、精神分析の経験の終わりに見出されるはずのものの座です。

Lacan はどこかで、その $S(A)$ の座にはイエス・キリストが位置づけられる、と言っていたと思います。 $S(A)$ の座は、したがって、聖人の座、sinthome

の座である, と言えるでしょう.

詩篇 23 について補足しておく, その詩は David が Saul に迫害されて, 荒れ野をさまよっているときに詩われた, とされています. そのとき David は死の野に既にいるのです. しかし, そのとき同時に, David は復活の悦を詩っています.

YHWH は我が牧者

我れに欠けるもの無し.

彼れは我れを青草に横たわらせ,

安らぎの水の辺に連れ行き,

我れを生き返らせる.

我れは, 闇と死の谷を歩むときも

悪を恐れない, なぜなら汝れは我れと共に在るから.

David は「闇と死の谷」にいます. そのこは荒れ野, 砂漠ですから, 飲み水はありません. しかし同時に, そこは青草の繁る安らぎの水辺です. ここでは水は, 死から復活への橋渡しとなる洗礼の水です. その水は「我れを生き返らせる」, つまり, 復活させてくれます.

詩篇 23 は、通常、神への信頼の詩と分類されていますが、そこではむしろ、復活の悦が高らかに歌われています。

我が敵の面前で

汝れは我がために食事を給してください。

我が頭に香油を注いでください。

我が杯はあふれる。

この部分では、旧約のほかの箇所でも用いられている「天上的饗宴」の image が提示されています。神とともに飲み食いする宴です。神との communion の比喩です。

詩篇 23 において「YHWH は我が牧者」と詩われるとき、父の名 YHWH は、分析家の言説において生産の座へ閉出されている S1 としての父の名ではあり得ません。

むしろ、YHWH は復活の可能性の条件です。

聖人たちは神の証人です。彼ら、彼女らは、神の愛を、みづから身を以て証言します。その「身」は、彼らの実存構造 $\frac{a}{\phi}$ における a 、純粹徴示素

となっている a です. その限りで, 証言はひとつの *métaphore* です.

精神分析においてかかわる *métaphore* は, 代理・代表の構造, 症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ によって規定されます.

métaphore の解釈において読み取られるべきなのは, *imaginaire* な意味ではなく, 而して, *Bedeutung* ϕ です.

言い換えると, *métaphore* は, 存在の真理の深淵を啓示してくれます.

その深淵は, 二階堂奥歯氏が証言しているように, 直視するにはあまりにおそろしすぎる深淵です. 彼女はじかにそれと向き合い, そこに吸い込まれるように投身してしまいました.

緩衝となる *métaphore*, 症状としての *métaphore* が二階堂奥歯氏には欠けていました.

もし彼女が, キリスト教でも仏教でも, 信仰をもっと生き生きしたしかたで生きることができる環境にいたなら, 彼女は信仰という *métaphore* で身を守ることができたかもしれません.

16 October 2014 : sainte Marguerite-Marie Alacoque と二階堂奥歯 ;
Wittgenstein が沈黙して立ち止まったところこそ, 精神分析の出発点である.

10月16日は, sainte Marguerite-Marie Alacoque (1647-1690) の祝い日でした. キリストの聖なる心 Sacré Coeur への崇拝を始めた聖人です.



写真は, Bourgogne 地方の Paray-le-Monial という町にある礼拝堂に安置されている sainte Marguerite-Marie Alacoque の遺体です. 17 世紀の人なのに, 遺体の保存が良好であることに驚きます.

ついでながら, 聖人の遺体が巡礼者たちに見えるように安置されている例として有名なのは, Lourdes でマリア様と出会った sainte Bernadette です. 彼女の遺体は, Bourgogne 地方の Nevers という町にある chapelle Saint-Gildard に安置されています. Paris 市内では, 6 区の saint François Xavier 教会のお御堂内に sainte Madeleine-Sophie Barat (1779-1865) の

遺体が安置されています。sainte Madeleine-Sophie Barat は、聖心会 Société du Sacré-Cœur de Jésus の創立者です。先日 MOPP の黙想会が行われたのは、裾野市にある聖心会の修道院の山の家でした。

話を sainte Marguerite-Marie Alacoque に戻すと、彼女が書いたものの日本語訳を二階堂奥歯氏は『八本脚の蝶』のなかで幾度か引用しています。だからこそ、この聖人の名をここで挙げたのです。

二階堂奥歯氏が引用したところをここで孫引きするなら：

「わたしたちは、愛するために心を持っており、苦しむために肉体を持っている。」

「わたしは苦しみ無しでは一瞬も生きることができませんでした。わたしが苦しめば苦しむほど、わたしは、もっとこの愛の聖性に満足しました。そしてそれは、絶え間無く苦しんだわたしの心に三つの願望をかき立てました。第一に、苦しむこと。第二に、主を愛し、聖体を受けること。第三に、主と一致するために死ぬこと。」

「わたしは、わたしの苦しみが減少するのを望んだことは一度もありません

でした。なぜなら、わたしの体がいつそううちひしがれれば、それだけ、わたしの霊はもっと喜びを感じ、そして、もっとわたし自身に専念させ、苦しみのイエスともっと深く結びつく自由があります。」

二階堂奥歯氏は、「わたしたちは、愛するために心を持っており、苦しむために肉体を持っている」を座右の銘にする、とさえ言っています。

sainte Marguerite-Marie Alacoque は、実際に物理的に自分の身体を痛めつける荒行のようなことを好んでしていたそうです。しかし、sainte Marguerite-Marie Alacoque は、二階堂奥歯氏のように自殺はしませんでした。

苦痛を辛抱することにおいて、十字架上で苦しむイエスと「深く結びつく」、即ち「一致する」、つまり、主との communion において死に、復活すること。sainte Marguerite-Marie Alacoque は、そのような communion を生きていました。

他方、二階堂奥歯氏にとっては、宗教も信仰も仮象のものにすぎませんでした。17 世紀と 21 世紀の違いかもしれません。

あるいは、悪しき wittgensteinisme ? というのも、今開いている『八本脚の蝶』のページで二階堂奥歯氏は Wittgenstein を引用しているからです：

「神は世界の中には顕れない」.

もう少し Wittgenstein を二階堂奥歯氏から孫引きしてみると：

「自然科学の命題以外、何も語らぬこと. (...)ほかの人が形而上学的なことがらを語ろうとするたびに、君は君の命題の中で全く意義を持たない記号を使っている、と指摘してやること.」

Wittgenstein は、三位一体の神秘を識らなかったようです. 勿論、三位一体という語は知っていたでしょうが、それが如何なるものであるか、彼は真剣に考えたことがなかったのでしょう.

三位一体の神秘は、神の存在の真理の現象学です. 神は世界の中に顕れます.

また、少なくとも Tractatus の Wittgenstein は、nihilisme の超克を全く考えていなかったようです. 「意義を持たない記号」と彼が読んでいるところの

ものは、構造 $\frac{a}{\varphi}$ における a にほかなりません。Wittgenstein は、存在の真理は、存在 φ にほかならない、ということに気づいていません。

Wittgenstein が沈黙して立ち止まったところこそ、精神分析の出発点です。

Wittgenstein の行き詰まりから精神分析は始まります。

18 October 2014 : 精神分析の政治学；大学の言説，すなわち全体の言説としての民主主義は，排除と差別の言説である．

先日，藤田博史先生主催の木曜ゼミで，宗教の布教は善意で為されれば為されるほど，大きなお世話ではないか，ということについて議論があったそうです．

それとの関連において言うなら，精神分析を広めようとすることも大きなお世話ではないか？

精神分析は，単なる机上の空論ではなく，人間存在の様態を変える実際的効果を持ちます．であれば，精神分析の実践が或る程度社会の中に広まれば，精神分析は何らかの社会的効果を持ち得ます．

つまり，精神分析の政治学 *la politique de la psychanalyse* を考えることができます．

精神分析の政治学は如何なるものであり得るか？精神分析の効果として誕生するかもしれない社会は，如何なる *politeia* のものであり得るか？

その答えは, Lacan の四つの言説を手掛かりにすれば見えてきます.

民主主義とは, 民, つまり奴隷が支配者の座に就いている *politeia* です.

それは, 大学の言説の構造を有しています.

$$\frac{S_2}{S_1} \rightarrow \frac{a}{\$}$$

支配者の言説において右上の他者の座, つまり奴隷の座にあった S_2 が, 大学の言説においては左上の能動者の座, つまり支配者の座に位置しているからです.

支配者徴示素 S_1 は, Freud の *Totem und Tabu* において Urvater 原父が息子たちに殺されたように, 存在の座, つまり, 死の座へ排斥されてています.

支配者の座に就いている S_2 は, 普遍的知としては, 確かに, 大学 *université* です. しかし, *université* のラテン語語源 *universitas* は「全体」です.

大学の言説は, ひとつの「すべて」の支配体制です. それが民主主義の本

質です.

周知のように、民主主義における意志決定の原理は多数決であり、したがって、民主主義とはひとつの多数派の支配です. ところが、多数派は「皆」の名において支配します. 多数決で決められたことは「皆」の意志で決められたことであり、あらゆる者がそれに従わなくてはならない、というわけです.

しかるに、民主主義は、「皆」というすべてから排除された者を必然的に伴います. 大学の言説において「皆」から排除された者は、右上の奴隷の座に位置づけられた a です.

たとえば、 S_2 は男であり、 a は女です. あるいは、 S_2 は「正常者、健全者」であり、 a は「障害者」です. USA においては伝統的に S_2 は WASP であり、 a は黒人や hispanic です. 日本においては、 S_2 は、君が代を歌い、日の丸を仰ぎ見る「日本人」であり、 a は「非国民」です.

「皆」、「すべて」を形成する S_2 が、そこから排除された者 a を暴力的に支配する政治体制、それが民主主義です.

その意味で、人民民主主義共和国である中国は、確かに、世界で最も民

主主義的な政治体制の国家である, と言えます.

それに対して, 精神分析の政治学は, Lacan が分析家の言説と呼ぶ構造に表されています.

$$\frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{\$}{S_1}$$

分析家の言説においては, 大学の言説において排除されていた者 a が左上の能動者の座に就いています. つまり, 分析家の言説により形式化される政治体制は, 大学の言説として形式化される民主主義体制をくつがえすひとつの「革命」です. 民主主義の超克です.

分析家の言説により形式化される *politeia* においては, 排除されていた者が支配者の座に就いているのですから, 要するに, 誰も排除されることはありません.

民主主義を超克する「革命」は如何に為され得るのか? それは, 精神分析の実践によってです. ひとりの精神分析家が精神分析の実践によって幾人かの精神分析家を新たに誕生させ, 今度は, 彼らがまたそれぞれ, 幾人かの分析家を新たに誕生させる. そのようにネズミ算式に精神分析家は増

えて行きます。

そのように精神分析家が増殖する過程の究極的な到達点は、あらゆる者が精神分析家であるような社会です。それが、分析家の言説により形式化される *politeia* です。そのような *politeia* を目指すのが、精神分析の政治学です。

それに対して異論が提起されます。そんなことは大きなお世話だ。排除された者の立場で安心している者もいるのだ。そのような者にまで精神分析の福音を押しつけないで欲しい。

たとえば「ひきこもり」と言われている状態にある人々のことを考えてみましょう。わたしの臨床経験においては、ひきこもっている人々は、ある程度進行した幻覚妄想状態にある *Schizophrenie* の患者さんか、あるいは、*Schizophrenie* 発症前後の状態にある人々でした。

ひきこもりの人々すべてがそのような精神病理学的状態にあるのかどうか、確かなことは言えません。もしかしたら、確信犯的に引きこもっている人々もいるかもしれません。

もし「ひきこもり」を広義に取るなら, Wittgenstein も「ひきこもり」であったか
もしれません. そのような「ひきこもり」の人々は, 伝統的には *schöne Seele*
「美しい魂」と呼ばれてきました. ひとりの美しい魂としての Wittgenstein.
昨日の東京ラカン塾で論じたことを, ここでも紹介してみましよう.

19 October 2014 : 人間の実存は, 神の現象学である.

今日の御ミサで, 関口教会主任司祭, 山本量太郎神父様は, 福音朗読箇所 (Mt 22,15-21) について大変すばらしい解説をしてくださったので, 紹介しましょう.

Wittgenstein とも無関係ではありません. というのも, Wittgenstein は彼の *Tractatus logico-philosophicus* 6.432 でこう言っているからです:「神は, 世界において己れを啓示しない」. とんでもない! 神はこの世に己れを啓示します.

10月19日の福音朗読は Mt 22,15-21 でした. 有名な文句:「皇帝のものは皇帝へ, 神のものは神へ」が出てくる一節です.

当時, ユダヤ地方はローマ帝国の支配下にありました. ユダヤ人たちはローマ皇帝へ税金を払う義務を負わされていました. そのためにはローマ帝国の貨幣を用います. ローマ帝国の銀貨には皇帝の肖像が刻まれています. そのような貨幣を用いて税を支払うことは, 皇帝の権威を認めることです. 当時, ローマ皇帝は自分を神として崇めることを人々に強制していました. 本来, それはユダヤ人には従い得ないことです. しかし, 税を払わない

でいることは反逆になります。そのような二律背反状況において、律法学者らはイエスに問います：皇帝に税を支払うことは許されるか？イエスはローマ帝国の銀貨の刻印を示しつつ、彼らに問いかえします：この肖像と銘は誰のものか？彼らは答えます：皇帝のものだ。イエスは言います：皇帝のものは皇帝へ返し、神のものは神へ返せ。

このイエスの言葉は、一見そうは見えませんが、実は譬え話です。key word を成しているのは「肖像」です。ギリシャ語では εἰκών, ラテン語では imago です。

imago という語は皆さんも知っているでしょう。Freud が出版させていた精神分析の機関誌の名です。それをまねて青土社はかつて同名の雑誌を出していました。imago は、しかし、雑誌の名であっただけではありません。

1940 年代の Lacan は、Freud の Ichideal 自我理想を imago と呼んでいました。signifiant *a* の前駆概念です。

ともあれ、εἰκών, imago の用語によって我々は創世記 1,27 へ回送されます：

ἐποίησεν ὁ θεὸς τὸν ἄνθρωπον, κατ' εἰκόνα θεοῦ ἐποίησεν αὐτόν.

creavit Deus hominem ad imaginem suam ; ad imaginem Dei creavit illum.

神は、人間を、神の εἰκών, imago に成るよう創造した。

この εἰκών, imago は「似姿」と邦訳されています。フランス語では image です。

神は、人間が神の image であるよう、創造したのです。言い換えると、神は人間としてこの世に己れを啓示したのです。この「人間」はイエスひとりに限られません。あらゆる人間です。人間存在は、神の現象学です。その構造は我々の学素 $\frac{a}{\Phi}$ により形式化されます。神は、いかにも、十全適合的には、adaequatio においては、己れを啓示しませんが、しかし、似姿によって、仮象によって、己れを代表します。

イエスは言いました:神のものは神へ返せ。

イエスが律法学者らとの対話においてこう言ったのは、十字架上で処刑される三日前のことです。つまり、その言葉は、イエスが全人類の罪の贖いのために身を以て支払いをすることを予告しているのです。

その支払いは, Lacan が dette symbolique, 徴象的負債と呼ぶところのもの
の返済にほかなりません. それによって, signifiant a は棄却されます.
Lacan が destitution subjective 主体滅却と呼ぶ事態です. 言い換えれば,
分離 séparation です.

それによって, 負債は支払われ, 神のものは神へ返されます. そして, 人
間は, 神のものとして復活します. それが Ereignis です. 自有です. 人間
は, 己れの最も本来的な自己により自有されるのです.

イエスの言葉と精神分析とは完全に一致します.

20 October 2014 : 存在のトポロジー；存在論的差異；死からの復活と無からの創造.

御質問をいただいています：聖書は *sinthome* であるか？勿論です！

直接 Lacan の *Séminaire XXIII Le sinthome* を読んでみる前に、Heidegger のこの命題を参照しましょう：

das denkende Dichten ist in der Wahrheit die Topologie des Seyns. Sie sagt diesem die Ortschaft seines Wesens.

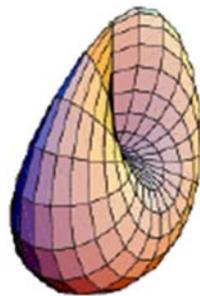
“思考する詩作は、その真理において、存才のトポロジーである。それは、存才のために、存才の本有の処有を言う。”

Seyn は Sein の古い正書法です。Heidegger は、存在事象そのもの全体としての存在 Sein とは弁別されるべきものとしての存在, ~~Sein~~, Lacan 的学素では φ を、Seyn と書きます。白川静によれば「才」は「在」の元の字ですから、Seyn を「存才」と訳します。

先週金曜日、10月17日の東京ラカン塾のセミナーに参加していた或る

人の発言によって改めて実感させられたのですが、存在, \varnothing と、存在事象そのもの全体としての存在との差異, Heidegger が「存在論的差異」と呼んだものは、自明のものでは全然ないようです。だからこそ Lacan は、Möbius の帯や cross cap などの topological objects に基づいて、存在論的穴を説明しようとしていました。

一枚の disc のエッジと一本の Möbius の帯のエッジとを同一化すると、投射平面が得られます。投射平面を、Lacan は好んで cross cap とも呼びます。cross cap を実数三次元空間内に embed することは不可能ですが、その部分的表象 immersion は、球面の一部を鉗子ではさんでつぶしたような外見をしています。



鉗子ではさまれ、つぶれて、ひとつの線分のようにになっているところの諸点を除いた部分は、球面の一部であり、一枚の disc へ還元されます。

したがって、Möbius の帯の要素は、cross cap においてはそのものとして

は現れておらず、つまり、己れを隠しています。

cross cap の閉曲面は、構造 $\frac{a}{\varphi}$ を表しています。cross cap を構成するふたつの要素、disc と Möbius の帯とのうち、己れを隠している Möbius の帯は φ に、現れている disc は a に対応しています。

存在論的差異は、存在事象の次元のなかで新たに識別された差異ではなく、存在事象と、存在事象ではないものとの、根本的な差異です。

cross cap においては、disc a が存在事象そのもの全体としての存在 Sein であり、Möbius の帯 φ が Seyn です。Sein と Seyn とは、disc と Möbius の帯のように、相互に根本的に異質なものです。

話を Topologie des Seyns 存才のトポロジーに戻すと、存才のトポロジーとは、存才のために、存才が宿る場処の本有を「言う」ことです。「存才の本有の場処を言う」とは、存才が ek-sistieren し得るように、人間が己れの実存、己れの Dasein 現場存在によって、存才を守ること、守護すること、保護することです。つまり、 $\frac{a}{\varphi}$ として実存しつつ、 φ を a のなかに保匿することです。

その a は、できあいの存在事象ではなく、ひとつの「無からの創造」です。

それが、Heidegger が *denkendes Dichten* と呼んでいるものです。denken 「思考する」も、ひとつの *dichten* 「詩作する, 創造する」です。

それは、抹消された存在 \emptyset から出発しての創造であることにおいて、無からの創造 *creatio ex nihilo* です。

無からの創造は、死からの復活と等価です。

Lacan が *sinthome* と呼ぶものは、そのような無からの創造, 死からの復活としての症状 $\frac{a}{\emptyset}$ だ, と考えられます。

聖書の物語は神話です。神話は、不可能在としての実在 \emptyset を保匿するために、 \emptyset から出発して為されるひとつの創造です。そのような神話として、聖書はひとつの *sinthome* である, と言えます。

逆に言えば、Joyce の *Finnegans Wake* はひとつの聖書です。なにしろ、*Finnegans Wake* の主題は死と復活なのですから。ただし、*Finnegans Wake* が聖書ほど長期にわたる *best seller* になるとは思いませんが。

Lacan が *jouissance de déchiffrage* と言うとき, Joyce がその一例です. 彼は, 存在の真理 ϕ の座に仮定された知 S_2 を解読しつつ, 彼の作品 a を創造します. Joyce の創造 a は, 存在の真理 S_2 の解読です.

カトリックにおいて聖人と呼ばれている人々, たとえば Mother Teresa や Jean-Paul II は, 芸術的創造をしたわけではありません. 彼らは, 隣人を愛し, 神に熱心に祈りました. 彼らは, 信仰を实践する彼らの生, 彼らの実存において ϕ を保匿しています.

周知のように, どんなに技術やテクニクがある *artiste* も, それだけでは感動を与えることはできません. テクニクは, 芸術的創造の必要条件でも十分条件でもありません.

Lacan が引用していますが, Picasso はこう言いました : *je ne cherche pas, je trouve*. わたしは探さない. わたしは見つける.

Picasso が真の芸術家であるのは, 彼が存在の真理 ϕ を見出しているからです.

21 October 2014 : 構造主義について; 言語の構造と存在の構造; 真理と神話; 元祖 *sinthome* イェス・キリスト.

「構造主義」に関して御質問をいただいています.

Lacan は「構造主義者」を自認したことは一度もありません.

Lacan は Lévi-Strauss 経由で Saussure を学んだので, Lévi-Strauss に恩義を感じており, そのことを表明していますが, Lévi-Strauss の方は Lacan を「神学への逆戻り」として批判していたそうです.

Lévi-Strauss は Lacan の発想の数多くの源のひとつに数え入れられているので, わたしも *Anthropologie structurale* を読んでみようとしたのですが, 第一頁で, これを苦勞して読んでもしょうがないと感じて, 放り出しました.

Lacan における構造は, *la structure du langage*, 即ち, 構造 a / φ 以外のものではありません.

いわゆる構造主義においては, Heidegger の言う意味での存在, *Sein*, φ は視野に入ってきません. 構造 $\frac{a}{\varphi}$ は, Heidegger に準拠することによっ

て初めて見えてきます。

いわゆる構造主義においては、存在事象の次元における差異のシステムとしての構造が問題になるだけです。それに対して、精神分析では、精神分析の主体の存在 Φ こそが本質的です。

精神分析における構造は、言語の構造 $\frac{a}{\Phi}$ であり、それは、主体の存在 Φ の住まいです。このような構造の概念は、いわゆる構造主義のものではありません。

「神話」という語に関しては、それをを用いて Freud は『精神分析への導入のための新たな一連の講義』のなかでこう言っています：

Die Trieblehre ist sozusagen unsere Mythologie.

本能学説は、言うなれば、我々の神話である。

神話とは、それとして十全適合的に表言することが不可能であるものに関して fiction, つまり métaphore を以て語ることです。神話も詩作も症状も、同じ学素 $\frac{a}{\Phi}$ で構造化されています。

Schizophrenie において, néologisme は幻覚妄想症状の等価物です.

Schizophrenie は, 構造 $\frac{a}{\phi}$ の解体を以て始まります. dépersonnalisation が出現するのはその解体にともなってです.

構造 $\frac{a}{\phi}$ の解体が代補されなければ, 自殺に至るでしょう. 代補されれば, 典型的には, 幻覚妄想症状が出現します. それは, 無ないし死 ϕ から, 新たな a が創造されることであり, 新たな命へ復活することです.

Lacan は Joyce を sinthome と呼びましたが, Jésus Christ こそが「元祖」 sinthome です.

仏教国の日本では, ブッダこそが「元祖」 sinthome だと異議を唱える人々がいるでしょう. 反対はしません.

22 October 2014 : 徴象と実在； 穴としての徴象.

或る御質問へ回答するために Lacan の *Écrits* の或る箇所を参照したところ、改めて発見したことがあります.

1953-54 年の Séminaire I の一部にもとづいて 1956 年に書かれた『Jean Hypolite のコメントへの答え』のなかの一節 (*Écrits*, p.392) :

徴象の位においては、空虚は、充満と同じく徴示素的である； 今日 Freud の言葉を聴くなら、徴象の *dialektisch* な動き全体の最初の歩みを定立するのは、ひとつの空虚の裂口である、とまさに思われる。それは、その歩みを繰り返すことに *Schizophrenie* 患者が固執することをまさに説明する、と思われる。ただし、無駄である。なぜなら、*Schizophrenie* 患者にとっては、徴象全体が実在的であるから。

御質問に答えるために引用しようと思っていたのは「*Schizophrenie* 患者にとっては徴象全体が実在的である」という文だけだったのですが、それに先立つ部分を読んで、1974-75 年の Séminaire *RSI* における徴象の位の定義を、それより 20 年前の書に再発見しました。

つまり, *RSI* において Lacan は徴象を穴と定義するのですが, 「徴象の *dialektisch* な動き全体の最初の歩みを定立するのは, ひとつの空虚の裂口である」という文において, まさにその定義を先取りしています. 穴という裂口こそが, 徴象の本質です.

徴象の *dialektisch* な動きは, 主体と他 *A* との *Dialektik* です.

主体自身の存在の真理 ϕ は他 *A* の場処に穴 *S(A)* をうがつ. 主体はその穴の周りを回ることによって, それを己れ自身の存在の真理と認めるに至る. そのとき, 自有が発起する.

S(A) の穴の周りを回る動きは, 徴示素の連鎖 *a* の固執 (*Écrits*, p.11) として現れます.

Schizophrenie の症状として Lacan が念頭においているのは, 彼の精神医学の師 Clérambault の言う *automatisme mental* です.

automatisme mental は, ひとくちに言えば, *Schizophrenie* における声の幻覚症状, いわゆる幻聴です. それは, 書かれることをやめない徴示素 *a* の連鎖を成します.

非精神病者においては、徴示素連鎖をたどっていくことによって $S(A)$ の穴が見えてきます。

ところが、Schizophrenie 患者においては、そのような歩みは無駄に終わってしまいます。なぜなら「Schizophrenie 患者にとっては徴象全体が実在的である」(tout le symbolique est réel) からだと Lacan は言っています。

automatisme mental を構成する徴示素連鎖と、妄想形成の核を成す phénomènes élémentaires とは、それらの物質性において実在的である。それらの物質性は、ex-sistence としての実在の深淵の穴を、分離不可能なように塞いでしてしまう。

Écrits p.392 から引用した一節は、そう言っていると思われます。

そして、続けて Lacan はこう言っています：「そのことにおいて、Schizophrenie 患者は Paranoïa 患者とはまさに異なる。Paranoïa 患者については、我々 [Lacan] は医学博士論文 [1932年の症例 Aimée の論文] において、影象的な構造が優位であることを示した(…)」。

Lacan が言う意味での Paranoia においては、即ち、症例 Aimée においては、Schizophrenie とは異なり、妄想症状において優位であるのは、自我理想との関繋 $a - a'$ 、つまり、鏡の段階の構造です。

それに対して、Schizophrenie においては、幻覚妄想症状も néologisme も実在的なのです。

23 October 2014 : Paranoia と Schizophrenie ; symptôme と sinthome.

Lacan の言う意味での Paranoia と Schizophrenie との違いは、このことで
す： Paranoia 即ち症例 Aimée においては妄想症状はその意義の「実現」
によって消退したが、他方、Schizophrenie においては、幻覚妄想症状の
そのような自発的解消は起こりません。

症状は、一般的に、 $\frac{a}{\phi}$ として構造化されています。症状の多様性を規定
するのは a の多様性ですが、それだけでなく、構造 $\frac{a}{\phi}$ の解体可能性
も重要です。

ひとくちに精神病や妄想と言っても、Aimée の症状は解消したのに対して、
Schizophrenie の症状は、薬物療法によって抑えつけることはできても、解
体することはありません。Schizophrenie の症状における声や妄想を特徴
づけるのは、それらの実在性です。Schizophrenie の患者さんたちにとって
は、症状の声や妄想は、いわゆる現実よりももっと実在的です。

この場合の「実在的」は「不可能」、即ち「書かれぬことをやめない」ではなく、
而して「ex-sistence としての実在、 ϕ の実在とまったく一体になり、物質的
matériel となった」ということです。

その場合、構造 $\frac{a}{\Phi}$ において、 a はその不透明な物質性において「実在的」である、と Lacan は言っています。

réel という用語も一義的ではありません。

automatisme mental (Schizophrenie における声の幻覚) における声、妄想知覚において phénomène élémentaire を成す Bedeutung, néologisme を成す signifiant の断片はいずれも、実在的な a です

sinthome にせよ symptôme にせよ、症状の構造は、分析家の言説の構造の左側の部分 $\frac{a}{S_2}$ です。

質問者の方を混乱させてしまった原因は、次のことです:つまり、一方に、分析の開始以前の、分析可能なものとしての神経症症状があり、他方に、分析の終わりを成す「死からの復活」としての症状があります。

わたしは今までのところ両者を共に学素 $\frac{a}{\Phi}$ で表してきました。Lacan も両者を共に symptôme と呼んでいます。

分析の終わりを成す「死からの復活」, 「無からの創造」としての症状を特に *sinthome* と Lacan が呼ぶのは, Joyce との関連においてのみであり, ほかの文脈においては, 用語上の区別な為されていません.

Schizophrenie の症状は, 構造 $\frac{a}{\phi}$ の解体から出発して形成されていますから, 或る意味で, 既に *sinthome* です. 実際, Schizophrenie の症状は, Joyce の *Finnegans Wake* と同様, 分析不能, 分析不要です.

イエスやブッダは, 彼らの実存構造 $\frac{a}{\phi}$ において, 他 A の欲望としての存在 ϕ に最も忠実, 従順な者たちです. そのことにおいて, 彼らは *sinthome*, *saint homme* です.

26 October 2014 : 精神病における症状形成； 精神病患者の精神分析可能性.

関係妄想 *Beziehungswahn* は, *Schizophrenie* の精神病理学においては正確に定義された用語です.

Schizophrenie の症状形成には少なくともふたつの系統が区別されます. ひとつは *automatisme mental*, もうひとつは *Wahnwahrnehmung* 妄想知覚です.

automatisme mental は声(それは出発点においてはまだ「声」ではなく, 頭に勝手に浮かんでくる言葉の断片であったりしますが)を核にして発展して行きます.

伝統的なドイツ精神病理学において妄想知覚と呼ばれているものにおいては, その核を為すのは *Bedeutung* 意義の経験です. 如何なる意義かは不明な, 不透明な謎めいた意義がまず生じ, そこから解釈によって妄想が発展して行きます.

謎めいた意義の経験の第一段階は, *Wahnstimmung* 妄想気配, 妄想気

分と呼ばれています。意義はまだ全く漠然としています。しかし、無気味な不安と緊張は既に感ぜられ始めています。

第二段階が **Beziehungswahn** 関係妄想です。謎めいた意義は、患者自身と関係づけられます。「わたし自身にかかわっている」という確信が生じます。なぜなら、その意義は、確かに、患者自身の存在の真理の現象にほかならないのですから。

そして、第三段階は、狭義の **Wahnwahrnehmung** 妄想知覚です。フランスの伝統的な精神病理学においては、解釈妄想 **délire d'interprétation** と呼ばれています。謎めいた意義が解釈されて、多くの場合、患者自身が他者から何らかの作用を被る被害妄想、迫害妄想が形成されます。

automatisme mental と妄想知覚とに加えて、まなざしを核とする妄想形成を第三の系統として明確に区別しても良いと思います。Lacan は「まなざし」も客体 *a* に数え入れていますから。まなざしの経験から、被注察妄想が形成されて行きます。

ただし、被注察妄想は、**automatisme mental** の声の経験において二次的に形成されてくることもあり、実際にはむしろその場合の方が多いです。

いずれにせよ, **Schizophrenie** において症状形成の核となる声, まなざし, 意義は, *réel* なものとして出現してきた *a* です.

Schizophrenie が精神病理学的に比較的良く規定された症候群(単一疾患ではない)であるのに対して, **Paranoïa** は曖昧です.

Schizophrenie において妄想症状が幻覚症状よりも目立つ病態は *paranoïde* と形容されます. しかし, **Schizophrenie** の *paranoid type* は, あくまで **Schizophrenie** の一病態です. **Paranoïa** と混同しないようにしてください.

Paranoïa には, いわゆる誇大妄想 *mégalomanie*, 被愛妄想 *érotomanie* などのほか, 1932年の Lacan が *psychoses du surmoi* 超自我精神病と名づけた二型, 自罰パラノイアと好訴妄想(復権妄想)があります.

Paranoïa は精神病理学的に単一ではありません. 一方に, Lacan の *Aimée* や Freud の *Wolfsmann* のような *imaginaire* 優位の病態があり, 他方に, 幻覚症状がほとんど目立たない **Schizophrenie** と見なされ得る病態があります.

Schizophrenie 患者の精神分析可能性の問題については、一概には論ぜられません。

まず、未発症の Schizophrenie 患者さんが精神分析を求めて来ることがあります。不用意に分析に導入すると、それによって幻覚妄想症状が惹起される危険性があります。未発症 Schizophrenie 患者においては構造 $\frac{a}{\phi}$ がもともと非常に不安定です。そのことに分析家が事前に十分留意していないと、分析によって構造 $\frac{a}{\phi}$ は容易に崩壊してしまい、その代補として急激な幻覚妄想症状が始まり得ます。そのような事態は当然、望ましいことではありません。予備面接において、構造 $\frac{a}{\phi}$ の脆弱性を非常に慎重に評価する必要があります。さらに、分析家との面接を継続することが患者さんにとって何らかの支えになり得るか否かを評価します。判断は case by case です

27 October 2014 : 無意識はひとつの言語として構造化されている; 言語の構造は, 言語に住まう存在としての人間存在の存在論的構造である.

Schizophrenie 患者の精神分析可能性の問題についてもう少し考えてみましょう.

活発な幻覚妄想症状のさなかの Schizophrenie 患者が何らかの治療を求めて精神科医なり精神分析家のところに来ることは例外的です. 彼らは自分の症状にとらわれており, 症状を悦んでいます. そこから脱出しようとは思いません. それに, Schizophrenie 患者たちの症状は既に *sinthome* ですから, 分析不可能, 分析不要です.

それに対して, 幻覚妄想症状の活発な形成がおさまった状態の Schizophrenie 患者は, 鬱状態や意欲低下などの自覚症状のゆえに治療を求めてくることがあります. この場合は, 未発症患者と同様です. 幻覚妄想症状の再発の可能性を評価しつつ, *case by case* で考えます.

さて, 他の質問に移りましょう. 質問者の方と対話した或る自称 *lacanien* は「世界が言語で成立しているのは精神分析の大前提である」と断言したそうです. その自称 *lacanien* が Lacan を引用したつもりであったなら, 非

常に不正確な引用です.

Lacan の基本公式のひとつはこれです: *l'inconscient est structuré comme un langage*. 無意識は, ひとつの言語として構造化されている.

言語の構造とは, ことです: $\frac{a}{\phi}$.

1950 年代に確立された公式:「無意識はひとつの言語として構造化されている」は, 1953 年のローマ講演においては, 「症状はひとつの言語として構造化されている」と述べられていました. つまり, 学素 $\frac{a}{\phi}$ は, 症状の構造の学素でもあります.

それらふたつの公式をたばねるのは, *formations de l'inconscient* 「無意識の成形」です: 夢, 言いそこない, しそこない, 機知, 症状. さらに付け加えるなら, 芸術作品. そしてさらに, 実存. そこまで言うと, 一見, Freud の領域を超えてしまうように見えますが, しかし, Lacan は精神分析家の実存を問題にしました.

「世界」Welt は, 非常に大きな主題です. というのも, ドイツ語で Welt は, 単に「世界」「世間」だけでなく, 森羅万象, 宇宙です. 特に Weltraum と

言えば、宇宙空間です。Stanley Kubrick の *2001 : A Space Odyssey*

「2001年宇宙の旅」は、ドイツ語では *2001 : Odyssee im Weltraum* です。

Welt の問題については、Heidegger に準拠して、後日考えてみましょう。

ともあれ、Lacan が「世界は言語で成立している」と言ったことはありません。

それに対して、「無意識の成形はひとつの言語として構造化されている」は、
無意識の成形の精神分析可能性の必要条件です。

そして、言語の構造 $\frac{a}{\phi}$ は、精神分析とは何かを考えるための基本的な
足がかりです。

Lacan は、Heidegger を足がかりにして精神分析を基礎づけ直しつつ、言
語の構造 $\frac{a}{\phi}$ は、言語に住まう存在としての人間存在の存在論的構造で
あることを公式化しました。Lacan の用語 *parlêtre* はそのことを言っていま
す。

parlêtre は「人間の実存はひとつの言語として構造化されている」ということ
です。

parlêtre は「言語存在」です。あるいは、英語圏の論者に説明するために in-language-Being と訳してみたことがありますから、「言語内存在」でも良いかもしれません。

みづからまだ明瞭に発話できない幼児も、当然ながら、言語内存在です。いわゆる小児自閉症は、主体の存在と言語の構造との関係の障害です。自閉症児は、うまく言語の中に住まうことができません。小児自閉症は言語内存在の障害である、と言えます。

28 October 2014 : 基礎づけを欠く精神分析は無意識の真理を見失う;
Lacan の教えは, 精神分析を存在論的に基礎づけることに存する.

或る質問者のかたによると, 人文系の自称 lacanien たちは, Lacan の言語についての思考を, 次のような命題へ還元することがあるそうです:「人間は, 言葉を通して、あらゆるものごとを見ている, すなわち, 分節している」.

このような認識論的思考とは Heidegger も Lacan も無縁です. 通常は認識論そのものと見なされている Kant の『純粋理性批判』をさえ, Heidegger は存在論的に読解しています.

問われるべきは「主体は客体を如何に認識し得るか?」ではなく, 「物は如何に存在し得るか?」です.

そして, 物という客体の存在においてかかわっているのは, 主体自身の存在なのです. それが「異状」 aliénation と呼ばれる事態です.

そもそも, Lacan はいったい何のために彼の教えを展開し続けたのでしょうか? それは, 精神分析の実践を基礎づけるためです. しかも, 精神分析の

実践がはらむ可能性を最大限に発揮させ得るように基礎づけるためです。

Lacan が彼の Séminaire を開始した 1950 年代, 精神分析は USA で黄金時代を謳歌していました. 精神医学において, 当時はまだ有効な薬物療法が開発されていなかったため, 治療は大部分, 精神療法でした. 精神分析は, 当時臨床的に行われていた幾つかの精神療法のうち最も本格的なものに見なされていました. また, 当時 USA では, 精神科医がアカデミズムのなかで出世するためには精神分析家の肩書きを持つことが必須条件でした.

そのような条件のもとで USA の精神分析の実践は権威主義と形式主義に毒され, 精神分析の根源的な可能性は見失われていました.

USA のそのような事態に対して, フランスでは, Lacan が精神分析に出会ったのは *surréalisme* の文脈においてでした. *surréaliste* たちは, Freud が発見した無意識に人間存在の新たな真理を見出していました. Lacan の出発点はそこです.

せつかく Freud が発見した無意識という人間存在の真理を, 米国流の精神分析は, 見なかったことにして済まそうとする. 真理について何も知りたく

はない, という「無知の情熱」がそこには働いています.

成り行きにまかせておけば, 無知の情熱のせいで, 精神分析は, 無意識の真理を見失ってしまい, 現代社会における人間の生の「いごち悪さ」をごまかすための therapy のひとつへ墮してしまいます.

精神分析がそのように墮落してしまってはならない. それが Lacan の教えの動機です.

Lacan はまず問いました:精神分析とは何か? Lacan の答え:精神分析とは, 精神分析家が為すものと人々が期待するところの治療である. では, 精神分析家とは何か? それは, 精神分析されて在る者である.

一見, 循環論法にすぎないかのように見えるこの議論によって, Lacan は, 精神分析の本質に関する問いを精神分析家の存在に関する問いへ定式化しなおしたのです. 精神分析家で在るということに関する存在論的問いこそが, 精神分析の中心のかつ根本的な問いです.

29 October 2014 : 原罪の赦しと死からの復活; 精神分析家は, 無意識という人間存在の真理の証人である; 異状から自有へ; 言語内存在は, 人間の本質定義である.

10 月 30 日木曜日, 藤田ゼミで, 福田肇さんと彼の友人, 森下耕牧師との対談が予定されています. 主題は, キリスト教における罪の宥し(赦し)です.

キリスト教に言う原罪は存在論的なものであることを以前, 指摘しました. 赦しも, 当然, 同じ視点から思考されます.

24 日, 先週金曜日の東京ラカン塾の séminaire において Heidegger の ontologische Differenz について考えたとき, Heidegger がそこから発展させた Austrag の概念についても考えてみました. そして, それは和解 réconciliation と関連することがわかりました.

和解は, 赦しと密接に関連しています.

さらに, カトリックの Credo を思い起こしましょう. 使徒信条 le Symbole des Apôtres の最後の部分ではこうです:

Credo in (...) remissionem peccatorum, carnis resurrectionem, vitam aeternam.

わたしは信じます, 罪の赦しを, 肉体の復活を, 永遠の命を.

そこから読み取れるように, 罪の赦しと死からの復活とは, 互いに密接に関連しています.

さて, 10月31日の東京ラカン塾の séminaire のテーマは, 精神分析の基礎にとっての Heidegger 存在論における時間 Zeit と時間性 Zeitlichkeit, Temporalität の概念の意義です.

時間は Lacan にとっても非常に重要な主題です. Lacan は1945年に「論理的時間」le temps logique について論文を書いていますし, それから33年後, 1978-79年の Séminaire は「トポロジーと時間」と題されていました. トポロジーと時間という主題は, 残念ながら十分に展開されないままになってしまいましたが, 「存在のトポロジー」という Heidegger の表現を知っていれば, そこに「存在と時間」のこだまを聴き取ることができるかもしれません.

ところで, 昨日用いた「精神分析されて在る」être psychanalysé という表現

について御意見をいただきました。「精神分析されて在る」は単なる受動表現ではなく、むしろ、「精神分析をその終わりに至るまで経験しとおした」という完了を表現しているもの、と理解してください。

精神分析による無意識の発見は人間存在の真理の発見であるなら、「精神分析されて在る」こと、「精神分析を完了した」ことは、従来は秘匿されていた存在の真理を証しする — 明かす — ことである、と言えます。

精神分析家は、無意識という人間存在の真理の証人です。

Lacan は「精神病者は無意識の殉教者である」と言いました。その場合、殉教者 martyr は証人 μάρτυρος です。

精神分析家は、精神病者と同じく、無意識の殉教者・証人です。

殉教者は聖人です。Lacan が「精神分析家は、伝統的に聖人と呼ばれていたものに相当する」と言うとき、それは、精神分析家が無意識という存在の真理の殉教者・証人であることにおいてです。

精神分析は、その最も根源的な可能性においては、言語に住まう存在とし

ての人間主体存在の実践的現象学かつ現象学的実践です。日常態においては、存在の真理は「異状」 aliénation としてしか現れてきません。異状を解体し、自有 Ereignis に成ること、精神分析はそこに存します。

人間とは何か？ Aristoteles 以来の形而上学の伝統においては、人間は「理性的動物」animal rationale です。そのような形而上学的人間観を超克するために Heidegger は人間を Dasein 現場存在と規定することから出発しました。

存在は言語に住まいます。言い換えると、存在は言語の構造のなかに保匿されます： $\frac{a}{\emptyset}$.

したがって、言語存在 parlêtre は、精神分析の理論的便宜のための概念ではなく、人間存在の本質的な定義、しかも Heidegger 的な定義です。

01 November 2014 : 思考する詩作は存在の処言である; 芸術作品ならびに聖人の実存は, 存在の真理の証言である.

Heidegger が 1947 年に書いた哲学詩 *Aus der Erfahrung des Denkens* 『思考の経験にもとづいて』のなかに見出されるこの命題を改めて掲げておきましょう:

Aber das denkende Dichten ist in der Wahrheit die Topologie des Seyns.

だが, 思考する詩作は, その真理において, 存才の処言である.

この命題を以て, Heidegger は, 勿論, Heidegger 自身が哲人 Denker として遂行している思考 Denken は如何なるものかを規定しているのですが, しかるに, それは精神分析の本質をも表言しています.

Lacan は 1952 年に或る哲学の学会で Freud の症例ネズミ男を題材にして講演しました. その題は:『神経症者の個人的神話, または, 神経症における詩と真理』.

「詩と真理」は, Goethe の自伝的作品 *Dichtung und Wahrheit* を踏まえています.

ドイツ語で Gedicht は poème 詩であり, Dichtung は poésie 詩を作ること, 詩作です.

しかし, 動詞 dichten は, より広い意味において, 何らかの文学作品を創作することでもあり, Dichtung は fiction でもあります. 特に Wahrheit 真理と対置されればなおさら, Dichtung は fiction 虚構としての創作, 真理ではないものとしての仮象です. そして poésie の語源 ποίησις は何であれ何かを作ることですから, Dichtung は création 創造でもあります.

精神分析の行為は, ひとつの denkendes Dichten にほかなりません.

精神分析においては dire, sagen, 「言う」がかかわっています. 何を言うのか? 存在の真理を言うのです.

存在の真理の深淵がうがつ穴の周りを回りつつ, 存在の真理について思考する. 存在の真理へと思考を馳せる. そして, 存在の真理をできるだけ忠実に代表する言葉を dichten 創造する. それが, 精神分析の行為です.

Denkendes Dichten は Topologie des Seyns である, と Heidegger は言っ

ています。

Seyn は Sein の古い正書法ですが, Heidegger はそれを存在 φ を差し
徴すために用います。

Topologie des Seyns は「存在 Seyn の場処, 在処である τόπος を言う
λέγειν」ことです。すなわち「存在の真理の座 φ を表言する」ことです。

存在の真理の座 φ は, ex-sistence 解脱実存の場処です。それは, 存在
事象の座 a に対しては常に外に位置づけられて存有するものの座です。

Denkendes Dichten である Topologie des Seins は, 存在の真理 φ を解
読すること déchiffage でもあります。déchiffage は Lacan が用いている
表現です。

解読によって, ひとつの作品が創造されます。Joyce の *Finnegans Wake*
がその一例です。

詩作, 創造, 作品は, 存在の真理の証言です。

存在の真理をすべて、そのものとして言うことは不可能です。しかし、存在の真理について証言することは不可能ではありません。

芸術作品ならびに聖人の実存は、存在の真理のひとつの証言です。

11月1日は、カトリックにおいて聖人たちすべてを記念する祝い日です。昔は「万聖節」と言っていました。今は「諸聖人の日」と呼んでいます。

芸術作品が何らかの感動を喚起し、多くが殉教者である聖人たちが畏敬の念を惹起するのは、芸術作品や聖人が存在の真理を代表する証言であるからです。それが、物の存在論的構造であり、聖人の実存構造です。

02 November 2014 : 現実に対するファンタジーの優位; It Girl の宣伝ビデオ; フェティッシュとニヒリズム.

或る方が送ってくださった御質問に基づいて、こう問うこともできるかもしれませんが: Lacan の世界観は如何なるものか?あるいは、精神分析の世界観は如何なるものか?これらの問いに対しては、わたしはこう答えます: 問いの立て方が不適切である.

というのも、世界観 *Weltanschauung* という概念は、認識論を前提しているからです. 認識論は、さらに、認識の主体と客体の存在を前提しています.

ところが、Lacan は、精神分析において、伝統的な主客関係の概念を無効にし、存在そのものに関する問いを問うているからです.

適切な問いは、したがって、1964 年 1 月 22 日の *Séminaire* の最後に Jacques-Alain Miller が Lacan に向かって発した問いです: *Quelle est votre ontologie ? あなたの存在論は如何なるものか?*

1964 年. 50 年前です. 大学紛争で社会が騒然としていたのは 68-70 年ころです. むしろ当時は「世界観」は流行語でした. そこには、現在の社会を

否定し、革命を起こさねばならない、という情熱がこめられていました。それは、ある意味で、美しき魂 *schöne Seele* の夢想でした。

今や「世界観」はほとんど死語でしょう。外界や社会がどうであるかはどうでも良いことです。なぜなら、そこには如何なる満足も見いだせないからです。

満足が得られるのは *Phantasie* においてである。今や、美しき魂は完全に内向きになっています。

満足は *Phantasie* において得られる。それは、*virtual reality* の受容の前提です。逆ではありません。*virtual reality* がはやったから内向きになったのではなく、*Phantasie* の優位が先にあったのです。

今や人々は、世界観を問うことはしません。逆に、ファンタジーを問題にします。

ところで、ファンタジーを通して問われるべきは、Lacan が「根源的幻想」と呼んだものです。そして、幻想を通して問われるのは、Lacan が「他 A の欲望」と呼び、Heidegger が「存在の請求」と呼んだものです。

ファンタジー優位の今は、まさに精神分析の時代となる可能性をはらんでいます。

先日、ある人が Facebook に Pharrell Williams という hip-hop singer の最新曲 *It Girl* の music video を紹介していました。その video は、村上隆と彼の collaborator が製作した Superflat なアニメです。しかも、そこに登場する女性たちはすべて、いわゆるロリコン好みに描かれています。一般のアメリカ人たちにとってはかなり違和感を感じさせるものであったようで、The New Yorker 誌がその Pharrell Williams の video を話題にしました。

村上隆のいわゆる Superflat な作品は、伝統的な観点からはもはや芸術作品とは言えないような image や icon から成っています。もはや何の意味も持たない、純粋に imaginaire な形象。そのような作品に何億円もの値がつくのですから、まさに Fetisch です。いわゆるロリコン好みに描かれた女性も Fetisch 以外の何ものでもありません。そのような Fetisch の機能は何か？

Freud は既に 1927 年に答えています： Fetisch は失われた phallus の代理である。つまり、 $\frac{a}{\phi}$.

今, ちまたにあふれかえっているファンタジーにおいて際限無く増殖している image や icon はすべて, Fetisch です.

そして, Fetisch が覆い隠し, 否認させるのは, ϕ です.

Freud はそれを去勢と呼びました. しかし「去勢」は今の人々にはピンと来ないかもしれません. 何と呼ばば良いでしょうか?

人間存在が資本と科学の言説のなかでもはや何の尊厳も持たないこと, 人間は資本の増殖に仕えるためのただの人材, 人的資材にすぎないこと, 人間存在は無に等しいこと.

「ニヒリズム」もほとんど死語ですが, その忌まわしい響きを今, 人々は再び聞き取ることができるでしょうか?

03 November 2014: 大学の言説 vs 分析家の言説; 聖なるもの; 存在のことば.

御質問くださった或るかたは, 自称 *lacanien* たちの知ったかぶり, 知的うぬぼれにうんざりさせられたことがあるそうです. そのような *lacanien* は *Socrates, Heidegger, Lacan* を見習うように!

知をふりかざすことは, 大学の言説にほかなりません. 例えば政治体制としては, それは官僚支配です. 官僚たちは大学, ないしより高等な教育機関で統治するための *know how* を学び, そのような知として支配者の座に就いています.

精神医学の臨床においては, *DSM* に頼る診療は大学の言説のものです. *DSM* は診断基準をまとめたマニュアル知です. 精神科医は, そこにリストアップされた病名を精神障害者にはりつけて, 精神障害という実存的出来事を支配したつもりになっています.

大学の言説に対して, *Socrates, Heidegger, Lacan* ら, 偉大な哲人たちは, 分析家の言説に位置しています. 彼らは, みづから知をふりかざすのではなく, 知を存在の真理の座に仮定し, 知が何を言おうとするのかを聴き取る

ために, 知の声に耳を傾けます.

Socrates は, 知の声を δαίμων と呼んでいます. Heidegger は Herakleitos や Parmenides の断片に存在の言葉を聴き取ろうとします.

Lacan は, 神学, 哲学, 文学, 数学, 文化人類学などの精神分析以外の領域から常に学ぼうとしています.

存在の言葉 Wort des Seins は Heidegger が用いた表現です. 神学において Wort と言えば, ヨハネ福音書の冒頭に言われているように, それはイエスのことです. 存在 ϕ は声 a をとおして人間へ請求を差し向けてきます.

存在の言葉に耳をふさぐこと. 適当に聞いたふりをする事. 存在の真理が何を言おうとしているのか, そんなことは知りたくもないと抵抗すること. それが我々の日常態です. 世間の多くの人々はそれで何とかやっています. しかし, それではどうにもならなくなる時には?

聖性についてコメントをいただいています. 「聖なるもの」は, Heidegger が読解を試みた Hölderlin の詩 *Wie wenn am Feiertage* あたかも祝い日に... の一節を思い起こさせます:

Jetzt aber tagts ! Ich harrt und sah es kommen, Und was ich sah, das Heilige
sei mein Wort.

今や, しかし, 日が昇る! 我れは待ちわびた. して, それが来るのを見た.

して, 我れが見たもの, 聖なるものぞ, 我が言葉たれ.

そこで Hölderlin が言葉 Wort と呼んでいるものは, イエスのことかもしれ
ません. 「待ちわびる」はイエスの再臨の期待かもしれません. 今や日が昇
る: ニヒリズムの夜は明けようとしています. そのとき出現し, 成起するものは,
聖なるものです.

Lacan は sinthome を Σ と表記することがあります. それにしたがって,
sinthome の構造を $\frac{\Sigma}{\phi}$ と書いてもよいかもしれません.

04 November 2014 : 死は, 最も即自的な存在可能性である; 死は, 無の
匱である; 死と罪; 死からの復活と罪の赦し.

東京ラカン塾の web page を全面的に改訂しました. ホームページ作成ソ
フトの新しいものを用いたのですが, そうそう思いどおりに作れるものでもあ
りませんでした. さらに改訂すべき余地はありますから, 不備な点を御指摘
いただければ幸いです.

言い遅れましたが, 先の日曜日, 11月2日は, カトリックでは「死者の日」で
した. 11月1日の「諸聖人の日」に続いて, すべての死者を記念する日で
す. ちなみに, Halloween はカトリックの行事ではありません.

死について, Heidegger は 1927 年の『存在と時間』においてこう言ってい
ます:

「死は, 最も即自的な存在可能性 [die eigenste Seinsmöglichkeit] であ
る. 」

また, 1950 年の講演 *Das Ding* ではこう言っています:

「死は、無の匱として、存在という存有するものを己れのうちに保匿している。」

いずれにせよ、死は、単純に「生理学的生命機能が停止すること」ではありません。

Heidegger の死の概念には、復活の概念が既に含まれています。復活とは、死んだ後に単純にこの世に「よみがえる」ことではなく、この世の生ではない「永遠の命」に与ることです。それが、「最も即自的な存在可能性」です。

「即自的」は、ドイツ観念論に言う *an sich* ではなく、*eigen* です。それは、「本来的な自己に即している」という意味において「即自的」と訳されてもよいでしょう。

ところで、永遠の命へ復活するためには、あらかじめ死なねばなりません。

学素 $\frac{a}{\emptyset}$ において、死は \emptyset に相当します。

構造 $\frac{a}{\emptyset}$ において a を純化し、 $S(A)$ の穴へ還元すれば、 $\frac{S(A)}{\emptyset}$ となり

ます。

穴 $S(A)$ は、死 ϕ の深淵の最も忠実な代表です。カトリックの聖人たちの実存は、学素 $\frac{S(A)}{\phi}$ で形式化され得ます。

それに対して、Joyce のような芸術家においては、死からの復活としての創造が発起します。それを $\frac{\Sigma}{\phi}$ としましょう。

$\frac{\Sigma}{\phi}$ は、無からの創造であり、死からの復活です。それが発起するためには、いったん死へ至らねばなりません。無の深淵へ到達せねばなりません。それが、精神分析以前の症状としての $\frac{a}{\phi}$ との相違です。

RSI のボロメオ結びの中央に位置づけられた a は、réel, symbolique, imaginaire のいずれにも与り得ます。

Σ は、その物質性における signifiant, 言うなれば signifiant réel です。

死 ϕ は、罪でもあります。罪の赦しと和解について、明日以降、改めて考えてみましょう。

05 November 2014 : 神話としての聖書 ; fiction と fetish ; 復活と赦しと和解.

先月 30 日にフジタゼミで, 福田肇氏がマルコ福音書 2,1-12 から出発して, 罪の赦しについて論じてくれました.

罪の赦しを主題に選んだのは彼の友人, 森下耕牧師(日本基督教団)であったそうですが, 森下牧師は残念ながら参加できませんでした.

とりあえず皆さんもマルコ福音書 2,1-12 を読んでみてください. 四肢ないし半身の麻痺した病人をイエスが癒やし, 罪の赦しを与えるエピソードです.

現実には起こり得ない奇跡が物語られているからといって, 聖書をバカげた作り話の寄せ集めと判断しないでください.

先代の教皇, 今は名誉教皇と呼ばれている Benedikt XVI は彼の名著『ナザレのイエス』の冒頭で, いわゆる歴史主義のせいで貧弱にされてしまったイエス像を嘆いています.

どれが歴史上実際に起きたことであるかと問うならば, 福音書の大部分は

捨て去られることになります。聖書のなかに歴史的事実を探すべきではありません。もし仮に歴史上実際に起きたことが語られているとしても、そのようなことは、fictif な要素とともに、すべて、神話へと創造されているのですから。そして、fiction としての神話においては真理が提示されているのです。

fiction は fingere に由来し、Fetisch は facere に由来しています。

それらふたつのラテン語動詞 facere と fingere は語源を共有してはいないようですが、一方は様々な意味で「作る」、他方は「形造る」、悪い意味で「でっちあげる」ですから、意味上は相互に関連しています。

Fetisch という語は、「つくりもの、まがいもの、仮象」というニュアンスを強く含んでいます。

fiction も Fetisch も「真理」の反意語です。

精神分析においてかかわる真理、四つの言説の構造において左下の座に位置する真理は、そのものとしては提示され得ないもの、書かれぬことを止めない不可能在、実在としての真理です。

Fiction も Fetsch も, そのような真理を代表し, 代理するもののひとつです. そして, 両者ともに, 或る種の創作, 創造 *création* です.

聖書に戻って, マルコ福音書 2,1-12 を読む際の注目点を先に指摘しておくとして, まず, この癒やしと赦しの奇跡の業(わざ)は, 信仰において行われています. 第 5 節において「イエスは彼らの信仰を見て」と言われていますから.

第二に, からだの麻痺した男は, 当然ながら, 脳血管障害等の何らかの病気のせいで麻痺したのであって, 犯罪行為のせいではありません. 彼が何か悪を為したのではないにもかかわらず, イエスは「あなたの罪は赦された」と宣言します.

第三に, 第 9 節と 11 節でイエスが発する「起き上がれ, 立ち上がれ」という命令において用いられている自動詞 *ἐγείρειν* は, 他動詞としては「復活させる」であり, 聖書のほかの箇所において「死者たちのうちからの復活」を言うときに用いられる語です.

さらに, 「罪の赦し」と密接に関連する「和解」の主題にも触れておきましょう.

和解に関して、マタイ福音書 5,23-26, ならびに聖パウロのローマ書簡 5,8-11 を読んでください.

それから、『精神分析の倫理』において Lacan が引用している有名な箇所も、罪と死との関連に関して、読んでみてください. それは、やはり聖パウロのローマ書簡の 7,7-12 です.

今日は宿題を幾つか出しました. それらにもとづいて、明日以降、話を続けて行きましょう.

06 November 2014 : 無意識的罪意識; 存在論的有罪性; 原罪の赦しと死からの復活.

罪の概念に関してですが, 西洋は罪の文化, 日本は恥の文化, とよく言われていました. 出典は Ruth Benedict (1887-1948) という米国の文化人類学者の『菊と刀』(1946) です. 第二次世界大戦中, USA では敵である日本をよく知るための研究が盛んに行われていたことがうかがわれます.

しかし, 恥の意識も広い意味では罪の意識の一種です. また, 名誉を重んずる態度は西洋においても古代から一貫しています.

ともあれ, 精神分析においてかかわる罪は, Freud が「無意識的罪意識」という矛盾した表現で呼んだ有罪性です. 無意識的ですから, 厳密には, 「罪意識」とか「有罪感」とは言えません.

Freud が「無意識的罪意識」と呼んだものは, 何らかの違法行為の結果ではなく, いわば a priori な有罪性, ないし存在論的有罪性と呼ぶべきものです. 何もしていないうちに既に有罪なのですから, それは, 神学において原罪と呼ばれるものと関連しています.

仏教には原罪に相当する用語は無いでしょうが、しかし、我々が輪廻にとらわれて解脱できず、現世にとどまっている、ということは、我々の前世における罪の結果なのです。前世の罪を相続しているという意味で、それはまさに原罪です。ドイツ語では「原罪」は Erbsünde 「相続した罪」です。

カトリックの *Credo* のひとつ、使徒信条では、こう言います：

Credo in remissionem peccatorum, carnis resurrectionem, vitam aeternam.

わたしは、罪の赦し、肉体の復活、永遠の命を信じます。

罪の赦しは、死からの復活と密接に関連しています。

昨日指摘したように、マルコ福音書 2,1-12 に物語られている麻痺患者の癒しのエピソードにおいて、イエスが「起き上がれ、立ち上がれ」と命ずる際、その動詞は「復活させる」という意味でも用いられます。

マルコ 2,1-12 は譬え話と同じように読まれるべきです。そこには、読み取られるべき秘められた意味があります。

麻痺患者は、身動きもできないまま横たわっています。それは、死者の譬

えです。イエスは、死者に「起き上がれ」と命令し、復活させたのです。

実際、そのようなエピソードが幾つか物語られています。たとえば、マタイ福音書 9,25：イエスは、死んだ少女の手を握ります。すると、少女は起き上がります。また、ルカ福音書 7,14-15：イエスは、死んだ少年に「起きなさい」と命じます。すると、少年はよみがえります。

いずれの場合も、同じ動詞 *ἐγείρειν* が用いられています。

復活は、名詞では *ἀνάστασις* です。この語は、女性の名前 *Anastasia* のもとになっています。

「復活させる」という動詞としては、*ἀνίστημι* と *ἐγείρω* のいずれもが同じ程度によく使われています。

原罪の赦しと、死からの復活は、相互に等価です。

08 November 2014 : 工藤庄平氏と永井均氏； 存在の意味に関する問い
が問われないところにおいて擬似問題は増殖する； 我れは他である；
fiction の構造において真理は己れを示す； ふたつの死の間の矢吹丈；
あしたのジョーと主の変容.

ある方から、我々の友人工藤庄平氏の twitter での発言を教えてください、
それを retweet しました。工藤氏が引用している永井均氏の twitter 発言
も見つけることができたので、retweet しました。

永井均@hitoshinagai1

高校生のとき、クリスチャンで左翼の先生に「イエス・キリストを神だと信じる
なら、天皇を神だと信じる人を批判する資格はない」と言って悲しませたこ
とがあった。

工藤庄平@nineteen_jacob

「イエス・キリストを神だと信じるなら、天皇を神だと信じる人を批判する資格
はない」(永井均).

— そもそもイエス・キリストは己が真に神の子である(誇大妄想ではなく)事
を如何にして証明するのか？ 仮に彼が水上歩行や中風の癒しを為し得た
として、それを彼が真に神の子である事の証拠と言い得るのか？

永井均氏のことは全く知らなかったのですが、Wikipedia の記事を参照しました。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%B8%E4%BA%95%E5%9D%87>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%AA%E3%81%9C%E7%A7%81%E>

[3%81%AF%E7%A7%81%E3%81%AA%E3%81%AE%E3%81%8B](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%AF%E7%A7%81%E3%81%AA%E3%81%AE%E3%81%8B)

「イエス・キリストを神だと信じるなら、天皇を神だと信じる人を批判する資格はない」は永井氏の高校生時代の発言だそうですから、若気の至りでしょう。それとも、永井氏は今もそう考えているのでしょうか？

まず、当然ながら、Abraham を信仰上の祖先とする三つの宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教における神と、日本神話の神々を同列に置くことはできません。同じ「神」という語で差し徴されてはいても、概念的には全く別物です。

また、天皇自身が神格化されることを拒むだろう今、もし仮に天皇を神だと信ずる人がいるとして、どうして批判する必要があるのでしょうか？その人は、その信念、信仰、ないし幻想、妄想によって、実存をかろうじて支えているのかもしれない。その場合、その支えを不用意に崩してはなりません。

「イエスは自分が神の子であることを如何に証明し得るか？」に対しては、Gödel にならって、真理はその証明可能性について決定不可能である、と答えることもできます。

その場合、「真理」は、イエスが ἐγώ ειμι ἡ ἀλήθεια 「我れは真理である」と言うときの「真理」です。

そのような真理にとって証明は無用です。

「仮にイエスが実際に水上歩行や中風の癒しを為し得たとして」に対しては、聖書は歴史書ではなく神話である、と答えましょう。聖書においては、歴史的事実の断片も、神話の材料に応用されています。そして、神話という fiction の構造において、真理は己れを示します。

Hard problem of consciousness と呼ばれているもの：

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%84%8F%E8%AD%98%E3%81%AE%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%BB%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%96%E3%83%AC%E3%83%A0>

は、科学主義の観点においてのみ措定される問いです。

他方、永井均氏が取り組んでいると言われる the Harder Problem of Consciousness は、徴象 le symbolique, 実在 le réel, 影象 l'imaginaire の諸次元を区別することを知らないときに措定される問いです。

「なぜわたしはわたしなのか？」は、影象的な自我・他者の関繋 $a - a'$ のなかで問われている問いです。

それに対して、徴象と実在とを知っている者、たとえば Arthur Rimbaud は « Je est un autre » 「我れは他者である」と断定しています。

以上のような擬似問題はすべて、真に問われるべき問いを問うていないところに生じます。真に問われるべき問いとは、『存在と時間』において Heidegger が「存在の意味に関する問い」と呼んだものです。

「存在論と神学と精神分析は、互いに次元が異なる」という御意見をいただきました。いいえ、それら三つにおいては同一の構造がかかわっています。即ち、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ です。

存在論と神学は Heidegger により既に統一されていました。そこに精神分析を加えて、より大きな統一を成したのは、Lacan です。

そもそも、人間の存在の本有と神の存在の本有は *das Selbe*, 本同的なものです。それは、存在 \varnothing です。

復活をどう説明するか考えていて、ふと『あしたのジョー』の *finale* を思い出しました。

三島由紀夫『あしたのジョー』の愛読者で、あるとき彼は講談社にやっけて、少年マガジンを買いそびれて本屋になくなってしまったから、残っていたら一冊売ってくれ、と言ったそうです。

最後にまっ白に描かれた矢吹丈は死んだのか？と当時騒がれました。死んだのではありません。彼は、復活したのです。

力石徹とジョーとの *rivalité* は、影象的な関係そのものです。しかし、力石が死んだとき、決定的な変化が起こります。ジョーは死を先取りのに懐胎します。

Lacan は *Antigone* について *entre deux morts* : 「ふたつの死の間のアンチゴネー」を論じています。それと同様に、力石の死後、ジョーはふたつの

死の間にあります。

福音書には「主の変容」と呼ばれるエピソードが描かれています。主の変容において、イエスは復活を先取りして、まっ白にまばゆく輝きます。まっ白になったジョーを思い浮かべて、ふと、その輝きを連想しました。

09 November 2014 : あなたたちは神の家であり, 神の靈気はあなたたちに内に住んでいる; 人間はすべて, 神の子である; 現場存在は神の現象学である; holisme の陥穽; 神話は存在の真理の隠喩である; 原罪と存在.

11 月 9 日は, ローマの Laterano 大聖堂 Basilica di San Giovanni in Laterano の献堂の記念日でした.

Laterano 大聖堂はローマ司教座教会です. 本来は教皇の本拠地でした.

11 月 9 日の御ミサの第二朗読は, 聖パウロの第一コリント書簡 3,9-17 の一部でした. そのなかに意義深い表現が出てきます:「あなたたちは神の家である.」「あなたたちは神の神殿であり, 神の靈気(聖霊)はあなたたちに内に住んでいる.」

以前, Heidegger の「存在の住まい」という表現を紹介しました.「言語は存在の住まいである」.

Heidegger が「存在の住まい」と言うとき, 彼は聖パウロの「神の家」をふまえているのではないかと推測されます.

構造 $\frac{a}{\Phi}$ は、存在の真理の現象学的構造であり、かつ、言語の構造でもあります。したがって、「言語は存在の住まいである」と「人間は神の家である」とは相互に等価です。

我々人間の内には神の霊気が住まっています。人間の本有は神性です。

言い換えると、人間の実存, Dasein, 現場存在は、神の現象学です。

ただし、人間の本有であり、かつ神の本有であるところのものは, existence としての存在 Φ です。

工藤庄平氏が参照するよう勧めてくれた彼の記事を読みました：

<http://d.hatena.ne.jp/jacob1976/20120206/1328490755>

そこにおいて「二つのドグマ」と呼ばれているものが何なのかわからなかったもので、よく理解できませんでしたが, holisme と呼ばれるものが問題になっているようです。

いわゆる holisme は、存在事象そのもの全体 *das Seiende als solches im Ganzen* と Heidegger が呼ぶところのものにとどまっています。つまり, ex-

sistence としての存在 φ を思考してはいません.

イエスは神の子です. イエスのみならず, 人間はすべて神の子です. これは, カトリックの教義のひとつです.

「人間は神の子である」とは「現場存在 Dasein は神の現象学である」ということです : $\frac{a}{\varphi}$.

当然ながら, 存在事象そのもの全体に対して ex-sistence, Ek-sistenz であるものを, 存在事象そのもの全体を根拠にして証明することはできません.

逆に, その Ek-sistenz, つまり, 存在 φ の方が, 存在事象そのもの全体の根拠です.

Es gibt Sein. 存在 φ は, 存在事象そのもの全体としての存在を与える, 恵む, 恵与する.

その構造を学素 $\frac{a}{\varphi}$ は形式化しています.

イエスの奇跡の物語は, 神話として, fiction として, 存在の真理の

métaphore です.

ここで一旦、話を少し戻して、罪のことに立ち返りましょう. というのも、Heidegger の『存在と時間』における罪の概念への言及をいただいたからです.

『存在と時間』において Heidegger は罪をこう定義しています:

「有罪である」とは「ひとつの非 Nicht によって規定された存在の根拠であること」(Grundsein für ein durch ein Nicht bestimmtes Sein) である.

より簡潔に Grundsein einer Nichtigkeit 「ひとつの非性の根拠であること」とも言われています.

ein durch ein Nicht bestimmtes Sein 「ひとつの非 Nicht によって規定された存在」とは、後に Heidegger がバツ印で抹消する存在、つまり, Sein, 存在, Lacan 的学素の \emptyset にほかなりません.

現場存在 Dasein の存在論的構造は $\frac{a}{\emptyset}$ です.

ですから, *das Dasein ist im Grunde seines Seins schuldig* 「現場存在は, その存在の根拠において, 有罪的である」と Heidegger も言っています.

「人間はその存在の根拠において有罪である」とは, つまり, 原罪を負っている, ということです. 原罪という神学的概念を, Heidegger は存在論的に定義しなおしたのです.

良心という道徳的な概念も, Heidegger は存在論的に捉え直します.

「良心を持つとすること *Gewissen-haben-wollen* は *Anrufverstehen* である」と規定されています.

Anruf は「存在の呼びかけ」です. 「存在の呼びかけ」は, 後の用語では *Anspruch des Seins* 「存在の請求」です. Freud の用語では *Triebanspruch* 「本能の請求」, Lacan の用語では「他 A の欲望」です.

そして Heidegger は, *der Ruf erschließt das ursprünglichste Seinkönnen des Daseins als Schuldigsein* 「存在の呼びかけは, 現場存在の最も本源的な存在可能を有罪存在として開明する」と言っています.

10 November 2014 : 律法によらねば、わたしは罪を識らなかった；罪さえも！罪さえも役に立つ。

今日は、罪に関する省察の材料としてふたつの引用を皆さんに提示するだけにしておきます。ひとつは、聖パウロのローマ書簡 7,7-12 です。もうひとつは、Paul Claudel の『サテンの靴』から。

聖パウロ, ローマ書簡 7,7-12 :

では、どういうことか？律法は罪であるか？とんでもない！だが、律法によらねば、わたしは罪を識らなかった。そも、律法が「欲望するなかれ」と言わなかったなら、わたしは欲望を識らなかったであろう。だが、機会を得て、罪は、命令によって、わたしのうちに欲望すべてを作り出した。そも、律法が無ければ、罪は死んでいる。かつて、律法無しに、わたしは生きていた。しかし、命令がやってきて、罪は生き返り、わたしは死んだ。命へ至るはずの命令が、わたしにとっては、死へ至るものとなった。そも、罪は、機会を得て、命令によってわたしを誘惑し、それによってわたしを殺した。さように、律法は聖なるものであり、命令は聖なる、義なる、善なるものである。

Paul Claudel (1868-1955) は劇作家で、カトリックでした。本職は外交官で、1921-27年、駐日フランス大使を務めました。引用は『サテンの靴』第三日、

第八場から:

Doña Prouhèze :

男は, 女の腕のなかで, 神を忘れます.

守護天使:

「神と共に在る」ことは, 「忘れる」ことであるか? 「神と共に」以外のところで
か, 神による創造の神秘と結合されて在るのは? 辱めと死の門を通過して,
暫しの間, 再びエデンの敷居をまたいで.

Doña Prouhèze :

結婚の秘跡を受けない愛は, 罪ではありませんか?

守護天使:

罪さえも! 罪さえも役に立つ.

Doña Prouhèze :

では, 彼[主人公 Rodrigue]がわたしを愛するのは良いことでしたか?

守護天使:

おまえが彼に欲望を教えたのは、良いことであった。

Doña Prouhèze :

まぼろしを欲することを？常に彼から逃れる影を欲することを？

守護天使:

欲望は、存在するものの欲望であり、まぼろしは存在しないものだ。まぼろ

しを通しての欲望は、存在しないものを通して存在するものを欲することだ。

11 November 2014 : 創造は, 無からの創造である; 真理は fiction の構造において真現する; Fetisch と sinthome ; ϕ は, 物であり, かつ, 欲望である限りにおいて, 存在論と倫理学との連結の役を果たす.

村上春樹氏を差しおいて今年の Nobel 文学賞を受賞した Patrick Modiano の小説が届きました. *La place de l'étoile* と *Les boulevards de ceinture* です.

étoile という語は, 何故か小文字で書かれています.

Les boulevards de ceinture 『環状道路』の題辞に Rimbaud が引用されています. 『地獄におけるひとつの季節』の『悪しき血』のなかの言葉です:

フランス史のいかなる時点においても, わたしの前例があったなら! 否, 皆無だ.

18 歳の Rimbaud の言葉です. いかにも, 創造は, 無からの創造です.

Modiano は全く読んだことがないので, 楽しみです. しかし, 同じ Nobel 賞作家でも, Elfriede Jelinek ほどの驚きがあるかどうかはわかりません.

文学の話しのついでに、昨日引用したふたりの Paul のうち Paul Claudel に先に触れておくなら、Lacan は彼の Coufontaine 三部作を Séminaire VIII のなかで取り上げています。

Le soulier de satin は渡辺守章氏の訳で岩波文庫から『繻子の靴』として出版されています。これも或る意味で、福音書と同様、死と復活の物語です。長編の戯曲ですが、あきることがありません。

「真理は fiction の構造において真現する」 « la vérité s'avère dans une structure de fiction » と Lacan は言っています。四つの言説の構造においては、仮象が真理を代表しています。

Lacan の学素 $\frac{a}{(-\phi)}$ にならって $\frac{a}{\phi}$ を考案し、それを症状の構造の学素と定義しました。RSI のボロメオ結びにおいても、三つの輪の交わりに a が位置づけられています。

しかし、去勢の否認の機能である Fetisch としての $\frac{a}{\phi}$ と、無からの創造ならびに死からの復活としての $\frac{a}{\phi}$ とは、必要に応じて区別する方が、混乱を避けるためには良いようです。特に必要があれば、

後者は $\frac{\Sigma}{\phi}$ と書きます.

二階堂奥歯氏にとってのぬいぐるみの機能について、彼女はそれを世界守護者と呼んでいたとの御指摘をいただきました。言い換えれば、父の名ではないか？しかし、彼女にとって、あらゆる存在事象は仮象にすぎませんでした。彼女は世界守護者を呼び求めましたが、この世ではかなえられませんでした。

ひとくちに芸術作品と言っても、それらのうちに、単に去勢の否認に役立っているにすぎない *Fetisch* と、死からの復活、無からの創造としての *sinthome* とを、常に判然と識別し得るか否か？この問いは今後も考え続けてみましょう。

Séminaire VII 『精神分析の倫理』 p.101 において Lacan は、昨日引用した聖パウロの一節の「罪」に「物」 *la Chose* を代入しています。

律法によらねば物を識らなかつたらう。律法によらねば欲望を識らなかつたらう。

そこにおいて、律法は *signifiant a* であり、物および欲望は ϕ です。

ローマ講演の終わりの方で Lacan は「語は物の殺害である」と言っています。物は、抹消された限りでの物、つまり \emptyset です。

\emptyset は、物であり、かつ、欲望である限りにおいて、存在論と倫理学との連結の役を果たしている、と言ってもよいでしょう。

古代ギリシャにおいて無からの創造の観念があったか否かは、Hesiodos が用いた Chaos の語をどう解釈するかによります。Chaos の原義は「裂口、開口」であり、つまり、穴です。はたしてそれは無そのものであるか？確かに解釈は分かれます。

12 November 2014 : Gérard Haddad, 『ラカンがわたしを養子にした日』;
Fetisch は創造の尊厳を失った被造物である; *trait unaire*, 一元特徴, 自我理想, *signifiant a*; 仮象 *a* は, 存在 \emptyset がまとう仮面である; 「なぜわたしはわたしなのか?」が *aporia* になるのは男にとってだけだ. なぜなら, 女にとっては「わたしは他者である」が自明であるから.

たまたま Mallarmé の引用を見かけました. Mallarmé は言語についての覚え書きのなかで Descartes の『方法序説』に関してこう言っています:

あらゆる方法は *fiction* であり, 証明に役立つ. 言語は *fiction* の道具であると彼 (Descartes) には思われた: 彼は, 言語の方法に従うだろう. (その方法を規定すること) 言語は, 言語自体を映す. つまるところ, 彼 (Descartes) には, *fiction* は人間精神のふるまいそのものであると思われる — *fiction* こそが, あらゆる方法を動員する. そして, 人間は意志へ還元される.

Descartes の *Discours de la méthode* をゆっくり読んでいる時間はありませんでしたが, そのテキスト内を検索した限りでは, Descartes 自身は *fiction* という語は使っていないようでした.

ともあれ, Descartes が言語と fiction との本質的な関連について思考しているのだとすれば, 興味深いことです. Lacan が *Discours de la méthode* そのものに言及しているのは見かけたことはありませんが.

Gérard Haddad という分析家が Lacan との分析の思い出を本にしています. 『ラカンがわたしを養子にした日』という題です.

Haddad は Tunisia 出身のいわゆる séfaraïte, アラブ系ユダヤ人です. ヨーロッパ系ユダヤ人は ashkénaze. ピアニスト, 指揮者の Vladimir Ashkenazy の姓はその名称に由来しています.

興味深いのは, Haddad は, 分析以前にはマルクス・レーニン主義者として全く信仰を持っていなかったのに, 分析の最中から彼の祖先の宗教に関心を持ち始め, どうとうユダヤ教について本を書くまでになった, ということです.

Haddad は, 分析をとおして, 神の声, 存在 \varnothing の声を聴くに至った, というわけです. 分析以前には, 彼は, その声に耳を塞いでいたのですが, 分析の経験のなかで, 彼はその声に耳を傾ける勇気を持つに至ったのです.

或る方から、あらゆる a はかつては Σ であったのではないか、との御指摘をいただきました。確かに、あらゆるものは神により無から創造されたのですから、その意味で *sinthome* です。

果たして、*Fetisch* は創造の尊厳を失った被造物であるか？

御質問をいただいています： a に関して、Lacan が *trait unaire* と呼んだものとのその関連は如何？

Lacan は *trait unaire* について『主体のくつがえし』のなかでこう言っています (*Écrits*, p.808) :

「一元特徴 [*trait unaire*] は、主体を、最初の同一化(其れは、自我理想を形成する)へ異状化 [*aliéner*] する。そのことを記号 $I(A)$ は記している。」

学素 $I(A)$ は欲望のグラフのなかで用いられています。Freud の言う *Ich-Ideal* 自我理想の学素です。 $i(a)$ が影象的「理想自我」*ideales Ich* であるのに対して、 $I(A)$ は徴象的「自我理想」です。自我理想を形成するのが一元特徴への同一化です。

一元特徴への同一化は異状 *aliénation* を生ぜしめます : $\frac{a}{\phi}$.

つまり, Freud の「自我理想」を規定するために Lacan が用いた *trait unaire* は, 同一化の *signifiant* としての *a* の別名です.

Freud が同一化と呼ぶものは *a* への同一化であり, その限りで, 異状 *aliénation* を定立します.

主体 ϕ の同一化としては, *a* は自我です.

と同時に, 欲望との関係においては, *a* は「欲望の客体」ないし「欲望の原因である客体」と呼ばれます.

a は自我でもあり, 客体でもある. それが *narcissisme* の構造です.

Lacan の教えのなかで主題化される時間的順序としては, *a* はまずは *schéma L* における自我・他者 *a - a'* として登場し, 次いで欲望のグラフのなかで幻想の学素 ($\$a$) に用いられます.

客体 a という名称は、「幻想 ($\$a$) のなかの客体」に由来します。

自我としても客体としても, a は存在 ϕ を代理する仮象です。

そのことに関連して, 仮面舞踏会 *mascarade* という表現を思い出してもよいでしょう. UK の女性分析家 Joan Riviere (1883-1962) が 1929 年の論文 *Womanliness as a masquerade* 「仮面舞踏会としての女性性」において用いた表現 *mascarade* に Lacan は注目しています。

仮象 a は, 存在 ϕ がまとう仮面です。

或る方が興味深い指摘をしてくださいました:「なぜわたしはわたしなのか?」が *aporia* になるのは男にとってだけだ. なぜなら, 女にとっては「わたしは他者である」が自明であるから。

13 November 2014 : 我れは他である ; *Je est l'Autre* ; 男が「なぜわたしはわたしなのか？」と問うのは、 Φ との同一化が不安定になったときである ; 女が仮面 *a* を脱ぐとき、それによって顕わになる存在の真理の穴は、*Medusa* のまなざしの恐ろしさか、聖女の美しさか。

1871 年 5 月 15 日付の書簡において 16 歳の *Arthur Rimbaud* は言いました :

Je est un autre. Si le cuivre s'éveille clairon, il n'y a rien de sa faute. Cela m'est évident : j'assiste à l'éclosion de ma pensée : je la regarde, je l'écoute.

我れは他である。銅が目覚めてラッパになるとしても、銅の過ちは何も無い。それは、わたしには自明だ : わたしは我が思考の開花に立ち会う : わたしはそれをまなざし、それを聴く。

より正確には、*Je est un autre* の前に接続詞 *car* が置かれています。 *car* は文の始まりの語なので、大文字で書かれています。それに続く *je* も大文字で書かれています : *Car Je est un autre.*

この文の異様さは、日本語に翻訳してしまうと隠されてしまいます。通常は文頭以外では小文字で書かれる一人称代名詞 *je* が大文字で書かれ、し

かも、動詞 être の活用形は一人称単数のそれではなく、三人称単数のそれになっています。この Je は、明らかに、後の部分の je とは異なります。

引用した Rimbaud の言葉は、分析家の言説の構造を表しています。彼が Je と呼んでいるのは、左下の座に位置づけられる主体の存在の真理です。

ですから、より Lacan 的に表記するなら：

Je est l'Autre.

Je は、他 A のなかの欠如、他 A の場処に穴をうがった存在の真理の深淵 ϕ です。そして、存在の真理は、「我が思考の開花」として己れを示現します： $\frac{a}{\phi}$.

a の立ち現れに立ち会い、それをまなざし、それを聴く「わたし」は、右上の座に位置する $\$$ です。

自分自身の存在の真理が言語の構造において示現されてくる。そのとき、存在の真理の声に耳を傾け、それを読み取る。Rimbaud にとって、詩作の

経験とはそのようなものです。

16歳の少年がそのような分析家の言説の構造を把握し、公式化しているとは、なんとも驚くべきことです。

Rimbaud の *Je est un autre* に対して、仮面舞踏会としての女性性との関連における「わたしは他者である」は、印象的な自我が仮面であることを言っています。そして、女性はそのことを多かれ少なかれ自覚しています。

Simone de Beauvoir は彼女の最も有名な著書:『第二の性』*Le deuxième sexe* においてこう言っています:

on ne naît pas femme : on le devient.

我々[女]は、女として生まれるのではなく、女に成るのだ。

男も先天的に男であるのではなく、後天的に男に成るのであり、そう成るよう強いられるのですが、それは、*sexuation* 性別の *signifiant* としての Φ への同一化によってです。

男において、徴示素 Φ との強固な同一化は、鏡像的な自我・他者の

transitivisme に取って代わります。

逆に言えば、男が「なぜわたしはわたしなのか？」と問う問いは、 Φ との同一化が揺らいだとき、あるいは、それが始めから不安定であるときに生じてくるものでしょう。

男の性の signifiant Φ に対して、女性の性そのものの signifiant はありません。女性の性は、否定神学においては神について「... ではない」としか語らないように、否定形でしか表言できません：

$$\neg (\forall x) \Phi(x)$$

すべての x について $\Phi(x)$ であるわけではない。

« x は女である » は、« x は $\Phi(x)$ ではない » という否定によってしか差し徴され得ません。

固有の signifiant の欠如の穴に、さまざまな仮象 a が便宜的に、人為的に代入されます。とりわけ、男の欲望の客体と成り得るように。そのような同一化は、男の Φ との同一化より遙かに容易に解体され得ます。

それゆえ、女性は、女性としての自我が人為的、便宜的な仮面であることを比較的容易に自覚し得ます。

そして、その仮面を脱ぎ捨てることも。それによって顕わになる存在の真理の穴は、**Medusa** の恐ろしいまなざしになるかもしれませんし、聖女の美しさになるかもしれません。

15 November 2014 : 一神教と一なる YHWH ; Un $\equiv \varnothing$; y a d'l'Un ; 三人の囚人と論理的な時間。

一神教について御質問をいただいています。一神教は、旧約聖書申命記 6,4 の言葉によって定義されます：

Sh'ma Yisra'el YHWH Eloheinu YHWH Ehad.

ヘブライ文字で書いても何と読むかわからないので、ラテン・アルファベットで表記しておきます。日本語に訳すと：

「聴け、イスラエル！我れらの神 YHWH は、一なる YHWH である」。

この文言は、ユダヤ教の最も基本的な信仰箇条を成すと見なされています。

YHWH Ehad.

Ehad は一、英語なら one、フランス語なら un です。YHWH は一である。つまり、一は神の名、父の名です。ここで、YHWH は、存在 \varnothing のことです。つまり、ex-sistence 解脱実存です。

一, Un について, この等価性を措定することができます:

$$\text{Un} \equiv \emptyset$$

一, Un について, Lacan は *Séminaire XIX ...ou pire* でこの命題を提示します:

Y a d'l'Un.

Y a d'l'Un は, *il y a de l'Un* という文を日常会話における発音のしかたで発音した音をそのまま表記したものです. 代名詞 *il* が省略されてしまい, また, *de* の母音が飲み込まれてしまいます.

il y a は存在を差し徴す表現です. 英語の *there is*, ドイツ語の *es gibt* に相当します.

Y a d'l'Un は, 日本語では「一が有る」と訳すしかありませんが, それでは重要な点が抜け落ちてしまいます. それは, *de* と定冠詞から成る部分冠詞の意義です.

部分冠詞は, 非可算名詞に関してその何らかの量を差し徴します. たとえ

ば英語で *would you like some coffee ?* と言うときの *some* に相当します。

フランス語では *voulez-vous du café ? du* は *de* と *le* の縮合です。

では, ϕ としての一, *Un* に部分冠詞が付されるのは, 如何なることか?

存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ に即して考えてみましょう. ちょうど昨日の東京ラカン塾精神分析セミナーで読解した *Encore p.47* の一節で *Lacan* はこう言っています:

l'inadéquat du rapport de l'Un à l'autre.

一と *autre* (つまり, *petit a*) との関係の非十全適合.

signifiant a は *Un* に対して十全適合的ではない. そもそも, *signifiant a* は *Un* を代表する仮象にすぎません.

« *y a d'l'Un* » の部分冠詞は, *signifiant* の実在に対するこの非十全適合性を差し徴しています.

一, *Un* は, ひとつ, ふたつと数える際の単位ではなく, 「すべて」のことです. 「すべて」である *Un* という *signifiant* を以て存在事象そのもの全体を

差し徴すと考えるなら、部分冠詞は必要なく、l'Un est ないし il est l'Un と
言ってもよいでしょう。

しかし、Lacan が考えている Un は、存在事象ではなく、而して、存在 \emptyset
です。

signifiant Un を「すべて」として措定するとき、必ずそれに対して解脱的で
ある何か、それに対して ex-sister する何かが存在します。「すべて」である
はずの Un は、実は「すべて」ではなく、ex-sistence を考慮に入れるなら、
部分にすぎないのです。

かくして、「y a d'l'Un」の部分冠詞は、間接的に ex-sistence を指してい
るのだ、と読解することができます。

先週と昨日の東京ラカン塾精神分析セミナーにおいて、Lacan が『論理
学的時間』で提示した三人の囚人の譬え話について考えてみました。基本
的に仏教徒である日本人によりわかりやすいかもしれない version を思い
ついたので、最後に紹介してみます：

お釈迦様が地獄で苦しむ三人の亡者を見てあわれに思い、そのうち一人

を極楽へ救済してやることにしました。お釈迦様は彼らに言いました。ここに 5 枚の円板があり, 3 枚は白色, 2 枚は黒色である。いずれか一枚を君たちの額に貼る。ほかの者の円板の色を見ることはできるが, 自分自身のものは見えない。君たち三人を一緒に一部屋に入れる。自分の円板が何色かを最も速く論理的に正しく推論して正しく結論した者ひとりだけを極楽へ救済する。勿論, 互いに相談したり議論してはならない。

これが, 三人の囚人の話の仏教版です。いずれにせよ, 最終的にかかわっているのは, 芥川龍之介の『蜘蛛の糸』におけるように, 救済です。さあ, どうなるでしょうか? 答えは *Ecrits* に示されていますが, 御自分でも考えてみてください。

16 November 2014 : Sartre vs Lacan, 出口無し vs パス; 死は人類の運命について最後の言葉を言うものではない, なぜなら, 人間は永遠の命へ定められているから; Gestell und Todestrieb, 総召集体制と死の本能; 死からの復活は神話ではない.

昨日書いた仏教版「三人の囚人」の話から, ふと Sartre の戯曲 *Huis clos* 『出口無し』のなかの台詞 *l'enfer, c'est les autres* 「地獄とは他者である」が頭に浮かんできました.

Sartre の戯曲においても, 登場人物は三人です. 執筆されたのは 1943 年, 初上演は 1944 年 5 月. Lacan の『論理的な時間』が執筆されたのは 1945 年 3 月ですから, Lacan が Sartre の『出口無し』を知っていた可能性は十分に考えられます.

『出口無し』では, 男ひとりと女ふたりがひとつの部屋にいます. 表題どおり, そこから出られる可能性はありません. 三人は, 互いにまなざしあい, 影象的関繋 $a - a'$ のなかに閉じ込められています. 「地獄とは他者である」は, そのような影象的関繋のことです.

『出口無し』では殺し合いは起きませんが, Sartre がそれを執筆していた当

時、現実には第二次世界大戦で殺し合いが続いていました。

Freud は第一次世界大戦に関連して、破壊本能、死の本能の脅威を嘆いていました。

果たして、死は人類の歴史の最後の言葉であるのか？

否！2週間前、カトリックでは死者の日である11月2日、Francesco 教皇は言っています：死は人類の運命について最後の言葉を言うものではない、なぜなら、人間は永遠の命へ定められているから。

Lacan が『論理的な時間』を書いたのは Sartre の『出口無し』への答えとしてであるか否かは不明です。しかし、影象的関係の出口無し、行き詰まりの状況に対する出口を Lacan が指し示していることは確かです。

しかも、影象的関係の行き詰まりに対して、Lacan は、論理学を以て、つまり徴象によって、出口が開かれることを示します。Sartre の出口無し状況のなかに、精神分析は穴をうがち、通り道をつけることができます。その通り道を Lacan は *passe* と名づけることとなります。

つまり、1945年の『論理的な時間』は、1967年の『Ecoleの分析家に関する提案』における *passee* 「パス」を予描しているのだ、と見なすことができるでしょう。

今、たとえ第三次世界大戦は起きていなくても、たとえ日本が世界のあちこちでおきている局所的戦争の当事者ではなくとも、すべてを破壊しつくす戦時状況は、資本の言説と科学の言説として、容赦無く進行しています。Heidegger はそれを *Gestell* 「総召集体制」と呼んでいます。

総召集体制は、Freud が死の本能と呼んだものの現在化です。

地獄とは現実のことだというようなことを言う人がいますが、総召集体制こそが地獄的現実の本質です。

しかし、破壊と死は人間の運命の最後の言葉ではありません。

日本でキリスト教が受け入れられないことの原因のひとつはイエスの磔刑像だ、と言われることがあります。プロテスタントの教会にはイエスの磔刑像は無いそうですが、カトリックの教会には必ず顕示されています。

イエスは人類のすべての罪を担って、処刑されました。十字架にかけられているイエスは、むきだしの罪そのもの、むきだしの死そのものです。つまり、 \emptyset です。

しかし、そこに復活の神秘が成起します。

それは単なる神話でしょうか？ 否、精神分析は、復活が単なる神話でないことを証しています。

17 November 2014 : 罪の赦し, 死からの復活, 無からの創造; 喪と鬱; 復活と躁; 精神分析の終わりは朗らかである; より聖人であるほどに, よりよく笑う.

罪の赦し, 死からの復活, 無からの創造, これら三つのことは, 同じひとつの構造へ帰着します. つまり, *sinthome* の構造 : $\frac{\Sigma}{\Phi}$ です.

「罪の赦し」にだけ「から」 *ex* という前置詞がありませんが, しかし「罪の赦し」は罪から義への転換であり, 原罪からの解放です.

分離 *séparation* においては, 死の本能にしたがって, 主体は喪失において己れを実現する, と Lacan は言っています (*cf. Écrits*, p.843).

つまり, 分離までしか考慮に入れないのであれば, 精神分析の行き着く先は死でしかないことになります.

Freud が精神分析を創始したのは科学の言説との相関においてであった, という意味のことを Lacan はどこかで言っています. では, 精神分析は Heidegger が *Gestell* 総召集体制と呼んだものの一部を成しているのか? 否, そうではありません.

Gestell 総召集体制は、死の本能の作用そのものとして、死に至ります。そこで終わりです。

それに対して、精神分析においては、Francesco 教皇が先日言ったように、死・罪・無が最後の言葉を保有してはいません。死・罪・無から復活、赦免、創造が成起します。

ですから、Lacan は、精神分析の終わりは躁鬱的である、という意味のことを *Étourdit* において言っています。順序としては、鬱、次いで躁です。

Freud は『喪とメランコリア』という 1917 年の論文において、躁鬱について論じています。メランコリアは、鬱のことです。Freud はこう論じています：

喪は、愛の対象の喪失にともなって起こる事態であり、そこにおいては何が失われたのかは明白であるのに対して、病的な鬱においては、何が失われたのかは不明である。さらに、鬱に続いて躁が起きるとき、何らかの意味で喪失は代償されているはずである。

鬱は、Dasein 現場存在の構造 $\frac{a}{\phi}$ の解体において a が失われることに

よって生じます。☉ は、そのものとしては死です。鬱において自殺が起こり得るのは、それがゆえです。

そして、鬱が「少しでも精神病へ行けば」躁的興奮が起こる、と Lacan は言っています (*Autres écrits*, p.526). すなわち、躁と精神病との共通点は、死からの復活、無からの創造、罪からの赦免です。

躁的興奮と精神病的興奮との違いは、創造される *sinthome* の多様性に存することになります。

精神病における創造は幻覚妄想症状です。

躁においては、Heiter そのものが創造されます。

Heiter は、Hölderlin について論ずる際に Heidegger が用いる語です。今のドイツ語においては heiter は形容詞としてしか用いられません。「晴れた、朗らかな」という意味です。しかし古くは Heiter は名詞としても用いられました。「晴朗」です。Heiter は、つまり、Lichtung「朗場」の別名です。

罪からの赦免、死からの復活、無からの創造に存する精神分析の終わりは、

朗らかです。ですから, **Lacan** は, より聖人であるほどに, よりよく笑う, と言っています。それは, 精神分析の「福音」です。たとえ **Freud** は新大陸にペストをもたらすつもりであったとはいえ。

18 November 2014 : 東京ラカン塾は、ラカン派精神分析を本当に経験し
学び得る日本唯一の場所である；ラカン派でない精神分析は、精神分析
ではなく、ただの therapy である；変動時間面接の本質的な意義をふま
えないままに漫然と時計に支配された面接を行う者は、ラカン派精神分析
家ではない；精神分析の基礎は、存在の真理の現象学的構造に存する。

「東京ラカン塾は、ラカン派精神分析を本当に経験し学び得る日本唯一の
場所だ」と東京ラカン塾のホームページに書きました。

「ラカン派精神分析」という表現は、ある意味で「馬から落ちて落馬」と同様
に余分な言い回しです。精神分析はすべて、ラカンのです。あるいは、ラ
カンのでない精神分析は、精神分析ではなく、ただの therapy です。

精神分析の本質は、精神分析家の本有に存します。「精神分析家である」
とは、「精神分析されて在る」です。

精神分析された者は、日本に何人いるのでしょうか？正確にはわかりません。

わたしが知る限りで、わたしより前にフランスでラカン派精神分析を受けて
いたと言える者は、向井雅明氏だけです。

わたしが 1986 年に Paris VIII 精神分析学部留学を始めた当初, 向井氏には大変お世話になりました. 感謝しています. Jacques-Alain Miller 以外に誰の講義がおもしろいかとか, Lipsy という本屋(今はもうなくなってしまいました)に行けば Lacan の séminaires の海賊版が手に入るとか, 便利なことをいろいろ向井氏に教えてもらいました.

わたしの後, 幾人かの日本人が Paris で分析を受けました. 正確な人数は知りませんが, しかし, 10 人もいないと思います. そのうち今, 日本で精神分析の臨床を行っている者は, さらに少ないはずです. そして, 彼らが行っている精神分析が本当にラカン派精神分析と呼べるかどうか, 疑問です.

というのも, 彼らのうち幾人かは精神分析における時間の重要性を無視しているからです. つまり, いわゆる短時間面接, より適切には, 変動時間面接の本質的な意義をふまえないまま, 漫然と時計に支配された面接を彼らに行っているのです. それではラカン派精神分析とは言えません.

Lacan は, 国際精神分析協会 IPA からの追放という損害を覚悟して, 変動時間面接を続けました. 時計に支配されない面接が精神分析にとってど

れほど本質的であるかは、その事実だけからでもわかります。

1945 年の『論理的な時間』において Lacan は *instant du regard* 「まなざしの瞬間」、*temps pour comprendre* 「了解するための時間」、*moment de conclure* 「結論するとき」という表現を以て精神分析における時間の問題を論じます。

精神分析の面接各回に、まなざしの瞬間、了解するための時間、結論するときの三つの契機が含まれています。そこにおいてかかわっているものは、当然、主体の存在の真理 Φ です。それは、穴として現象してきます。

まなざしの瞬間において、存在の真理の穴の気配に気づきます。ついで、その穴が主体の存在の真理であることを「了解する」、つまり、それを穴として認めます。そして、それが真理の穴であることを *démontrer* 明示するために、結論する、つまり、面接をしめくります。

それら三つの時間的契機は、当然ながら、時計で計測される時間として予定されるものではありません。

「出たところ勝負」という土居健郎先生の表現を以前紹介しました。土居先生

の方が、ラカン派分析家を自称しつつ変動時間面接を否定する者たちより、はるかにラカンのような人であったと言えます。

「Freud は精神分析を受けていなかったのに、どうして精神分析をすることができたのか？」という御質問をいただきました。

それは、ひとつには、精神分析においてかかわる存在の真理の現象学的構造は普遍的な構造であるからです。

精神分析は、存在の真理の現象学的構造に基づいています。その構造は、実存の構造として、精神分析以外のさまざまな状況、たとえば精神病理学的事態、あるいは宗教的実践などにおいてもかかわっています。

精神分析においては、実存構造を一旦解体することによって神経症症状を解消し、そこから新たに構造を立て直します。

Freud がヒステリーの臨床において精神分析を創始したのは偶然ではありません。ヒステリーにおいては実存構造の解体と再構築が比較的容易に起こるからです。そこから出発して Freud は、構造の解体と再構築を治療的に利用してゆきます。

しかし、存在の真理の現象学的構造の解体・再構築という事態が有する本当の意義を把握するには、Lacan を待たなくてはなりませんでした。Lacan が Heidegger の存在論に準拠して精神分析を基礎づけることが必要でした。

19 November 2014 : Jacques-Alain Miller の過誤; Heidegger や Lacan を英訳や邦訳で読んでわかったつもりになっている者は、とんでもない勘違いをしているだけである; 読解不可能性の穴を穴として保持しつづけ、絶えずその穴の周りを回り続ける覚悟がなければ、偉大なテキストを読むことはできない; 目覚めと復活と自有; 精神分析はニヒリズムの超克の実践的な道である.

Jacques-Alain Miller による Lacan の Séminaire のテキスト編纂に問題があることは、1991 年に第八巻『転移』が出版されたときに明瞭に指摘されました. しかし, Miller は何の改善もしていません.

同じ年に第 17 巻『精神分析の裏』が出ています. Miller は第 17 巻の巻末に Notice と題された短文を付し, そこで Dr Patrick Valas への謝辞を述べています.

先ほど Valas 氏から受け取った mail によると, 彼は Miller に頼まれて, 第 17 巻の原稿の誤りを幾つか訂正しました. そして, やはり Miller の依頼により, Valas 氏は Lacan の Séminaire のテキスト編纂のための作業グループを立ち上げました(あるいは, 立ち上げようとしてました). しかし, 結局 Miller は他の者から指摘された問題点に基づいて訂正や改良を行う

ことはしようとしませんでした。

Encore は 1975 年に、つまり Lacan の生前に出版されています。しかし、Miller のテキストには誤りがあります。Lacan は事前に Miller の原稿の間違いを訂正する暇が無かったのでしょう。あるいは、それをし始めると全部書き直したくなって、やめたのでしょう

Miller 版の *Séminaire* を読む際には、細心の注意が必要です。勿論、邦訳を読んでいただけでは、Miller の誤りに気づくことはできません。

以前にも言いましたが、Lacan や Heidegger は日本語では読めません。フランス語、ドイツ語の原文で読むべきです Lacan を読むためにフランス語を、Heidegger を読むためにドイツ語を習得することは、それだけ価値のあることです。

邦訳で読んでわかったつもりになったとするなら、それはとんでもない勘違いでしかありません。

Lacan や Heidegger に限らず、偉大な哲人や詩人(小説家を含む)のテキストには、読解不可能なものが必ず含まれています。その不可能性こそ

が、彼らの思考の偉大さを証しています。

邦訳は、その不可能性の穴を埋め立ててしまいます。邦訳のなかにその痕跡を見つけるのは困難です。

読解不可能性の穴を穴として保持しつづけ、絶えずその穴の周りを回り続ける覚悟がなければ、偉大なテキストを読むことはできません。日本語に限らず、英語訳で Lacan や Heidegger を読むことも論外です。

さて、存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ は普遍的なものであると昨日指摘しました。

ちょうど仏教に関する御指摘をいただいたところです。それによると、西行、円空、一茶らは出家するとともに、和歌、仏像、俳句の創作、創造をも行っています。

Buddha という名称の原義は「目覚めた者」です。「目覚め」は Bodhi です。漢語では「覚」と訳されています。

この仏教的な「目覚め」は、キリスト教に言う「死からの復活」とまさに同じで

す。そもそも「復活」のギリシャ語原語は「立ち上がる、目覚める」の意味を持っています。

ブッダもキリストも、まずこの世に対して死にます。キリストは文字どおり処刑されました。ブッダについては、先日、スジャータの逸話を紹介しました。ブッダは苦行によって文字どおり死にかけていました。

イエスは、マグダラのマリアの愛によって復活しました。ブッダは、スジャータの粥を口にして復活しました。

彼らの復活に女性が本質的な役割を果たしているのは、興味深いことです。

ともあれ、Freud が精神分析を創始するはるか前に、ブッダとイエスは、精神分析の終わりにおいて成起する自有 Ereignis の実例を我々に示してくれています。それは、存在の真理の現象学的構造が普遍的であるからこそ起こり得ることです。

では、精神分析はそこに何を付け加えたのか？

精神分析は、存在の真理の現象学的構造をそれとして明示しました。

Freud においてはまだ暗示的でしたが, Lacan は Heidegger の助けを借りて, 精神分析においてかかわる実存の存在論的構造をそれとして明示しました.

そして, Lacan は精神分析を存在の真理の現象学的構造に準拠して基礎づけ直しました. それによって, 精神分析は現代におけるニヒリズムの超克の実践的な道の役割を意図的に担い得るようになりました.

20 November 2014 : 偉大な哲人や詩人の作品は、存在事象ではなく、存在そのものに関する思考を表言しているがゆえに、しばしば翻訳不可能である；偉大な哲人や詩人の作品の翻訳書の出版は、読者が翻訳のみを読んでわかったつもりになることがあるがゆえに、有害である；ブッダとイエスは存在の真理の証人であり、精神分析は解脱と復活を今の時代にも可能にするひとつの道である。

偉大な哲人や詩人の書は邦訳でなく原語で読まねばならないと昨日改めて強調しました。しかし、だからと言って、Lacan や Heidegger を邦訳する作業や日本語で解説する作業が無意味だというわけではありません。たとえば、理解の手助けのために自分で Lacan や Heidegger の文の一部を翻訳してみることは、学習のためには有意義です。

それに対して、出版のための翻訳作業には疑問を呈さざるを得ません。

たとえば科学論文やマニュアルなど、具体的な存在事象に関する文書は翻訳しても失われるものはさしてありません。もっとも、IT などに関する文書は訳してもカタカナ語だらけですから、英語で読む方が早いでしょう。

それに対して、存在事象ではなく、存在そのもの、 \emptyset そのものがかかわる

思考を表言している文書は、しばしば翻訳不可能です。偉大な哲人や詩人の作品はそのような文書です。

我々が存在 φ を思考する場合、勿論、無から出発することも可能ですが、よりしばしば、手元にある偉大な哲人や詩人の作品を手掛かりにして思考します。つまり、その原文を原語で読み、我々日本語を母語とする者の場合、日本語でそれについて解説を試みます。それは有意義です。

その際、わたしがよくやっているように、まず原文を示し、それについて自分なりに可能な訳文を付す、というふうにするのが望ましいと思います。読者は翻訳を検証することができますし、また、みづから原文を参照することもできます。

偉大な哲人や詩人の作品の翻訳書の出版が有害であるのは、読者が翻訳だけ読んでわかったつもりになることがあるからです。

自分の学習のための翻訳してみることや、みづから存在そのものを思考するために日本語で解説を試みることは、意義のあることです。

さて、精神分析は、ブッダやイエスにおいて実現された解脱と復活を、今の

時代に、我々のような凡人にも可能にするひとつの道です。「唯一の」とは
言いません。

ともあれ、精神分析は、ブッダやイエスの解脱や復活において何が成起し
ているのかを、存在の真理の現象学的構造に基づいて解明しました。

Heidegger や Lacan が直接仏教に言及することは少ないですが、彼らに
とって神学は常に準拠となっています。

存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\emptyset}$ は、日常態においては aliénation 異状
の状態にあります。つまり、 a は主体の存在の真理そのものではなく、それ
とは異なる仮象です。精神分析はそれを Ich, moi, 自我と呼び、
Heidegger は das Man, 世人と呼びます

解脱や復活が成起するためには、主体の存在の真理が仮象としての a
に代表されている異状の構造は解体されねばなりません。

そのためにブッダやイエスは荒れ野で苦行をつみました。それは、世に対
して死ぬためです。

仏教において出家すること, カトリックにおいて修道者となることは, その本来の意義においては, 世に対して死ぬことです.

仏教においては, 世に対して死ぬことを, 涅槃, 入滅, 寂滅などの特別な用語で呼んでいます.

しかし, 仏教においてもカトリックにおいても, 死にとどまるわけではありません. 一旦世に対して死ぬが, そこから目覚め, 復活します.

仏教において目覚めの可能性が如何に保証されているのかは知りませんが, カトリックにおいては, 信仰において神の愛が復活を保証してくれます.

ブッダは目覚めた者であり, イエス・キリストは死者たちのうちから復活した者です. そして, 彼らは, 存在の真理の証人となります.

Lacan が「聖人」と呼んでいるのは, そのような存在の真理の証人のことであり, *sinthome* と呼んでいるのは存在の真理の証言のことです.

Freud は, 精神分析を創始したとき, 精神分析が目覚めや復活の可能性を秘めていることに気づいてはいませんでした. 初めてそれに気づいて,

そのことを明言したのは **Lacan** です。そして、そのときから初めて、語の本当の意味での精神分析は始まったと言えます。

22 November 2014 : Pierre Rey と Gérard Haddad, 『ラカンのところで過ごしたひとつの季節』と『ラカンがわたしを養子にした日』; Elisabeth Roudinesco の自己欺瞞; その名に値する精神分析の創立者は Freud ではなく Lacan である; 認知機能としての意識と精神分析的な無意識とは全く別問題である.

今わたしが読んでいる Gérard Haddad (1940 -) の *Le jour où Lacan m'a adopté* 「ラカンがわたしを養子にした日」は, 大変おもしろい本です. Haddad は, 1969年から1981年の Lacan の死去まで, 12年間, Lacan と分析をしていました. 『ラカンがわたしを養子にした日』は, その経験の誠実な, 飾り気のない証言です.

Haddad のもの以外にも, Lacan との分析の証言としては, わたしが昔翻訳した Pierre Rey の『ラカンのところで過ごしたひとつの季節』, Jean-Guy Godin の *Jacques Lacan, 5 rue de Lille* などがあります.

Godin の本は, 逸話に満ちてはいますが, 大しておもしろくありません.

Rey の証言は, Haddad と同様, とても誠実で, 今でも一読の価値はあります. フランス語原書は絶版になってはいません.

Haddad や Rey が, 己れの分析の経験の証言という形で Lacan について個人的な誠実な証言をしているのに対して, Elisabeth Roudinesco が精神分析と Lacan について書くものは, 客観的な歴史記述という体裁をとりながらも, 個人的な不誠実さに満ちています.

Haddad は「Roudinesco は Lacan を陳腐化している」と批判しています. Roudinesco が Lacan に大変媚びへつらっているのをたびたび目撃した, と Haddad は語っています.

最近出版された Freud の伝記も含めて, Roudinesco が精神分析と Lacan について書くものには, 精神分析家 (Freud, Lacan) と精神分析とをおとしめようという彼女の意図が読み取れます.

つまり, Roudinesco は, 精神分析と Lacan とに夢中になっていた自分の若き日々を無かったことにしたいのです. 「若気の至り」をフランス語では folie de jeunesse 「若さの愚行」と言いますが, Roudinesco はその記憶を払い去りたいのです.

Roudinesco のそのような記憶の排斥の試みは, Sartre の表現で言えば,

mauvaise foi, 不誠実, 自己欺瞞以外の何ものでもありません. Pierre Rey や Gérard Haddad の誠実さの正反対です.

Pierre Rey も Gérard Haddad も自分が陥っていた窮状について, つまり, folie de jeunesse について誠実に証言しています. そして, それに対して Lacan との分析が何をもたらしてくれたかも.

folie de jeunesse という表現は, 聖パウロが用いている folie de la croix, 十字架の愚かさという表現を思い起こさせます.

イエスが自分は神の子であると主張して冒瀆の罪に問われ, 十字架上で処刑されたことは, 世人から見れば愚行でしかありません. 世人の観点からは, イエスは適当に言いつくろって処刑を免れることがいくらでもできたはずです.

しかし, 聖パウロはひるみません. 十字架上で処刑されたイエスの愚かさをこそ我々は告げ知らせるのだ, と彼は言います. なぜなら, イエスの死から永遠の命への復活が成起するからです.

聖パウロがアテネで永遠の命への復活について語ろうとしたとき, 人々の

大部分は耳を貸そうとはしませんでした。バカげた、荒唐無稽な作り話としか思えなかったからです。しかし、パウロは、イエスの死と復活について証言することをやめませんでした。

Rey や Haddad がしているのも、聖パウロがしたのと同様のことです。ふたりとも Lacan と精神分析を 10 年以上続けました。世人には愚行にしか見えません。しかし、その経験を通して如何なる実存的変容が起きたかを、彼らは誠実に証言しています。

ものものしく分厚い本を書く Roudinesco より、Rey や Haddad の証言の方が我々にとってどれほど貴重であり、信頼をおけることか。Roudinesco を読んで時間を無駄にしようとしている人がいるとすれば、忠告しておきます。

さて、精神分析と呼ばれるものを創始したのは Freud ですが、精神分析を存在論的に基礎づけ、精神分析が有する実存的可能性を明らかにしたのは Lacan です。その意味では、Lacanこそが本当の精神分析の創始者です。その名に値する精神分析は Lacan から始まります。

Freud は無意識を発見したと言われますが、精神分析的意味における無

意識が、従来の哲学等において意識と呼ばれるものとは何の関係も無いことを明示したのも Lacan です。

「意識」も一義的ではありません。

いわゆる他我問題との関連において論ぜられる意識は, *imaginaire* な関係 $a - a'$ に還元されます。新カント学派の認識論や, いわゆる認知機能 *cognitive function* を問題にする科学領域における意識は, そのようなものです。

それに対して, Hegel が意識 *Bewußtsein* と言うとき, 問われているのは, *Wissen* 知と *Sein* 存在との連関の問題です。それは, *imaginaire* な関係ではなく, *symbolique* 徴象と *réel* 実在との関連の問題です。つまり, 認識論とは別次元のことです。

「無意識は他 A の言説である」, 「無意識はひとつの言語として構造化されている」という Lacan の命題は, 認知機能としての意識と精神分析的な無意識とは全く別問題だ, ということを十分に示しています。

23 November 2014 : スノビズムとニヒリズム； 誠実と善言； 欺瞞と否認；
日本人の精神分析不必要性.

11 月最終週に入りました. 来週 30 日日曜日から待降節 *Avent* が始まりま
す.

待降節とは, 降誕祭の準備期間です. その間に四つの日曜日があるように
期間が定められています.

日本で長く小教区司祭をしている或るアイルランド人神父様は, 11 月にな
るといつも皮肉をこめて言っていました: 日本人は本当に用意周到だよ. 待
降節が始まるはるか前からクリスマスの準備に余念が無い.

全然別の文脈ですが, 昔, 日本人について皮肉を言った有名人がいま
す : Alexandre Kojève (1902-1968). 彼が 1933-39 年に Paris で行った
『精神の現象学』についての講義で Lacan は Hegel を学びました.

Kojève の話にもとづいて Raymond Queneau は *Introduction à la lecture
de Hegel* 「ヘーゲル読解への導入」という講義録を 1947 年に出版しました.
1968 年の第二版に Kojève は, 1959 年の訪日の印象を付記しています.

「歴史の終わり」は Kojève が言い出したことですが、彼は、歴史終結後の時代を、まずは American way of life に見出しました。つまり、大量生産・大量消費において物質的な満足が実現され、階級闘争が消滅した社会です。

ところが彼は、日本に、別の形の歴史終結後社会を見出しました。Kojève は日本社会を snobisme à l'état pur 「純粋状態におけるスノビズム」と規定しています：「現在、日本人はすべて、例外無く、完全に形式化された価値との関係において生きている状態にある」。

そこにおいて「完全に形式化された価値」とは、「『歴史的』という意味における『人間的』な内容すべてを完全に空ぜられた価値」という意味だ、と Kojève は説明しています。

さらに Kojève は「日本と西洋世界との相互作用は、ロシアを含む西洋の日本化へ行き着くだろう」と予想しています。何という慧眼！

バブル崩壊後の経済停滞やコスプレに関することはさておき、Kojève が「純粋状態にスノビズム」と呼んだものは、完成されたニヒリズムにほかなり

ません。

アイルランド人神父様が嘆いていたように、救世主の誕生の意義は全く空
ぜられたクリスマスを喜々として祝う日本人は、その象徴です。

そして、そのような意義の空疎化は、今や全世界的なものです。

Kojève は Heidegger を読んでいました。Kojève は Heidegger に準拠し
て、ニヒリズムの完成と満了 *Vollendung* を予期していたのでしょう。

昨日わたしが用いた「誠実」と「欺瞞」に関して御意見をいただきました。

bonne foi 誠実と *mauvaise foi* 欺瞞 (Sartre の文脈では特に「自己欺瞞」
とは、存在の真理の現象学的構造に基づいて明確に区別されます。

辞書にも説明されているように、誠実 *bonne foi* とは「義務に忠実である」
ことです。

精神分析においてかかわる義務を Lacan は *éthique du Bien-dire* 「善言
の倫理」と呼んでいます。 *bien-dire* とは、存在の真理に忠実な *dire* 言で

す.

つまり, 存在の真理 ϕ を *sinthome* の構造 $\frac{\Sigma}{\phi}$ においてそのものとして
守護するような言, それが *bien-dire* 善言です.

善言において存在の真理を忠実に証言する者は, 誠実です.

それに対して, 存在の真理を否認し, 覆い隠す者は, 欺瞞的です.

そして, 存在の真理は主体自身の存在の真理ですから, *mauvaise foi* は
「自己欺瞞」です.

誠実と欺瞞は, 存在事象の次元のなかで相対的に規定されるものではなく,
存在の真理との関係において定義されます.

存在事象の次元をのみ見て, 存在の真理を忘却するところに, ニヒリズム
が生じます.

話を *Kojève* に戻すと, *Lacan* が『日本人読者への通告』の冒頭で言及し
ているスノビズムとは, 先ほど見た *Kojève* の言うスノビズムです.

Lacan (*Autres écrits*, p.497) はこう言っています:

「日本語がその言説において支える大変洗練された社会的つながり, それを Kojève はスノビズムという語によって差し徴している。」

Kojève の言うスノビズムから Lacan が「日本人は精神分析を必要としない」を如何に導いているか, それを明日以降たどっていきましょう.

24 November 2014 : 精神分析はひとつの理論ではない；精神分析が理論でないのは、性関係は無いからである；精神分析は、理論ではなく、而して、存在の真理の証言である；哲学においても、神学においても、精神分析においても、存在の言葉を聴くことがかかわっている。

精神分析はひとつの理論でしょうか？ちがいます。

かつて Jacques-Alain Miller たちが来日して京都で学会を開いたとき、日本側主催者はその会合の表題に「ラカン理論」云々という表現を用いていました。それを見て、やれやれと思いました。

Lacan は、自分のしていることは *enseignement* だ、と言っていました。*enseigner* は「教える」です。*enseignement* は「教え」です。*L'enseignement de Jacques Lacan*. ラカンの教え。

フランスの *lacanien* たちが当たり前用いているこの「ラカンの教え」という表現は、日本では結構抵抗感を引き起こすようです。なにか宗教的、道徳的な教訓のようなものを連想させてしまうからでしょう。しかし、だからといって「ラカン理論」はもっといけません。

古代はともかく、現代において、つまり科学の時代において、理論とは何でしょう？さまざまな科学の分野においてさまざまな理論が提唱されています。その完成度もさまざまです。もっとも完成されているのは、物理学における諸理論でしょう。古典力学、相対性理論、量子力学、等々。

ひとつの理論は、ある適用範囲内で有効です。古典力学は日常的に見出される時空間でのみ有効です。宇宙のような巨視的な時空間では相対性理論、素粒子の微視的な時空間では量子力学が有効です。そして、宇宙の始まりを考えると、相対性理論と量子力学との統一理論が必要になってきます。

ともあれ、物理学におけるひとつの理論は、現実において観察される物理学的諸現象を総合し、いくつかの数式へ抽象化することだけに存するものではありません。当然ながら、その逆の方向で、数式から出発して、計算にもとづいて、現実のなかに或る出来事をもたらすこともできます。

たとえば、リンゴの落下から Newton が作り上げたと言われる万有引力の方程式に基づいて、今度は、人工衛星が地球の周りを回るようにすることができます。

つまり、理論には、le réel から le symbolique へ向かう記号化、数学化と、le symbolique から le réel へ向かう実験化、実用化とが含まれます。有効な理論は、真理を記述する数式を持つだけでなく、その数式に基づいて現実に変化を引きおこし得ます。

理論が「実在から徴象へ」と「徴象から実在へ」の両方向の関数から成るとするならば、はたして精神分析はひとつの理論でしょうか？「ラカン理論」と呼べるようなものがあるのでしょうか？答えは否です。

なぜ精神分析はひとつの理論ではないのか？それは、「性関係は無い」からです。

性本能は Freud が精神分析の基礎概念のひとつと見なしたものです。もし仮に精神分析がひとつの科学理論であるならば、精神分析は性本能がそこにおいてかかわるところの性関係についてひとつの記号化された、形式化された命題を有するはずで、そして、性関係に関する命題にもとづいて、現実の性行動の領域に何らかの変化をもたらす得るはずで、つまり、完全な、十全な性的悦 *jouissance* の実現をもたらす得るはずで、

Sexology を標榜する人々はそれが可能だと主張するかもしれません。

Freud は否と言いました。

性本能の十全な満足は不可能です。不可能な悦の代理物として、症状が生じます。そのような症状を Freud が精神分析によって除去しようとしたとき、何が起きたか？抵抗が起こります。症状が逆説的に悪化することもあります。いずれにせよ、完全な性的悦は実現されません。

以上のことから Lacan は、精神分析の根本的な公理を公式化しました : *il n'y a pas de rapport sexuel*. 性関係は無い。

我々の学素では \emptyset と表記されます。

詳しくは、東京ラカン塾の web site に上梓されている『ハイデガーとラカン』の第一章を参照してください。

「性関係は無い」とは、精神分析の「理論」には根本的な穴がある、ということです。いくら性的なものの観点から患者を観察しても、性本能の満足に必要な不可欠なものは決して記号化・形式化され得ません。したがって、いくら理論ぶっても、理論に基づいて現実を変えることはできません。

精神分析は、科学理論も哲学理論でもありません。

では何なのか？証言です。精神分析は、「性関係は無い」の穴にかかわる証言です。

Freud の著作を読むとすれば、そのような観点から読むべきです。そして Lacan も。

「性関係は無い」の真理は、存在の真理です。これについても詳しくは『ハイデガーとラカン』第一章を参照してください。

Heidegger は体系的な著作を残さなかった、と嘆く、あるいは批判する人々がいます。この場合、「体系」は「理論」と同義です。「体系」は、ある領域の全体をカバーするような「理論」です。しかし、そのような嘆き、ないし批判は、全く見当違いです。

Heidegger がしたことも証言です。彼は、存在の真理を証言しているのです。彼はそれをしばしば、存在の真理について先哲が為した証言を読解することをおして実行しています。Heidegger は Parmenides に前ソクラテス的な存在論の理論を探しはしません。Herakleitos に原初的な

Dialektik の理論を求めはしません。Heidegger が Parmenides や Herakleitos を読むのは、存在の真理の証言としてにほかなりません。

存在は何を我々人間に語りかけているのか？存在の言葉を聴き取ろうとすることが、肝腎なことです。

存在の言葉に耳を傾けること。存在の真理を証言すること。哲学においても、神学においても、精神分析においても、まさに同じことがかかわっています。それは「理論」ではありません。

25 November 2014 : Stop DSM ; DSM は、まず病気を売り、ついで薬を売
るために作られている；フランス語無しに Lacan を学ぶことはできない；
日本人の精神分析不必要性と純粹状態におけるスノビズム。

DSM-IV の責任者は語る： DSM は精神疾患を作り出し、精神医療の情
況を歪める。

DSM-IV の責任者であった Allen Frances は言う： The DSM is made « to
sell the ills and then sell the pills » [DSM は、まず病気を売り、ついで薬を
売るために作られている]。

御質問をいただいています：「日本語でラカンを勉強することができる本は
どれか？」

残念ながら、成書のなかには皆無です。わたしが昔書いた『ジャックラカン
の書』を含めて、お勧めできる本は何もありません。

Lacan の教えを本気で勉強するつもりがあるなら、まず、日本語だけで済
まそうという考えを捨ててください。そして、フランス語を学びながら Lacan
の原文を読む努力をしてください。

たくさんある Lacan のテキストのうちどれを最初に読めばよいかという御質問に対する答えは、「初期のもの、つまり 1940 年代以前のは避ける方が良い」です。なぜなら、それらは後の Lacan から振り返って初めて読めるものだからです。

Ecrits に収録されている書のなかでは、1957 年の講演 *La psychanalyse et son enseignement* が比較的読みやすいです。

Séminaire のなかでは、伝統的に、第 11 巻が初心者向けと言われていています。なぜなら、*Séminaire XI* 『精神分析の四つの基本概念』は、Lacan が従来彼の教えを知らなかった聴衆のことを考慮に入れて語ったものだからです。しかし、だからといってわかりやすいわけではありません。

いずれにせよ、Lacan の教え全体を視野に入れるためには、1969-1970 年の *Séminaire XVII* で提起された「四つの言説」の構造を知らねばなりません。それは、*Autres écrits* に収録されている *Radiophonie* と同時期です。

ともあれ、可能であれば、東京ラカン塾の精神分析セミナーに参加してく

ださい。それが難しければ、東京ラカン塾の web site に上梓されてあるわたしの『ハイデガーとラカン』をお読みください。まだ第二章までしか邦訳していませんが、それでも既成の日本語の本よりはましです。

さて、Lacan の「日本人の精神分析可能性」ないし「日本人の精神分析必要性」の議論を読解するためには、Kojève を参照せねばなりません。そして、Kojève が「特殊日本的な、純粹状態におけるスノビズム」と呼ぶところのものは何かを考えねばなりません。

我々の友人、福田肇氏の Facebook の記事を見ていて、ふと思いつきました。三島由紀夫の『金閣寺』こそ「純粹状態におけるスノビズム」を理解する手助けになるかもしれない。特に、主人公の友人と、金閣寺の住職に注目してください。

『金閣寺』をまだ読んでいない方は、是非お読みください。

26 November 2014 : Superflat arts とスノビズム; 死の覚悟におけるアンテ
ィゴネーの美; 侵犯と分離.

Kojève の言う「純粹状態におけるスノビズム」を考えるために, 三島の『金
閣寺』に加えて, Jeff Koons, 村上隆, 松井冬子の三氏の作品も見てみて
ください:

<http://www.jeffkoons.com/artwork/celebration/balloon-dog-0>

[\[kaikaikiki.com/category/artists/takashi_murakami/works_takashi_murakami\]\(http://kaikaikiki.com/category/artists/takashi_murakami/works_takashi_murakami\)](http://gallery-</p></div><div data-bbox=)

/

<http://www.matsufuyuko.com/>

もうひとり Katharina Fritsch を加えましょう:

<http://en.wikipedia.org/wiki/Hahn/Cock>

Lacan は 1962 年の書 *Kant avec Sade* において, 美の機能をこう定義して
います:

根本的な恐怖への到達を禁止する極限的な障壁.

fonction de la beauté : barrière extrême à interdire l'accès à une horreur
fondamentale.

そして、そのような美の例として、Sophokles の悲劇のヒロイン、死を覚悟した Antigone の名を挙げています。

アンティゴネーは、神の律法に忠実に、彼女の兄の亡骸を葬るために、死を覚悟して、テーバイの支配者の命令に背きます。彼女は、死を覚悟した実存そのものです。

根本的な恐怖は、死の恐怖です。存在 \emptyset の深淵を前にしての恐怖です。

そのような根本的恐怖への到達を禁止する極限的障壁は、純粹徴示素 $S(A)$ に限りなく近い a です。

Lacan が Antigone について詳しく論じたのは、1959-60 年の『精神分析の倫理』の Séminaire においてでした。

そこでは、禁を侵すことに Lacan は注目しています。transgression 侵犯は、 a を破壊して \emptyset へ至ることです。

つまり、1964 年に séparation 分離と呼ぶことになるものを、1959-60 年の

時点では Lacan は transgression 侵犯と呼んでいたのです。

構造 $\frac{a}{\phi}$ の破壊として、それは、死の本能の機能です。

死へ至る動きを一瞬、つかのま、辛抱し、支えるとき、美は出現します。

したがって、美は本質的にはかないものです。美しいものは破壊の運命を免れないものです。永遠の美は、形容矛盾です。

それゆえ、三島由紀夫は『金閣寺』において、美とその破壊を主題にしています。そして最後に、復活も。

三島由紀夫は洗礼を受けたキリスト教徒ではありませんでしたが、彼は、死からの復活と永遠の命を信じていたのではないかと思います。彼の小説においてはしばしば、破壊、破局の後、復活の瞬間が成起します。『金閣寺』でもそうです。「生きようと私は思った」と最後に主人公は言っています。

それに対して、Kojève の言う「純粹状態のスノビズム」においては、諸価値は全く形式化されており、Geist(精神、靈気)の現象の過程としての歴史を生きる人間存在の意味は全く失われています。

Facebook に紹介した Jeff Koons や村上隆の作品に、まさに、純粹状態のスノビズムの例を見ることができるでしょう。

Jeff Koons の Balloon Dog という作品は約 60 億円で落札され、彼は現在生きている芸術家のなかでは最も高額な芸術家だそうです。

Jeff Koons の Balloon Dog は Google で検索すれば簡単に見つかるでしょう。村上隆と共通するものがあるのは一目瞭然です。彼らの作品に高値がつけられるのを見れば、Kojève は、純粹状態のスノビズムここに極まれり、と言うでしょう。

Balloon Dog は、言い換えれば、Bubble Dog です。バブルは、それ自体としては無価値なものに市場が高価値を措定することによって生じます。

27 November 2014 : Superflat arts と純粹状態におけるスノビズム；精神分析の不必要性；禅公案とイエスの言葉の謎.

Alain Badiou 著

À la recherche du réel perdu

2015 年 2 月 4 日出版予定

<http://livre.fnac.com/a7777260/Alain-Badiou-A-la-recherche-du-reel-perdu>

Alain Badiou の新著:『失われた実在を探し求めて』は, Proust の『失われた時間を探し求めて』を踏まえています.

その表題は, 曾有・現在・将来の *ekstatische Einheit* 解脱的統一としての時間は *ex-sistence* としての *le réel* 実在と等価であることを, 示唆しています. 実際に Badiou はどのような議論を展開するのでしょうか?

さて, 昨日名を挙げた村上隆氏と松井冬子氏はともに, 東京芸大日本画科で学びました. 日本画を西洋絵画との比較において特徴づけるのは, その *flatness*, 厚みの無さです. 村上氏の言う *Superflat* は漫画だけでなく日本画にも由来しているはずです.

古代ギリシャ・ローマ, ならびに近代の西洋美術においては, 実在を忠実に描くことがかかわっています. その場合, 実在は, 物質的・物理的な実在のみならず, 感覚的・情動の実在性, 心的実在性をも含みます. 物質的実在性からの逸脱が生ずるのは, 心的実在性に忠実であろうとするためです.

それに対して, 日本美術においては伝統的に, *imaginaire* 影象は *réel* 実在からの或る種の独立性を保っています. 日本美術においては, *image* は実在に忠実ではなく, 而して, 影象独自の形式美・様式美の表現です. そこに実存的意味を読み取ることはできません.

松井冬子氏がいくら九相図様に死を喚起しても, いくら不安惹起的な *image* を巧みに描いても, 彼女の作品は, その *flat* な形式美を以て, 存在論的穴を塞いでしまうだけです. 文字どおり「きれいごと」に終わっています. 彼女の作品はその *flatness* において村上隆氏と同類です.

村上隆氏, 松井冬子氏, Jeff Koons, Katharina Fritsch らの *flat* ないし *superflat* な作品を賞讃し, 高く価値づけることこそ, 今の世界の芸術界における「純粋状態におけるスノビズム」です. もはや特殊日本的なことではありません.

村上隆氏や Jeff Koons らの作品も, James Joyce の *Finnegans Wake* も, およそ取っかかりの無いつるんとした表層において, 存在論的穴を完全に塞いでしまい, *désabonné à l'inconscient*, 無意識との縁を切っています.

もしそれら芸術作品を *symptôme snob* と呼ぶなら, 聖人としての *sinthome* とそれらは, 構造論的には同じ $\frac{\Sigma}{\Phi}$ ではあっても, Σ の *Nichtigkeit*, 非性, 無性において異なると言うべきでしょう.

聖人においては Σ は限りなく純粹徴示素 $S(A)$ に近いものです. 穴として, 存在 Φ の深淵のできるだけ忠実な証言です. そして, そのことにおいて聖人は, もはや精神分析を必要とはしません.

さて, 『金閣寺』には注目すべき二つの禅公案が引用されています. ひとつは, 臨済の言葉です:

仏に逢うては仏を殺し, 祖に逢うては祖を殺し, 羅漢に逢うては羅漢を殺し, 父母に逢うては父母を殺し, 親眷に逢うては親眷を殺し, 始めて解脱を得ん。

もうひとつは「南泉斬猫」と名づけられている公案です:

東西の両堂猫児を争う。南泉提起して云く:道ひ(言ひ)得ば即ち切らず。
衆無對(無答)。南泉猫児を斬って両断と為す。南泉, 趙州に問ふ。趙州,
便草鞋を頭上に於いて戴いて出づ。南泉云く:もしなんじ在らば猫児を救
い得ん。

「羅漢」は勿論, Lacan のことではなく, 仏教の修道者です。しかし, そこに
Lacan を読んでも, Freud を読んでも良いでしょう。要するに, 存在事象を
殺し, 破壊することがかかっているのです。

イエスもこんなことを言っています:

わたしが地上に平和をもたらすために来たと思っはならない。わたしが
来たのは, 平和ではなく, 剣をもたらすためである。(…)自分の家の者らが
敵となる (Mt 10, 34-36).

続けてイエスは言います:

わたしよりも自分の父や母を愛する者は, わたしにはふさわしくない。わた
しよりも自分の息子や娘を愛する者は, わたしにふさわしくない。自分の十

字架を担って、わたしの後に従わない者は、わたしにふさわしくない (Mt 10, 37-38).

南泉斬猫の公案については、興味深いことに三島は、「あの猫は美しかったのだぜ、君、たとえようもなく美しかったのだ」と柏木に言わせています。

禅公案もイエスの言葉も、謎かけです。それらの謎について思考してみてください。

29 November 2014 : 天と地は過ぎ去るが、わたしの言葉は過ぎ去らない；
存続するものを詩人は創設する；復活無しの死は無い；存在の真理の現象学的構造においては無矛盾立は妥当しない；自我理想を殺すべし。

明日 30 日は、待降節第一主日です。新年の始まりです。

23 日日曜日の御ミサで、関口教会と本郷教会の主任司祭を兼任なさっている山本量太郎神父様は、一年の終わりを成す週にちなんで、終末論の話をなさいました。

新約聖書のなかで終末論を大きく扱っているのはヨハネ黙示録ですが、福音書も *la grande tribulation* 「大きな苦難」という表現のもとに終末の *image* を描き出しています。

世の終わりのとき、神の御国の到来をひかえて、あらゆる存在事象は滅び去ります。しかし、滅亡だけで終わるわけではありません。イエスは言います：「天と地は過ぎ去る。しかし、わたしの言葉は過ぎ去らない」(Mt 24,35)。

イエスの言葉とは、御ことばとしてのイエス御自身のことです。

また、第二 Vatican 公会議で採択された憲章 *Gaudium et Spes* 「喜びと望み」においては、こう言われています:「罪により歪められたこの世の形象は過ぎ去る。しかし、愛と愛の業(わざ)とは残る」(39,1).

終末論や世の終りの話しなど、自分には関係無い、と思わないでください。

終末論においてかかわっているのは、あなた自身の死の問題なのです。

終末論の問題は、まったく実存的な問題です。

終末論において、世の終りの時は、同時に、救済の時です。死の時は、同時に、復活の時です。

イエスは福音を説きました。福音, εὐαγγέλιον, *evangelium* は「良い知らせ」です。

キリスト教教義の本質を成すその良い知らせとは、要するに何なのか？それはこのことです:復活無しの死は無い。

復活無しの死は無い。つまり、死は、同時に、復活であり、永遠の命なのです。

この命題は, Aristoteles 的な無矛盾律の観点からは, まったくの矛盾命題です. 言い換えれば, ありえない命題, 不可能な命題です.

しかし, Lacan の定義によれば: 実在とは不可能在である.

存在の真理の現象学的構造は, そこにおいて Aristoteles 的な無矛盾律がつかづくところのものです.

それは, Heidegger の用語では, $\frac{\text{Sein}}{\text{Sein}}$ と表記されます. Lacan 的学素では $\frac{a}{\phi}$ です.

存在を存在が代表する. この存在の真理の現象学的構造においては, Aristoteles 的な無矛盾律はもはや妥当性を失います.

無は存在であり, 死は命であり, 貧しさは豊かさであり, 悲しみは喜びです.

そして, 死をとおしてこそ, 復活は成起します.

一昨日, 三島由紀夫の『金閣寺』のなかで言及されている禅公案をふたつ紹介しました.

臨済は言いました: 仏に逢うては仏を殺し, 祖に逢うては祖を殺し, 羅漢に逢うては羅漢を殺し, 父母に逢うては父母を殺し, 親眷に逢うては親眷を殺し, 始めて解脱を得ん.

仏, 祖先, 羅漢, 父母, 親族などの表現によって差し徴されているのは, 要するに, Freud が Ichideal 自我理想と呼んだものです. 言い換えると, 同一化の徴示素です. つまり, 症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ における signifiant a です.

仏, 先祖, 羅漢, 父母, 親族などの自我理想を殺すことは, 自分自身を殺すこと, 死を引き受けることです. つまり, 涅槃・入滅に至ることです. そうして初めて解脱が得られる.

ということは, 仏教に言う解脱とは, 確かに, キリスト教に言う復活なのです. 死をとおして初めて解脱・復活が成起します.

一年の終りの日の最後に, もう一度, イエスの言葉を提示しましょう: 「天と地は過ぎ去る. しかし, わたしの言葉は過ぎ去らない」.

そして, Hölderlin の言葉も :

Was bleibt aber stiften die Dichter.

だが、存続するものを詩人は創設する。

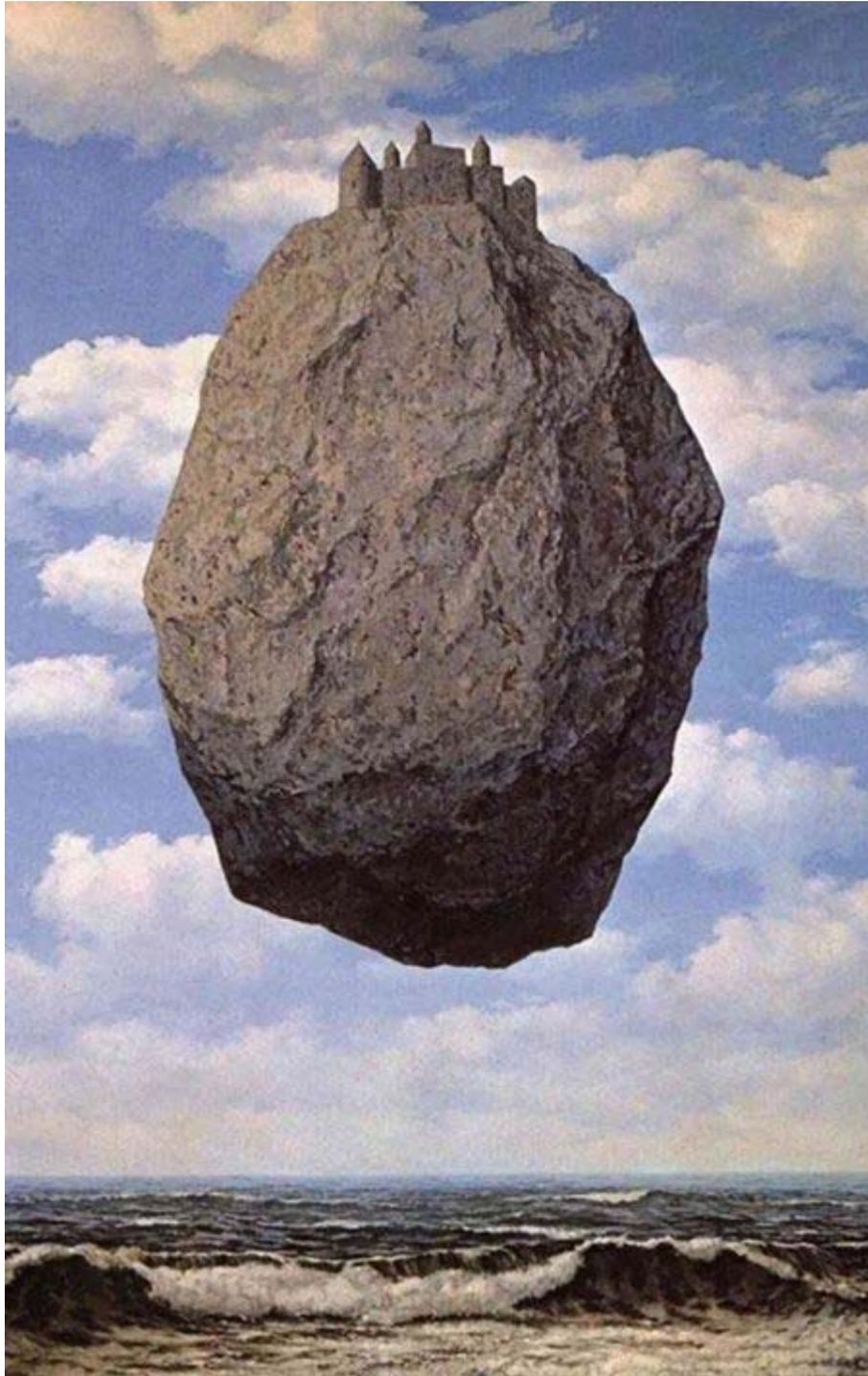
神の愛の恵みとして、過ぎ去らないもの、存有するものは、言語の構造

$\frac{a}{\phi}$ です。それは、解脱と復活の可能性の条件です。

30 November 2014 : 自有, 即ち, 存在の到来を待ち望むことが転移の原動力である; 注意深く, かつ, 冷醒に待つ; 空間に裂口を切り裂く芸術作品.



Wien のイエズス会教会の聖堂の中で空中浮遊する高さ 8 m, 幅 5 m の岩. この作品は, Steinbrener Dempf & Huber という芸術家集団によるもので, 「辺獄に存在すること」と題されている. 素材はプラスチック, 重さ 700 kg. 径 2 mm の鋼線 3 本で吊されている. René Magritte の中空に浮く岩にインスピレーションを受けた. 製作者によると, この岩は, 信仰とその神秘とを象徴している.



René Magritte, *Le château des Pyrénées*

11月30日は待降節第一主日でした。「待降節」は、フランス語では *Avent*, ドイツ語では *Advent*. とともにラテン語 *adventus*「到来」に由来する語です.

待降節の意義は、主イエス・キリストの誕生を待ち望むことに存します. しかし、それは単に約二千年前に救い主イエスが生まれたことを記念するためではありません. 我々が期待するのは、世の終わりにキリストが再び到来すること、終末論的再臨です.

終末論的再臨の期待が精神分析や Lacan と何の関わりがあるのか? 大いに関係があります. なぜなら Lacan はこう言っているからです:「分析家の欲望との関係における存在の到来の期待, それが転移を定立するものの原動力である」(*Ecrits*, p.844).

l'attente de l'avènement de l'être, 存在の到来を待ち望むこと. しかも, 他 A の欲望との関連において.

「存在」を *παρουσία* と読みかえ, 「他 A の欲望」を「神の意志」と読みかえるなら, それは全く神学的命題になります.

παρουσία (*parousia*) は, 神学ではキリストの終末論的再臨ですが, ギリシ

「現」におけるその本来の意味は *présence*, 「現に存在すること」です。

精神分析においても、精神分析の経験の終わりに存在が到来することが待ち望まれています。

そのような存在の到来を Heidegger は *Ereignis* 自有と呼びました。

「待つ」と言っても、ただ単に漫然と待っていれば良いわけではありません。聖パウロの第一テサロニケ書簡のなかの表現を用いるなら : *vigilant et sobre*, 注意深く、かつ、冷醒に。

vigilant という形容詞の原義は「目が覚めている」です。そして、*sobre* は「酔っていない、醒めている」です。*vigilant et sobre* は、眠気や酔いによって注意深さを損われることなく、いつ成起するかわからない主イエスの終末論的再臨を待つことです。

精神分析においても全く同様です。いつ成起するかわからない存在の到来の瞬間、自有発起の瞬間を、常に注意深く待ち受け、その瞬間を解釈において示現せねばなりません。

名誉教皇 Benedikt XVI は彼の名著『ナザレのイエス』のなかで *adventlicher Mensch* という表現を使っています。 *adventlich* は Advent から派生させた形容詞です。直訳すれば「待降節的人間」。神の終末論的到来を注意深く待ち望む人間です。

精神分析においても、我々は *adventlich* である、とすることができます。分析の終わりにおける自有の発起を注意深く待ち望むこと。それが精神分析の過程の原動力です。

昨夜 *Le Nouvel Observateur* 誌でたまたま見かけた写真を Facebook に投稿しました。

Wien のイエズス会教会の聖堂のなかに宙吊りにされた巨大な岩。ただしプラスチック製ですが。作者は Steinbrener Dempf & Huber という芸術家集団です。聖堂のなかに突如 *black hole* が出現したかのような無気味さを感じられます。岩を模した塊であるにもかかわらず、異空間の裂口が開いたかのようです。

Jeff Koons の Balloon Dog の flatness と比較してみてください。

今、芸術の可能な様態のひとつは、まさに南泉斬猫の如しにです。

その公案には直接表現されていませんが、三島由紀夫は、その猫が非常に美しい猫であることを強調します。それは、伝統的芸術における美の象徴です。

南泉は、ほかの僧らに向かって「言い得るなら、この猫を斬らずにおこう」と提案します。

この場合、「言う」とは、Lacan が *Bien-dire* と呼んだもの、Heidegger が *Sage* と呼んだものにほかなりません。つまり、存在 φ を守護する言です。

言語の構造 $\frac{a}{\varphi}$ において、存在 φ を *ek-sistieren* 解脱実存させ得るような言、*dire*, *Sagen*, それが *Bien-dire* であり、*Sage* です。

南泉は、ほかの僧らに、*bien-dire* せよ、と命じます。しかし、その場にはそれができるような者はいません。そこで南泉は、存在事象としての美を切り捨て、分離し、棄却し、むきだしの φ を死そのものとして提示します。

趙州は、南泉の *bien-dire* の命令に対して何も言えなかった僧たちとは異

なり、草鞋を頭上に載せることを以て応答します。その汚い、すり切れた草鞋は、Lacan が *déchet*, 屑, 芥と呼ぶ客体 *a* の具象的一例にほかなりません。つまり、伝統的な美とは正反対のものです。

Jeff Koons らの作品は、いかにも薄っぺらい美です。それに対して、イエズス会教会の聖堂に宙吊りにされた岩塊は、それ自体としては何ら美しいものではありません。しかし、それは、死の恐ろしい深淵を予感させる無気味さを有しています。

01 December 2014 : 存在の真理の現象学的構造は「不二」の構造である；
罪ないし悪を主体自身の存在の真理と認めるところにのみ，義ないし善は
成起し得る；問いは，認識論的にではなく，存在論的に措定されねばなら
ない。

幾つか御質問をいただきました。まず，悪について。

無と存在，死と命，罪と義などの根本的対立のひとつとして，悪と善の対立
があります。

無，死，罪は，存在 \emptyset です。悪もそうです。

しかし，存在 \emptyset は同時に，存在 a でもあります： $\frac{a}{\emptyset}$ 。

永遠の命への復活は，死をとおして成起します。

義，即ち，罪の赦しは，罪を認める *reconnaissance* ことをとおして実現され
ます。

Es gibt Sein 「何かが存在を与える」と Heidegger が言うとき，存在は，存

在 \emptyset , 即ち, 無から創造されます.

禪に「不二」という意義深い表現があります. ふたつならず.

「無と有」をはじめとする根本的な対立は, しかしながら, 二項対立ではなく, 根本的には同一のものである, 本同である, という事です.

この「不二」は $\frac{a}{\emptyset}$ の構造そのものを差し徴しています.

有無不二, 命死不二, 義罪不二. 同様に, 善悪不二.

旧約聖書のヨブ記に登場する悪魔は, YHWH の宮廷の一員です.

福音書において悪を象徴する形象のひとつに徴税人があります. ルカ福音書 18, 9-14 を読んでみてください. 律法の遵守を誇るファリサイ人は, 偽善者であり, 義とされることはありません. それに対して, 悪の象徴である徴税人は, 自分を悪と認め, 心から悔いることにより, 義とされます.

善ないし義は, 悪ないし罪を主体自身の存在の真理として認めること, 否認ないし失認しないことに他なりません.

罪ないし悪の否認ないし失認は、義とされません。

不可知論 agnosticisme について。不可知論は、認識論の土俵において問題とされる概念です。しかし、認識論においては、問いは決して適切に措定されません。認識論そのものが誤謬の産物です。

適切な問いは、存在論的に措定されます。

存在論的に「主体の存在の真理」と言うとき、その真理を認識することがかわるのではありません。問題は、実存において真理を生きること、真理そのもので在ることです。存在の真理を生きることが、永遠の命に与ることです。sinthome はそこに存します。

02 December 2014 : 精神分析の真の創立者は Lacan であり, Freud はその準備をしたにすぎない; スノビズムとニヒリズムと精神分析不必要性; Not der Notlosigkeit ; 精神分析不必要性こそ, 最も精神分析を必要とする事態である.

以前いただいた質問にまだ答えていない, という御指摘をいただきました. Freud は分析を受けていないのに, なぜ精神分析家であると言えるのか? 答えは一義的ではありません.

ひとつには, その存在論的規定において「精神分析家で在る」ことと, 分析家の言説において「精神分析家として機能する」こととは, 同じことではありません. つまり, 存在論的規定において精神分析家で在るわけではない者が分析家の言説において精神分析家として機能することは, あり得ます.

その場合, 「分析家の言説において精神分析家として機能する」とは, 分析家の言説の学素の左側の部分 $\frac{a}{S_2}$ を体現することです.

S_2 は知であり, それは, 存在の真理の座に仮定されています. 知 S_2 の存在の真理の座への仮定が, 転移を条件づけます.

転移が成立していれば、 $\frac{a}{S_2}$ を体現する者は、存在論的規定性における精神分析家ではなくても、分析家として機能し得ます。つまり、その者の何らかの言動が、分析者 *analysant* に或る種の効果を及ぼし得ます。それが結果的に治療的であることもありえます。

別の答え: 本当の意味での精神分析は *Lacan* によって初めて創始されたのであり、*Freud* が精神分析の名のもとに始めたものはその準備段階にすぎない。なぜなら、*Lacan* が *Heidegger* の存在論により精神分析を基礎づけなおして初めて、精神分析はその本質を見出したからである。したがって、*Freud* がしていたことは、語の本当の意味での精神分析ではなく、一種の精神療法にすぎない。

Freud が自分の遺産相続人として作り上げた国際精神分析協会が *Freud* の死後どうなってきたかを見れば、そこで行われているものは精神分析とは言えないことは明白です。

ではラカン派はどうか？ *Ecole freudienne de Paris* も *Ecole de la Cause freudienne* も組織としては必ずしも理想的に機能していません。

しかし *Lacan* と分析を経験した者は、*Lacan* が分析家であったことを証言

しています。

つまり, Lacan と分析を経験した者は, そこにおいて分離と復活とが成起したこと, つまり, 精神分析の行為が起きたことを, 証言しています。

たとえ Lacan 自身は, 自分は聖人にはなれなかったと認めてはいても。

日本人の精神分析不必要性については, Lacan は, Kojève の言う「純粹状態におけるスノビズム」に基づいて, 日本人は精神分析を必要としていない, と言っています。

しかし, 純粹状態におけるスノビズムは, 今や, 日本人に限らず, 普遍的な現象です。

三島由紀夫の『金閣寺』においては, 主人公も, その友人である柏木も, 金閣寺の住職も, 仏教の教義は全くなおざりにしつつ, 仏教儀式の形式を尊重し, また, 生け花を手際よくいけたり, 尺八を巧みに吹いたり, 日本の伝統的文化を形式的に受け継いでいます。つまり, そこにあるのは文字どおり, 形骸化です。にもかかわらず, 仏教や日本伝統文化を尊重し, 尊敬すること。それが Kojève の言うスノビズムです。

『金閣寺』の主人公は、例外的に、スノビズムを打ち破り、存在の真理へ至るために、金閣寺を破壊し、それによって復活を遂げます。

しかし、純粹状態におけるスノビズムにおいては、通例、誰もその必要を感じません。

純粹状態におけるスノビズムは、その *Vollendung* 満了におけるニヒリズムです。今やそれは普遍的です。その実例を Jeff Koons や村上隆氏らの作品に見ることができます。

Lacan は、「James Joyce は *désabonné à l'inconscient* 無意識と縁を切っている」と言いました。

Finnegans Wake は分析不能、分析不要です。それと同様に、Jeff Koons らの作品も分析不能、分析不要です。

そして日本人も、ニヒリズムの満了において、分析不要です。

しかし、日本人が精神分析を必要としていないということは、精神分析その

ものが無効になったということでしょうか？ちがいます。

ここで Heidegger の Not der Notlosigkeit という表現を思い起こしましょう。

ドイツ語の Not という名詞は多義的で、「必要, 強制, 欠乏, 困窮, 辛苦」などの意味を有します。

notlos という形容詞は、「欠乏しているものが何も無い」ことです。「notlos である」とは、生きるために必要なものに関して物質的に満たされた状態です。今の先進諸国において、貧困の問題はまた新たに出現してきてはいますが、多くの者は物質的には notlos である状態、Notlosigkeit を享受しています。

しかし、そのような Notlosigkeit こそ、最も困った状態、Not そのものなのです。

なぜなら、そのような Notlosigkeit においては、存在 Seyn そのものは全く忘却されてしまっているからです。ニヒリズムはその満了にまで展開されているからです。

日本人が精神分析を必要としていないとすれば、それこそ *Not der Notlosigkeit* の典型的な一例です。精神分析を必要としていないという *Notlosigkeit* こそ、存在忘却という *Not*, 最も憂うべき事態です。

さあ、果たして日本人の精神分析不必要性という *Notlosigkeit* を超克することは如何にして果たされ得るでしょうか？それが問題です。

03 December 2014 : 川上未映子氏の仮面舞踏会 ; désabonné à l'inconscient ; 無意識のメッセージを読むのをやめる ; James Joyce は存在の言葉を読むのをやめた ; スノビズムは, 力への意志が仮象を価値づけることに存する.

作家の川上未映子氏に関する御意見をいただいています. 残念ながら, わたしは彼女の小説を読む機会がありませんでした. 彼女が書いたもので読んだのは, 朝日新聞に連載されていた「おめかしの引力」というコラムだけです. そのコラムを読んだ印象では, 川上未映子氏は, 女性性の仮面舞踏会を意図的に逆手に取っていると思われました. 確か, 彼女の小説のひとつにおいて, 豊胸手術が Motiv となっていなかったでしょうか?

女性が, 女性性の仮面舞踏会を, 軽薄性を装うために利用する. しかし, 二階堂奥歯氏の自殺例を識っていると, そのことを単純に笑ってはいられなくなります. 二階堂奥歯氏が『八本脚の蝶』で語っていた顔面の皮膚の手入れに関する「女性的」こだわりは, 精神病的解体に対する必死の予防であったわけですから.

軽薄性を装う女性の有名例のひとつとして, Marilyn Monroe の名が思い浮かびます. 周知のように, 彼女も自殺しています.

川上未映子氏に関する御意見を下さった方がおっしゃるように、確かに、
Marylin Monroe の仮面舞踏会的女性性という症状 — それは ϕ のひとつの証言なわけですが —, 彼女のそのような症状は、男たちにとっては sex symbole という Fetisch となり得ます。

Fetisch の仮面を以て、女性たちは必死で他 A の欲望を支えています。
女性たちばかりでなく、例えば三島由紀夫も。

Lacan が絶賛した女性作家 Margueritte Duras は、自殺こそしませんでした
が、alcoolique でした。alcoholisme は自殺の代替手段のひとつです。

わたしが今取り組もうとしているノーベル賞女性作家 Elfriede Jelinek は、
不安神経症のために公の場に出てくるのが非常に難しいそうです。ノーベル
賞授賞式に出席することもできませんでした。

Elfriede Jelinek を読まねばならないのは、彼女が *Lust* という表題の小説
を書いているからです。Freud の最重要用語 Lust(快, 悦)を、当然意図
的に自分の作品の表題にする作家を、精神分析家として見過ごすわけに
は行きません。

James Joyce est désabonné à l'inconscient と Lacan は言いました.

通常, abonnement は, 新聞や雑誌の定期購読の契約のことです.

désabonné の dé- は, そのような契約が解除されたことを示しています.

désabonné à l'inconscient を, とりあえず「無意識と縁を切った」と訳していますが, そこには, 「無意識のメッセージを読むことをやめた」という意味が込められているようにも思えます.

James Joyce の場合, 無意識のメッセージを読み続けようとするれば, Schizophrenie 発症の危険性があったかもしれません. その危険性を回避するために, 彼は, 無意識に完全に蓋をしてしまうような作品を書いたのかもしれない.

それに対して, 「純粹状態におけるスノビズム」においては, signifiant ないし image a が代表すべきものは何も無いのです. ニヒリズムは満了の状態に達しています.

Jeff Koons らの作品に高値がつけられるのは, もはや有効な投資先を見

いだせない資本が最後の悪あがきとして美術品市場に流れ込んでいるからにすぎません。

それ自体としては無価値なものを無理やり価値づけるのは、Nietzsche の言う「力への意志」の為すところであり、つまり、ニヒリズムであり、純粹状態におけるスノビズムです。

精神分析の不必要性は精神分析によっては超克できないのではないか？
そのとおりです。

ただ、何にも困っていない状態が最も困った状態であることが気づかれるのは、もう間もなくです。それは差し迫った事態です。

何にも困っていない状態が最も困った状態であることが気づかれたときに、精神分析は必要とされます。そのときに精神分析家が身近に誰もいないという事態にならないよう、我々は備えていなければなりません。そのときに備えて、今のところ我々はノアの箱船を建造するだけです。

04 December 2014 : ニヒリズムにおいては、人間存在の尊厳は失われる；
十字架上で処刑されたイエスの死は、最も尊厳ある死である；人間だけが
死ぬことができる；安楽死も生殖医療も、人間存在の技術化である；人間
の本有と神の本有は本同的である。

「尊厳」という語があります。人間の尊厳。人間存在の尊厳。それが一切失
われた状態が、Kojève の言う「純粹状態におけるスノビズム」であり、
Heidegger の言う「その満了におけるニヒリズム」です。

昨今、いわゆる安楽死のことを「尊厳死」と呼びますが、その表現は「尊厳」
を取り違えています。もはや治療の可能性がなくなったからといって人間の
生命を技術的に終わらせることは、人間存在の尊厳の尊重とは全く逆の事
態です。

では、尊厳ある死はどのようなものか？第一に挙げられるのは、勿論、十字
架上で処刑されたイエスの死です。最も義なる者でありながら、罪を引き受
け、悲惨に、苦悩しつつ、絶望の叫びをあげつつ、しかし、神への感謝と
希望のうちに死ぬ死。

殉教者の死はいずれも尊厳ある死です。彼らの死は神の *ex-sistence* の

証言です.

聖人の死も尊厳ある死です. 以前に肖像を紹介した *sainte Thérèse de Lisieux* (1873-1879) は 24 歳の若さで結核に全身を蝕まれ苦痛にもがきながら亡くなりました.

いわゆる安楽死においては, 或る意味で, 人は本当に死んではいません. なぜなら, 死を引き受けるのではなく, 技術的手段によって回避しているからです. 最期まで死の不安を辛抱することを放棄しているからです.

Heidegger は, 人間のみが死に得る, と言いました.

動物たちの死は, 単なる生命活動の停止です. 動物たちにおいては, 死を引き受けるという事態は起こりようがありません.

それに対して, 人間は死を引き受け, 死を覚悟します. 死の覚悟において死ぬことが, 実存的な死です. 死を覚悟し, 死の不安と苦痛のなかで辛抱し続けながら死ぬことが, 本当の意味での尊厳ある死です.

勿論, 現在の医療が提供し得るモルヒネなどの鎮痛手段の使用を排除す

るものではありませんが。

今、果たして、本当の意味で尊厳ある死を辛抱しながら死のうとする人はどれほどいるのでしょうか？ 技術的手段によって安易に生命活動を停止させることを好む人の方が圧倒的に多いのではないのでしょうか？

安楽死と同じ次元で行われているのが、技術的手段によって人間の生命を新たに誕生させることです。人工授精から代理出産まで、さまざまな技術が既に臨床応用されています。

先日も、代理出産で生まれた子の引き取りを先天異常を理由に拒否するという例がありました。人間存在の尊厳などどこ吹く風です。

Vatican は、安楽死にも生殖医療(妊娠中絶を含む)にも原則的に反対しています。それらは、科学技術によって人間存在の尊厳をないがしろにすることだからです。

人間存在の尊厳と、神の尊厳とは、同じものです。それは、Heidegger が存在の真理と呼ぶものです。存在の真理の座を我々は学素 ϕ で差し徴しています。

<http://webheibon.jp/blog/satomasaru/2014/11/post-130.html>

今紹介した佐藤優氏の blog に「人間は神と質的に異なります。人間の行為に神的な要素は何もありません」と述べられています。その言葉を評価するには前後の文脈をよく読んでみる必要がありますが、そこに引用されている Karl Barth のテキストの邦訳はかなりひどいもので、読めたものではありません。

ここではこう言うにとどめておきましょう：カトリックにおいては、人間の本質と神の本質は本同的です。であればこそ、永遠の命への復活が可能なのです。

ニヒリズムがその満了に達しつつある今、如何に人間存在はその尊厳において復活し得るのか？この問いは、精神分析の終わりの問いと等価です。

06 December 2014 : Lady Gaga の場合；ラカン派精神分析家の基準のひとつは、論理的時間面接の実践である。

一昨日、人間存在の尊厳を話題にしました。そして、ニヒリズムの時代である今においてそれがいかにないがしろにされているかを問題にしました。

あなたの存在の尊厳は保たれている、とは思わないでください。Marx が別決したように、資本主義的市場経済において、賃労働をする労働者の人間存在は労働力という商品に物象化されています。そのことにおいて、労働者の人間存在の尊厳はないがしろにされています。

女性の場合、および、女性と同等の立場にある或る種の男性や子供の場合は、さらに、あらゆる様態の性的商品として売買されることにおいて、人間存在の尊厳はまったく無視されています。

人間存在の尊厳が全く見失われた状態が、その満了におけるニヒリズムであり、純粹状態におけるスノビズムです。

イエスは言いました：「姦淫するなかれと言われていることを、あなたたちは学んでいる。わたしは言う：貪欲を以て女をまなざす者は誰でも、既に心の

中でその女との姦淫を犯しているのだ。」

そう言うことによってイエスは、女性を単なる性的対象と見なすことは女性の人間存在の尊厳を侵すことである、と指摘しています。

そして、強姦ほど女性の人間存在としての尊厳を侵害するものではありません。女性にとって強姦は死と同等です。

[http://www.huffingtonpost.com/2014/12/02/lady-gaga-
raped_n_6257760.html?utm_hp_ref=tw](http://www.huffingtonpost.com/2014/12/02/lady-gaga-
raped_n_6257760.html?utm_hp_ref=tw)

Lady Gaga が 19 歳のときに強姦を体験していたことを公表したという記事を紹介しました。

彼女のすばらしい点は、強姦という死から出発して、自分の身体と声を用いて芸術的な創造をなしとげた、ということです。死からの復活、無からの創造の見ごとな一例です。

話題を変えて、ラカン派精神分析家の見分け方をお教えしましょう。ここでは、精神分析の臨床を行っている分析家のことに限ります。或る分析家が

ラカン派であるか否か, ラカン派分析家を自称ないし自認する者が本当にラカン派分析家であるか否かの試金石は, 俗に言う「短時間面接」, Jacques-Alain Miller の表現では「変動時間面接」, より適切には「論理的時間面接」に存します.

「論理的時間面接」は, Lacan の 1945 年の論文:『論理的時間と先取りされた確実性の断言』に基づく命名です.

Lacan が一回の面接の時間を 40-50 分と予め定められたものにしなかったのは, 主体の存在の真理が成起する瞬間を示現すること以て面接を区切るためです.

そも, 主体の存在の真理の成起こそが精神分析の目標です.

aliénation 異状 - séparation 分離の時間的搏動が, 精神分析においてかわる時間性です.

論理的時間面接は, この時間性に基づいています.

aliénation 異状 - séparation 分離の時間性にもとづいて論理的時間面

接を実践していない者は、ラカン派分析家ではありません。

論理的的時間面接の実践に、Lacan は己れの分析家生命を賭けました。
国際精神分析協会から除名されるという代価を払ってでも、それを貫き通
しました。そのような論理的的時間面接の意義を正しく理解していない者
は、ラカン派分析家ではありません。

もし或る者が本当にラカン派精神分析家であるか否かを確認したければ、
論理的的時間面接を実践しているか否かを判断基準にしてください。

07 December 2014 : ラカン派精神分析家の基準のうち最も根本的なものは、ラカン派分析家との分析経験を有していることである；「女は、見られたくないからミニスカートをはく」；フェティシズムの壁；自慰的悦としてのファロス悦；ファロスは自慰を可能にするだけである。

付言すると、昨日述べた「ラカン派精神分析家を見わけるための判断基準」、即ち、Lacan の時間性の概念を把握したうえで、いわゆる変動時間面接(より適切には、論理的時間による面接)を臨床的に実践している者、という基準は、教育分析を前提しています。つまり、その者がラカン派分析家との分析をみづから経験している、という条件も、当然ながら要請されます。

Lacan 自身はラカン派分析家と分析していないではないか、という反論をしないでください。ラカン派分析家も、わたしは第三世代ですし、フランスでは第四世代が育ってきているでしょう。第三世代、第四世代のラカン派分析家は、ラカン派分析家との分析を経験していなければなりません。

本当の意味での分析の終わりへまで分析経験を徹底させることができるのは、ラカン派分析家だけです。

ほかの派の分析家は分析の終わりについて Lacan のように突き詰めて考えることはありません。何を以て「精神分析された」と言えるのか、わかっていません。ですから、本当の精神分析をすることもできません。

さて、こんなことを教えてくださった方がいます： 齊藤環氏は「男は、見られたくないならミニスカートなんかはくなく、と女を非難するが、女は、見られたくないからミニスカートをはくのだ」というようなことをどこかで書いている。

果たして、女性は何を見せたくないのでしょうか？ 齊藤環氏がどう答えているかは知りませんが、ラカン的な答えはこれです：存在の真理 φ を見せたくないのだ。より適切には、存在の真理そのものを示現することは不可能である。がゆえに、目くらましとして仮象 a である下肢を見せるのだ。

このことは、Lacan が *Séminaire XIX ...ou pire*, p.82 で提示した命題を思い起こさせます：

je te demande de refuser ce que je t'offre, parce que c'est pas ça.

我れは汝れに求める、我れが汝れに差し出すものを拒むことを。なぜなら、それは違うからだ。

ここで一人称で「我れ」と言っているのは, Lacan の 1955 年の書『フロイトの物』において「我れは語る」とことあげしている真理の女神, つまり, 存在の真理そのもの, 我々の学素では ϕ です.

存在の真理 ϕ が差し出すものは仮象 a です. ミニスカート姿の女性の場合, それは下肢という部分客体です. それに目を奪われてしまう男は, しかし, Fetischismus という amur を越えることはできません.

amur は, Séminaire XIX pp.81-82 で Lacan が提示している曖昧語法の語です. amur には一方で amour 愛を聴き取ることができますが, 他方で a-mur, つまり, 仮象 a という mur 壁です. 仮象は真理への到達を阻む壁なのです.

Séminaire XX *Encore* pp.75 et 80 において Lacan はこのようなことを言っています:

「男にとって手が届くのは, 客体 a だけである. 性関係に関して実現され得るのは幻想だけである.」

男は, 客体 a ないし幻想に阻まれて, 存在の真理へ到達し得ません.

同じことを Lacan は *Encore* p.75 の最後の段落でこのように言っています:

「signifiant Φ は男においてファロス悦により支えられる徴示素である。ファロス悦とは何か？それは, idiot の悦にほかならない。」

idiot は歴史的な精神医学用語で「白痴」ですが, idiot はギリシャ語の ἴδιος 個に由来しています。つまり, 他 A と共にあるのではない状態です。同じ箇所では Lacan は masturbation に言及しています。つまり, ファロス悦とは自慰的な悦です。RSI の図のせいで有名になった jouissance phallique は, 自慰的な悦, つまり, 他 A を悦することの不可能性です。

以上から, ファロス悦は Fetischismus ないし幻想の別名であることがわかります。

08 December 2014 : 形而上学はニヒリズムとして満了する；形而上学の満了においては、存在は何ものでも、何ごとでもなくなっている；形而上学においては、存在 ϕ はそのものとしては思考されておらず、したがって、死からの復活の可能性も思考されていない；精神分析は、形而上学の超克のひとつの可能性である；Lacan が「純粹状態におけるスノビズム」と呼んだのは、みづから精神分析の内的必要性を持たぬままに翻訳のためだけに *Ecrits* を邦訳する事態である。

Kojève の「純粹状態におけるスノビズム」に戻りましょう。そこにおいては「諸価値は、全く形式化されており、即ち、歴史的という意味における人間的内容を完全に空ぜられている」と彼は『ヘーゲル読解への導入』において述べています。

「価値」は Nietzsche 的用語と取ってもよいでしょう。即ち、価値とは、形而上学の満了における存在のことです。

形而上学の満了においては *mit dem Sein ist es nichts* と Heidegger は言っています。「存在は何事でもなくなっている。」

もはや存在は何事でもなくなっている。それが「その満了におけるニヒリズム

ム」の Heidegger による定義です。

純粹状態におけるスノビズムと、満了におけるニヒリズムは共に、存在の虚無化です。そしてそればかりでなく、無からの復活の可能性も無視されています。

ニヒリズムとスノビズムにおいては「無からの復活」の可能性は無視されているのは、それらにおいては、存在は、形而上学的に、単純に存在事象そのものの全体と見なされており、存在 \varnothing のことは思考されていないからです。

存在 \varnothing のことをそのものとして思考するためには、形而上学を超克せねばなりません。

ということは、とりまなおさず、精神分析は形而上学の超克のひとつの様態である、ということです。

ところで、Lacan が Kojève の「純粹状態におけるスノビズム」に言及している『日本の読者への通告』を読んでみてください。その邦訳は、*Écrits* の日本語訳の第一巻の冒頭に出ています。フランス語原文は *Autres écrits* に収録されています。

Lacan は 1971 年の来日の際、四人の *Écrits* 邦訳者に会っています。その際、驚くべきことに、精神分析そのものに関心を有する者は誰もいない、という事実を Lacan は見出します。

それ以前に、Lacan に会いに Paris へ行った日本人は何人かいました。彼らのうち幾人かは、留学生としてフランス政府の給費を受ける精神科医でした。当時は少なくとも二年間留学することができました。しかし、Lacan に精神分析を求めた者は皆無でした。

わたし個人のことを言えば、わたしは自分自身の精神分析の必要性を学生時代から非常に強く感じていました。しかし、日本には分析家と呼ぶに値する分析家は皆無でした。ですから、卒後研修を終えて間もなく、分析を経験するために留学しました。1986年2月に Paris で行われたラカン派の国際学会に参加し、そこで故 Pierre Skriabine 氏に声をかけてもらったのは、非常に幸運でした。また、当時既に数年前から Paris VIII 精神分析学部の講義を聴講し、実際に分析を受けてもいた向井雅明氏もいました。当時は Jacques-Alain Miller も精力的に講義とセミナーを行っており、École de la Cause freudienne も活気に溢れていました。

そのころに比べると、今はフランスのラカン派もやや形骸化してきているよう

な気がしてなりません。

Kojève が予言したとおり、日本のみならず、欧米全体も「日本化」して、純粹状態におけるスノビズムに陥ってきているようです。

ともあれ、みづから精神分析の経験に入る内的必要性・必然性を全く持たぬまま、*Écrits* の邦訳作業をただ単に翻訳のためにのみ続ける四人の日本大学人を見て、Lacan は暗澹たる気持ちになったに違いありません。

みづから精神分析の内的必要性を持たぬままに翻訳のためだけに *Écrits* を邦訳するという事態、それを Lacan は Kojève の表現を借りて「純粹状態におけるスノビズム」と呼んだのです。

日本においては、彼の *Écrits* もその人間的な意味を全く空ぜられた『エククリ』です。

ですから Lacan は『エククリ』の前書きとなる『日本人読者への通告』において、日本人読者が「この前書きを読むや、この本を閉じる」ことを Lacan は欲しているのです。それが全く冗談ではなかったことは、説明したとおりです。

09 December 2014 : ファロス悦の徴示素 Φ ; 男にとって可能なのは、ファロス悦, 即ち, 剰余悦のみである; 男であること, 女であること.

1960 年の講演『主体のくつがえしと欲望の弁証法』において Lacan は, ギリシャ大文字の Φ を, 徴象的ファロスの学素として提示し, そして, それを「悦の徴示素」 *signifiant de la jouissance* と定義します.

しかし, 一昨日見たように, 1972-73 年の *Encore* における Lacan の言葉によるなら, 徴象的ファロス Φ は, 悦そのものの徴示素ではなく, 「ファロス悦 *jouissance phallique* の徴示素」です. そして, ファロス悦は, *idiot* の悦, つまり, 自慰的悦として, 他 A の悦 *jouissance de l'Autre* ではありません. 他 A の悦ではないことにおいて, ファロス悦 Φ と剰余悦 *a* は同等です.

一昨日見たように, *Encore* において Lacan は, 男にとって可能なのは剰余悦 *a* のみである, と言っています.

1971-72 年の *Séminaire XIX ... ou pire* において提示される性別の論理式において, 徴象的ファロス Φ は男性を規定する徴示素として捉え直されます.

性別の論理式の男の側においては、命題 $(\forall x) \Phi(x)$ が成り立っています。「すべての x について $\Phi(x)$ である」。したがって、賓辞 $\Phi(x)$ により規定される集合が措定され得ます。

かくして、「 x は男である」は「 x は賓辞 $\Phi(x)$ により規定される集合に属する」ことです：

$$x \in \{x \mid \Phi(x)\}$$

ところで、賓辞 $\Phi(x)$ は、Lacan の他の学素と如何なる連関を持ち得るか？

先ほど見たように、徴象的ファロスの徴示素 Φ は、ひとつの徴示素として、徴示素 a のひとつの特別な形態にほかなりません。したがって、主体の存在の真理の現象学的構造の学素

$$\frac{a}{\emptyset}$$

の a の座に Φ を代入することができます：

$$\frac{\Phi}{\emptyset}$$

かくして、賓辞 $\Phi(x)$ はこう定義され得ます：

$$\Phi(x) \equiv \frac{\Phi}{x}$$

そして、「 x は男である」は、こう定義され得ます：

$$x \in \left\{ x \mid \frac{\Phi}{x} \right\}$$

これが、「徴象的ファロス Φ が男であることの徴示素である」ということにより厳密な公式化です。

ただし、「父である」という例外も同時に考えねばなりません：

$$(\exists x) \neg \Phi(x)$$

$\Phi(x)$ にあらざる x が ex-sister : 「解脱実存」する。

他方、「女である」を直接に規定する徴示素はありません。「女である」は、否定神学において神について直接的な肯定命題を措定せず、「...にあらざる」としか語らないように、否定的にしか差し徴され得ません：

$$\neg(\forall x) \Phi(x)$$

すべての x について $\Phi(x)$ であるわけではない。

「すべての x について $\Phi(x)$ であるわけではない」により差し徴される徴象的な穴こそが、「女である」ことを差し徴す欠如せる徴示素です。

そして、穴としての純粹徴示素は、学素 $S(A)$ にほかありません。

ですから Lacan は *Encore* p.73 の図において、抹消された女性定冠詞 La (女の「すべてならず」の記号)と $S(A)$ とを矢印で関連づけています。

抹消された女性定冠詞 La は、ここでは La と表記してもよいでしょう。

女性においては、 $S(A)$ の穴にさまざまな仮象 a が代入されます。その多様性が、仮面舞踏会としての女性性の現象の多様性です。ひとつの仮象は、つかのま、穴をふさぎますが、間もなく、ほかの仮象によって取ってかわられます。女性の服装等における流行の変化の速さに現れているとおりです。

それに対して、男性においては、通例、 $S(A)$ の穴は仮象 Φ によりしっかり塞がれています。仮象 Φ により、穴はすっかり否認されています。

しかし、資本の言説と科学の言説によりあらゆる仮象が無効化されて行く現代において、仮象 Φ の堅固さ、Freud が「ファロスの優位」 *Primat des Phallus* と呼んだものも、揺らいでいます。「男に成る」こともなかなか難しいことが自覚されてきています。

11 December 2014 : 精神分析はひとつの理論でも、ひとつの科学でもない；精神分析が幸福の科学でないのは、性関係は無いからである；

精神分析はひとつの理論ではありません。精神分析はひとつの科学ではありません。とりわけ、精神分析は、ひとつの幸福の科学ではありません。

「幸福の科学」と言っても、それは、ここでは、大川隆法氏の宗教法人のことではなく、而して、「幸福であることを可能にする科学」のことです。

Freud は精神分析をひとつの精神療法として創始しました。それは、疾患の治療として、ひとつの幸福の科学となり得たかもしれません。

一般的には、病んでいることは不幸ですから、病を治せば、患者をより幸福にすることになります。

1950 年代前後の USA においては、精神分析はまさにひとつの幸福の科学と見なされていました。いわゆる American way of life においては、不幸であることは病であり、精神分析はそのような病を根絶し、皆を幸福にし得るものだと思われていました。

ところが、Freud 自身は、1895 年の『ヒステリー研究』の末尾において既に、患者にこう言っています：

「あなたのヒステリーの惨状を普通の不幸へ変えることに我々が成功するならば、それは多大な成果なのです。」

つまり、Freud は、精神分析の創生期において既に、仮に精神分析が症状の解消に成功しても、だからといって、アメリカ的な、薄っぺらな、現世的な幸福が実現されるわけではない、ということ十分に自覚していたのです。

何故、精神分析はひとつの幸福の科学ではあり得ないのか？それは、性関係は無いからです。

Freud は 1930 年の著作：『文化における居心地悪さ』において、人間社会において幸福が実現されないのは、性本能の直接的な満足が許されないからだ、と指摘しました。Freud はまだ、発達段階論の観点から、前性器的なリビド固着が精神分析によって解消されれば、性器的段階が達成され得ると考えていました。性器的段階に到達すれば、性本能の十全な満足が実現されることとなります。Freud はまだ、そのことが可能である、と考えていました。人間社会のさまざまな外的要因によって、性本能の十全な満

足の実現は妨げられているだけだ, と考えていました.

ところが, そうではないのです. Lacan ははっきり言いました: 性関係は無い.

つまり, 発達論の言う性器的段階はあくまで想定され, 要請されたものにはすぎない. そんなものは実際には無い.

Lacan は「性関係は無い」を精神分析のひとつの公理にしました.

性関係は無いのですから, 性本能の十全な満足は不可能です. そのことに由来する不幸と不快は, American way of life を幸福の実現と見なす考えにおいては, 決して解消されないのです.

幸福の科学と名のつてこそいませんが, 政治学も, 社会学も, 心理学も, つまるところ, 幸福の科学です. そこにおいては, 何らかの社会改革によって, 何らかの心理療法によって, 幸福を実現することができるはずだ, と想定されています. しかし, その想定は間違っています.

しかし, だからと言って, 中島義道氏のように「どうせ死ぬんだから」と悲観

して、ニヒリズムに陥ることも間違いです。

精神分析は、ニヒリズムの超克のひとつの可能性です。

最後にひとこと付け加えると、精神分析の基礎は、精神分析における存在と時間について十分に思考することに存します。そのような思考を経ないままに Lacan の名を引き合いに出して駄弁を続ける評論家たちを、我々が相手にするには及びません。彼らは、Lacan が *Ecrits* の邦訳者たちについて言ったように、単なる「純粹状態における snob 」にすぎないのです。

翻訳したり評論したりする前に、Lacan の教えを十分に学び、そこにおいて思考されていることをみづから思考する必要があります。

13 December 2014 : ラカン派精神分析において症例提示をするのは患者自身である

或る臨床家の方からいただいた御質問にお答えしましょう。御質問の内容はこうです:ラカン派を自称する臨床家たちがみづから治療した症例を学会などの場で提示しようとならないのは何故か?精神分析の実践を経た後にどのような変化があったのか(あるいは, なかったのか)を提示しなければ, その実践の効果は証明し得ないではないか?

臨床家たちが構成する学会では, 自験例の発表は伝統的に行われていることです。

例えば, ヒステリーに関する Freud の師 Jean-Martin Charcot は, Salpêtrière 病院のなかで症例提示をしていました。聴衆の眼前にヒステリー患者を連れ出し, 彼女たちが如何なる症状を呈するかを見せました。

Freud 自身, 自分が治療したヒステリー患者たちの臨床記録を『ヒステリー研究』にまとめて出版しました。また, 「ネズミ男」や「オオカミ男」の症例も論文にして提示しました。

しかし, Lacan は, みづから治療した症例について, その全治療過程を提示したことはありません. Lacan の弟子たちも, 僅かな例外を除けば, 自験例を詳しく提示することはありません.

症例提示が行われないのは何故か?

ひとつめの理由:精神分析の過程については絶対的な守秘義務が分析家に課せられている.

分析家は, 分析の面接において聞いたことを決して他言してはなりません. さもなければ, 自由連想は困難になります. 特にラカン派の場合, 精神分析の患者(分析者, *analysant*)がみづから分析家になることを目指している場合が少なくありません. 彼らは当然, ラカン派の学会にも参加しますし, ラカン派の学会誌も読みます. かくして, 臨床例が発表や論文の材料として使われれば, 当該の患者にすぐわかってしまいます.

ふたつめの理由:ラカン派の分析においては, 分析の過程において起こることは, 実存的な尊厳を有する出来事であって, 科学的・学問的な研究を趣旨とする学会の場で提示される「症例」やら「臨床材料」として扱われることはできない.

症例提示は、臨床家にとって己れの臨床能力を公に証明するためのひとつの手段です。そんなことのために利用されるのは、患者自身にとってはまっぴらごめんです。分析の面接において分析者は己れの実存を賭して語っているのです。その人間的尊厳を「症例」や「臨床材料」へ卑しめてはなりません。

三つめの理由:精神分析において起こったことについて証言が為されることがあるとすれば、そのような証言を為すのは分析者(患者)自身であって、分析家ではない。

Lacan は、分析者であった者がみづから自分自身の分析経験において成起したことを証言するよう、促しています。そのような証言の場を Lacan は *passee* パスと名づけています。発表するのは治療者ではなく、患者自身です。

かかわっているのは、分析の終わりを成す自有 Ereignis について証言することです。

自有は、ひとつの *topologie*, 処言であり, 言, *dire*, *Sagen* そのものです。

自有は、言として実存することです。その言は、存在の言葉そのものです。
存在を証言すること、それは最も本自的な実存様態です。

École de la Cause freudienne においては、パスの手続きを経て *Analyste de l'École* と認定された分析家は、2年間、分析の終わりに関わる最も肝要なことがらについて公に証言するよう義務づけられています。

また、幾人かの *lacaniens* は、Lacan との分析の経験についての証言を著書として発表しています。なかでも、昔わたしが翻訳した Pierre Rey の『ラカンのところで過ごした季節』と、今わたしが読んでいる Gérard Haddad の『ラカンがわたしを養子にした日』は秀逸です。

ラカン派の分析において如何なる実存的变化が起こるか？それを実際の「症例」において知りたければ、Pierre Rey と Gérard Haddad の証言を読んでみてください。後者はフランス語テキストしかありませんが、

14 December 2014 : Giacometti は、彫刻によって空間の中に裂けめを切り裂いた最初の芸術家である； Superflat arts are characterized by a slogan : « Imaginary only, no Real » ; 「オタク文化」を特徴づけるのは、影象的悦の優位である； ニヒリズムの満了の時代の生き方は snobbish way of life である； ニヒリズムの満了において存在が何ものでもなくなった今こそ、存在 \emptyset の深淵の裂口があらわになってくる。

今日は都美館の Uffizi 収蔵品展の最終日だったので、御ミサの後、あわてて上野へ行ってきました。留学中も、その後も、自分の分析のために Paris に滞在することが旅行の主目的なので、イタリアもスペインもドイツもオーストリアも訪れたことはありません。



都美館で Botticelli を観賞してきました。Botticelli が描く女性は、存在の尊厳に満ちています。Jeff Koons や村上隆らの作品とは何という違いでしょう！

ついでに、国立新美術館で明日まで行われている Kunsthaus Zürich の収蔵品の展示も見に、六本木まで足をのばしました。Kunsthaus Zürich は

Giacometti のコレクションで有名です.



Femme debout



Grande tête de Diego

Giacometti の彫刻作品は, « un reste que laisse l'être » [存在が残す残渣] (Lacan, Séminaire VI, p.565) としての *objet a* そのものです. Lacan のその文において「存在」は抹消された存在, 存在 ϕ であり, 「実在」le réel と読みかえることができます. Giacometti の彫刻作品は, 空間に実在の裂けめを切り裂き, 裂口をうがちます. それらの無気味さと「存在感」は, そのことに由来します. Giacometti の彫刻作品の裂口性は, Jeff Koons や村上隆らの作品が空間を flat にしてしまうのとは正反対です.

<https://www.youtube.com/watch?v=pPZDBF0kei0>

Pharrell Williams の It Girl の宣伝動画を紹介しました。その製作者は、村上隆と彼の友人たちです。

英語では Groddeck や Freud の用語 Es を翻訳するのに、わざわざラテン語の id を持ち出してきて、英語の中性代名詞 it を用いません。ところが、it には性的な意味があります。it のそのような性的意味を広めたのは、興味深いことに、Elinor Glyn (1864-1943) という英国の女性小説家です。Freud とほぼ同時代ですが、彼女は精神分析のことは知らなかったようです。

Pharrell Williams の It Girl の MV を暫く前に紹介してくれたのは、Facebook での或る知人でした。そのときの動画と、今見ることができるものとは若干違うようです。以前のものにおいての方が、今のものにおいてよりもより目立つしかたで或る単語が提示されていました。その単語とは「土足厳禁」です。今見ることができる It Girl の MV においても、よく注意していれば、「土足厳禁」という文字が脈絡も無くときどき現れてくるのが見てとれるはずで

「土足厳禁」は、言うなれば、Jeff Koons や村上隆らの作品の標語です。それは、つまり、imaginary only, no real, 影象のみ, 実在おことわり, ということです。

或る方が、おもしろい画像を紹介してくれました。

<http://youpouch.com/2012/10/12/86163/>

ふたりの女性モデルが完全に人形的、アニメ的な化粧をした姿を、そこに見ることができます。なまみの人間が故意に superflat な影像を演じて見せています。絵画と正反対です。なまみの人間が flat な影像として己れを提示する。それも「土足厳禁」の一例でしょう。

いわゆる American way of life は、大量生産・大量消費における物質的な過剰によって欲望を窒息させることに存します。アメリカ人は、いまでもそれで自己欺瞞的に満足しているのかもしれませんが。彼らの肥満体がそのことを示唆しています。

日本人も、いわゆる高度成長時代、American way of life を追求していました。しかし、アメリカ人よりも早く、物質的なものによっては満足を得られないことに気づきました。そこで出現してきたのが「オタク文化」です。

「オタク」の本質は、物質的・実在的な満足に見切りをつけて、ひたすら *imaginaire* なもの、影象的なものによって満足を得ようとすることに存します。物質的なものの大量生産・大量消費に代わって、今や、影象的なものの大量生産・大量消費が蔓延しています。

「オタク」において氾濫している諸々の *images* は、それ自体としては、全く薄っぺらい、無価値なものです。しかし、「オタク」は、そのようなものを高度に価値づけます。それこそ、「純粹状態におけるスノビズム」です。

今や、*American way of life* ではなく、*snobbish way of life* がひたすら追求されています。それは、日本から世界中に輸出されています。今や、全世界が日本化し、オタク化し、*snob* 化しています。つまり、世界的なニヒリズムの満了です。

ニヒリズムの満了においては、*mit dem Sein ist es nichts* : 存在は何ものでもなく、何ごとでもない。

しかし、存在が何ものでもなく、何ごとでもなくなった今、まさに、存在の真理、つまり、存在、 \emptyset の深淵の裂口があらわになってきます。そして、そのとき初めて、ニヒリズムの超克の可能性も見えてきます。

15 December 2014 : Superflat 作品の存在論.

御質問をいただいています:「二次元の絵も, なまみの身体も, 見る側からすれば *imaginaire* なものではないか?」

この問いは, 認識論の次元の問いです. 我々は日常的には認識論の次元にいたので, そこから離れるのは難しいですが, 認識論は既にそれだけで誤謬のもとです.

正しい問いは, Heidegger 的な存在論において措定され得ます. そして, 存在論的に問うとき, 我々は, 「見る側から」問うのではなく, 存在事象の存在そのものに関して問わねばなりません. 存在事象の存在そのものに関して問うとき, 初めて, 存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\Phi}$ に即して問うことができます.

Jeff Koons や村上隆の作品に関して, 12 月 12 日の東京ラカン塾精神分析セミナーにおいて, 即興的に次のような学素を提示してみました:

$$\frac{a}{\$}$$

petit a, その下に dollar.

それは, Nietzsche の言う「力への意志」の Wertsetzung 価値措定の行き着いた先です.

男女の性別に関してひとこと: hysterica の言説は「女の言説」である. 大学人の言説は, 強迫神経症者の言説として, 「男の言説」である.

hysterica の言説ならびに大学人の言説と, 男女の性別の論理式とを組み合わせるとどうなるか? 明日はそのことを論じてみましょう.

16 December 2014 : 四つの言説と性別の論理式； 大学人の言説は、強迫神経症者の言説として、「男の言説」であり、他方、hysterica の言説は「女の言説」である； 支配者の言説は、父の言説として、排斥の言説であり、他方、分析家の言説は、剰余悦の言説として、前性器的悦の言説であり、また、排斥されたものの回帰としての症状の言説である； Lacan が芸術作品を論ずるとき、それは、芸術作品を精神分析するためではなく、而して、個々の芸術作品において具体化されてた存在の真理の現象学的構造から出発して、精神分析においてかかわる主体の存在に関する問いを問うためである。

Lacan は 1969-70 年の Séminaire XVII 『精神分析の裏』において四つの言説の学素を提起しました：支配者の言説、分析家の言説、大学人の言説、hysterica の言説。

$$\frac{S_2}{S_1} \longrightarrow \frac{a}{\$}$$

大学人の言説

$$\frac{\$}{a} \longrightarrow \frac{S_1}{S_2}$$

hysterica の言説

次いで、1971-72年の Séminaire XIX ...ou pire において、Lacan は性別の論理式を提起しました：

$$M: (\forall x) \Phi(x) \wedge (\exists x) \neg \Phi(x)$$

$$F: \neg (\forall x) \Phi(x) \wedge \neg (\exists x) \neg \Phi(x)$$

では、四つの言説と性別の論理式を重ね合わせてみるとどうなるか？

Lacan はそのような試みをしていませんが、考えてみましょう。

というのも、hysterica の言説は女の言説であり、大学人の言説は、強迫神経症者の言説として、男の言説である、と解釈し得るのではないかと思うからです。

大学人の言説は、男の言説 le discours de l'homme としては、こうなります：

$$\frac{(\forall x) \Phi(x)}{(\exists x) \neg \Phi(x)} \longrightarrow \frac{a}{\$}$$

他方, hysterica の言説は, 女の言説 le discours de ~~La~~ femme としては, こうなります:

$$\frac{\neg (\forall x) \Phi(x)}{\neg (\exists x) \neg \Phi(x)} \longrightarrow \frac{S_1}{S_2}$$

四つの言説のうち, 症状の言説としての分析家の言説は, 発達段階論に言う前性器的リビード態勢に相当します:

$$\frac{a}{S_2} \longrightarrow \frac{\$}{S_1}$$

それに対して, 父の言説としての支配者の言説は, オイディプス期に相当します:

$$\frac{S_1}{\$} \longrightarrow \frac{S_2}{a}$$

発達段階論的表現を用いるなら, 前性器的リビード態勢においては, 男女の性の区別はまだありません. 男においても女においても同様に, 前性器的部分客体における部分本能の満足が問題になります. そのことは, 前性器的言説としての分析家の言説の図により形式化されます.

それに対して、オイディプス期には、父 S_1 が支配者・能動者の座に介入してくることにより、前性器的満足を与えていた部分客体 a は排斥されます。このことは、父の言説としての支配者の言説により表されます。

ここまでは男女共通の事態です。次いで、父の言説としての支配者の言説の構造から出発して、男女の性が分化して行きます。

男の場合、Freud が『トーテムとタブー』において提示した父殺しの神話に語られているように、父 S_1 は、死の座としての存在 ϕ の座へ押しやられます。代わって、能動者の座には、signifiant Φ を賓辞としてひとつの「すべて」を形成する男が来ます。

「或る者 x は男である」は、phallus Φ により規定される集合、すなわち、「すべての x について $\Phi(x)$ である」という命題により規定される集合に x は属している、 x はその集合の要素である、ということです。

それに対して、「 x は父である」は「 x は $\Phi(x)$ にあらず」です。そして、そのような x は、すべての x について $\Phi(x)$ である」という命題により規定される集合に対して ek-sistieren, ex-sister, 解脱実存します。

父を規定する命題は、単に「 $\Phi(x)$ にあらざる x が existieren, exister 現存する」ではなく、「 $\Phi(x)$ にあらざる x が, 存在 ϕ の座に ek-sistieren, ex-sister 解脱実存する」である, と考えられます.

男の言説において能動者の座に位置する「すべての x について $\Phi(x)$ である」に対して, 右上の他者の座, すなわち, 受動者の座, 被支配者の座に位置する a は, Fetisch そのもの, ないし, Fetisch としての女の体 (全体, または部分)を表します.

さて, hysterica の言説, 即ち, 女の言説においては, 穴の signifiant が能動者の座に来ます.

「すべての x について $\Phi(x)$ であるわけではない」という否定命題によって, 「賓辞 $\Phi(x)$ により規定されないもの」の穴が指し示されます.

「すべての x について $\Phi(x)$ であるわけではない」という否定命題によって女を指し示すことは, 否定神学において神について「神は ...である」という肯定命題を措定せず, 「神は ...ではない」という否定命題のみを措定することになっています.

否定神学においてのみならず、そもそも宗教において、信仰にとって、神秘を神秘として保守することは本質的なことです。

ここで、「神秘を保守する」とは如何なることか？それは、「存在の真理を、仮象的徴示素で表言しないことによって、尊重し、畏敬する」ことです。

存在の真理 Φ に対してあらゆる signifiant a は仮象でしかなく、十全適合的ではありません。そのことをわきまえて存在の真理について肯定命題を措定しないこと。それが神秘に対する否定神学の慎みです。

Lacan は、女に対して、神に対するのと同じ慎みを要請しているわけです。

次に、存在の真理の座に位置するものについて見てみましょう。女の言説としての hysteric 言説においては、左下の存在の真理の座には「 $\Phi(x)$ にあらずる x は現存しない」が来ます。この命題は、男の言説において存在の真理の座に来る「 $\Phi(x)$ にあらずる x が現存する」と矛盾します。しかし、そのような矛盾は、存在の真理の座においては「止揚」されます。

なぜなら、存在の真理そのものは、あらゆる対立、あらゆる矛盾の $\acute{\alpha}\rho\mu\omicron\nu\acute{\iota}\alpha$, harmonia, 結接であるからです。

女の言説においては、右上の他者の座、受動者の座に父 S_1 が位置づけられます。そのように父に相對することが女の客體選択を特徴づけると Freud は考えました。

ただし、能動者の座の $\$$ は、満足不能の欲望としての *hysterica* の欲望です。

hysterica にとっては、欲望の満足としての悦は、耐えがたい不安と不快を惹起します。*hysterica* は、欲望の満足を *versagen* 放棄しています。

したがって、*hysterica* の客體選択においては、父 S_1 は不能者でなければなりません。Freud の症例 *Dora* の父親がそうであったように。不能者ではない *Herr K* が言いよつてくると、*Dora* は嘔気を覚えます。

男女の性別については今日はここまでにして、ひとこと言いそえておきましょう。我々 *lacaniens* にとっては、精神分析の「理論」を以て社会現象や芸術作品を論評することがかかわるのではありません。Lacan が芸術作品を論ずるとき、それは、芸術作品を精神分析するためではなく、而して、個々の芸術作品において具体化されている存在の真理の現象学的構造から

出発して、それを手掛かりにして、精神分析においてかかわる主体の存在に関する問いを問うためです。

精神分析における何らかの概念を道具にして社会現象や芸術作品などを論じている評論家たちは、深く考えもせずに、あたかも精神分析がひとつのできあがった理論であるかのごとくに錯覚しているのです。

しかるに、以前にも強調したように、精神分析はひとつの理論でもひとつの科学でもありません。

而して、精神分析は、存在の言葉を聴き取ろうとするひとつの途なのです。

17 December 2014 : 精神分析において最も肝腎なものは実在である; 間(ま), 裂けめ, 穴は, *ex-sistence* としての実在の深淵をうかがわせるものである; *a* の多様性.

存在事象としての存在事象はいづれも, 存在の真理の現象学的構造 $\frac{a}{\phi}$ によって, 存在事象として存在しています.

a は, *réel*, *symbolique*, *imaginaire* の三つの位のいづれにも与っています.

ただし, 個々の存在事象それぞれにおいて, *a* はもっぱら *imaginaire* であったり, もっぱら *symbolique* であったり, もっぱら *réel* であったりします.

精神分析の実践においては, 例えば *Skype* を介しての面接はしません.

将来の情報技術発達によりどんなに *image* と音声鮮明に伝達されることになろうとも, 直接対面しないままに精神分析の面接を行うということはありません.

なぜかと言えば, それは, 精神分析において最も肝腎なものは, 実在 *le réel* であるからです.

なまみの人間の实在性無しには、精神分析の実践はありえません。分析家も、分析者も、なまみの人間として面接の現場に実存しているのでなければ、精神分析の実践は起こり得ません。

特に、分析家は、寝椅子に横たわる分析者の背後に座して沈黙するとき、*image* も声も持たないものになります。*imaginaire* の位にも *symbolique* の位にも参与することをやめ、ひたすら *réel* なものとしてのみ面接の現場に実存することになります。それが肝腎なことです。

Alexandre Kojève が 1968 年に用いた表現:「純粹状態におけるスノビズム」を持ち出したのは、Lacan の『日本人読者への通告』を読解するためです。そのテキストを読む必要があったのは、Lacan が「日本人は精神分析不可能だ」と言っているという誤解を正すためです。

Lacan は「日本人は分析不可能だ」と言ったのではなく、こう言ったのです:

「日本語に住まう者は誰も、自動販売機(今なら、コンピューター)との関繋 — さらに、もっと単純に機械のような顧客[クライアント]との関係 — を調整するため以外には、精神分析される必要を有していない。」

« personne qui habite la langue japonaise, n'a besoin d'être psychanalysé,

sinon pour régulariser ses relations avec les machines-à-sous, – voire avec des clients plus simplement mécaniques » (*Autres écrits*, p.498).

その際、Lacan はあたかも日本人一般について語っているかのようですが、実際には、*Écrits* の邦訳をしていた四人の翻訳者(四人とも男性の大学人)がみづから精神分析を経験する内的必要性を全く持たぬままに翻訳のためだけに翻訳している日本的状況にあきれかえったのです。

Lacan としては当然、皮肉のひとつも言いたくなったのでしょう。ですから、Lacan は、Kojève の言葉:「純粹状態におけるスノビズム」を引用しつつ、「それは彼のユーモアによるものだ」と付け加えています。

いわゆるオタク文化を分析する仕事は、評論家たちにまかせておけば良いのです。我々としてはただ、Kojève の言う「スノビズム」とその普遍化とをよりよく把握するために、Jeff Koons や村上隆の作品を例に挙げただけです。

Jeff Koons や村上隆らの作品の構造を形式化する学素は、先日晒したとおりです:

$$\frac{a}{\$}$$

a, その下に dollar.

どうせ日本画なら、墨絵のほうがどれほど感動的でしょうか！

芸術作品においては、すきま、裂けめ、ひとことと言うなら、間(ま)が非常に重要であることは、よく知られています。Jeff Koons や村上隆らの作品に欠けているのは、まさにそのような間(ま)です。

間(ま)、裂けめ、要するに、穴は、ex-sistence としての実在の深淵をうかがわせるものです。

実在の深淵をいかにうかがわせるか、それが芸術作品の実在性、いわゆる「存在感」を規定しています。

男女の性別の問題と関連づけるなら、男においては存在の真理 Φ の深淵の穴は徴示素 Φ で多かれ少なかれ完全に塞がれているのに対して、女性においては、存在の真理を代表するものは Φ の欠如の穴でしかありません。ですから、女性の方がより実在的なのです。

a がどの程度存在の真理の穴を覆い隠すか、あるいは逆に、穴をそのもの

としてうかがわせるか, そこに a の多様性があります.

そして, a の分離可能性, 分離の容易さ, 困難さも, a の多様性を成しています.

そのような a の多様性の問題は, 分析の終わりにおいて存在論的構造

$\frac{a}{\phi}$ はいかなるものであり得るかの問題とかかわってきます.

18 December 2014 : わたしは失敗したが、耐え忍びつつ続ける；真の *féminisme* は男女の性別の止揚に存する；男女の性別の彼方における人間存在の真理は、抹消されたファロス ϕ にほかならない。

藤田博史先生の *web site* によると、今晚のフジタゼミのテーマは、「ラカンの精神分析はなぜもうダメなのか？」だそうです。ということは、藤田博史先生は「ラカン派」の看板を正式に下ろした、と見なしてよいでしょう。あるいは彼は、始めから自分はラカン派ではない、と言うでしょう。

いずれにせよ、我々としてはここで、Lacan の次のような言葉を読みましょう。1980年1月5日付、Lacan による『解散の書簡』からの抜粋です (*Autres écrits*, pp.317-318) :

「(...) わたしが[精神分析の] *École* を創立したのは、ひとつの仕事のためである。即ち、Freud が切り開いた畑[領野、場]において、その真理の犁の鋭利な刃を回復し —, Freud が精神分析の名のもとに設立した独自の実践を、我々の世においてそれに帰属する義務へ連れ戻し —, 精神分析における偏向と妥協(それらは、精神分析の使われ方を墮落させることにより精神分析の前進を減衰させる)を、不断の批判により告発する仕事。この目標を、わたしは堅持する。

それゆえ、わたしは [l'École freudienne de Paris を] 解散する。そして、l'École freudienne のメンバーと言われる者らについて苦情を言ったりはしない。むしろ、わたしは彼らに感謝する。彼らに教えてもらったのだから。つまり、わたしは失敗したのである。一、即ち、解決の糸口を見失ったのである。この教えは、わたしにとって貴重である。わたしはそれを有効利用する。言い換えれば、わたしは、耐え忍びつつ続ける。

そして、今、1980年1月、Lacan と共に続けようと欲する者らに、再び集うよう呼びかける。」

1980年1月に École freudienne de Paris の解散を宣言するとき、Lacan はみづから「耐え忍びつつ続ける」ことを明言し、そして「Lacan と共に続けようと欲する者ら」を励ましています。あなたは、彼の呼びかけに応じますか、それとも、耳を塞ぎますか？

さて、一昨日、男女の性別の本質を成すのは、父の言説としての支配者の言説から出発するひとつの分化である、と言いました。

四つの言説のうち、大学人の言説は、強迫神経症者の言説として、男の言説であり、他方、hysterica の言説は女の言説である、と解釈することができます。

そして、男女の性別は、父の言説ないしオディプス複合の言説としての支配者の言説から出発するひとつの分化である、と考えることができます。

しかし、男の言説としての大学人の言説と、女の言説としての *hysterica* の言説との *antithèse* が最後の言葉ではありません。そこから再び、前性器的リビード態勢としての分析家の言説への回帰が起こります。

症状の言説としての分析家の言説は、排斥されたものの回帰です。

父の言説としての支配者の言説において排斥されたもの *a* は、男の言説としての大学人の言説を経て、または、女の言説としての *hysterica* の言説を経て、症状の言説としての分析家の言説において、能動者の座へ回帰します。

症状の言説としての分析家の言説においては、男女の性別という *antithèse* は、言うなれば、止揚されています。

症状の構造 $\frac{a}{\phi}$ は、そのものとしては、性別の外にあります。

真の féminisme は、男女の性別の止揚に存するはずでず。それは、症状の言説としての分析家の言説において、そして、そこにおいて成起する分離において、実現されます。

男女の性別の彼方における人間存在の真理は、 \emptyset にほかなりません。

さて、Lacan は言いました：

Le sérieux, ce ne peut être que le sériel.

真摯であることは、継起を成すことにほかならない。

EFP 解散宣言のなかで Lacan が用いている言葉で言うなら：
persévérance.

耐え忍びつつ続けること。忍耐、辛抱において継続すること。それこそが真摯であることです。

精神分析においては、真摯であることが要請されます。変節とは相容れません。

19 December 2014 : psychose hystérique ; Anna O と sainte Thérèse de Lisieux ; American way of life と snobbish way of life.

女性において構造 $\frac{a}{\Phi}$ の解体可能性は見極められるのか？という御質問をいただきました。つまり、女性においては精神病発症の可能性は正確に予測し得るのか？

フランス精神医学においては古くから psychose hystérique という概念があります。hystérie が精神病症状を伴うことは珍しくありません。Freud と Breuer の共著:『ヒステリー研究』のなかの Breuer の症例、まさに精神分析の生みの母である症例、Anna O がその典型的です。

それから、sainte Thérèse de Lisieux も。

sainte Thérèse de Lisieux は、修道院の上司の勧めに応じて自伝的な文章を書き残しました。彼女の死後、それらは彼女の周囲の者によって一冊の本にまとめられて出版されました。それは、彼女の信仰の証言、つまり、神の証言です。彼女の自伝を読んだ人々は、彼女による神の証言に非常に感動しました。それを読んで病気が癒されたと言う人々が続出しました。それらの経験は Vatican により奇跡と認定され、petite Thérèse は死後まも

なく、正式に列聖されました。

sainte Thérèse de Lisieux の自伝の邦訳は絶版にはなっていないようです。翻訳の質がどの程度のものか不明ですが、御興味があればお読みください。勿論、フランス語原書で読むにこしたことはありません。

ともあれ、精神医学的に興味深いのは、修道院に入る以前、たしか 12-13 歳ころ、彼女は Anna O と類似の *psychose hystérique* の症状を呈している、ということです。

彼女たちの *psychose hystérique* の幻覚症状においては、視覚的な幻覚が優位です。さまざまな無気味な影像が出現します。

petite Thérèse が精神病症状を呈していたのは、まさに Charcot が活躍していた時期であったのですが、彼女は Paris ではなく地方に住んでいたため、Charcot の診察を受けることはありませんでした。

そして、さすがに聖人になる人ですから、*petite Thérèse* の精神病は、彼女自身の祈りによって自発的に治癒してしまいます。

Anna O の場合, Breuer の治療によっては彼女の症状は完全に消退しませんでした. Breuer 自身は明言していませんが, Freud の推測によると, Anna O は妊娠幻想ないし妊娠妄想を持つに至り, その時点で Breuer は治療を中断してしまいます. そして Anna O は或る精神病院に入院します. その後の病状の推移がどのようなものであったかは不明ですが, 結局, 彼女の *psychose hystérique* は, 一種の強迫神経症的性格形成へ変化します.

Anna O の本名は Bertha Pappenheim です. 彼女は social worker のパイオニア的人物として歴史に名を残しています. 英語の Wikipedia の説明では, 彼女は, 女性の権利を主張した *feminist* でもある, と紹介されています.

Bertha Pappenheim は, 売買春の犠牲者となっていた女性たちを救うために共同住居を作り, その施設の長となります. そこでの生活規則はかなり厳格なものでした. 彼女はユダヤ人ですから, ユダヤ教の宗教的な戒律に支配された生活でした. それが彼女の最終的な症状となったわけです.

話をもとに戻すと, 女性の場合, *hystérie* だから神経症であって, 精神病ではない, と簡単に診断学的分別をしてすますわけには行きません. $\frac{a}{\phi}$

の構造の安定性と解体可能性とを、ひとりひとりについて個別的に評価する必要があります。

話題を変えて、American way of life と snobbish way of life についてですが、American way of life が全盛であったのは 1950 年代前後です。日本では高度成長時代に American way of life が主流でした。

大量生産と大量消費によって物質的な満足が実現され、USA では階級闘争が消滅した、と Kojève は判断し、USA は歴史終焉後の社会である、と彼は考えました。

例えば American way of life においては、若い男は、女の子を連れて自家用車でドライブにでかけ、食事をし、何か買い物をして、といった具合です。今や非常に古風な感じがします。

それに対して、現在主流である snobbish way of life においては、満足は *imaginaire* の次元において得られます。実際、若者が車に興味を持たなくなったと言われています。女の子も、なまみではなく、アニメのキャラであったり、メイドの扮装で仮想化されています。

snobbish way of life は, American way of life では(つまり, 物質的なものでは)満足は得られないということを前提にしています. imaginaire の次元においては, より確実に, より手っ取り早く, より大きな満足が得られる, というわけです.

日本においていち早く snobbish way of life が主流になったのは, 日本画の伝統に見られるように, 日本では歴史的に imaginaire なものが優位であったせいでしょう.

ともあれ, snobbish way of life は今や特殊日本的ではなく, より普遍的です.

snobbish way of life は「まがいもの」の優位である, ということは明白です. 誰もが, 自分たちが熱中しているのは「まがいもの」であるということを多かれ少なかれ自覚しています. しかし, そうわかってはいても, やめられない. そこが問題です.

果たして snobbish way of life の「まがいもの」性は如何にして克服されて行き得るのか?

日本の首相は、戦争による克服を考えているのかもしれませんが。戦争によりすべてが破壊され、再びゼロから出発すればよい。彼は自覚無きまま、そう考えているのかもしれませんが。

20 December 2014 : ナルシシズム; オタクたちはみづから美少女になりたがっている; 欲望の客体は主体自身の鏡像である; 性倒錯者は剰余悦を行動化する; phallic woman について.

「オタクたちはみづから美少女になりたがっている」という議論があることを教えていただきました. 或る twitter 記事を引用すると:

「男のオタクの人ってかわいい女の子と付き合いたいわけじゃなくて, 可愛い女の子に自分になりたいんですよ. だから性別っていうのを超越した存在なんですよ, オタクって.」

これは, narcissisme の概念に鑑みれば至極妥当な主張です.

Narcisse が自分の鏡像に死ぬほど見とれたことが示しているように, 欲望の客体は主体自身の鏡像なのです. より正確に言えば, 欲望の客体 a は, 主体の存在の真理 φ を代表する仮象である : $\frac{a}{\varphi}$.

Transgender と混同すべきでないものに, 性倒錯としての服装倒錯があります. 性倒錯的服装倒錯の行動を取る者らは, おおむね, heterosexual の男性です. 彼らは, 女装した自分自身の姿を見ることによって性的興奮を

得ます。

性倒錯者は、性的幻想を実際に act out します。幻想の acting out の有無が、性倒錯者と神経症者との相違を成します。

美少女の image に見とれるだけにとどまるか、あるいは、女装という行動を取るか。両者において関わっている構造は、ともに、 $\frac{a}{\Phi}$ であり、それによって性的満足、剰余悦 plus-de-jouir が得られます。

オタクの場合、 a は美少女の image にとどまります。それに対して、服装倒錯は、女性の衣服を実際に身につけた自分の姿として a を実現させます。

いずれにせよ、 a は理想自我 ideales Ich です。単純に imaginaire なものか、実際に act out するかの相違はありますが。

phallic mother ないし phallic woman という表現を使う場合、よく用心する必要があります。

構造 $\frac{a}{\Phi}$ における a は失われた phallus の代理ですから、imaginaire

なものである女性の身体は phallus の代理です

昨日から Polanski の『毛皮のヴィーナス』が渋谷で上映され始めましたが、例えば Fetisch としての毛皮は、失われた phallus の代理です。それを身にまとう女性は phallic だとも言えます。そして Fetischist にとっては、それはその限りで性的客体です。

他方、同性愛の男性にしばしば見られる幻想としての phallic woman ないし phallic mother の幻想があります。彼らの幻想において、母ないし女性の身体には器官としての phallus が備わっています。

同性愛男性が育った家族においては、三島由紀夫の場合典型的であるように、父親ではなく、特定の女性が権力者です。三島由紀夫の場合は、同居していた祖母がそれです。

同性愛男性にとっては、女性が Φ の体现者であり、それに対して、男性、特に男の子、ないし若い男性が ϕ を保有する客体 a と成ります。

phallic mother ないし phallic woman という表現はしばしば議論を混乱させますから、不用意に用いない方が賢明かもしれません。

ともあれ、男女の性別にもとづく差別を真に無効にするためには、女性が Φ を獲得するのではなく、男も女も一旦、仮象 a を捨て、存在の真理 ϕ そのものへ至ることが必要です。それは、よくある精神分析的言い回しでは、去勢を引き受けること、実存論的には、死を引き受けることです。

『毛皮のヴィーナス』の原作者は、周知のとおり、Leopold von Sacher-Masoch (1836-1895) です。彼の名から Krafft-Ebing は 1886 年に Masochismus という用語を作り出しました。

これも周知のように、Polanski は pédophilie の疑いで訴追されたことがあります。果たして彼は、毛皮をまとった Venus をどのように演出することができるでしょうか？年末年始、時間の余裕があれば見に行ってみてください。

21 December 2014 : *sinthome* について; 押しつけられたことば; 存在のことば.

Lacan が 1975-76 年の *Séminaire XXIII* で提起した用語 *sinthome* について御質問いただきました. もしお手元に *Séminaire XXIII* の本をお持ちでしたら, 第 VI 章を開いてみてください.

第 VI 章を Jacques-Alain Miller は *Joyce et les paroles imposées* と題しています. James Joyce と「押しつけられたことば」.

ことばが押しつけられる. これは *automatisme mental* の本質的特徴です.

automatisme mental は, Lacan の精神医学の師 Clérambault が提唱した用語です. フランス精神医学独特の用語で, 英語圏やドイツ語圏では用いられません. 日本でも Lacan を学んだ者しか用いません. しかし, *automatisme mental* は *Schizophrenie* におけることばの精神病理を統一的に把握することを可能にする非常に有意義な概念です.

Dans l'inconscient ça parle. 無意識において何かが語る. *Écrits* p.437 に見出される有名な命題です. 言い換えると, *l'inconscient est le discours de*

l'Autre. 無意識は他 A の言説である.

Lacan の教えの基本命題中の基本命題である「無意識は他 A の言説である」も「無意識において何か語る」も, Lacan は *automatisme mental* に準拠して作り出した, と言えるかもしれません.

Schizophrenie ではない者にとっては, 何かは知らないうちにどこかで語っており, 我々は, まずもってかつおおかたは, それらのことばを聴き取るまゝいと否認しています.

しかし, それでも, 何かは語ることばは, 日常的に, 夢や言いそこないなどの形のもとに我々を不意打ちすることがあります.

Schizophrenie においては, 何かは語ることばは, もっと顕在的です. 病状が進行した段階では, 何かは声として語りかけてきます. その声は, 我々自身について語り, ときとして揶揄し, また, 命令したりもします. その声に耳を塞ぐことはできません. まさに押しつけられてきます.

声が完全に他者性をおびる手前の段階では, 自分の考えが声として聞こえる, と感ぜられることもあります.

また、声という対象性をおびる手前の段階では、単なる考えや単語がひとりでに頭に浮かんでくる、と感ぜられることがあります。

以上のような Schizophrenie におけることばの病理、ないし、声の病理を総合的に概念化しているのが *automatisme mental* です。

また、Schizophrenie においては、まなざしの病理もかかわっています。

Lacan は、声とまなざしとをともに、客体 *a* に数え入れています。

幻聴という用語は日本独特のものです。フランスでは *hallucination* ないし *hallucinose auditive* ないし *verbale*、聴覚性ないし言語性幻覚症と言いますし、ドイツでは *Stimmenhören* 「声を聴く」という表現が用いられたりもします。

ともあれ、Séminaire XXIII の p.95 で Lacan は *sinthome paroles imposées* と言っています。「押しつけられた語り」という *sinthome*。そこで Lacan が問題にしている精神病理は Schizophrenie のはずです。

そして p.96 で Lacan は, Joyce においては, ことばはどんどん「押しつけられたことば」となっていく, ついに *Finnegans Wake* においては言語を解体するに至った, と述べています.

Joyce の作品は精神病症状と等価である, と言えます.

我々は日常的には「ことばが押しつけられてくる」とは感じません. しかし, 我々にもことばは語りかけています. それは Heidegger が「存在のことば」*Wort des Seins* と呼んでいるものです.

存在のことばを聴き取ろうとするか, あるいは, それから耳をそらしたり, ほかの雑音で耳を塞いだりしたままでいようとするか. そこに根本的な倫理的選択がかかっています.

22 December 2014 : 既に斧は木々の根を切るべく置かれている;

$(\exists x) \neg \Phi(x)$; YHWH の名としての父の名.

洗礼者ヨハネは言いました:「既に斧は木々の根を切るべく置かれている」

(マタイ 3,10).

男女の性別の論理式を改めて見てみましょう:

$$M: (\forall x) \Phi(x) \wedge (\exists x) \neg \Phi(x)$$

$$F: \neg (\forall x) \Phi(x) \wedge \neg (\exists x) \neg \Phi(x)$$

特に, 男の側の式を見てください. もし仮に $(\forall x) \Phi(x)$: 「すべての x について $\Phi(x)$ である」だけであつたなら, 徴示素ファロス Φ は存在論的穴 \varnothing をぴったり塞いで固定されてしまつていたでしょう. まるで Jeff Koons の Balloon Dog のように superflat に.

Jeff Koons の作品も村上隆の作品も, $(\exists x) \neg \Phi(x)$: 「非 $\Phi(x)$ であるような x が解脱実存する」無しの $(\forall x) \Phi(x)$: 「すべての x について $\Phi(x)$ である」だけのようなものです.

$(\forall x) \Phi(x)$ 「すべての x について $\Phi(x)$ である」だけであれば、徴示素フ
アロス Φ による存在論的深淵 \varnothing の隠蔽は完璧であったかもしれません。

$$\frac{\Phi}{\varnothing}$$

ところが、そうは行かないのです。

改めて引用するなら:「既に斧は木々の根を切るべく置かれている」(マタイ
3,10).

この斧は, $(\exists x) \neg \Phi(x)$: 「非 $\Phi(x)$ であるような x が解脱実存する」です。

$$\frac{(\forall x) \Phi(x)}{(\exists x) \neg \Phi(x)} \longrightarrow \frac{a}{\$}$$

Φ の flatness は常に non Φ により切り裂かれようとしています。その不安
こそ Freud が去勢不安と呼んだものです。

もし仮に去勢不安が全く無かったなら, \varnothing の深淵の穴を塞ぐ Φ の蓋がは
ずれる可能性は全く無かったでしょう。されば, 男の救済の可能性は無か

ったでしょう

ところが、天の御父は、男にも救済の可能性があるように、御子に先立って、洗礼者ヨハネを使わし、「神の御国は近づいた。回心せよ」と言わせたのです。

「既に斧は木々の根を切るべく置かれている」ことに気づいた男は、去勢、即ち死を通して復活し得るかもしれません。

$(\exists x) \neg \Phi(x)$: 「非 $\Phi(x)$ であるような x が解脱実存する」は、YHWH の名としての父の名です。

それは、 Φ の奢りを斧により常におびやかしています。

26 December 2014 : 主体の定立と主体の滅却; 自我無き主体; 自我理想への同一化を解体すること.

精神分析の終わりの必要条件は, Lacan が『École の分析家についての1967年10月9日の提起』において *destitution subjective* と呼んだものです.

destitution は *constitution* の反意語です. Lacan は実際, まずは *constitution du sujet* について問いました.

主体は如何に定立されるのか? その答え: 主体は *aliénation* として定立される.

つまり, *aliénation* の構造, 異状の構造 $\frac{a}{\phi}$ が, 主体の *constitution*, 主体の定立の構造です.

destitution subjective という Lacan の表現をわたしは「主体の滅却」と訳していますが, その訳は残念ながら *destitution* という語の意義を十分には表現していません. 先ほど *constitution* を「定立」と訳しましたが, それも理想的な翻訳ではありません.

constitution は、或る者を或る役目に就ける、任命する、ということです。辞書の例文では、或る弁護士を自分の代理人に任命する、というときに constituer という動詞を使います。

それに対して destitution は、解任、罷免です。解任、罷免は、当然、何らかの重要な役目、高い職位に就いていた者をその地位から降ろす、ということを含意しています。

destitution subjective は、構造 $\frac{a}{\phi}$ における能動者の座、支配者の座に位置する signifiant a — その場合、signifiant a は、同一化の徴示素であり、自我理想です — をその座から追い出す、分離する、ということです。

主体は、自我理想としての signifiant a との同一化において、主体として異状的に定立されています。その同一化は、症状を成す同一化でもありません。

そのような主体の異状的同一化を解体すること、それが destitution subjective, 主体滅却です。

Lacan は 1954-55 年の自我についての Séminaire においてこう言っています:「我々が分析家たちを養成するのは、彼らにおいて自我が不在であるというような主体たちが有るようにするためである. (...) 自我無き主体, 十全に実現された主体, (...) それはまさに, 分析中の主体から得ることを常に目ざすべきものである」(Séminaire II, p.287).

Lacan が「自我無き主体」と言っているからといって, 即座にそれを仏教的「無我」に還元しないでください. 我々は, 仏教に言う「無我」のことを正確に理解しているわけではありませんから.

ともあれ, 1954-55 年に「自我無き主体」と呼んだものを, Lacan は, 1967 年に, 異状の構造を踏まえた上で, *destitution subjective* という表現で捉え直しているのです.

主体滅却とは, 主体の自我理想との同一化の解体, 脱同一化です.

それによって, ϕ の深淵が成す穴を塞いでいたものが除去され, 穴が穴としてあらわになります. それが, 精神分析の終わりの必要条件です.

27 December 2014 : 精神分析の四つの基礎概念; 異状と分離; $A \equiv \phi$;
欲望の Dialektik.

2014-15 年度の東京ラカン塾精神分析セミナーの第二学期と第三学期
では, Lacan の *Séminaire XI, Les quatre concepts fondamentaux de la
psychanalyse*, 『精神分析の四つの基礎概念』の読解を行います.

第二学期は 2015 年 01 月 16 日から 03 月 06 日までの 8 回, 第三学期は
04 月 10 日から 07 月 10 日まで(ただし 05 月 01 日と 05 月 08 日は休み)
の 12 回を予定しています. 計 20 回のセミナーの各回を, Lacan の
Séminaire XI の全 20 章の各々の読解に当てます.

1964 年 1 月から 6 月までの半年間, Lacan が精神分析家ではない者を多
数含む聴衆の前で行った初めての *Séminaire* である『精神分析の四つの
基礎概念』の解説の試みは過去に既に幾人かにより為されていますが, 必
ずしも納得の行くものではありませんでした.

東京ラカン塾精神分析セミナーでは, Freud と Heidegger と Lacan と
のボロメオ結びに基づき, 存在の真理の現象学的構造から出発して,
Lacan が問い続けた精神分析の主体に関わる問いを, 我々もみづから改

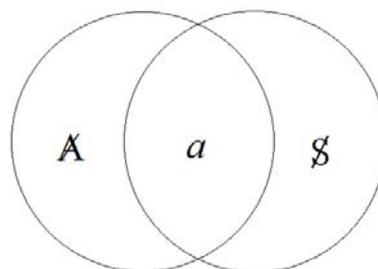
めて問い直します.

参加者は *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse* のフランス語テキストを各自御用意ください. フランス語を読めない方は邦訳を御覧になっても結構ですが, 読解はフランス語原文に基づいて行います.

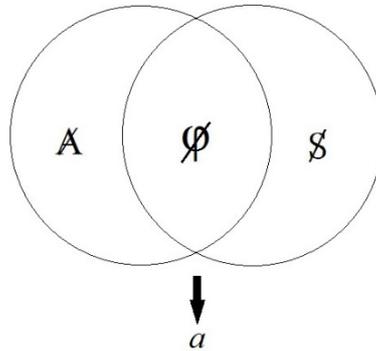
Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse のフランス語原書の入手が困難な方は, 東京ラカン塾 info@lacantokyo.org または, 小笠原晋也 ogswrs@gmail.com へ御連絡ください.

さて, aliénation 異状の構造 と séparation 分離の構造とを図で示してみましよう.

まず, 異状の構造:



次いで, 分離の構造:



これらの図は, Lacan の 1964 年の書:『無意識の位置』に基づいています。初歩的集合論において教育的に用いられる Venn diagram を応用するのは, Lacan 自身が 1964 年の Séminaire XI において行っていることです。

異状の図において a , A , S の三項の各々が置かれた三つの領域はそれぞれ, 分析家の言説の構造の四つの座のうちの一つに対応しています:

$$\frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{S}{S_1}$$

異状の図において a が位置する二つの円の交わりの領域は, 分析家の言説の構造において a が位置する能動者の座(支配者の座)に対応しています。

異状の図において A が位置する領域は, 分析家の言説において S_2 が位置する存在の真理の座に対応しています.

そして, 異状の図において $\$$ が位置する領域は, 分析家の言説の構造において $\$$ が位置する他者の座(奴隷の座, 被支配者の座)に対応しています.

分析家の言説において S_1 が位置する生産の座に対応する領域は, 異状の図には表示されていません.

分析家の言説の構造において知 S_2 が位置する存在の真理の座は, 抹消されたファロス ϕ の学素によっても差し徴されます.

存在の真理と ϕ とが等価であることの証明については, 東京ラカン塾の web site に上梓してある『ハイデガーとラカン』の第一章を参照してください.

A は, 他 A の場処のなかの欠如の学素です.

他 A の場処のなかの欠如は、性関係の徴示素ファロス φ が書かれぬことを止めぬ徴示素であることによりうがたれた深淵です。したがって、 A と φ とは相互に等価です：

$$A \equiv \varphi$$

かくして、確かに、分析家の言説の構造において知 S_2 が位置する存在の真理の座は、徴示素の宝庫である他 A の場処のなかの欠如 A の領域である、とすることができます。

aliénation 異状の構造は、Lacan が“欲望の Dialektik”と呼んだものの構造でもあります。

弁証法という訳語は Dialektik が何たるかの理解を困難にするだけですから、用いない方が無難です。また、フランス語の dialectique だと名詞か形容詞かわかりませんから、ドイツ語の Dialektik と dialektisch の方が便利です。

欲望の Dialektik とは、Lacan のこの公式により差し徴されていることです：「人間の欲望は、他 A の欲望である」。

無意識的欲望とは、存在 \varnothing のことです。それは、したがって、 A です。 A は、他 A の欲望です。

それに対して $\$$ は、*hysterica* の欲望、*désir hystérique*、言い換えると、満足不能なる欲望、*désir insatisfait* です。Freud の表現では *versagter Wunsch*、断念された願望。

Freud は『夢解釈』において取り上げた症例、「美しい(ないし、機知に富んだ)肉屋夫人」の症例において、「願望 *Wunsch* を断念 *versagen* することについて論じています。

この動詞 *versagen* の名詞化 *Versagung* は、英語で *frustration* と訳されます。英語の *frustration* は、日本語でそのまま「フラストレーション」と表記されたり、「欲求不満」と訳されたりします。ところが、ドイツ語の *Versagung* には「欲求不満」という意味は今でもありません。訳語のひとり歩きの一例です。

$\$$ は、四つの言説のひとつである *hysterica* の言説において能動者の座に位置することから、*hysterica* の満足不能なる欲望、断念された欲望の学素である、と言えます。

「hysterica の」という限定を省いて言えば, \$ は *désir insatisfait* の学素です.

欲望の *Dialektik* を通じて, 満足不能なる欲望 \$ は, 己れの真理を他 A の欲望 A に見出すこととなります.

分離 *séparation* の図においては, ϕ , A, \$ の三項の各々が置かれた三つの領域は, もはや分析家の言説の構造に含まれる三つの座に対応してはいません. なぜなら, 分離という事態の全体は存在の真理 ϕ の深淵そのものへ還元されてしまうからです.

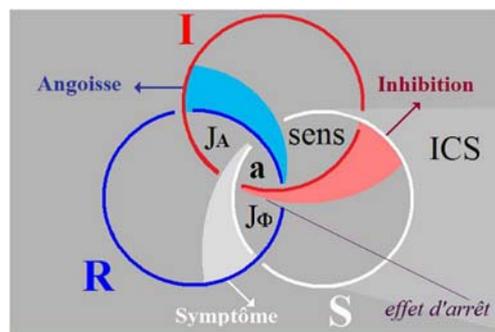
四つの言説において, *hysterica* の言説と大学人の言説は, 分析家の言説とは区別されています. つまりそれらは, 分析家の言説に入ることに對して抵抗している女と男とをそれぞれ表しています.

分析家の言説に入ろうとしない女と男においては, 症状はそれとしてはまだ形成されてきません.

28 December 2014 : 学素 a の多義性; 影象的関繋 $a - a'$; ひとつの徴示素 a が主体 ϕ をもうひとつの他なる徴示素 $\$$ に対して代表する; a は存在が残す残渣である; 死としての分離; 死からの復活としての聖人.

Lacan が *petit a* と呼ぶ学素 a の多義性は, 或る意味で, Lacan の教えの読解の鍵です. そこにおいて Jacques-Alain Miller できえカン違いを犯しているのですから, 一筋縄では行きません.

1974-75 年の Séminaire *RSI* のボロメオ結びの図において, a は le réel 実在, le symbolique 徴象, l'imaginaire 影象の三つの位の交わりに位置づけられています.



つまり, a はそれら三つの位すべてに参与しているのみならず, 而して, a は R, S, I 三つの輪のボロメオ結合の可能性を成すものです.

a は、自我、ならびに、幻想のなかの客体としては、影象的です。

その場合、 a はひとつの魅了的な影象 *image* であり、影象的な悦 *jouissance imaginaire* を成します。影象的な a は、*narcissisme* の本質的条件を成します。

また、 a は、症状の剰余悦 *plus-de-jouir* としては、ひとつの徴示素であり、徴象の位に属します。

Lacan は *Écrits* p.840 においてこう言っています：

「徴示素の集成が設立されるのは、ひとつの徴示素がひとつの主体をもうひとつの他なる徴示素に対して代表することによる。このことは、夢、言い損ない、機知の言葉など、無意識の成形すべての構造である。」

無意識の成形 *formations de l'inconscient* には、当然、症状が含まれています。

「ひとつの徴示素 a が主体 Φ をもうひとつの他なる徴示素 $\$$ に対して代表する」という症状の構造において、主体を代表する徴示素、それが、

剰余悦としての徴示素 a です.

$$\frac{a}{\emptyset} \rightarrow \S$$

ただし、徴象の位の定義も、徴示素の宝庫としての他 A の場処という定義に尽きるわけではありません.

1974-75 年の Séminaire *RSI* において徴象を穴と定義するより 15 年以上前、1958-59 年の Séminaire VI 『欲望とその解釈』において既に Lacan は、切れめが徴象の本質である、と言っています.

同じ Séminaire VI において Lacan は、 a は切れめであり、穴である、と言っています.

切れめ、ないし、穴としての徴示素 a を、純粹徴示素 *signifiant pur* と呼んでおきましょう.

徴示素の宝庫としての他 A の場処に開いた穴は、他 A のなかの欠如 A 、即ち、不可能な徴示素、書かれぬことをやめない徴示素ファロス \emptyset によりうがたれた穴です. その穴を徴示する徴示素は、したがって、 $S(A)$ で

す。それが、純粹徴示素としての a です。

かくして、徴示素としての a については、一方で、症状の剰余悦としての a と、他方で、純粹徴示素 $S(A)$ としての a とが区別されることになります。

そして第三に、実在としての a 。

1958-59 年の Séminaire VI p.565 において Lacan はこう言っています：

「 a は、存在が残す残渣であり、そのことにより、 a は実在に参与する。」

また、1965-66 年の Séminaire XIII の 1966 年 1 月 5 日の séminaire において Lacan は、

le a est de l'ordre du réel

「 a は実在の位のものである」

という有名な定義を提起しています。

「実在が残す残渣」 « un reste, un résidu que laisse l'être » という表現は、「存在はそのものとしては抹消される」ことを含意しています。つまり、そこにおいて、存在は、存在, \oplus であり、Heidegger が Sein とは区別して Seyn

と表記する存在です.

「抹消された存在は残渣を残す」という命題は, Heidegger の Es gibt Sein という命題と等価です.

何か φ は, 残渣としての存在 a を与える. その限りで, a は実在に参与している, a は実在の位のものである, と言えます.

存在の真理の現象学的構造の学素 $\frac{a}{\varphi}$ は, 以上のことすべてを要約し, 形式化する学素です. それがゆえにこの学素は powerful ですが, また同時に, 多義的であり, misleading であるかもしれません.

さらに, Lacan が symptôme の代わりにもちいた sinthome という表現も, 混乱を招いたかもしれません.

先ほども引用したように, 「ひとつの徴示素 a は, 主体 φ を, もうひとつの他なる徴示素 $\$$ に対して代表する」という構造は, 精神分析において解釈されるべき無意識の成形の構造であり, それを Lacan は四つの言説において「分析家の言説」と呼びます.

$$\frac{a}{S_2} \rightarrow \frac{\$}{S_1}$$

$$\frac{a}{\emptyset} \rightarrow \$$$

分析家の言説の構造において、知 S_2 が置かれている存在の真理の座を \emptyset と表記し、かつ、右下の生産の座をとりあえず省略すれば、「ひとつの徴示素 a は主体 \emptyset をもうひとつの他なる徴示素 $\$$ に対して代表する」の構造が見えやすくなります。

分析家の言説の構造は、昨日提示した異状の構造と等価です。それは、精神分析の過程の構造であり、そこにおいて生ずる転移の構造も表しています。

それに対して、精神分析の終わりにおいて生ずるのは、分離であり、次いで、分離における死 \emptyset からの復活です。

分離は精神分析の終わりの必要条件ですが、精神分析の終わりは分離に尽きるものではありません。死からの復活をまで視野に入れなければ、精神分析の終わりは思考し得ません。

分離は、そのものとしては、言説の構造の外における *ex-sistence* であり、死そのものです。

しかし、言説の構造の外にとどまることはできません。この世に生きている限り、我々は言説の構造の中へ再び戻ってくることになります。ただし、精神分析家 *a* として、死から復活して。

死から復活して、永遠の命に与る者は、聖人と呼ばれます。聖人は、存在の真理の証人です。聖人が存在の真理 ϕ を証言し得るとすれば、それは、聖人は分離において一旦死 ϕ に至り、そしてそこから復活した者であるからです。

Lacan は、精神分析家の実存構造を聖人の実存構造と等しいものとして考えようとしています。

根本的な同一化の構造の解体としての分離において死 ϕ に至り、そこから純粹存在 *a* として復活した者。それが聖人であり、かつ、それが Lacan の考える精神分析家です。